

のぞみを耕す

東京大学東アジア藝文書院 2019 年度報告書



E A A

EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS

Contents

1. 挨拶 …………… 1
 - ・ 院長 羽田 正
 - ・ 副院長 中島隆博
 - ・ 副院長 石井 剛
2. 東アジア藝文書院の紹介 …………… 5
3. 教育プログラム：学融合プログラム「東アジア教養学」…………… 9
4. 活動報告書 …………… 11
5. その他 …………… 237
6. INDEX …………… 239

1. 挨拶



羽田 正

(東京大学執行役・副学長、東アジア藝文書院院長)

東アジア藝文書院（EAA）が誕生して1年が経ちました。この報告書をご覧になればお分かり頂けるように、私たちはこの1年、数多くの研究と教育のプロジェクトに取り組みました。残念ながら、2020年1月後半からは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、予定されていた行事が延期や中止となりましたが、それまでの活動だけでも、1年目としては十分な成果を挙げる事ができたと思います。

この1年の活動を通じて私がもっとも印象に残ったのは、若い学生たちの熱気です。2019年4月に、私は教養学部前期課程の「学術フロンティア講義」というオムニバス講義の1回を担当しました。「30年後の世界のための世界史」が講義の題目です。話を終えると、多くは入学したばかりの1年生から驚くほどたくさんの方が手を挙がりました。質問やコメントに一つ一つ答えていくうちに、授業時間を大幅に超過してしまいました。新しい世界史についての私の考え方に、学生たちが賛成してくれたかどうかは分かりません。しかし、少なくとも、緊張感に溢れた議論を通じて、彼/彼女たちの思考に何らかのインパクトを与えることはできたようです。この講義に出席していた学生たちの何人かが、秋の北京大学でのEAA集中講義に参加したと聞きました。

その北京大学で、私は2019年の10月に新しい世界史について講演を行いました。やはり多くの学生たちが手を挙げ、鋭い質問を次々と投げかけてきました。熱い議論の再現でした。この2回の経験を通じ、しなやかな感性と溢れる熱意を併せ持つ若い学生たちこそが「新しい教養」を必要とし、実際にそれを作ってゆくのだと確信しました。EAAの取り組みによって、彼/彼女らの手助けができることを大きな喜びだと感じています。

最後に、東京大学本部、総合文化研究科、東洋文化研究所、そして、何よりもダイキン工業株式会社の方々のご支援とご厚意に心からの感謝の気持ちを申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

のぞみとしての東アジア藝文書院

中島隆博

(東洋文化研究所教授、東アジア藝文書院副院長)



東アジア藝文書院（EAA）が発足して一年が経ちました。最近、一年を振り返るたびに、この一年間は大変な一年であったと思うのですが、この一年はそうした中でも、とりわけ重要な一年だったように思います。

2020年が明けてから、わたしたちは新型コロナウイルスによるパンデミックに直面しています。それは、過去のSARSやMERS流行の規模を遥かに超えていて、グローバル化によって世界がすでに稠密に結びついていることを否応なく示しました。経済的な流通だけでなく、人の往来や情報の共有など、世界の各国は何重にも相互に連結しているのです。

また、この疫病により、わたしたちはこれまでの生活様式の根本的な見直しも迫られています。現代社会は、その医療制度や福祉制度まで経済成長に支えられていますので、どれだけ経済成長が難しくとも、なんとかそれを追求せざるをえない構造を有しています。そのため、人間と動物、人間と人間の間でどれだけ偏った格差を生み出そうが、経済成長を支える生活様式を維持しなければならなかったのです。ところが、この疫病は、そうした現代社会のあり方と、そこで生きるわたしたちの生活様式を直撃したのです。この危機において、はたしてわたしたちは生活様式を変えることができるのか。これがもっとも重要な問いかけだと思います。

東アジア藝文書院は、こうした危機において、オルタナティブな生活様式を構想する場所でありたいと思います。それには、かつての生活様式の再考も必要でしょうし、まったく新しい概念のもとにそれを創造することも必要でしょう。たとえば、人間を不完全な動物として理解し直すならば、わたしたちは動物の高貴なあり方により学ぶことができるでしょう。あるいは、人間の欲望のあり方を変更して、「できる」ことの拡大というよりはむしろ、「のぞむ」ことの深化として、欲望を捉えることもできるでしょう。

もし、そのように人間の再定義に一步踏み出し、オルタナティブな生活様式を構想するのであれば、それを具体的に支える政治的・倫理的・技術的な装置が必要になるはずです。こうしたことを、ご支援をいただいているダイキン工業株式会社や北京大学、そして問いを共有する他の大学とともに、東アジア藝文書院はさらに考えていきたいと思っています。

この一年間の取り組みは、振り返ってみますと驚くべき質量になっています。しかし、それは単により前へとか、より多くといった思いで行ったわけではありません。そうではなく、わたしたちの「のぞみ」をお互いにより深めていったプロセスの結果にすぎません。あなたは何をのぞみますか。この問いを、一緒に考え続けていきましょう。

「教養」とは何か



石井剛

(総合文化研究科教授、東アジア藝文書院副院長)

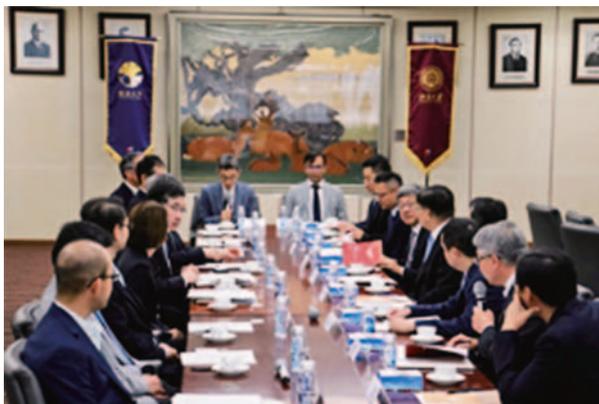
わたしたち東アジア藝文書院（EAA）は、「東アジア発のリベラル・アーツ」を標榜しています。「Liberal Arts」は安定した漢訳語が存在しないことばですので、漢字を使って生活しているわたしたち東アジアの住人たちにとってはじつはまだ縁遠いものなのかも知れません。しかし、少なくとも東京大学においては、リベラル・アーツとは、第一高等学校の遺産を継いで成立した教養学部の「教養」そのものであるという理解が存在しています。「教養」とは単に学識豊かなさまを指すのではなく、自由な想像力によって不安定で不可測な諸状況のなかで新しい道を切り開いていける智慧にほかならない、とは、わたしが2019年4月の学術フロンティア講義「30年後の世界へーリベラル・アーツとしてのを構想する」の中で申し上げたことです。

現在、新型コロナウイルスによるパンデミックによってわたしたちの生活もドラスティックな変化を迫られています。そうした中で、教養学部は疫学、生物学、心理学、哲学、政治学、行動経済学などさまざまな専門を持つ教員たちが一丸となって大学と社会に向けて多くのメッセージを発信し続け、かつ、オンライン授業の全面導入に向けて急速に体制を整えました。まさに教養の真価がここに発揮されているのだと思います。「人間味のあるICT教育」を実装することによって、Society5.0と言われる新しい社会に人間の顔を与えるための大きな実験です。日々変わる状況の中で、それでも人間の善（「仁」）を飽くことなく追求し続けることで、わたしたちはきっとより人間的になります。

わたしたちの共通の目標は「30年後の世界」です。それをデザインするために想像力を解き放ち、日々の生活そのものを創造的に構築していく、それこそが学問としての「教養」の力であり、わたしたちはそのことによって、世界と交わりながらより人間らしくなっていくのだと信じます。

最後になりましたが、EAAの活動を支えてくださっているダイキン工業株式会社の皆さま、そして、各種イベントにご協力して下さった方々に心からの感謝を申し上げます。

2. 東アジア藝文書院の紹介



東アジア藝文書院（EAA）は、2018年12月に行われたダイキン工業株式会社と本学の産学協創協定締結と同時に始まった。2018年度（2019年3月まで）は設立準備期間として文部科学省補助金（国立大学改革強化推進補助金）を得て活動を行い、2019年4月からは、産学協創協定を原資とする東京大学基金（FSI基金）によって運営されている（上記補助金も継続中）。現在の体制は、東洋文化研究所と総合文化研究科にそれぞれオフィスが設置されて運営の責任を担うほか、人文社会系研究科、医学系研究科、教育学研究科が部局として協力している。また、公共政策大学院とは、東洋文化研究所と総合文化研究科が加わる北京大学との戦略的パートナーシップを通じて協力関係にある。

【設立趣旨文】

東アジア藝文書院は、東京大学と北京大学が共同で運営するジョイント研究・教育プログラムで、アジアの共通の未来を担う人材の育成を目指すものです。そのための学問的な基礎として、わたしたちは新たに「リベラル・アーツとしての東アジア学」を構築していきます。わたしたちが考える新しい東アジア学とは、単なる東アジアの地域研究ではありません。より相互的で関与的な研究として、日本と中国の双方が自らを批判的に相対化する視点を持ちながら、地域概念としての東アジアを超えて、アジア、オセアニア、そしてヨーロッパ、アメリカ、さらにはアフリカとの交通を重視した研究であるべきだと考えています。それは「地域研究2.0」とも言えるもので、世界における東アジアとともに、東アジアにおける世界を問う新しいリベラル・アーツとしての学問です。

わたしたちは、「リベラル・アーツとしての東アジア学」の理念を「藝文書院」という名称に託しました。『漢書』の「藝文志」という東アジア最古の目録であり学問のジャンルを構想した書物にちなむと同時に、教員と学生がともに学人として思考し実践していく共同体としての理想が「書院」の名に込められています。この場所から、東京大学と北京大学の学問資源を最大限活用し、まったく新しい研究と教育のプラットフォームを築き、今後の世界における大学の新しいあり方を示したい。これがわたしたちの願いです。

EAA では、まず、教育プログラムとして、教養学部後期課程に学融合プログラム「東アジア教養学」を開設し、2020 年度からスタートする。後期トライリンガルプログラム（後期 TLP）としてこれまで行われてきた副専攻プログラム「東西文明学」を EAA の理念に併せてアップグレードし、トライリンガル方式での教育を推進する。コア科目には「クラシックス講読」を据え、複数教員が同時に授業に臨むペア・ティーチングや、大学院生がプログラム生といっしょにテキストの講読を行うピア・リサーチなど、リベラル・アーツ教育の新たなモデル構築に向けた実験的なクラス運営を行う。北京大学との交換留学（1 セメスターないし 1 年）を組み込むほか、ダイキン工業株式会社とのコラボレーションによるインターンシップの単位化も検討している（当面はグローバル・インターンシップ・プログラムへの参加者に単位を賦与する計画。将来的にはカスタマイズ型インターンシップも視野に入れる）。

プログラム生は、後期課程生 10 名を募集、すでに選抜が終了し、20 名の応募者から書類審査と面接を経て 10 名に合格通知を出した。なお、本プログラムは、駒場キャンパスにおいてこれまで行われてきた特色あるプログラム（後期 TLP、キャンパス・アジア）を活かしながら設計されており、教養学部後期課程におけるリベラル・アーツの刷新に貢献することを目指している。

また、EAA では、研究プログラムとして、リサーチ・ユニット（Research Unit、RU）を構成し、関心を共有する本学の教員と研究者が集まり、先端の研究を推進している。目下、「世界哲学」、「世界歴史」、「世界文学」、「未来社会と環境・健康」という 4 ユニットがあり、これらは教育プログラムで開講される科目に連動している。

事務組織としては、本郷オフィス（東洋文化研究所）と駒場オフィス（総合文化研究科）を設置している。2020 年 2 月現在、スタッフの構成は、本郷オフィス（中島隆博副院長）で、特任助教 1 名、特任研究員 3 名、学術支援職員 1 名、計 5 名であり、駒場オフィス（石井剛副院長）で、特任講師 1 名、特任助教 1 名、特任研究員 4 名、計 6 名である。これに加え、2020 年度より教育プログラム「東アジア教養学」が発足するのに併せて、駒場オフィスでは、特任研究員増員（1～2 名）、及び、教務担当の事務スタッフ拡充（2 名程度）をする必要があり、現在その予定で準備を進めている。



EAA メンバー		
羽田 正 (HANEDA Masashi)	院長	東京大学執行役・副学長 東京カレッジ長
中島 隆博 (NAKAJIMA Takahiro)	副院長	東洋文化研究所・教授
石井 剛 (ISHII Tsuyoshi)	副院長	総合文化研究科・教授
リサーチ・ユニット		
中島 隆博 (NAKAJIMA Takahiro)	世界哲学 (RU・P)	
石井 剛 (ISHII Tsuyoshi)		
納富 信留 (NOUTOMI Noburu)		人文社会系研究科・教授
羽田 正 (HANEDA Masashi)	世界史 (RU・H)	
伊達 聖伸 (DATE Kiyonobu)		総合文化研究科・准教授
鈴木 将久 (SUZUKI Masahisa)	世界文学 (RU・L)	人文社会系研究科・教授
武田 将明 (TAKEDA Masaaki)		総合文化研究科・准教授
前島 志保 (MAESHIMA Shiho)		総合文化研究科・准教授
橋本 英樹 (HASHIMOTO Hideki)	未来社会と 環境・健康 (RU・S)	医学系研究科・教授
EAA 委員会		
中島 隆博 (NAKAJIMA Takahiro)	本郷 EAA 委員会	
名和 克郎 (NAWA Katsuo)		東洋文化研究所・教授
園田 茂人 (SONODA Shigeto)		東洋文化研究所・教授
青山 和佳 (AOYAMA Waka)		東洋文化研究所・教授
小寺 敦 (KOTERA Atsushi)		東洋文化研究所・教授
石井 剛 (ISHII Tsuyoshi)	駒場 EAA 委員会	
阿古 智子 (AKO Tomoko)		総合文化研究科・准教授
伊藤 徳也 (ITŌ Noriya)		総合文化研究科・教授
岩月 純一 (IWATSUKI Jun'ichi)		総合文化研究科・教授
前島 志保 (MAESHIMA Shiho)		
小野 秀樹 (ONO Hideki)		総合文化研究科・教授
清水 剛 (SHIMIZU Takashi)		総合文化研究科・教授

スタッフ		
具 裕珍 (KOO Yoojin)	本郷オフィス	東洋文化研究所・特任助教
宇野 瑞木 (UNO Mizuki)		東洋文化研究所・特任研究員
崎濱 紗奈 (SAKIHAMA Sana)		東洋文化研究所・特任研究員
犬塚 悠 (INUTSUKA Yū)		東洋文化研究所・特任研究員
伊野 恭子 (INO Kyōko)		東洋文化研究所・学術支援職員
王 欽 (WANG Qin)	駒場オフィス	総合文化研究科・特任講師
八幡 さくら (YAHATA Sakura)		総合文化研究科・特任助教
高山 花子 (TAKAYAMA Hanako)		総合文化研究科・特任研究員
前野 清太郎 (MAENO Seitaro)		総合文化研究科・特任研究員
マーク・ロバーツ (Mark ROBERTS)		総合文化研究科・特任研究員
立石 はな (TATEISHI Hana)		総合文化研究科・特任研究員
高原 智史 (TAKAHARA Satoshi)	リサーチ・ アシスタント (RA)	総合文化研究科・博士課程
郭 馳洋 (GUO Chiyang)		総合文化研究科・博士課程
張 瀛子 (ZHANG Yingzi)		人文社会系研究科・博士課程
王 雯璐 (WANG Wenlu)		人文社会系研究科・博士課程
胡 藤 (HU Teng)		人文社会系研究科・博士課程
建部 良平 (TATEBE Ryōhei)		総合文化研究科・博士課程

3. 教育プログラム：学融合プログラム「東アジア教養学」

2020年度からは、これまでの後期トライリンガルプログラム（後期 TLP）「東西文明学」をアップグレードして、教養学部後期課程に学融合プログラム「東アジア教養学」を開設する。その第1期プログラム生を2019年1月に募集し、応募者20人の中から10名を選抜した。いずれの学生も高い語学力を養い、東アジアからの新しいリベラル・アーツを共に創造したいという意欲を持つ優秀な学生である。

(1) 学融合プログラム「東アジア教養学」の特徴

①徹底した講読・議論の演習授業

古今東西の経典テキストを読む共同作業を通じて、「リベラル・アーツとしての東アジア学」の基礎を学ぶ。

授業科目名	授業形態			取得すべき 最低単位数
	講義	演習	実験実習	
東アジア教養学理論Ⅰ	2			2
東アジア教養学理論Ⅱ	2			2
東アジア教養学実習Ⅰ		2		2
東アジア教養学実習Ⅱ		2		2
世界哲学と東アジアⅠ	2			6
世界哲学と東アジアⅡ	2			
世界哲学と東アジアⅢ	2			
世界歴史と東アジアⅠ	2			
世界歴史と東アジアⅡ	2			
世界歴史と東アジアⅢ	2			
世界文学と東アジアⅠ	2			
世界文学と東アジアⅡ	2			
世界文学と東アジアⅢ	2			
社会・環境・健康と東アジアⅠ	2			
社会・環境・健康と東アジアⅡ	2			
社会・環境・健康と東アジアⅢ	2			
東アジア教養学特殊講義	2			
東アジア教養学特殊演習		2		
インターンシップ			1	
東アジア教養学実習			1	
高度教養特殊講義（東アジア教養学）	2			

②夏冬の北京/東京合宿で討論

東京大学と北京大学の双方からプログラム生が参加するサマープログラムおよびウィンタープログラムを通じて、交流しながら共に学ぶ。

③北京大学への短期留学

北京大学 EAA との交換留学制度（単位互換）を設ける。留学にあたっては往復 1 回分の渡航費を EAA が負担するほか、奨学金が支給される。

④国際インターンシップへの派遣

企業との連携のもとにインターンシップを実施する。

⑤トライリンガルスキルの実践

新しい後期 TLP として、英語・中国語・日本語のトライリンガル教育を行う。

(2) 履修・修了要件

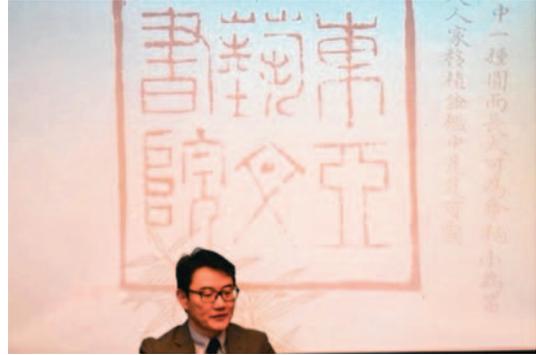
教養学部所属であるか否かを問わず、学部後期課程に所属するすべての学生が選抜を経て履修することができる。プログラムの定めによる単位（前記の科目表の合計 14 単位）を取得することによって、修了証を得ることができる。

(3) 応募要件

英語（IELTS 7.0 もしくは TOEFL iBT100）、中国語（HSK 5 級）、日本語（N1）のすべてに相当する言語能力を有していると認められる者。

4. 活動報告書

2019年3月北京大学-東京大学ジョイントプログラム 立ち上げ会議①



2019年3月21日（木）北京大学臨湖軒において北京大学と東京大学のジョイントプログラムである東アジア藝文書院の開設セレモニーが開催された。北京大学側からは王博氏（北京大学副学長）をはじめ張旭東氏・楊立華氏・章永樂氏・蔣洪生氏・歐陽哲生氏・李猛氏の教授陣と王欽氏（北京大学研究員）、東京大学側からは羽田正氏（東京大学副学長・EAA 院長）、中島隆博氏（EAA 副院長）、石井剛氏（EAA 副院長）、八幡さくら氏（EAA 特任助教）、宇野瑞木氏・趙斉氏・立石はな氏（以上EAA 特任研究員）・伊野恭子氏（EAA 学術支援職員）・張瀛子氏（EAA リサーチ・アシスタント）が参加した。

まず、北京大学側から張旭東氏が東アジア藝文書院名を石に刻んだ印章を披露した。中国の芸術家の手により意匠を凝らして造られたものであることが説明された。

次に、石井剛氏が東アジア藝文書院のロゴを紹介した。糸綴じの書物の意匠である「魚尾」に着想を得て表現された形に、火と水と土を融合させ、新たな学問を生み出す場としての書院という意味がロゴに込められていることを、石井氏は説明した。

王博氏から歓迎の挨拶が行われ、北京大学が本プログラムに寄せる期待と東京大学との学術交流に対して歓迎の意が述べられた。それを受けて羽田氏がプログラム設立の経緯と新しいリベラル・アーツを創造するという本書院の目的と今後の展望を説明した。その後、王博氏と羽田氏の間で調印式が行われた。

会議は終始和やかな雰囲気が進み、東アジアから発信する新たなリベラル・アーツへの期待と意気込みが参加者の間で共有された。

セレモニーに引き続き、教員間で学術委員会実務会議が行われ、北京大学側のカリキュラムや教員・学生相互交流に関する進捗状況が報告された。東京大学側からも春学期の「学術フロンティア講義」やリサーチ・ユニット設立の説明が行われ、互いに着実な準備を進めていることを確認した。

昼食時に田剛氏（北京大学副学長）と羽田氏を中心に学術委員会メンバーで会談を行い、今後の北京大学と東京大学との交流を進めていくことを約束した。

午後からも引き続き、学術委員会実務会議を行い、北京大学から東京大学への受け入れ学生や、



カリキュラム、秋学期からの授業テーマやその運営方法について話し合いが行われた。北京大学と東京大学において中国と日本の学生の授業に対する意識や関心を踏まえたカリキュラム作りと、各々の言語能力を踏まえた授業運営が必要不可欠であるという共通の認識を確認した。その上で、学生達が将来的に世界へ研究成果を発信するために、英語を中心とした多言語での研究を目指すことに同意した。会議後、中国文学の教授たちと会談を行い、北京大学での会議の一日目を終えた。

報告者：八幡さくら（EAA 特任助教）

2019年3月北京大学-東京大学ジョイントプログラム 立ち上げ会議②

2日目の3月22日は、北京大学と東京大学東アジア研究ジョイントプログラムの学術会議と若手研究者のワークショップ「PKU-UTokyo Joint Program of East Asian Studies Launching Conference & Young Scholar Workshop」が開催された。

昨日に引き続き、晴天に恵まれた朝、わたしたちは北京大学キャンパスの有名な未名湖沿いにある会場「采薇閣」に向かった。会場は親密で朗らかな雰囲気になっており、こうした会場選びにも北京大学側の深い歓迎と親愛の情が感じられた。このような和やかな雰囲気の中、教員と若手研究者による学術発表会が行われた。午前中はテーマ発表として東京大学から中島隆博氏（EAA 副院長）と石井剛氏（EAA 副院長）が基調講演を行い、午後は北京大学と東京大学の若手の研究者がそれぞれ発表を行った。

まず冒頭を飾ったのは中島隆博氏の講演である。中島氏は、「Open Philosophy in East Asia」と題し、東アジアの「哲学」を真の意味で「開く」ための鍵をいくつか提示した。中島氏は、戦後日本の大学における「哲学」が、一部を除けばほとんどが（欧米の）「哲学」についての研究すなわち「哲学学」であったことを指摘し、我々が「哲学」をすることはどのようなことか、それはいかに可能なのか、という問いが投げかけられた。それに対し、哲学はある学問分野に区切られるような研究の「目的」を持つものではなく、すべてを問うことができる学問であり、同時に無防備な状態にあるべきこと、さらにリベラルアーツの文脈に立ち返って哲学を開くことなどが提言された。ま





たトマス・カスリス氏が「植民地化」された戦後の日本哲学を世界に開くためには他の哲学と「結婚」させることが必要と答えたという興味深い逸話を紹介し、これに対し中島氏は「友情」こそが必要であると述べたのも印象的であった。最後に、私たちが過去から解放されるためには過去から独立しては不可能であるように、未来に対して、私たちがどのような東アジアの未来を「望む」のか、そのイメージが未来に深く関与していると述べ、東アジアの開かれた哲学のための「プラットフォーム」としてのかけがえのない役割をEAAが担い得ることを力強く呼びかけた。張旭東氏（北京大学）からの応答では、そのような開かれたラディカルな「哲学」のもつ可能性とともに危険性について問題提起がなされた。会場からはラテンアメリカのポスト・コロニアリズムの視点から質問が出るなど、活発な議論がなされた。

続いての石井氏の講演は「華語語系哲学」をテーマとした「Sinophone Philosophy as a Working Hypothesis toward World Philosophy（“华语语系哲学” 及其通向“世界哲学”的可能性刍议）」である。石井氏は、言語の地域的・歴史的特性と思想の間にある無視できない力関係に対する反省をもとに、中国の外部で作られた中国語系の文学、「華語語系文学（Sinophone literature）」から着想を得て、「華語語系哲学」という超地域的な哲学を作る可能性を提示した。「sinophone」は「華夷風」とも訳され、それには単なる地域の違いのみでなく、「中華」と「夷狄」、すなわち文明と野蛮の意味も含まれている。近代の哲学は西洋を中心とし、中国やインドの思想的言説は地域的・民族的なものとなされ、以来、知的世界における文明と野蛮の図式が作られてきた。石井氏は、「漢語哲学」がこのような図式を乗り越えるアプローチとして注目に値するという欧米の議論を紹介した。つまり、「華語語系哲学」は、東アジア内部の「華夷」を解消するのみでなく、近代世界の「文明と野蛮」への批判力ともなり得る。講演の最後で石井氏は「phone（風）」と表された「声」の存在を取り上げた。流動的な「風」は、人々を隔てている地域の区分、文化や時空の違い

を通過することができ、文明と野蛮の互換性を示唆している。石井氏は、空海と戴震の古典的な言語論から、小林康夫氏と中島氏の最新の議論を紹介し、人の心の内から発する「声」の意思疎通における役割を強調する。文字では包括しきれないコンテキストや背景に関わっている「声」に耳を傾けることによって、互いへの真の理解と友情、そして新しい哲学の生成につながると考えられると石井氏は結論づけた。

八幡さくら氏（EAA 特任助教）は「A Change in Japanese Rural Areas by Arts : A Study from Aesthetic Perspective」と題して、日本の農村地域における芸術祭の影響と問題点について風景に着眼した美学的観点から発表した。八幡氏は、芸術祭が与えた地域住民の土地に対する意識変化を、フィールドワークとインタビューから明らかにした。石井氏からはこうした活動とアカデミックな理論をどのように結びつけて行くかという質問があり、張旭東氏からは近年の中国においても同様の問題があり、地域活性化として導入された芸術がその機能を果たしていないという例が挙げられた。八幡氏は、理論と実践の両方を備えた新しい学問のあり方の探求と、日本と中国における芸術祭の比較研究の可能性を指摘した。

趙齊氏（EAA 特任研究員）は、「Pioneer of Sino-Japan Education Exchange : 第一高等学校特設高等科」というタイトルで、EAA 駒場キャンパスオフィスが所在する 101 号館（1908 年から発足した中国人留学生の受け入れ機構・一高特設高等科）の歴史について発表した。19 世紀末に、一高が京師大学堂から留学生を受け入れたことは東大と北京大の教育国際交流の前史にあたること、また、当時の中国人留学生の勉強と生活の様子、及び一高時代の駒場キャンパスの風景が分かる写真や文献資料の紹介といった内容には、双方の参加者から高い関心が寄せられた。

邢程氏（北京大学）は、「A Discussion on the Problematic of Symbolization in Lu Xun's Fictional Writings」と題して、魯迅の作家としての誕生を新たな視点から検証した。邢氏は、周作人の翻訳詩、及び厨川白村の作品から『傷逝』が受けた影響を指摘し、作家魯迅は、五四運動の中で必然的に育てられたのではなく、一連の偶然な個人経験の中に生まれたものだと結論づけた。

宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）は、「日本における二十四孝の受容と展開」と題し、自身の博士論文をもとに出版した本の内容を紹介した。特に、本の第三部にあたる「漢字文化圏」に広く流布した「二十四孝」説話の日本近世のパロディ化の様相と分析を中心に展開させた。コメンテーターの中島氏からは、午前中の石井氏の「Sinophone」の議論を踏まえた上で、「漢字文化圏」をどう再定義するか、と質問され、宇野氏は、地図上に境界線が引けるような実際の地理的な領域としてではなく、時・場における多様性を明らかにするための「方法論」として見ることを提案した。石井氏からは「字」の共有の一方で、「声音」に揺らぎが大きく存在するという問題が指摘され、





今後さらに「字」と「声」の関係を紐解く必要性が共有された。

最後に、王欽氏（北京大学）は、「Literature, Powerlessness, and Modernity : A Reading of Takeuchi Yoshimi's 'What Is Modernity?'（文学、無力および近代—竹内好の「近代とは何か」の一読解）」と題し、発表を行った。王氏は、竹内好の「文学」に関する考え方、すなわち文学とは「無力性」であり、それはつまり自己を無にすることによって全き存在となって相手の心に生きるような営為であるとする点に着目し、この独特な主体性の在り方（あるいは無）にアジアにおける「文学的」抵抗の可能性を示唆した。質疑では、竹内好の「無力」「無」について、それが京都学派の「無」とも異なったものであったことや、竹内における毛沢東への参照があったのか、など様々な角度から議論がなされた。

2日間を通して感じたのは、哲学的探究を通じて培われた中島隆博氏と張旭東氏の長年の「友情」であり、それが今回のプロジェクトという大きな動きの核になっているということである。これから、若手研究者、さらにはEAAを通して交流する学生たち一人一人もそれぞれに学問を通じた「友情」をはぐくむことこそが、本プロジェクトの目指す「未来」を築くに違いない。

報告者：宇野瑞木（EAA 特任研究員）・張瀛子（EAA リサーチ・アシスタント）・
趙齊（EAA 特任研究員）・八幡さくら（EAA 特任助教）

2019年3月北京大学-東京大学ジョイントプログラム 立ち上げ会議③



3日目の3月23日は、張旭東氏（北京大学）の案内で北京大学燕京学堂を訪問した。学内の燕京学堂内で院長補佐の陳長偉氏（北京大学）と対面し、世界中から優秀な学生を集め研究・教育を進めている燕京学堂の基本理念やカリキュラムについて石井剛氏（EAA 副院長）を中心について話し合った。

石井氏は東アジア藝文書院の基本理念や今後の展望について説明し、燕京学堂での学生に対する指導や卒業後の進路など具体的な問題について質問し、それに対し、陳氏は燕京学堂での指導教員制度や卒業生の様々な就職状況を紹介した。両プログラムが様々な形で協力できる可能性を確認し、今後さらに関係を発展させていくことを約束した。

その後、現在燕京学堂で学んでいる日本人学生たちの案内で、レクチャールームやミーティングルームを参観した。彼らが受けている授業方法や寮生活、エクスカージョンなど経験から、実際に彼らがどのような留学生活を送っているのかについて聞くことができた。

北京大学での国際的な学術研究・教育を参考にしながら、今後東京大学の東アジア藝文書院をさらに発展させていくことを誓い、3日間の北京出張を終えた。

報告者：八幡さくら（EAA 特任助教）

2019 S セメスター第1回学術フロンティア講義

2019年4月5日、学術フロンティア講義「30年後の世界へーリベラル・アーツとしての東アジア学を構想する」の初回講義が行われた。今回はガイダンスとして、コーディネーターの石井剛氏（EAA 副院長）が本講義の趣旨説明と各回の担当教員の紹介をし、また第6回講義を担当する張旭東氏（ニューヨーク大学・北京大学）からの挨拶もあった。今回、石井氏はいくつかの質問を投げかけながら講義を進め、それに積極的に回答する学生の姿が見られた。

まず石井氏が投げかけた問いは、講義名にある「30年後の世界」について皆がどう思うかである。30年後の自分はどうなっているのか、世界地図はどうなっているのか、技術はどうなっているのか。この問いを出発点として、石井氏は「東アジア藝文書院」という本講義の主催組織を紹介した。北京大学との協力において4月に創設されたばかりのこの新たな研究・教育組織は、英語では「East Asian Academy for New Liberal Arts」という名前をもつ。「リベラルアーツ」とは「教養」を意味する言葉である。

では「教養」とは何か。これについては多くの学生から回答が寄せられた。「古典を知り、知識・文章の作り方を身につけること」「新しく専門的なことを学ぶ際に基盤となる基礎知識」「問題に直面した際に参考となる前例」「自分の専門知識を他者と共有する際に相手の考え方を理解するためのもの」「物事を多角的に見ることを可能にし、人生を楽しくするもの」などである。

石井氏はそれぞれの意見の意義を確認しつつ、教養・リベラルアーツを身につけるということには「自由になること」という意味があると指摘した。「自由になること」とは、自分が変わる可能性と、他を変える力との二つを内に秘めることを意味する。「専門」とは、どれぐらい長持ちするものだろうか。技術の寿命は、人の一世代ほどともいわれる。内燃機関や原子力、また社会システムなどに対するシステムチックな知が専門である。その知はもちろん重要であり、社会はこの知によって動かされているが、それが立ち行かなくなった時、どうすればよいのか。新しい時代に対応するために、私達は自分を変えなければならない。同時に、今あるものを変えなければならない。教養は、その「自由」を可能にするものであると石井氏はいう。

「東アジア藝文書院」とは、東アジアに足場を置いてこのような教養・リベラルアーツを考えることを目指す組織である。「東アジア学」とはここで、東アジア“を”研究するのではなく、東アジア“から”考えることを意味する。この試みは、私達が近代以来培ってきた西洋中心的なパース



ペクティヴから別のものへと移行する一つのきっかけになると考えられる。

それから石井氏は、各回講義の担当教員を紹介した。その中で、ちょうど本学に滞在中であった張旭東氏からの挨拶があった。張氏は「東アジア藝文書院」の北京大学側のコーディネーターでもある。張氏は本プログラムの目標を主に4点述べた。1つ目の目標は、学生が人生を共にする友人に出会えるようなプラットフォームを作ることである。張氏自身、ニューヨーク、北京、東京と飛び回り、石井氏たちと研究活動を進めている。本プログラムでも学生が国境を超えた友情を築いていくことが望まれる。

2つ目の目標は、リベラルアーツを通して、学生が「人間」として生きることを考えることである。孔子は「君子」はその有用性によって決まるのではなく、精神の修養によって決まると説いた。精神の修養という考えはゲーテにも通じ、日本の大学もドイツのシステムに基づいている。ニューヨーク大学が企業のCEOになった卒業生らに尋ねた時、彼らが大学でもっと学んでおくべきだったと述べたのが、歴史・哲学・文学といった、人間としてあることの意味をめぐる知であった。この基礎的な知がリベラルアーツである。

3つ目の目標が、New Liberal ArtsのNewが意味するところ、すなわち「新たな」リベラルアーツを提示することである。これまでの「リベラルアーツ」は根本的に西洋のものであった。そこに東洋的なものを含めていくという挑戦をこのプログラムは担っている。それによって真にグローバルであることが可能となる。

最後の目標として張氏は、学生に自らの根差す場所としての「ホーム」を感じさせるプログラムにしたいと述べた。学生には、ロンドンの夏目漱石のように異邦人として孤独を感じるのではなく、また単に地理的に東アジアにいるということではなく、知的に自分が属しているという感覚、その自信をもてるようになってほしい。それによって真に国際的な交流が可能になる。換言すれば、自分が何者かという根本的な感覚を学生がもてるようになることが、EAAの第4の目標である。

以上の張氏の言葉を受けて、石井氏は孔子の「学びて時に之を習ふ亦た説ばしからずや」「朋有り遠方より來たる亦た樂しからずや」という語を上げながら、国際的であることの理由として「楽しさ」を挙げた。大学は「楽しい」所であり、この「楽しさ」を保存していかなければならない場所である。

各回内容の説明を受けて、学生からは本プログラムの内容が「東アジア」を掲げつつも、やや中国研究に偏っているということが指摘された。これは石井氏・張氏たちの友情からはじまったというプログラムの背景に由来するものであるが、今後各国の大学にも協力を求めていきたい、そしてぜひ学生には積極的に介入してほしいと石井氏が答え、30年後の世界を志向する本講義の初回は締めくくられた。

報告者：犬塚悠（EAA 特任研究員）

学生からのコメントペーパー

私は教養というのは自分を精神的に豊かするような内面的な性質が強いと思っていたんですが、今回たくさんの方の話聞いて、教養は外に働きかける上での基盤だったり、他者とコミュニケーションをとるための基盤だったりと外向的な性質もあると気づきました。(文Ⅲ・1年)

「楽しくありたい」というのは人間の根源的な欲求だと思うのだが、それを満たすために「教養」を「自発的に」欲せるとするのは、非常に知的で、有難いことだと思う。とはいえ、「楽しい」ということだけが教養の本質ではない。そもそも「楽しさ」自体が時代に左右されやすい、不安定な感情だ。各時代、それぞれ30年後の世界において、「楽しさ」をつくる役割を教養が担っているとしたら、「楽しさ」をつくることのできる環境や社会や状況を作るのにもまた教養が一役買うのではないだろうか。(文Ⅲ・1年)

グローバルな活躍ばかりが重視される傾向があるが、今後30年は再びローカリティを重視する傾向になるだろうと思っている。東アジア学は日本で生まれ育った自分にとって本当に重要な意味をもつと思う。(1年)

やはり依然として文学的覇権は西洋各国であるという事実を突きつけられるとともに、東アジアなどの他地域は協力して自ら発信していくべきであると痛感した。領土問題など歴史的ないざごいばかりがメディアに取り上げられ、協力する方向性は中々強調されないが、EAAを通して日中韓などの「教養」を身につけ、以後の楽しみ (pleasure) を生む有意義な時間にしようと思いました。(文Ⅰ・1年)

法学では、基本的人権を守ることが全ての考え方の根底にある。思考の基盤が人であるならば、人が生活する社会を理解することが不可欠である。そこで必要なのが教養であるのだと思う。ここで自分が指す教養とは、駒場で開講されているものに限らず、日常のあらゆる側面のことである。自分の専門をより深め、豊かなものとするためにも、教養は大切だと感じた。(文Ⅰ・2年)

「教養とはなにか」という話を聞いた時、「力学」の教授の話思い出した。「メンデルはもともと生物学者じゃなくて物理学者だったんです。物理学の視点が生物学に導入された結果なのです」。「生物学の細胞説は分子論から来ているんです」。発想も思考方法も input からはじまります。その input (○○な perspective をはらんだ)こそが教養だと思います。(文Ⅲ・2年)

2019 S セメスター第2回学術フロンティア講義



2019年4月19日、学術フロンティア講義「30年後の世界へーリベラル・アーツとしての東アジア学を構想する」の第2回目の講義が行われた。今回の講義の題目は、「30年後の世界のための世界史」で、担当講師は羽田正氏（EAA 院長）だった。フロアの学生も積極的に参入し、活発な議論が行われた講義となった。

冒頭では、30年後を考えるために30年前の世界を顧みるということで、羽田氏は、昭和天皇の崩御やベルリン壁の崩壊などの国内外の歴史的事件をはじめ、自身のフランス留学の経験をも紹介した。現在の世界が30年前の世界からどのように大きく変化したのかを認識した上で、これから30年間で世界はまたどのように展開していくのだろうか、考えさせられる話であった。

現在我々が生きている世界はどのような特徴を有するか。羽田氏は、主権国家体制のゆらぎ、「世界」という新しい公共空間の出現、科学技術の新局面、という3点を挙げた。グローバル化が進むにつれて、政治や、経済、科学技術など様々な面において変化・変容が起こり、我々は数々の新しい課題に直面している。

人々は、世界を認識し、自分と世界の関わりを理解するために世界史を学んでいる。しかし、現行の世界史の枠組みと、先ほど紹介した現代の実情との間には、ずれが生じているのではないか。現代日本における一般的な世界史理解は未だ異なったいくつかの文明世界、ないし国家の時系列に沿った歴史を束にして、ひもで縛ったようなものである。世界は異なった複数の部分から構成されており、それぞれ異なった歴史を持っている。また、その中でも「ヨーロッパ」とそこから生まれた諸国家が他国に比べて優位にあり、実質的に世界史を動かしてきた。

この現行世界史の「暗黙知」は、ヨーロッパ中心史観に基づく20世紀半ば頃の世界の実情に対応した過去の見方であり、そこでは、国、あるいは地域を単位とし、「自」と「他」を区別して歴史を解釈しようとするものである。この過去の見方は現在でもなお有効だろうか。羽田氏は、自（自国）と他（他国）を峻別する世界史観だけにに基づく判断と行動は、グローバル化が進む世界では必ずしも有効ではなく、人々が新しい公共空間である「地球」に帰属しているという意識を持つことが重要と主張する。そのために現代世界の实情に合う新しい世界史を創出すべきではないかと提唱している。新しい世界史は、「地球の住民」というアイデンティティの形成に資するとともに、「中心」史観から脱して、複数の人間集団や地域間における関係性やつながりを発見するものであ

るべきだと述べた。新しい世界史を描く方法としては、ある時期の世界全体の見取り図を描く、時系列史にこだわらない、様々な地域や人間集団の横のつながりを意識することを提起した。

さらに、羽田氏は、新しい世界史を研究するにあたって、国際交流が極めて重要な場であり、学ぶことが多かったことを述べた。「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」(Global History Collaborative)をはじめとする研究事業を紹介し、自身がメキシコ、中国、シンガポールなど様々な国や地域で行った研究活動についても語った。これらの国際共同研究から、異なる言語による複数の知の体系が存在し、研究者の立ち位置が異なると実感し、相手の意見とその背景を理解するとともに、自分の意見とその背景を理解してもらうことで、「徹底討論」することが重要であるとの認識に至った。

フロアの学生からは積極的な質問や意見が提起された。「歴史学は主権国家と切り離せないのではないか」との質問に対して、羽田氏は、現状の限りではそうであると認めた上で、全てシェアする必要はなく、根底で「地球の住民」との認識を共有できれば良いと主張した。それこそ現在にふさわしい過去の見方であると述べた。また、「人間」を中心とする歴史叙述に対して疑念を抱く意見に対する回答として、羽田氏は、もっと長いタイムスパンなどを取り扱うビッグヒストリー(Big History)について紹介した。

新しい世界史の方法によって、どのような新しい問題を提起できるか、そして、現行の歴史叙述に対して、どのように新しい理解をもたらすか。羽田氏は、1つの例として、1550~1650年の日本史を取り上げた。一般的な日本史の理解においては、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての時期は、中世から近世に転換する段階とされ、信長や秀吉による「天下」統一や、朝鮮侵攻、ポルトガル人とイエズス会の来航、関ヶ原の合戦と江戸幕府の成立、「鎖国」などのキーワードで語られる。しかし、同時代の世界に目を広げると、例えばヨーロッパでは宗教改革が展開され、スペインやポルトガルが海外に進出し、東インド会社が設立され、また南北アメリカでは銀山が発見され、キリスト教の布教とともに植民地化が進展し、さらに東南アジアでは商業が発展するなどの局面が確認できる。同時代の世界を視野に入れると、従来の日本史における理解に対して、新たな問題提起ができる。例えば、信長や秀吉にとって「日本」や「天下」とは何であったか、当時のポルトガル人とは誰のことか、などが挙げられる。また、横のつながりを重視することで、徳川政権の平和な時期の背後に存在する要素や、「鎖国」が東アジア、東南アジアないしヨーロッパにもたらした影響もはっきりと見えてくる。

学生からは、新しい世界史の必要性を認識した一方、研究における新しい世界史観を教育現場にどう導入するかという質問があり、高等学校の教育における普及に期待が示された。また、「新しい世界史を構築する権利は誰にあるか、全ての人が平等に参加できるか、政治家に利用されないようにどうすべきか」などといった、クリティカルな意見もあった。

最後に、本講義のコーディネーターである石井剛氏(EAA 副院長)から「世界史を研究する」とは「歴史を作る」ことであって、作っていく過程が重要であるとのコメントがあり、今回の講義が締めくくられた。

報告者：王雯璐 (EAA リサーチ・アシスタント)

学生からのコメントペーパー

アメリカ合衆国でアメリカ史と世界史を学んだ私ですが、自分の母語は日本語であり、日本人の両親から彼らの歴史観に触れながら育ったことから、学校で学ぶ「アメリカ中心」の歴史と自分が家庭で聞いていた日本視点の歴史や国際政治史とのギャップにとまどうことがしばしばありました。先生が提案する「世界に帰属する人々」という意識に基づいた歴史はとても興味深いですし、私のように国籍や言語が越境している人々に居場所を与えてくれる歴史なのだろうという希望も抱けます。一方、実際にこの新しい歴史観を育てていくにおいて、歴史認識が異なる集団の間での衝突が起こると考えます。そして、このような衝突は、日韓・日中の対立のように国家など同レベルの権力をもつ主体同士だけでなく、国家の政府対抑圧されている市民やマイノリティのように、圧倒的な力の差がある主体の間での対立も予想されます。このような状況のもとで、主体同士の討論や妥協がどのようになされ、排他的ではない、より inclusive な歴史を導き出せる方法を検討したいです。(文 I・1年)

自分の考えでは、現在はグローバル化が進み、たしかに国民国家の存在が薄れてきてはいるものの、次にどういった時代になるかを見通すには難しい時代だと思います。国民は虚構にすぎませんが、その虚構が崩壊した先に何が存在するのかが今はまだ分かりません。そうした人間存在のあり方がおぼろげにでも見えてくるときにならなくては、「新しい世界」をつくり上げるのは難しいのかな、というふうに感じました。(文 III・1年)

社会において、AI が物事を行う範囲が拡大していくと予想されている中で、歴史、広くは教育のあり方が劇的に変化する可能性をどう検討していくべきかと思います。(文 I・1年)

確かに、主権国家体制に染まった世界史は良くないが、だからといって新しい世界史とされるグローバルな、地球人としての世界史が素晴らしいとは思えない。今グローバル化しているからグローバルな世界史を考えろというのでは、30年後には、おかしいと言われるだろう。その方法では、独裁者の時代には、独裁者を素晴らしいとする世界史になりはしないだろうか。だからと言って、他に選択技があるのかも分からないが、現状に合わせた歴史の解釈をするのは、時として危険ではないかと思う。(文 I・1年)

歴史における事実はほんとうに一つなのか。(文 III・2年)

神の視点を持たない人間がどう歴史を書くか、「唯一の正解がない」歴史をひとつにまとめるなんて不可能ではないですか。(文 II・1年)

2019 S セメスター第3回学術フロンティア講義

2019年4月26日、学術フロンティア講義「30年後の世界へ——リベラル・アーツとしての東アジア学を構想する」の第3回講義が行われた。今回は東アジア藝文書院設立の立役者の一人である中島隆博氏（EAA 副院長）が講義を担当した。「Open Philosophy in East Asia」と題し、学生の質問が飛び交う白熱した講義が繰り広げられた。

中島氏が学生にまず語りかけたのは「Open Philosophy」が意味する内容についてであった。open（開く）とは一体どのような意味なのか。中島氏はここでナイジェリア系アメリカ人作家 Teju Cole の *Open City* (New York: Penguin Random House, 2012) に言及しながら、open であることは無防備であることだと説明した。哲学が無防備であること、それは哲学が誰に対しても開かれていることである。中国や日本に哲学はないという論及がしばしばなされるが、30年後の未来においてこのような語り方は出来るのか、或いはするべきなのか。中島氏は哲学を一部の地域のみが独占するようなものではなく、世界のあらゆる人に対して開かれているものとして考えたいと述べた。そしてその中で非常に重要になるのが、概念の武装解除である。

歴史学は歴史を対象にする。文学は文学を対象にする。では哲学は何を対象にするのか。哲学は概念を対象にするという答えが最大公約数的なものになっていると中島氏は話した。哲学書や哲学研究の本を見ると様々な概念が登場する。時にそれらは日常ではあまり使わない語句が使用されており、哲学に手を出そうとした人たちを辟易させる。そのような概念を強調すること、それは哲学を一部の人のものにしてしまい得る。よくわからない言葉を使い、哲学に興味のある人を遠ざけてしまうようなことをしていて良いのかという問題提起である。

概念の武装解除に言及した後、中島氏は日本哲学の話題に切り込んでいった。近年の日本哲学研究における大きな成果として、2017年に刊行されたトマス・カスリス氏の *Engaging Japanese Philosophy: A Short History* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2018) を中島氏は評価する。本書の最大の特徴は日本哲学を一つの研究対象として距離をとって客観的に考察するのではなく、engage、つまり関与することを通して日本哲学を読む手法を取っていることである。何か特定のテキストを読む際に、それを研究対象として突き放しているままでは問いなどそもそも生まれないとカスリス氏の言葉を使いながら中島氏は主張する。

続いて、話は日本における日本哲学の研究状況に移る。現在のところ、日本哲学科や日本哲学の



専攻を有している大学はほとんどなく、哲学科や哲学専攻の多くは分析哲学や現象学などの、カスリス氏の言葉で言えばドイツやアメリカなどにおけるローカルな哲学に拘りすぎてしまっている。中島氏はそのような地域的な、ローカルな哲学を脱し、世界哲学、つまり world philosophy を考慮する必要があり、それが来るべき open philosophy の前段階になると主張する。

World philosophy の発展を予期するものとして、中島氏があげたのは 2016 年 11 月にニューヨークタイムズに掲載された記事であった（“If Philosophy Won't Diversify, Let's Call It What Really Is”）。これはアメリカの大学の哲学科が行なっているのは西洋の哲学のみで、「欧米哲学科」と改名するべきだと風刺した記事であり、賛否様々な声があったが、哲学が少しずつ開放され、world philosophy の流れにやっと入ってきたと中島氏は感じている。

ではなぜ哲学は世界化すべきであると強調するのだろうか。それは哲学が持つ複合語の原理と深く関わっている。ここで取り上げられたのは中島氏と共に『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019 年）を著した小林康夫氏であった。本書は日本哲学を客観的に論じるのではなく、日本から普遍に如何にアクセスできるかを試みた本であった。そして小林氏は平仮名、カタカナ、漢字などが入り交じった「複合言語」としての日本語に言及しつつ、こうした複数言語の世界に直面した知性として空海を挙げている。このように複数の言語が組み合わせるところにこそ問いが生まれ、哲学が成立すると主張している。講義後の質問の中で、これは日本特有の現象なのではないかとの指摘があったが、中島氏は例えば現代フランス哲学はドイツ哲学の読解の中から生まれてきたこと、デモクラシーという言葉が様々な言語に翻訳されることを通してその意味を充実させてきたことなどを挙げ、あらゆる概念は複数の言語の中で展開してきたと答えた。問いは常に複数の言語の中から生まれる。だからこそ哲学は世界化する必要があり、そして open なものにならなければならないのである。

中島氏が最後に触れたのは未来についてであった。未来というのは大きく分けて 2 つのタイプがある。天気予報のように自分が何をしようが変わらないものと、人生のように自身の動きによって変わり得るものである。強調されるのは後者のタイプの未来である。それは欲すること、関与することによって変化する未来である。言葉を変えれば、私たちは自身が関わることによって大きく変わってしまう未来に直面している。哲学の未来、東アジアの未来についてどのようなものを欲するか。東アジア藝文書院と共にその展開に期待したい。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

西欧という思想の檻から抜け出し、哲学という言葉の意味を概念武装から解放し、人々が主体的にかつ普遍的に哲学と向き合っていく。自発的、関与的に新たな知を「欲する」。それこそが本当の哲学であるという新しい定義付けを学ぶことができました。（中略）未来そのものを構想し、主体的かつ普遍的に未来と関わっていく。そうすることで未来というものは変わってくる。自発的、関与的に新たな可能性を「欲する」。このように哲学において求められる姿勢が 30 年後の未来を考えるのに際し必要になってくることを学びました。東アジアという眼鏡を通して未来を見る、この EAA の主旨が少しずつ分かってきた気がします。（文 I・1 年）

哲学をする際に各言語の歴史性、拘束性を無視しないほうが良いと考えていらっしやるようでしたが、その場合エスペラント語のような明確な文化・歴史的背景を持たない『開かれた言語』で哲学は行えるのか。(文Ⅰ・1年)

理系の話題の中にも哲学が入ってくるような状況であるならば、現在も東京大学の入学システム、そして学習システムの中で残存している文理の境目はあやふやではないでしょうか?というかむしろ残す意味はあるのでしょうか?リベラルアーツ(私はこの学問の重要性は認識しています…)を学ぼうとするなかで、不安になります。自分の拠り所が無くなる感じがするのです。(中略)色々な「哲学」を学んだうえで open philosophy に関わりたいと思います。なんだかワクワクしてきました。(文Ⅱ・1年)

「可能性をこえたところを欲することでしか未来は変えられない」というメッセージは強くひびいた。(中略)学問への open な、無防備な姿勢、そしてリベラルアーツの重要性を改めて感じさせられた。(理Ⅰ・1年)

法学の講義では、英米法と大陸法を対比したり、フランス人権宣言の意義を探ったり、明治維新以降の日本法制史をフランス、ドイツ、アメリカの影響のも学んだりしています。(中略)そこでアジアやアフリカ等非西洋地域の法学、法哲学に関する知見というのはあまり触れることがありません。それらの東洋的、全世界的な法への理解の重要性を今回の講義で実感できたような気がします。当然、そこには哲学同様、“法”とは何かという疑問、再定義や現状の法の分析方法、研究対象への批判的な姿勢が伴い、挑戦的な態度が必要になるかと思いますが、自ら興味の方向を定めることができました。西洋的な法以外、“法”ではないか。「近代化」以前のアジア地域に“法”はないのかなど問いを常に持ちながら、学習を進めたいと思います。(文Ⅰ・2年)

2019 S セメスター 第 4 回学術フロンティア講義



2019年4月30日、第4回目の学術フロンティア講義が行われた。連休中にも拘わらず、多くの受講者が出席した。今回は、本講義のコーディネーターでもある石井剛氏（EAA 副院長）により、『『天下』なき時代の『天下』論と新しい世界観』と題した講義が行われた。

石井氏は、「世界史というのは疑わしい概念」、「人類は世界を世界とする境地に未だ至っていない」、「世界としての世界は未だ存在していない」という、ある人物（この人物が誰であるかは授業の中で後ほど明かされた）の発言を紹介しつつ、現在の国際連合について触れ、国連は世界政府ではなく、国際法も世界法とは言えないのではないか、という疑問を投げかけた。

さらに、「世界」を考えるにしても、「国家」中心の見方に我々はどうしても拘束されてしまうという限界が指摘された上で、「国家」とはなにかが問われた。ここで石井氏は、カントの「永遠平和のために」を参照した。カントによれば、自由な諸国家が連合することで、平和が保たれる。諸国家の連合は、世界共和国とは異なる。なぜなら、前者は、自由な諸国家の連合であり、上位に君臨する立法者は存在しないが、後者の場合は、上位の立法者が存在してしまうことになるからだ。それゆえ、諸国家の連合のもとには、依然として「国家」が残る。「国家」とは、自然環境の配備により、各民族は他民族と隣り合っていることに気づき、そうして内部で団結が促された結果構成されるものなのである。さらに石井氏は、章炳麟の『国家論』を挙げ、外敵から守るために国が必要、弱い国こそ「国」になる必要があると論じられたことに言及した。これに対しては儒学の立場から『大同書』を書いた康有為の批判があった。康有為は「国」より上の審級として「天下」がある、と主張した。章炳麟は辮髪を切り落とすことで、満州族の軛を脱し、漢族の主権を回復することを叫んだが、康有為は満州族へのプロテストよりも、共に政治改革を進めることで、共栄することを意図した。

そうして、冒頭の「世界としての世界は未だ存在していない」という発言の主が、現代中国の学者・趙汀陽氏だと紹介され、彼の「天下システム論」に話が及んだ。現代国際法ではソリッドな国境画定が必要とされるのに対し、これの代替案として、「天下システム論」は次のような世界を提示する。「天下システム論」においては、中心から同心円状に「文明」が薄らいでいくのであり、明確な国境画定は必要とされない。ただ、趙氏のこのような主張については、そこには中心に対する欲望があるのではないかという問題点もある（自由主義経済に基づく「ワシントンコンセンサ

ス」に代わる「北京コンセンサス」の可能性というトピックも、ここに関連してくる)。

次に石井氏は、趙汀陽氏の主張より遡ること数十年、1946年に平岡武夫が『経書の成立』で展開した「天下的世界観」を参照した。平岡によれば、天は宗教的であるよりも政治的な概念であり、周代が増えてくる表現である。ここで「天」は訓詁学的には「民」と同じであり、「天」、「天命」とは、ルソー流に言えば一般意思である。周の君主は天子を名乗り、「天=民」によって自身を正統化したのだ。これにより、経学は「天子とはなにか、いかにあるべきか」を語る、正統性の根拠を論じる学問であるとされた。そうして「天」の下に秩序が保たれているのが「天下」であるという。かような「天下的世界観」の下に諸王朝が交替していくが、中華民国の登場によりそれが終わり、そのようななかで経学の権威も落ち、科挙は清末にすでに廃止されていた。中華「民」国においては、「民」が「天」の媒介なく、直接に民意を代表することになる。平岡は戦後の国際連合や国際軍事裁判を歓迎したという。というのも、そこに天下思想の復活を見たからだという。すなわち、国際軍事裁判は、人道（「民」）の名の下に「正義」が裁くものであり、そこには「天」と類似したもの、普遍的に正しいものが観念されるからである。

では、「天下」の中心はなにか。それを語らざるをえない。再び、趙汀陽氏による「天下的当代性」に立ち返り、天下の時代におけるその中心としての主権の問題についての議論がなされた。今日、もはや戦争の時代ではなく、戦争をすればすべてが滅びるため、覇権争いは他の形にとって替わられるのだ。ここで、内閣府によって提言された「Society5.0」、「第四次産業革命」が参照された。この提言の底流にあるのは、「IoT」、「AI」などの「サービス」である。ここで、「Service is Power」から毛沢東の「人民にサービス(=Service)せよ」へと考察を進め、サービスが生み出す力の問題が議論された。では、「Society5.0」はむしろ共産主義の理想なのだろうか。この問題を解く鍵として、「ネット化する権力」が議論され、情報化社会において情報は誰が握っているのか、主権の問題はどうなるのかにつき問題提起がなされて、講義の本体は閉じられた。

受講生からは、「Service is Power」について、追加で説明が求められた。これに対し石井氏は、現状の、民主的な決定システムに代わり、快適なサービスを提供するものが民主的に支持され、権力化するのではないかという可能性を示唆した。さらに、サービスを提供する側が誰かに支配されているのではとの疑問に、石井氏は、そこでは一元的な支配関係が成立するかどうか不明確であると応じ、サービス化する権力とは、どこに支配の中心があるか分からない、「ネット化する権力」であるとした。次いで、サイバー空間は「世界」の一部であるかとの質問がなされた。サイバー空間には「未知」があり、地球上が領域的にすべて把握されている現状、そこに「天下の世界」が成立する余地がある中で、「未知」なる、また「中心」のない、サイバー空間上に「自由」の余地があるのではないかとされた。

今回は講義途中から活発に発言が飛び交い、講義終了後の討論も特に活発であった。こうして、古代中国から現代のサイバー空間にまで至る今回の講義は閉じられた。

報告者：高原智史（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

1つの疑問に直面した。サービスが大きな力を持っていくにつれて、天の中心がどこなのか分からなくなっていったときに、人々が不服な事態に追い込まれたら、人々は革命を起こすことが可能なかどうかということだ。現在の社会では政府という目に見えるものが存在しているが、サービスを提供することがメインとなったインビジブルな政府に対してもサービスの利用を拒否し、先生が仰った「沈黙都市」の結末のように山に逃げるしかないのだろうか。それともサービスがこの上なく充実しており、人々はそのような革命の意思すら持たなくなるのだろうか。頭をフル回転させる授業で非常に良い意味で疲れました。(文Ⅱ・1年)

「天下」を、現代の社会に応用しようとする中国哲学の世界の奥深さ、面白さを感じることができ、有意義な時間でした。(中略) 多様化する世界の中で国家や集団、個人の利害を調整する存在を否定するつもりはありませんが、それを「天下」と呼ぶならば、中心をめぐる(不毛な)戦いが生まれ、やがて国際社会は立ちゆかなくなる(そうではないにせよ、非合理的な部分にエネルギーがさかれる)ように思います。(文Ⅰ・1年)

自国第一主義が強まりを見せる中、30年後の世界はどうなっているだろう、と考えると国連中心の天下がバラバラと崩れていってしまうか、それとも新たに中心的な役割を担う人々が現れてくるかのいずれかであると思う。自分は前者の可能性としては高いと思う。(中略) もはや国際協調自体が不可能なフェーズ、各国の欲求を等しく満たす解決策がありえないフェーズへの突入していく気がする。こうしていくつかの文明が互いに比較的浅い関係を保ちつつ独立して併存する古代のような世界のあり方に戻る気がする。(文Ⅱ・1年)

中立的に世界の中心となれる存在など現実的できないように思える。(文Ⅰ・1年)

これまでの自分は、主権国家体制を、言ってみれば永続的な構造のように、無意識に思っていた。しかし従来と異なり、インターネットにより全ての人が直接に関わることのできる世界においては、「天下」を治める世界政府のようなものが成立しうるのであり、それが一体何になるのかを意識するのは必要なことなのだろうと痛感した。(文Ⅲ・2年)

サービス本位の社会は、古代中国における理想が個々の欲望に入れかわったようなもので、ある種理想郷のようでディストピア的な可能性を孕んでいると感じた。(理Ⅰ・2年)

2019 S セメスター第5回学術フロンティア講義

2019年5月10日、第5回学術フロンティア講義が行われた。今回は、藤原帰一氏（法学政治学研究科教授）が講義を担当された。講義の冒頭では、靖国問題や従軍慰安婦問題、あるいは南京事件といった具体的な事柄から歴史問題に触れつつ、現在の問題ではなくとも、過去に対する判断が政治指導者の評価につながることに、さらには指導者にとどまらず、国民も深く関わる問題になることが指摘された。そこで藤原氏は、「なぜそれが問題になるのか？」という問いから出発し、歴史が現在の争点となるに至った背景を、いかに解きほぐすかが課題になると述べた。

次に藤原氏は、戦争を誰がどう記憶するのか、という問いを提示した。特に、「共有されたお話」（としての「記憶」）として、博物館の展示の例がとりあげられた。まず、広島平和記念資料館を挙げ、そこでは、原爆の被害を受けた一般市民が主に展示されており、軍の経験がほとんど取り上げられていないことが指摘された。核廃絶のアピールという普遍性と、日本人のシビリアンへの視点の集中という特殊性が同居し、その結果、戦争責任の問題は外されていると、藤原氏は指摘した。続いてワシントンD.C.のホロコースト博物館の事例が紹介された。そこでは「戦争はいけない！」という話がなされているわけではなく、連合国と交戦状態に入る前からユダヤ人の迫害をしていたナチスに対し、もっと早く戦争を始めるべきだったというメッセージが発せられていると、藤原氏は述べた。そこではむしろ、「戦争責任」ではなく、「戦争を闘う責任」こそが問われていて、戦争の意味付けが広島とはまるで異なっている。さらに、スミソニアン博物館における、エノラゲイの展示について、言及された。この展示をめぐっては、日米の距離以上に、専門家と一般大衆のギャップにたじろぐアメリカの専門家の姿が印象的だったと藤原氏は述べた。というのも、専門家により用意されていた客観性の高い展示企画に対し、メディアの報道を通じて、原爆投下が悪であるかのような展示だとの批判が集まったからである。

続いて問われたのは、「歴史とは記憶なのか？」という問題である。史料に基づいてそれを解読し解釈するのが歴史ではないか。記憶などという曖昧なものは歴史の対象にはならないのではないか。このような見解に対して藤原氏は、次のように応答を試みた。まず、書かれた史料によって解釈できる歴史は歴史の一部に過ぎない。歴史の中には、記憶し、記憶されたと当事者が考えるものそれ自体が含まれており、これら全体が記憶の一部になる。自分たちの過去がどのようなものな



のかを再現する際、必ずしも史料によらず、語り伝えられたものによって表現された要素が入ってくる。

また藤原氏は、何を語るべきかを学者が方法論でもって決めることができるか、という問いを投げかけた。学者の特権性を指定した時点で、下から立ち上げられる「われわれの歴史」という立場から反撃を受けることになることとされ、講壇史学と共同体的な歴史（ナラティブヒストリー）との相克を指摘した。

さらに、語られる記憶と語られない記憶があること、公的な記憶と私的な記憶との間の隔たり、語りたくても共有されない記憶の存在についても言及された。

戦争の記憶においては、犠牲者になったという経験が共有されやすく、またこうした経験は「われわれ」という意識と結びつきやすくとされた。南京事件はチャイニーズの犠牲の物語であり、慰安婦問題はコリアンの犠牲の物語であり、広島はジャパニーズシビリアンの犠牲の物語であって、そのことに敏感でない場合に、なぜ犠牲に気付かないのかという公憤が生じるとされた。また、南京事件については、南京の犠牲が長らく北京から無視されてきたことにも後ほど触れられた。中国政府における南京事件の扱いは、中華人民共和国の機軸がマルクス・レーニン主義からナショナリズムへと傾斜していく中で変化していったことが指摘された。

では、「われわれ」という意識とネーションが重なり合うのはなぜか。藤原氏によれば、それは、戦争が国家を単位に生じ、ナショナルな動員が行われるからだ。また、戦争を伝える主体としての政府の役割がある。しかし、必ずしも国家の語りだけに収束するわけではない。南京事件を例に挙げれば、ネーションの要請と、より一般的な概念が重なっている。救国、国防というネーションの要請と、こんな侵略があってはいけない、日本軍国主義、いやおよそ軍国主義の台頭を許してはいけないというナショナルを超えた普遍的な側面との混淆がある。

日本における戦争の記憶として、広島を物語を挙げられた。そこでは、外国が敵であったという状況から、戦後、国家と社会の分離を通じて、自国の政府が他者化された。そして、「われわれ」という形で、軍、官僚を除いた犠牲者としての日本国民という意識が形成されることになった。戦後、兵士を描く多くの物語が現れるが、それらは、「一億火の玉」に回収されない、自己・自分・個人としての経験を表現しようとしてきた。しかし、このような個人に注目するだけでは、共通の経験に根ざした社会が立ち上がらず、共同性を形づくる「われわれ」という図式が必要になるとされた。

靖国神社について、そこに何度も参拝する遺族がいるが、それは近親者の死に意味を与えてもらえるからだとして、それを遺族が求めることは理解できるとされた。そして、これこそがナショナリズムが市民宗教として働いているということであると強調された。死に意味を与えるのは本来宗教の役割であるのだから。そうして、このようなナショナリズムが国境を越えて出会えば、大変なことになることは理解されようと述べた。

最後に、「戦争の何を記憶するのか」という問いが提示された。これに対し、藤原氏は次のように主張した。戦争の記憶を revision するためには国境を越えざるをえない。ここで revision とは、不都合な記憶を抹殺する歴史修正主義とは異なる。必要とされているのは、国境を越えて戦争を語る姿勢であり、このために revision が必要とされる。これが実現できなければ学者という存在に意味があるだろうか、という力のこもったメッセージが発せられた。

討論では、いくつもの質問があがったが、これらの遣り取りの中で藤原氏が言及した、印象的なエピソードで本報告を締めくくりたい。かつて藤原氏は、広島での会議で、広島での立場を相対化す

るために外国から人を呼ぼうと提案した。実際に、重慶からの参加者の招聘が実現した。彼は会議で次のように述べたという。日本軍の空爆を受けた街の者として、広島のこととは他人事とは思えない。しかし、それならば、なぜ広島の人々は重慶に来てくれないのか。その後これに感銘を受けた広島市長が、重慶を訪問した。このエピソードから、藤原氏は、国境の外との戦いだけが現実だという悪しき現実主義に陥らず、国境の中での語りがある外でも共有できるのではないかという気付きこそが重要であると説き、講義は終了した。

報告者：高原智史（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

講義の中で、語られない記憶や私的経験ということを知っており、目を覚まされました。確かに現時点で文献として世に出ているものは語られる記憶や公的な記憶であり、世の中には語られず、胸の内に秘められている記憶も多くあり、それらも触れるべき記憶の一部であるかもしれません。経験していない、できなかったような事実、出来事を公平に認識することは非常に難しいが、かといって政府などのほかの力に突き動かされるのではなく、学びの姿勢を持つべきだと思います。とくに、国境を超えて戦争を理解するという姿勢は今後失ってはいけないと思いました。（文Ⅰ・2年）

質疑応答で出てきた疑問とも似ているが、私はある歴史的問題を考える際、様々な本を読んで様々な主張を知った結果、自分なりの主張をもつことができず、中立的な立場をとってしまうことがよくある。藤原先生は講義の中で慰安婦や個人としての戦争責任の有無に対して自分なりの確固たる主張を持っていらっしゃったので、強いうらやましさを感じた。この大学生活で、論文を疑い、調べ、さらに理解を深めていく能力を身に付けたいと思った。（文Ⅰ・1年）

私は小学校2年生から5年生の間、広島の中区で過ごした。（中略）そんな環境に身を置いていたため、アメリカの人々の原爆に対する姿勢にはいつも憤りを感じていたし、広島について、戦争について周囲の人よりも理解しているという自負もあった。一方で、従軍慰安婦の問題について訴える韓国人の人々を冷やかに見つめた自分もいた。今日の講義を通じ、自らの浅はかさや戦争教育における「洗脳」の危険性について思いをめぐらさずにはいられなかった。フラットに、多角的な視野を、と言うのは簡単だが、実際には手間を惜しんで、なんとなくの理解で済ませてしまっていることが多い私であるが、30年後の世界において、そのような「知」を活かすことが果たしてできるのか、自らに問わなければならないだろう。（文Ⅲ・1年）

過去の罪そのものをなかったことにしようとしたり、中国や韓国に対して否定的な態度をとったりするのは誤りだと思う。(中略) もっと戦時中の中国や韓国に起きた惨状を知り、自身を客観視できるようになるべきだと思う。謝罪はそこから後での問題だと思う。(文Ⅰ・1年)

自分たちの経験が、自分たちのものだけではないかもしれない、国境の中だけで共有されるものでもないかもしれないという重慶の方のお話を聞き、自分も日本の広島や長崎だけではなく重慶やその他多くの戦争経験地(日本の侵攻を受けた地もちろん含めて)を訪れ、その気づきをするべきだと感じた。(文Ⅲ・2年)

2019 S セメスター第6回学術フロンティア講義



2019年5月24日（金）、第6回学術フロンティア講義が行われた。今回は張旭東氏（ニューヨーク大学・北京大学）による講義が予定されていたが、佐藤将之氏（台湾大学）が急遽代理講義を担当することになった。中国哲学とりわけ『荀子』を専門とする佐藤氏は日本出身で、台湾大学、ソウル大学で修士号、ライデン大学で博士号を取得し、現在台湾大学で教鞭をとっているという、異色な経歴の持ち主である。このたび、「東アジアの視野から自分自身の人文学の未来を構想するために」という主題で、30年後の人文学をいかに構想するかについて語りながら、それと関連した形で自身のマルチリンガルなバックボーンの形成も紹介した。

未来の人文学を構想することについて佐藤氏は3つのポイントを述べた。

その1、未来がこうなるから自分がこうするという受動的な姿勢をとるのではなく、逆にいま自分が考えて携わっていることは未来においてどうなるかを考えるべきだ。つまり未来に規定されるよりも自分で未来を作ることが重要である。

その2、外国語をマスターすべきだ。というのも、1つの外国語をマスターすると、自分の能力、世界観が2倍になるからだ。これはある種のかけ算ともいえる。いまの日本の社会環境は基本的に日本語に特化されているため、日本語が中心になっている情報がほとんどである。この状況は視野、認識範囲を狭めることになる。しかし英語や中国語のような外国語を身につけると、自分の視野と知識は倍になる。

その3、「中国哲学」は百年前「東洋哲学」、「支那哲学」と呼ばれていた。いわゆる中国哲学は実は1880年代の日本で興った。明治期になると、知識人は従来の経学ではなく哲学的な考え方によって物事を見るようになった。当時の東京大学の外国人教師フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）に啓発された日本人学生たちが東洋哲学を構想し始めた。その最初の一人は井上哲次郎だった。彼らは日本人の道徳をいかに構築するかに腐心しており、国民道徳論や修養論（次の世代にあたる新渡戸稲造ら）を唱えていた。そもそも「修養」という概念それ自体は当時

最先端の哲学、心理学など科学的なものを受容した上で形成されたものである。要するに哲学を導入し、国民道徳や修養論として読み替えたわけだ。そういった営みは一高の校風をも形作った。つまり、当時の人々は最初からそうしようとしたわけではなく、むしろその時その時の知識を吸収しながらそうしてきた。それは、今日の私たちが30年後の世界を構想することと同じく、自分が何かをやることによって新たな構想が生み出されてくるのだ。こうした佐藤氏のお話には、いまの東大生による主体的な作為への期待も込められていた。

続いて、佐藤氏は自身の経歴、とくに留学経験を紹介した。学部時代に韓国語を学びたいという思いから、大学2年生のときに初めて韓国に行き、高麗大学で韓国語の基礎を勉強したという。さらには当時の先生の反対を押し切って延世大学に1年間留学し、韓国語を大きく上達させた。こうして韓国語という外国語をマスターして佐藤氏が気づいたのは、自分のもっている世界観や知識が2倍になるということにほかならない。実際、韓国語を身につけたことでいろいろ恵まれたという。しかも1つの外国語をマスターしたことによって、ほかの外国語を学ぶコツも掴めるようになった。また、儒教ブームが起きており東アジアを理解するには儒教を理解しなければならないと言われていた時代だったため、その後は台湾に留学することにしたという。台湾大学では2年をかけて『孟子』について修士論文を書いた。その後また韓国に渡り、ソウル大学で2年間の修士課程を経てもう1つの修士号を取得した。ところがその時、いったん自分を東アジアから引き離し、欧米に行ってその視点を獲得しようと思い始めた。そこでライデン大学に留学した。最初は英語は全く歯が立たなかったが、英語で書かれた本を読み漁ったりメディアに触れる機会を増やすなどして、英語を必死に勉強した。ライデン大学では7年を過ごし、博士号を取得した。修了後は主に欧米と日本の大学に応募したが、台湾の大学は自身のバックグラウンドに非常に興味をもっていたこともあり、台湾での就職が実現した。そして日本ではなかなか就職できず「ワーキングプア」に転落しつつあった（中国思想を専門とする）若手研究者を何人か台湾の学術界に引き入れた。当時の日本における中国思想研究の状況は「職業としての中国思想研究——「ワーキング・プア」化する若手研究者」と題する佐藤氏のレポートにまとめられている。

総じていうと、自分自身をプロモートすることが大事で、そのためにも外国語を世界観・知識が2倍になるまで勉強すべきだというのが佐藤氏の主張である。外国語によって自分を豊かにすれば、その先に必ず大きな突破口が見える瞬間があるという。

自分をプロモートすることはむしろ教養の問題に関わる。佐藤氏によれば、古典とは人間がどう生きるかという固有の問題をめぐる思考の結晶であり、古典と対話することは未来につながる。そこで佐藤氏が提案した読書法は、人類史上重要だとされている古典、例えば『論語』、『墨子』、『莊子』などをとにかく短期間（2週間でざっと1冊全体に目を通すといったペース）で読むことである。これは実際アメリカの大学で行われていることでもある。例えば政治哲学者のフランシス・フクヤマ（Francis Fukuyama）はハーバード大学でいろいろ古典を読まされたからこそ、彼の著作では西洋の大家からの引用が随所に見られる。つまり議論の引き出しとして古典を知るべきである。中国哲学の古典を10冊ぐらい読むと、ビジネスをするにしても学問をするにしても力量の違いが現れる。

佐藤氏から見れば、昨今騒がれている米中の貿易摩擦のことはともかく、中国における人文学の研究は決定的に足りない。例えば広東省では哲学を教えている大学はせいぜい中山大学、深圳大学、華南師範大学くらいである。しかし10年、20年後、人文の争奪戦は必至なので、日本人はむしろ自分のほうから中国のマーケットを作り上げるべきである。佐藤氏はさらに昨年に東京大学で



行われたマイケル・ピュエット (Michael Puett) 氏を囲む座談会に触れた。そこで盛んに議論されていたのは「礼」の問題であった。「礼」をしっかり構想することは 30 年後の東アジア人の友好に寄与できるという。

授業の最後に聴講した学生たちから様々な質問が寄せられたが、以下、古典の読み方と位置づけに関するものおよびそれに対する佐藤氏の回答を挙げる。

Q：自分が果たして古典をどのくらい読んでいるか自信がない。

A：1 回読んで分かるようなものは古典ではない。古典はいますぐ役立つわけではなく、将来いつか人生の重大問題に直面したとき、再度読み返したくなるものである。これこそ古典の価値だ。古典を読むとき、最初は大筋を掴めればよい。

Q：技術だと新しいほうがよいとされているが、なぜ思想になると古いほうがよいのか？なぜそれを踏まえた現代の研究がもっと評価されないだろうか？

A：結局われわれは人間なのだ。人生をどう生きているかが第 1 問題である。例えばスマートフォンという新しい技術を使うにしても、結局のところ重要な意味というのは、コミュニケーションをとり人間関係を構築するため、つまりよりよく生きるため、といったところにある。古典というものは、いかに生きるかという普遍的な問いを考えると、常に立ち返る場所である。後世の優れた哲学はすべて古典との対話から生まれたもので、その意味では純粋に「新しい」ものは存在しない。

報告者：郭馳洋 (EAA リサーチ・アシスタント)

学生からのコメントペーパー

「未来を自ら創造し、それに世の中が追いついてくる」という内容に強く興味を持ちました。やはり、「適切な時期」や「しかるべきタイミング」を待っているのではなく、自ら行動を起こし、困難を乗り越えていくことの重要性に気づきました。そのためにも、壁に向かっていく勇気が必要だと思いますが、その一方で、若者の失敗に寛容な社会であってほしいとも願います。(文I・1年)

教養とは、それ自体力ではないけれど、何かを始め、そのプロジェクトを推し進める上での味方になるものなのだと感じました。(文I・1年)

古典の重要性を近頃ひどく実感している。学問自体は古典への積み重ねである点、時の流れという試金石に耐え抜いている実績がある点などが理由だ。今日教授の見解を聞いて、精読というよりも、読み破り(乱読)した方が良いのかなと感じました。(文III・2年)

人文学がどのように人の生に影響を与えるのかという洞察が新鮮だった。本を読んだり言語を学ぶことへの動機付けになったような気がする。人文学や言語を学んで頭の奥底に積もった知見が人生の選択を迫られた時に力を発揮するという話はたまに人文系の話題で聞くが、それをこれほどに高いレベルで広範に知識をつけている人の話は人生で初めて聞くので、その中で古典や言語を学んで自分や社会に起こったことを精細に描かれると大きな説得力を持ってそれらの重要性を感じることができた。(理I・2年)

先生の半生を聞いて最も心にささったのはその行動力です。私はいつも物事を見通しをたてて進めたいと思っていて、自分のからにとじこもってしまいがちです。でも先生くらい少しむこうみずに動くくらいの方が、(もちろん努力は必要ですが)楽しいかもしれないと思いました。私は今中国語を第三外国語として学んでいます。まずは東アジアへととびだしていきたいです。(文I・1年)

2019 S セメスター第7回学術フロンティア講義



2019年5月31日、学術フロンティア講義「30年後の世界へーリベラル・アーツとしての東アジア学を構想する」の第7回目の講義が行われた。今回の講義の題目は、「30年かかってできた気候変化適応技術のはなし」で、担当の先生は小林和彦氏（農学生命科学研究科名誉教授・茨城大学研究員）だった。

冒頭では、30年後に世界の食べ物は足りているか、各国・地域の食料供給量の統計を示しながら問題提起された。食べ物が余る傾向にあり、フードロスが問題となるとのことであった。

次に、本題に入る前の前提として、参考文献として挙げている「貧乏人の経済学」と「イノベーションの普及」の内容に基づいて、発展途上国の実態とイノベーションと普及について紹介があった。発展途上国に住んでいる人の考え方の一例として、テレビが食べ物より大事という意見があったことが興味深いと話された。

イノベーションとは、東芝がラップトップを発明したような新発明に限らず、ペルー農村で水を煮沸して飲むようになった新習慣をも含む。そして、普及とはイノベーションが広がることを指す。ただ、利便性の高い新しいイノベーションが広がるわけではなく、タイピングをあえて遅くするために開発された QWERTY のようなキーボード配列が現在逆に普及していることが紹介された。また、イノベーションの普及では、初期採用者が採用して、その後に多数採用者が採用するという流れがあり、その普及は個々の社会状況に依存する社会現象であるとのことだった。

上記を前提に、「30年かかってできた気候変化適応技術のはなし」という本題に入った。具体的には、北海道の十勝地方で普及した雪割りという農業のイノベーションについて紹介された。北海



道の十勝地方では、気候変動の影響で積雪が早まったため、土壤凍結深（土壤が凍結する深度）が減少した。そのことにより、野良イモ（土壤が凍結しなかったことにより死滅しなかったイモが翌年野放図に発芽したもの）が多く出るようになって、繁忙期の夏に人員を割いて除去する必要性が出るという問題が発生した。

そこで、ある十勝地方の農家（リードユーザー：イノベーションを積極的な応用を試みるユーザー）が雪を畑から除去すること（雪割り）で、土壤凍結を促して野良イモを減らそうとして、そのような技術が分散的に普及していったが、雪割りによって逆に土壤凍結深が高くなりすぎて農業に悪影響が出るという課題も出てきた。その際に、北海道の普及センターを通じて、地温推定モデルを研究していた広田博士（北海道農業研究センター）が偶然その課題を知ることとなった。講義当日は、ちょうど東京に来訪中であった広田氏が登壇して、当時の具体的状況を紹介した。広田氏は地温推定モデルを使って土地凍結深を推定することで、適切な土地凍結深になるように、どの時期に除雪すべきかを判断できるようにした。その結果、野良イモを効果的に減少させることに成功し、栄養の流出防止という副次的効果も生まれた。また、このイノベーションを更に普及させるために（集中型普及）、農家向けのシステムを構築して、農家がこのイノベーションを容易に採用できるようにした。

本事例の成功要因を振り返ると、農家が本技術を最初に生み出していたこと、研究によって技術の信頼性を上げたこと、農協など既存組織を通じて更に広く普及させたことが挙げられた。また、普及の裏では、農家間・研究間のネットワークが広田氏につながるという偶然性もキーとなった。

発表の締めとして、第2回目の講義で中島隆博氏（EAA 副院長）が言及していた open という概念に小林氏は言及した。open とは社会に向けて開くという意味で、ここでは研究を農家などに対して開いていくことを指す。また、東京大学国際オープンイノベーション機構についても言及され、トップダウンでイノベーションモデルを設計するという発想ではなく、社会との open なコミュニケーションをしていくことで、社会を変えるイノベーションが出てくるのではないかと問題提起があった。

学生からも積極的に質問がなされた。例えば、国家はイノベーションに対してどのような役割を果たすことができるか、イノベーターの特徴は何か、農家は今後30年でどうなっていくか、といった大きなテーマから、小林氏がなぜ農学を志すことになったかといった、個人的なテーマまで幅広く質問がなされた。小林氏は、例えば、国家は細かい部分まで介入せずにアイデアが出る仕組み作りに注力すべきなどといった話をなされた

最後に、本講義のコーディネーターである石井剛氏（EAA 副院長）から、「偶然」なイノベーションを求めるためにネットワークを広げていく必要性があり、これはまさにEAAが目指しているものである、とのコメントがあり、今回の講義が締めくくられた。

報告者：王雯璐（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

イノベーションはリアルワールド（社会）に向けて「開く」ことで生まれるという考えは今後大切にしていきたいです。今からできることは、様々な人とつきあい、その中で新しいものを発見したときに積極的に受け容れていくことだと思います。自分の考えとして、究めた学問を社会に積極的に還元したいということがあるので、今回のお話を大切なヒントにして、人との出会いを大切にしたいです。（文I・1年）

「30年後の未来を構想する」というテーマがあるこのEAAで、逆にこれまでの30年間でどのようなことが達成できたかということに気候変化適応技術にフォーカスして具体的に説明してくださいと素晴らしい講義だと思った。（中略）複雑な現状がある中で30年後を構想していく必要がある。（中略）30年後には大きくなるような問題がたくさんある。東アジアにフォーカスしても温暖化、砂漠化、歴史問題、領土問題…と問題は山積している。データや資料を直視し、イノベーションを起こし、また、イノベーションの発生を助ける、そんな人材になりたい。（文I・1年）

歴史の勉強を通してもある地域でのイノベーションが他の地域へ伝播するまでに交易が始まるまでの長い時間がかかったり、地域内でも宗教などによってイノベーションが弾圧されてしまうことが多々あったという事実を思い出した。イノベーションに限らず、発明や思想などといったものがヒットしたり広がったりしたりすることは複雑に様々な要因が絡まった結果であるのだな、と改めて認識し直すことができました。（文II・1年）

研究をopenにしていくことが大事だと思った。そして自分もイノベーションの可能性を高めるべく世界に対してopenな姿勢を持ちたいと思う。（文I・2年）

「リアルワールド」に対して「開かれて」いること、そのためには、あらゆる人々と対等に、それ以上に教えを乞う姿勢、相手に対する敬意をもってつながりをもつこと、そのことを見失わずに学生として、その先の研究者として生きていかなければならないと思った。(理Ⅰ・1年)

2019 S セメスター第8回学術フロンティア講義



2019年6月7日（金）、第8回学術フロンティア講義が行われた。経済学・中国経済論を専門とする伊藤亜聖氏（社会科学研究所准教授）が講義を担当した。「デジタルチャイナ——「第四次産業革命」の中国的展開」を主題とする今回の講義は、中国広東省都市・深圳（しんせん）での生活場面の紹介から始まり、「デジタル化と中国」、「デジタル化の国際比較」、「民と官の共創？：社会実装」、「官と民の共犯？：監視社会」という4部構成だった。伊藤氏によれば、深圳はもはや完全なキャッシュレス社会になっており、飲食店でもQRコードを使いスマートフォンによる支払いが普及している。ライドシェアも当たり前のようにになっている。さらにはHUAWEI、テンセント、DJIといった企業の台頭が目覚ましい。しかしながら、格差は依然として存在しており、路地裏には日雇いの街も残っているなど、影の面もあるという。

伊藤氏によれば、こうした深圳に今日の中国社会の特徴が凝縮されている。つまり超先進国的技術応用と、途上国の貧しい状況との共存である。その背景として、生産性がもう一度分岐するという第四次産業革命の進行が挙げられる。誰が第四次産業革命で勝ち抜くのかはともかく、現実においてデジタル化に関わる確かな変化が世界規模で観察される。例えばネットワーク端末、携帯電話契約件数およびインターネット人口の増加、人工知能の発達、IT企業の躍進、自動化の進行などである。しかし利便性がある一方で問題も生じてくる。デジタル格差、技術的失業、プラットフォームにおけるプライバシーと利便性、アルゴリズムの運用と影響というのは、デジタル化社会が直面している問題群である。それでは、「発展途上国かつ経済大国」である中国とデジタル化が出会うと、何が起ころうか。伊藤氏は、人口大国、中所得、経済成長、権威主義体制といった様々な側面を持ち合わせる中国とデジタル化が合流することで形成されている、多分野を横断する「デジタル×チャイナ」という問題領域を提示した。

伊藤氏の提供した図表によると、中国のネットユーザー数は年々増えており、2016年にすでに7億人を超えている。それに伴うのは中国系プラットフォーム企業とベンチャー企業の台頭だ。百度、アリババ、テンセントはいずれもインターネット業界に属している。そこにはデジタルエコノ



ミーと人口大国の相乗効果として、供給側は限界費用を極小に抑えることができるし、需要側もつねにネットワークの外部性を求めている、といった状況が看取できる。伊藤氏はほかにユニコーン企業の頻出や、最強の導線としての「スーパーアプリ」の確立、駐車場・コンビニなどの自動化・無人化といった項目も挙げた。このように、中国ではデジタル化が著しく進展しており、中国メディアが古代中国の四大発明に対して、高速鉄道、アリベイ、ネットショッピング、シェア自転車という「新四大発明」を掲げたほどである。しかし一方で中国の権威体制とデジタル化の関係に注目した「デジタルレーニン主義」論 (Heilmann, 2016) も現れたという。

ところで中国のデジタル化を国際比較の方法で測ると興味深い事実が判明した。ここで伊藤氏は2つの図表を見せ、次の2点を指摘した。まず、経済発展水準とインターネットを通じた支払い経験者比率の相関関係から、中国の1人当たり収入はまだ低いということが指摘できる。また、政治的自由とインターネットを通じた支払い経験者比率の関係を見ると、中国はまだ政治的に不自由だということが分かる。しかしそのわりには、デジタル化が進んでいる、つまり推定よりも高いデジタル化の水準にある。その原因の解明は1つの課題である。

では中国のデジタル技術の「社会実装」を支える仕組みは何だろうか。伊藤氏は大手IT企業の役割 (BAT) そしてインフラとしてのモバイル決済、ベンチャー・エコシステムの形成、サンドボックス制度と地方実験を挙げた。1つの事例として、QRコードでの支払いは実はセキュリティ上の問題があり、一時期は政府から規制されていたが、規制が緩和すると、アリババは一気にそれを推し進めた。政府も管理を強化しようとしながら、事実上QRコード決済を追認した。また、早くも次世代人工知能発展計画が考案されたり、デジタル鄉村発展戦略綱要が公布されたり、政策の面でもデジタル化を支える動きが見られる。

また、監視社会の問題という観点からは、官と民は共犯関係にあると伊藤氏は指摘した。例えばアリババはユーザーの支払い履歴、学歴、職歴、資産などによってスコアリングを行い、高得点のユーザーを優待する。だが、スコアの増減は自動的に行われるものであって、その基準は明確化されていない。これはプライバシー対コンビニエンス (利便性) の問題につながる。実際監視システムが作動してから犯罪率は下がっているが、人々が国家による監視下に置かれていることもまた、否定できない。しかし、「中国の社会実装から学び、監視社会を批判する」ことは案外難しい。伊藤氏によればその理由は2つある。1つはプライバシー意識が向上し、それに伴い消費者保護のためのデータ管理が強化されており、民意も依然として強いということである。もう1つは、ベンチャー企業は他方で技術面において監視社会の形成にも加担している、ということである。つま

り、企業が収集した消費者の個人情報監視社会の形成に寄与していることが確実である一方で、消費者は個人情報保護という観点から見れば、守られているのである。さらに踏み込んで言えば、消費者のプライバシーは守られており、この点においては、消費者は直接的に害を被るわけではないため、監視社会の問題を消費者の側から具体的に指摘することには難しさがある。

伊藤氏のとらえによれば、従来の「中国特殊論」はもはや適用できなくなり、国際比較が重要になってくる。また、新しい技術が次々と社会に応用されていくなか、これまでの「先進国＝デジタル化」という図式に代わって、ラテンアメリカやアフリカでは中国以上の「新興国×デジタル化」という問題領域が現れるに違いないと述べた。授業の最後に学生たちからいくつかの質問が寄せられた。そのうち、実地的な研究と理論的な研究の関係性についての質問に対して、伊藤氏は、21世紀の中国経済はすでに理論を超えて展開しているし、自身の中国留学の経験からも、理論に没頭するのではなく現地に行って実際の情報から考察したいと思い至った、と答えた。

報告者：郭馳洋（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

全体として思ったことは、日本と中国はデジタル化の進め方が全く違うということだ。日本は安全を最優先したうえで利便性を追求するが、中国は利便性を最優先してチャレンジ精神が旺盛だと感じた。(中略) デジタル化が進む中国において貧富の差は拡大していくのか。また、デジタル化が政治的自由のある国、ない国で同じように進むことは、政治的自由がデジタル化には関係ないことを意味するのか。(文Ⅰ・1年)

私は先日旅行で京都に行ったのだが、京都の路地の古めかしいお店にはスマホ決済の仕組みがなく、買い物をするのができずに苛立つ中国系の方を見た。私はこの光景を見て焦りと恐怖を感じた。中国系の方にとっての態度は、日本人が発展途上国で「進んでいないなあ、この国」と侮蔑的にとる態度と同じであったからだ。今や日本と中国のデジタル化の懸隔はそれほどまでに大きくなっているのだ。同時に、デジタル化だけでなく国家レベルで懸隔が広がるという恐怖を感じた。(中略) 中国を直に訪問することを通して、その差をさらに肌で感じて自分で考える糧としたい。(文Ⅰ・1年)

日本の統計を愚直にきちんととること、安全意識への高さからきちんと規制をすることは漠然と良いことだと思っていたが、最先端研究をすすめる観点からは、必ずしも望ましくないということが分かった。(中略) 一方、技術革新がはやすぎて立法が追いついていないのは危惧すべき事態だと思った。社会学は実態からスタートするのに対し、法学は理想論からスタートし法律を現実と理想に近づけようとするイメージだが、法学に社会学の視点と取り入れる必要性が高まっていると感じた。現在の立法担当者が現場を見ているのかどうか疑問に感じた。(文Ⅲ・2年)

中国におけるベンチャーキャピタルの投資額が日本の約 30 倍という話を聞き、イノベーションを起こすベンチャーを育てるための制度づくりや、自由化などを漸進的にでも進めていく必要があると感じた。政治的自由とデジタル化の度合いの相関が大して強くなく、ゆるい U 字のような構造が見られたのが興味深かった。政治的自由度の低い中国などでデジタル化が進展しているように、他にデジタル化を進める要因があるのであろうが、何が大きな要因になり得るのか、経済発展水準以外にどのようなものがあるのか気になった。(文Ⅲ・2年)

2019 S セメスター第9回学術フロンティア講義



2019年6月14日、学術フロンティア講義第9回が行われた。担当は阿古智子氏（総合文化研究科准教授）で、テーマは「歴史と現在をつなぐ“深い学び”とは？日本と中国の現場からの考察」であった。前回の講義がイノベーションにおける「現場」の重要性を多くの学生に印象付けたのに対し、「現場」は現代および歴史に対する学びにとっても欠かせないものだということを、阿古氏は自身の研究と活動経験を通じて述べていった。

まず、阿古氏は今年が天安門事件30周年であることを切り口に、当時学生運動に直接参加していなかったものの、投獄された詩人の体験を紹介した。また、現在進行中である香港の逃亡犯条例改正デモに触れた。「監獄の外の世界はもう1つの刑務所である」という詩人の言葉を借りて、自身の中国研究の難しさ、「現場における深い学び」につきまとう困難を表した。そして今回は、日本と中国それぞれ一つの事例を通じて、どうすればこのような現実の中で「深い学び」およびその限界を乗り越えられるのかを論じると述べた。

日本の事例としてあげられたのは、阿古氏自らも関わっている旧中野刑務所正門保存運動である。旧中野刑務所とは明治時代に造られた豊多摩監獄のことであり、哲学者の三木清を代表とする多くの思想犯を収監したことで知られている。現中野区平和の森公園がその跡地だが、刑務所本来のものとして残っているのは正門のみである。地元の住民の間では、暗い時代を乗り越えた証として「平和の門」と呼ばれている。問題は、阿古氏の息子が通う小学校新校舎移転予定地にあったため、その正門をとり壊そうとする議論が出てきたことから始まる。一部の保護者や住民、また政治家からすれば、この正門は歴史の闇を象徴するものであり、子供達から遠ざけられるべきであった。それに対し阿古氏は自らその保存運動のために奔走し、正門は現在残されることとなっている。

阿古氏は、旧中野刑務所正門の保存に尽力したのは、現代中国の政治犯たちとの交流の際に抱いた苦悶のためであると言った。「どうしてこの人たちが犯罪者となっているのか？」そして、同じような時代が日本にもかつてあったことを、今の人々にも伝えたいと思った。オランダのロイドホテルや、台湾の緑島における歴史的建造物の歴史教育への応用を紹介し、どのように次の世代に暗い時代を教えるのか、日本における同様な学びの可能性を考えた。

次に阿古氏があげた中国の事例は、歴史に限らず、より広い「現在」の学校教育に対する現場か

らの反省であった。「留守児童」という、両親が出稼ぎに出ている子供たちの教育に力を入れている広東省の2つの学校を取り上げた。阿古氏によれば、2校はともに留守児童に歩み寄っているものの、方法に大きな違いがあった。一方は子供達に「留守児童」というラベルを貼り付けてしまっており、実質上は彼らを「保護する対象」と見なしている。子供たち自身の思いから離れ、結果的には政府の宣伝道具にもなっていると指摘する。反対に、もう1つの農村の分校は「留守児童」の概念をあえて「淡化」し後退させ、子供たちの気持ちや自主性を重んじる教育内容や学校づくりに心がけている。広東の現場に赴き、両校における子供たちの姿や変化を実際に見聞し、学校教育のしかるべきあり方を模索した。

阿古氏はさらに、スウェーデンの学校教育を比較対象として紹介した。日本の学校に比べ、スウェーデンの学校は子供達により複雑なことを教えている。政治と社会のあり方、特にメディアを盲信してはならないこと、オピニオンリーダーになること、「世論を形成するとはどういうことか」など、日本では大学生向けの内容を子供達に教えているのである。阿古氏によれば、スウェーデンの学校では「政治的中立」を所与のものとして捉えず、学校教育において、政治を論じることを拒否していない。選挙の前には、様々な政治立場の人たちが校内で演説することが許可されている。独裁制を批判しながら、民主制の問題をも教えている。要するに、子供を「小さな大人」として尊重しているものであり、「危ないことには近寄らせない、触れさせない」というような態度ではない。

最後に阿古氏は、日本でも新しい教育が各地で模索されていることを、東京の麹町中学を最新の事例として簡単に紹介した。なお、講義中、阿古氏はしばしば中国の言論統制の複雑性について論じた。国家からの抑制が強いのは事実である。しかし、それと同時に、自由について、政治について、国のあり方についての民間の議論は逆説的に非常に活発だと指摘する。一方、言論の自由が保証されている日本では「空気を読む」や「村度」などによって、言論が知らず知らずに管理されている感があると述べる。そして、「言葉の生産に関わる者の力量と責任が、現在ほど問われているときはない」という引用文によって、今回の講義を締めくくった。

学生からの質問は、阿古氏が現場主義に至った理由を尋ねるのに始まった。阿古氏は、自分人間観察が好きだったこと、また、喜怒哀楽から見えてくるものに面白さを感じていたことをあげた。なお、中国の学校づくりのプロジェクトに関わったさいの現場の経験を通じて、政府の役人・ジャーナリストやNGO・農民からは見えてくるものが全く違うことに気づいたと、驚きとスリルに満ちた自身の研究経験を回想した。

他にあがったいくつかの質問の1つに、講義のテーマは「深い学びの可能性と限界」であり、「可能性」については詳しい事例によって理解できたが、「限界」とは具体的に何か、があった。阿古氏はまず、この問いは色々な面から考えられる難問だと答えた。旧中野刑務所正門保存運動における自分の活動にそって言えば、「限界」とは、自分に壁を作り、それを超えられないことである。例えば正門の保存に反対する人たちと接する際、自分がすでに変人扱いされていると気づくと、ついつい壁を作ってしまう。しかし、最も問題であるのは「話すことすらしないこと」なのである。「限界」をどこに設定し、「限界」をどう乗り越えるのか、問題を考えて、絶えず悩むプロセスが一番良い学びだと説いた。

質疑応答の後、石井剛氏は近代中国の文人・魯迅の「鉄の部屋」の喩えを用いて、阿古氏が講義の最初で言及した詩人の言葉に呼応した。鉄の部屋の中の人々は眠っており、そのままでは皆死んでしまうが、眠ったまま苦しまずに死んだ方がむしろ幸せなのではないだろうか。壁や檻に「守られていること」は気持ちよく、安全なのかもしれない。民主主義をどう作っていくのか、我々が何

を欲望して、どのような社会を作っていきたいのか。「深い学び」は、中国か日本かと関係なく、我々の足元から始まるものだと説き、阿古氏に謝辞を述べて第9回の講義の幕を閉めた。

報告者：張瀛子（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

教育の重要性を感じた。(中略) いきていく中での難題（例えば政治など）を避けて教えないからこそ、そうした話題を議論することがまるでタブーかのようになったり、そのような状況が何も知らない人を生み出し、そのような大人による教育で同じような人間が生まれてしまうのではと考えた。(文Ⅲ・2年)

政治的中立性や政治的タブーばかりを気にして、日本におけるリアルな政治の話題をちゃんと教育の場で子供たちを交えて議論しないことが、若者の政治への無関心、無理解を生んでいるように思う。(文Ⅲ・2年)

日本では簡単には「深く考える」習慣はつかないと思う。深く考えるメリットよりある種保身的な活動をする利益の方が大きいからである。「深く考え」た先に何があるのかということと言語化したらどうなるか考えている。(理Ⅰ・2年)

日本人が、国家の統制でもないのに議論を避ける傾向があるというのはその通りだと思う。(中略) しかもその際に子供が怖がるからなどと根拠もないようなことを理由にあげるが、子供はそれほど弱くないと思う。子供を一人の人間としてしっかりと向き合うべきだと思う。また戦争の記憶において自分が被害を受けたことを示す遺産は残すのに、国内の抑圧的状況や国外への侵略、掠奪を示す遺産は消そうとすることは極めて危険だと思う。(文Ⅰ・1年)

制度上としては民主主義が成立している日本においても実は同調圧力や政治、経済の閉塞感によって、どんな意見も受け入れる自由な、寛容な議論の場があまり成立していないということに気づかされた。日本において歴史問題のような繊細な問題を草の根レベルから議論しようという精神を根本的に欠いていることは大きな問題だと感じた。このような現状を変えるものこそ「教育」だと思う。(文Ⅱ・1年)

2019 S セメスター第 10 回学術フロンティア講義



2019年6月21日、第10回学術フロンティア講義が行われた。今回は高田康成氏（総合文化研究科名誉教授、名古屋外国語大学教授）が、「文化と歴史の基軸について」とのテーマで講義を行った。

近年、文化相対主義の普及で、各文化は平等同質だという考え方が受け入れられていると高田氏は指摘した。ただし、それぞれの文化にはその特徴を支える「基軸」（バックボーン）が存在していると考えられる。そこで高田氏は、アメリカの哲学者、東洋学者トマス・カスリス（Thomas Kasulis）氏の著書 *Intimacy or Integrity: Philosophy and Cultural Difference* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2002. 日本語訳は高田康成解説・衣笠正晃訳『インティマシーあるいはインテグリティー』法政大学出版局、2016年)における2つの文化的指向性と、その延長線上で日本哲学史を展開した *Engaging Japanese Philosophy: A Short History* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2018) に基づいて、その要点を紹介した。カスリス氏によれば、空海の真言密教に代表される日本文化はインティマシー (intimacy) の方で、キリスト教に代表される西欧文化はインテグリティー (integrity) の典型である。

もし人間を円型（あるいは球体）にたとえて考えると、インティマシーの場合、丸と丸が重なり、その重なる部分は関係性 (R, relationship) になる。恋愛関係を想像してみればすぐわかるように、もし二人が別れたらそれぞれ何か欠けたような感じを抱く、そういう関係性である。これは内的関係性と理解しても良い。インテグリティーだと、丸と丸との重なりがない前提で関係が成立する。すなわち、関係性 (R) は超越した第三者（例えば法的・社会的）によって規定され、外部に成立する。これをあえて歴史的に見るならば契約関係と底通すると説く。したがって、インテグリティーは分離的 (detached) で、第三者の検証が必要である。これに対してインティマシーは近接的 (engaged) で、職人精神のような、当の本人（たち）にしかわからないものがある。これら二つの指向性は、二者択一的な特質をもつが、実際には1つの文化に併存するものであり、どちらの指向性が強いか弱いかということが問題である、とカスリス氏は強調する。歴史的経緯により、日本の文化は超インティマシー文化であり、アメリカ的文化は超インテグリティーの様相を呈している。

次に、インティマシーについて、より詳細な検討が行われた。最澄と空海がほぼ同時に、中国よ



り顕教と真言密教を日本にもたらしたが、インティマシーの強い密教 (intimacy engaged knowing) は日本の思想の基軸になった。密教は身 (身体)、口 (言語)、意 (意識) で世界を認識する。その宇宙観に関しては、まず物質的な世界 (macrocosmic) があり、そこは四大元素 (土水風火) と空間と感覚認識 (識) からなる。そして瞑想によって、更なる秘密の世界 (microcosmic) に入り込み、主客の分別をなくし、全宇宙が繋がっていることが体得される。六道 (天道、人間道、畜生道など) のどちらからでもたどり着ける境地であり、ここでは個人が他者と一体化して全宇宙と響き合う。図式化すれば、大きな丸の中に無数の小さい丸が相重なって並んでいる状態であり、これは「外部」と「内部」との区分がない、超越のない内在的世界全体そのものを表している。

西欧的宇宙観はこれとは異なる。西欧的心性の構造を今なお支えていると思われる天動説に基づく宇宙観では、地面から月の軌道以下の範囲 (sublunary sphere) は四大元素 (土水気火) から構成され無常が支配するが、月の軌道以上は第五元素・エーテルからなり恒常のうちに天使が住む。宇宙の最果てには不動点 (firmamentum) があり、そのいわば外にはすべての創造主・神の領域になる。このように創造主と被造物が隔てられ、神の超越性が見える。内在性にたいして超越的他者性が顕著である。

続いて高田氏は、インテグリティーと西欧的思想の基軸であるキリスト教について言及した。高田氏は坂口ふみ『信の構造——キリスト教の愛の教理とそのゆくえ』(岩波書店、2008年)の議論を踏まえて、「三位一体論」においては、父と子 (キリスト) と聖霊とは1つの実体 (ousia) である一方、子であるキリストは、1つの基体 (hupostasis = persona) と2つの本質 (natura) (神的ならびに人間的) からなるという構造をもつことを紹介した。西欧中世キリスト教神学は、personaを理性的特性をもった個の実体と規定してゆく方向性が見られる。中世末のダンテの『神曲』にも、あるいは近代初期のミルトンの『失樂園』などの文学作品にも、個に基づいて超越性へと向かうという指向性は変わらず強固だった。

最後に、近代日本における基軸問題が取り上げられた。丸山真男が「布筒」(『日本の思想』1961年)として批判したように、神道には「基軸の欠如、諸思想の雑然たる同居化、構造化されない時間」といった特徴が見られる。しかし、開国当時東アジアで唯一列強に侵略されていなかった日本において、近代国家を築くためには、何かの基軸がなければならないと指導者たちは考えた。伊藤博文は、これを天皇制として設定した。神道の伝統を受け継ぐ天皇制は、「国体」の基軸として威力を発揮することになり、その体制下においては、天皇制に対するいかなる批判もほとんど不可能となった。しかし、丸山が述べたように、ポツダム宣言受諾に際して、「国体」が何であるかについて概念的規定と合意がなかったことが露呈し、最終的に「聖断」に頼るしかなかったこと、さ

らに軍部は、「聖断」を受け入れるべきとする一派と、これに反対する一派とに分裂するという有様であった。このことから、天皇制というイデオロギーの本質が、密教的インティマシーの指向性に彩られたものであることがわかる。

講義の最後に高田氏は、歴史と文化を相対主義の視点で見るとは、重要な問題の解決には繋がらないこと、それぞれの歴史と文化には基軸があることを再び強調した。新たな世界史を構想するのであれば、その差異性から出発しなければならないとし、今回の講義は閉じられた。

報告者：胡藤（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

今回の講義では、西欧において、超越的な存在としての神と個人のつながり、インテグリティへの発展のかたちについて興味を持ちました。（中略）その上で、上のような自由主義、個人主義的な憲法を頂点あるいは根底に作られた日本社会のハード面のインテグリティ的性格と、国民の性質の大部分を占めるインティマシー的性格の対立もしくは融合（融合はないとの話でしたが）が、今後、30年後さらにその後どのような形で進んでいくのかという疑問を興味と危惧とともに抱きました。（文Ⅰ・2年）

この東アジア学の講義で何度も感じていることですが、先生が「仏教用語は先入観のある漢字で表記された日本語ではなく、英語で理解した方がよい」と仰ったのを聞き、「教養」というものの価値を感じた気がしました。言語を学ぶことは単にコミュニケーションのツールを手に入れることではない、考えるプラットフォームを増やすことなのだと思えて実感できました。（文Ⅲ・2年）

戦後、天皇崇拝が薄れた現在も、intimacy が根深く残存しているのは何とも皮肉なものだと思う。グローバリズムの進む時代においては、intimacy から integrity への移行が必要なのだろうか。（文Ⅰ・2年）

インテグリティとインティマシーの対立に関する考えにおいて、他の議論でよく見られる「東洋が西洋に劣っている」というイメージが持ち出されていないのには興味を感じた。（文Ⅰ・1年）

リサーチ・ワークショップ「哲学者とはどのような人々か？——概念的・歴史的・社会的考察」



2019年6月25日、リサーチ・ワークショップ「哲学者とはどのような人々か？——概念的・歴史的・社会的考察」が開かれた。

本ワークショップではジャスティン・スミスが2016年に刊行した、*The Philosopher: A History in Six Types* (Princeton University Press) を切り口に、「哲学」に関する問いを、「哲学者」に関する問いへと読み替え、「哲学者」とはどのような人々なのかを検討された。スミスは本書にて、歴史上の哲学者は六つのタイプに分類することが可能だと主張する。ワークショップの企画者である若澤佑典氏（ヨーク大学）はスミスの試みを肯定的に捉えた上で、参加者と共に具体的な哲学者を列挙し、スミスによる分類の妥当性の検証を提案した。本ワークショップの参加者は学部学生、大学院生、若手研究者という年齢的に若い層で構成されており、専門分野も非常に多岐にわたっていた。とりわけ、中国や日本などの東アジアを研究対象としている者が多く、具体的な哲学者、或いは哲学者の候補として孔子や朱熹、戴震、和辻哲郎などが挙げられた。しかしながら、いずれの人物もスミスによる分類と完全に合致させることはできず、複数のタイプを組み合わせても説明の出来ないことが多くあることが確認できた。これによってスミスの試みが否定されることはないが、彼の問いを受けた上でより綿密な分析や議論が必要となる。

スミスが提示した6つの類型を検討する一方、本ワークショップでは「哲学者」、つまり「哲学をする人々」への問いに含有される、「哲学する」という動詞的な概念も議論された。「哲学とは何か」と問われた場合、そこで哲学は固定的な定義の成立し得る学問として考えられる。しかし、哲学は常にその内実を変容させており、「哲学とは何か」という問いが度々問題になってきたことも、哲学自身が常に変化していることに起因していると考えられる。一方、「哲学する」という動詞的な概念を考えた場合、固定的な枠に納められようとする哲学が、一挙に開かれたものとなる。参加者には東アジアを専門とする者が多かったことから、東アジアには哲学はあるのかという論争的な問題への言及があったが、これも哲学を一つの固定的なものとして捉えず、「哲学する」という形で動詞的に理解することで、この問い自体を乗り越えられるのではないかと。

哲学は今後どのような形で世界や人々に関与していくのか。少なくともそれは一つの地域や言語に束縛されたものではないだろう。本ワークショップでは、ジャスティン・スミスが提起した問い



の読解を一つの手段としながら、東アジアとヨーロッパ、それぞれを研究対象とする者が一堂に会して議論が行われた。このような対話の場が設けられることは、哲学の未来をより豊かなものにするだろう。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

2019 S セメスター 第 11 回学術フロンティア講義

2019年6月28日、学術フロンティア講義「30年後の世界へ——リベラル・アーツとしての東アジア学を構想する」第11回講義が行われた。講壇に立ったのは中国文学を専門とする鈴木将久氏（人文社会系研究科教授）であり、テーマは「中国の農村をいかに表象するか」であった。どのように表象するかとは、すなわち、どのように認識するかという問題である。「声なき声」としての農村を、魯迅をはじめとする近代中国文学はどのように表象しようとしたのか、その実践および問題を3つの事例によって解説し、中国文学というジャンルを超えた1つの普遍的な問いに挑戦した。

鈴木氏はまず、近代中国文学の巨匠魯迅の代表的な小説『故郷』を取り上げた。日本でもよく知られている当作品は、ある程度魯迅の実体験に基づいているとされているが、魯迅は主人公の「私」に仮託して何を語ろうとしたのだろうか。鈴木氏は、『故郷』の主人公「私」の少年時代の友人である「閩土」が、主人公の家の皿を灰に隠して盗み出そうとしたと「楊おばさん」に告げ口される一節を分析する。興味深いことに、現代中国では、貧しい農民である「閩土」が盗みごとをするわけないというイデオロギー的な理由から、この節は問題視されており、実際に盗んだのは「楊おばさん」だと解釈されている。それに対し、鈴木氏は、ここで問題となっているのはむしろ真実が分からないこと自体であると述べる。農民である「閩土」が何をするのか、語り手である「私」には分からない。ここに現れているのは「私」と農民「閩土」の間に存在する隔たりであり、鈴木氏は続いて魯迅のもう1つの代表作『祝福』をあげた。農村の不幸な女性「祥林嫂」の問いを前に、「私」は彼女の望み通りに答えようとするも、驚愕し、しどろもどろとなった。スピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』によれば、言葉を発し得る人間がそうでない弱者の「代弁」をすることは、実質的には後者の言葉を剥奪してしまう暴力である。鈴木氏は、「祝福」の「私」のしどろもどろさを、中国のサバルタンを前にした時の「私」の恐怖感を描いたものだと読んでいく。表象の暴力を前に、我々はどう表象すればよいのか？ これは魯迅が「声なき声」である中国の農村について提起した問いだと考えられるのであり、その答えを、鈴木氏は魯迅の「希望の哲学」に見出していく。中国の啓蒙運動とされる五四運動期に活躍した魯迅の啓蒙思想は「鉄の部屋の喩え」によってよく知られているが、この喩えからは俗的な啓蒙とは「違う匂いがする」と指摘する。「絶望は虚妄だ、希望がそうであるように」の詩や、竹内好の魯迅論によりながら、表象できないことに打ち震え絶望した後に、絶望した自分を手放さず、できるという幻想を拒否しながらも表象することに、魯迅は希望を見出し、それが魯迅的な「啓蒙」だと解釈した。

次に紹介されたのは、魯迅とは全く異なる事例、共産主義革命における文学の実践である。日本人の想像を超えた歴史的実践の中、毛沢東の文芸論のもとで創作された柳青の『創業史』を取り上げた。1959年に完成された『創業史』は、土地改革の中で、土地の集団化をどのように農民に受け入れさせるのかを題材にした作品であり、柳青はそこで農民を表象するための2つの方法を実践している。1つは「生活に入ること」、人物の真実の感覚を描けるようになることである。もう1つは作者自身が農民になることから始まり、農民たちと交流することによって自分を変えていくという、共産党のいわゆる「自己改造」に相応する。『創業史』は、「社会主義新人」に変化させられていく農民の姿を、それなりの説得力をもって描き出したとされ、高い評価を得るのに成功した。



しかし、鈴木氏は、当作品に表象された農民は果たして本物であるのかは当然ながら疑問であり、また、『創業史』の最大の功績は集団化を受け入れなかった「悪役」にあるとする別の評価からも、柳青の実践の怪しさ、そして共産主義の文学論の難しさが示されていると指摘した。

毛沢東の時代では、農民はたとえフィクションであっても文学の主人公だった。それに対し、改革開放後、経済発展を第一優先とする国づくりの中、中国の農村はどう認識されたのだろうか。鈴木氏があげた第3の事例は、現代中国の作家梁鴻の『中国在梁莊』（邦訳『中国はここにある』、みすず書房、2018年）である。「啓蒙者の視点ではない」という梁鴻の言明は、ポスト毛沢東の時代に、魯迅的な問いが再び蘇っていることを意味する。啓蒙の先にあるのは希望とは限らないが、啓蒙は中国の農村でなされねばならない。魯迅の課題に直面にした梁鴻の探索は、『人民文学』が新たに開設したコラム「ノンフィクション」のもとで行われた。『人民文学』によれば、「ノンフィクション」とは伝統的な文学ジャンルの外に可能性を感じたゆえに発した、新しい文学エクリチュールの試みである。それは農村が従来の文学パターンでは表象できないものであることを逆に示していると言え、そこで梁鴻は、最終的に「人物自身の語り」を叙述の方法とすることにした。『中国在梁莊』は、初版で好評を得た。ところが、梁鴻は再版に長いあとがきを加えており、その中で自分の調査の可能性と有効性に不安を感じていることを自白する。村の人々といつも一緒にいながら、村人たちの言説のシステムに入っていきそうにない。彼女は農民たちの「言葉の豊かさ」に揺さぶられたと述べるが、それは、農村出身であるものの都会の大学の先生となった梁鴻と農民たちとの距離を映し出していると、鈴木氏は指摘する。知識人が農民となって語るという柳青の問題が、再び浮上するのである。声なきサバルタンの代弁のつもりでいる言葉は、果たして本物なのだろうか。鈴木氏によれば、この問いは常に残るのであった。

講義の最後、鈴木氏は自身の研究を通じて得た中国の面白さを語った。魯迅の姿勢は抽象的なレベルにおいて示唆的であり、日本とだいぶ異なる中国の歴史をどう捉えるかは、日本人にとって挑戦的である。自分たちが当たり前だと思う経験と異なるものは、自我への問いにつながる。中国の農村問題は日本とは異なるが、「声なき声」を表象することは、日本における沖縄の問題、世代と大学の問題など様々な場合において存在している。「声なき声」とどう向き合うべきか、わかったふりをするのできるのだろうか。中国の問題のみとするのではなく、自分たちの問題を考えるきっかけにして欲しいと説き、議論を締めくくった。

学生からは、魯迅の『阿Q正伝』において描かれた農民の姿や、現代のSNSが新しい文学ジャンルを生み出す可能性についての質問があがり、鈴木氏はそれぞれに対して自身の見解を述べて答

えていった。質疑応答の後、石井剛氏は、前回の阿古智子氏の話と同じように、鈴木氏の講義は報道やデータに現れないが中国を理解するに不可欠な「声なき声」「見えないもの」を伝えてくれたと評した。「声なき声」を拾うのは文学しかない、ただ、それは読者があってこそ成立する。魯迅や梁鴻の問題は私たちの問題であるとき、講義の幕を閉じた。

報告者：張瀛子（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

スピヴァクの話聞いた時、「要約することのおそろしさ」を説いた話を思い出した。「君の言いたいことは、こうこうこうで、こういうことだろ？」という要約、そしてその要約を基に相手に反論することの恐ろしさは、他人の声を代弁することの難しさに対応すると思う。（中略）誰かの声を受け止めるだけの身構えのできている人はどれ程いるのか。大きい声をあげられる人の声のみを聞こうとし、自分の声すら聞けない人がどれ程多いのか。各自が見つめ直すべき問題だと考える。（文I・1年）

小説を読む際に時折感じる本質的なグロテスクさ、つまり弱者の「声なき声」のみならず、それ自体をそのまま表現できない事象、出来事を言語化するという不可能性とどのように向き合っていくか考えさせられる講義だった。不可能なものを表象するという形式によってこそ成り立つ文学のおもしろさに気づいた。（文I・2年）

1つの学問にしる、世界全体にしる、「声なき声」は至る所に隠れているのかもしれない。私たちがこの「声なき声」を知るためには、「声なき声」を知り（聞き？）、心を震わせ、思索を巡らせることだと思う。その1つの帰結点、1つの表現の形が「文学」なのであろう。私も私なりの1つの帰結方法を見つけていきたいと思う。（文I・1年）

弱者の声を強者の視点から代弁してしまうことは弱者の世界に横わたる本質的な問題から話題をズラしてしまうことになるというのは全世界で日常的に起きている問題なのではないかと考えます。（文I・1年）

第 11 回 BESETO 哲学会議

去る 2019 年 6 月 28 日（金）から 30 日（日）の 3 日間にわたり、東京大学本郷キャンパスにて「第 11 回 BESETO 哲学会議」（The 11th BESETO Conference of Philosophy、共催：東アジア藝文書院）が開催された。「BESETO 哲学会議」は、「北京」（BEijing）、「ソウル」（SEoul）、「東京」（TOkyo）の頭文字から成る名を冠する通り、北京、ソウル、東京大学の 3 大学が共同して開催する学会議であり、国を超えて研究成果を発表・共有する場として、主に若手研究者同士の国際的な連携関係を育てていくことを目的としている。これまで「BESETO 哲学会議」は 3 大学の持ち回りで、原則的に年に 1 回開催されてきたが、残念ながら 2017、2018 年は諸事情により開催されなかった。そのため、今回 2019 年の第 11 回会議は 2016 年のソウル大学で行われた第 10 回会議以来、実に 3 年ぶりの開催となった。今回東京大学哲学研究室による主催の下、本郷キャンパスで開催された会議では、各大学からの 3 名の教員によるプレナリー・セッションと、24 名の個人研究発表が行われた。そのうち、東京大学の院生ないし OB として、計 8 名（丸山文隆、岡崎秀二郎、松井隆明、野上志学、笠松和也、西岡千尋、飯塚舜、片山光弥）が研究発表者として参加した。また今回、幸いにも会議運営に当たっては、東アジア藝文書院（EAA）から支援を受けることができた。ここに感謝の意を表したい。いずれのセッションでも発表者・参加者の間では様々な意見が英語で取り交わされ、梅雨の肌寒さを感じさせないほどに、会議は終始盛り上がりを見せていた。

まず会議の冒頭を飾ったのは東京・北京両大学の教員 2 人によるプレナリー・セッションであった。最初の登壇者である榊原哲也氏（東京大学）は、'An Unforgettable Patient：A Phenomenological Approach to Dialysis Nursing Care' という題のもと、医療現場、とりわけケアの現場における、現象学的なアプローチの意義を取り上げる講演を行った。この講演では、長期にわたって透析治療を受けることを余儀なくされる、慢性腎不全の患者に対して、看護師がそうした患者との間にどのような関係性を築くことができるのか、という問題が提示された。患者や看護師が持つ「経験」や「行為」が、実際に生きられた事柄としてどのように立ち現れるのかを明らかにするとい



写真 1 BESETO11th ポスター@法文 2 号館



写真 2 榊原哲也教授によるプレナリー・セッションの様子

う、現象学及び哲学の実践的意義を問うこの講演は、専門の垣根を越えて多くの参加者の関心を惹きつけていた。さらに続いて Xiaomin Zhu 氏（北京大学）により、'Different Philosophies : Could Taijiquan be Understood Today ?' という題のもと、東洋と西洋の伝統や文化的背景の相違を踏まえたうえで、現代における太極拳をめぐる理解のあり方を問う講演がなされた。この講演では、古代中国において太極拳と密接に結びついてきた東洋哲学の考えを掘り起こしながら、太極拳が西洋的なスポーツとは異なる「原理」を持っているという点に焦点が当てられた。これらのプレナリー・セッションでは、一方で看護師へのインタビューの分析に基づく調査手法が取られたり、他方では太極拳と日本の柔道や空手等の伝統的な武道との比較が行われたりと、研究対象だけではなく研究のアプローチという点からも哲学研究の多様性が際立つ発表が行われていたと感じた。

各大学の院生たちによる研究発表は、続く2日目と3日目のセッションに分かれて行われた。これらの研究発表も、分析哲学、政治哲学、近世哲学、現象学、東洋思想といった、多岐にわたる専門分野からの発表となった。しかし、そうした中でも、各専門分野にまたがる問題領域が存在していることを改めて認識できた点も興味深かった。Soonahong 氏（ソウル大学）による'Sophrosyne as beautiful words'という題の発表、Yudi Jiang 氏（北京大学）による'Self-Knowledge in Thomas Aquinas'という題の発表、笠松和也氏（東京大学）による'The Remedy for Affects in Charron and Spinoza'という題の発表は、3大学の院生がそれぞれプラトン、トマス・アキナス、スピノザと、異なる哲学者の思想を紐解くものであったが、いずれの発表も自己知 (knowledge of self, self-knowledge) という哲学的主題に焦点を当てるものであった。加えて2日目にはもう一つのプレナリー・セッションとして、Haeng Nam Lee 氏（ソウル大学）により、'Hegel on Free Will : Its Conceptual Structure and Social Ontological Implication'という題のもとで講演が行われた。この講演ではカントの「自由意志」の理解に対して、ヘーゲルがその伝統を引き受けながら、「理性」と「自然」というカントが残した二分法をいかに解決したのか、という哲学史上の難問が取り上げられた。特にこの講演ではその問題に対して、『法の哲学』におけるヘーゲルの自由意志論からの新たなアプローチが示された。偶然にもこの講演においても、「自由」としての「自己規定 (self-determination)」や「自己同一性 (self-identity)」といった、人間個人がいかに自己を評価するか、という広義の意味での自己知の重要性がやはり強調されていた。

こうした専門分野を跨いだ問題関心の重なりは、3日目の研究発表においても見ることができた。Heo Min 氏（ソウル大学）は、'Rethinking Death as a Socially-constructed Concept : a Critical Examination on Two Ways of Defining Death'という題のもと、脳死という現代特有の現象をめぐる、社会的な観点から「死」の概念を再構成することを提案する発表を行ったが、続く丸山文隆氏（東京大学）の 'Heidegger's Concept of "Historizing"' という題の発表では、「現存在」として常に既に出会われつつあるものとしての「死」の観点から、ハイデガーの『存在と時間』における時間理解を再解釈する観点が提示された。今回、院生たちの発表はパラレルセッションを中心に行われ、その中でこうした共通の問題関心に対する異なる観点の見解が取り交わされていた点に、BESETO 哲学会議の醍醐味の1つが現れていたと感じる。

以上3日間の全てのセッションを終え、会議全体を総括するクロージング・ディスカッションでは、こうした共通の問題関心を前提としたより活発な議論を進展させる枠組として、次回以降ワークショップ形式の討議を行う可能性も指摘された。今回の第11回 BESETO は多くの方々のご尽力によって成功裏に終了した。第12回 BESETO は2020年夏に北京大学にて開催される予定であるが、今後もこの会議をもとに東アジアにおける哲学・人文学研究の国際的発展が続くことを祈念



写真3 Haeng Nam Lee 氏によるプレナリー・セッションの様子

して筆を置くことにしたい。

報告者：岡崎秀二郎（東京大学大学院博士後期課程）

2019 S セメスター 第 12 回学術フロンティア講義



2019年7月5日、学術フロンティア講義の第12回講義が行われた。登壇者は高橋哲哉氏（総合文化研究科教授）であった。「主権とユートピア：沖縄をめぐる」と題し、現在沖縄を巡って展開されている様々な議論を紹介した上で、高橋氏自身の意見も提示される講義となった。

高橋氏はまず、本年（2019年）が、いわゆる「琉球処分」の140周年であることに言及した。周知の通り、明治政府が成立し日本の国民国家化が進められていく中で、琉球王国は沖縄県として国民国家システムの中に取り込まれていった。高橋氏は、琉球側の資料を使って「琉球処分」の実態を研究している、波平恒男『近代東アジア史のなかの琉球併合：中華世界秩序から植民地帝国日本へ』（2014年、岩波書店）を挙げながら、現在明治政府による「琉球処分」（「琉球併合」）について、沖縄で盛んに議論されている旨を紹介した。また、高橋氏は八重洋一郎の詩集『日毒』（コールサック社、2017年）を紹介した。「日毒」という呼称からは、日本に対する怒りを読み取ることが出来る。

以上のような議論が活発化していること背景には、当然ながら沖縄における米軍基地問題がある。のみならず、現在先島諸島を中心とした沖縄の群島に次々と自衛隊基地が建設されている。基地ができることによって関係者の流入による人口増加が起り、社会構造自体が大きく変化する。自衛隊基地の拡大は、「日毒の再来」というイメージを喚起する側面を持っており、沖縄が大きく揺れている。そこから出てくるのが沖縄の独立論である。日米の軍事植民地とも言えるような状態

から脱するべく、自己決定権を取り戻そうとする動きだ。しかしこの琉球独立論に対しては、内部においても批判がある。日本から離脱することは検討すべき課題ではあるが、しかし、離脱後に主権国家として明確な境界を有して存在することは、結局は既存の国民国家システムの枠組みに留まってしまう。日本から離脱しつつ、国家システムをも乗り換えるものを作れないか。そこで提唱されているのが、琉球共和社会である。

琉球共和社会については、川満信一編『琉球共和社会憲法の潜勢力』（未来社、2014年）で詳しく論じられているが、本講義で注目されたのは川満信一が1981年に『新沖縄文学』で発表した、「琉球共和社会憲法C私（試）案」である。本憲法案は、国家廃絶の宣言や、法律・権力機構の廃止などを盛り込み、国家のための憲法ではなく、社会のための憲法として構成されている。そして国家でない以上、出入国管理という主権行為を放棄しており、難民・亡命者を無条件に受け入れる。また憲法案に同意する限り、如何なる人間、如何なる国家に属するものであれ、共和社会の成員であることが認められる。完全に開かれた社会、それを川満は構想しているのである。

このような議論が沖縄で出ていることを受け止めた上で、高橋氏は琉球共和社会の構築には困難と限界が伴うと考えている。琉球共和社会は、主権国家でないが故に他国家との交渉力を有していない。例えば、イラン人難民シェイダ氏の事例を考えてみよう。シェイダ氏は7年間日本で難民申請をしたが、その際琉球共和社会に彼は逃げ込めたのだろうか。高橋氏は仮に逃げ込んだとしても、国家としての交渉力を有していないが故に、イランの国家権力からの追求からシェイダ氏を守りきることは出来なかつただろうと考える。シェイダ氏は最終的にヨーロッパの第三国によって受け入れられたが、これはその第三国が主権国家であったが故に、難民として彼を庇護することが可能となったのである。また川満の憲法案では、琉球共和社会は無条件に人々を受け入れると書かれていたが、第十一条で「この憲法の基本理念に賛同し」と書かれ、第17条で「各国の政治、思想および文化領域にかかわる人が亡命の受け入れを要請したとき」、「軍事に関係した人間は除外する」と書かれているように、完全なる無条件の歓待ではないのが実情である。もちろん、他者に対して開かれる国家や社会を追求することは重要であるが、如何にして開くか、そしてどのような境界を設定するのか、その点を深く考えない限りは上手くいかない和高橋氏は考える。

講義後多くの学生による質問やコメントが語られた。その際中心的に議論されたのは、沖縄に対する構造的な差別の問題であった。高橋氏はもちろん、在席していた多くの学生、そして日本の国民は沖縄に対して特別な差別意識を持っているわけではない。その中でなぜ日本から離脱しようとする動きが出てくるのか。高橋氏は沖縄に対する構造的な差別が大きな要因となっていると述べた。例えば基地問題。これは日本とアメリカの両大国の中で沖縄の運命が決定される問題となって



おり、構造的に沖縄の声が届かない状況の中で基地が押し付けられている。一人一人は差別していても、多数が作り出している政府の下で沖縄の人が差別されている。ここから生まれるのは正しい意味での被害者意識であり、日本からの離脱は決して敵対心から言っているのではなく、構造的差別の中で運命の自己決定権を回復しようとする動きの中から出ている。

地理的な位置関係を見た際、琉球・沖縄はある意味で東アジアの中心に位置している。歴史的にも日本、中国、東南アジアなど様々な地域と交流を展開していた。そこで現在どのような議論が展開されているのか。高橋氏の講義を通して、東アジアにおける琉球・沖縄の重要性が改めて確認された。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

詩集『日毒』を読み、あまりに自分の想像の範疇を超えた歴史的事実に寒気を覚えた。この授業を聞くまで、僕は当時の生の資料を見る機会を持たなかったし、自分で見ようとも思わなかった。東アジアに住む日本人として、これはあってはならないことであると悟ったが、僕と同様に感じた人、つまり今回の授業で触れられた内容が、悲しいことにどこか遠いと感じた人が、他にもいる筈だ。今回この場で講義を聞くことが出来なかった人、また今どこかで普通の生活を送っている人の中に、過去何があったのか目を向けられていない人がまちがいないと思う。これは改善すべき問題であろう。日本史教育のあり方が今問われる。(文Ⅱ・1年)

「日本国」の平和や安定が、このような一部のマイノリティーの犠牲によって保持されていることは、今回の講演者である高橋教授の著書にも記されている内容である。これを踏まえると、授業中で紹介された「反復帰」論も理解できる。つまり、上で示されたような「構造的差別」は主権国家という概念を起点とするものだと捉えることが可能で、主権を持った「国家」によって、「日本」の安定のためというロジックに基づいたマイノリティーに対する榨取が正当化されるのである。(中略) その一方で、本土のどの部分に基地を移設しても、新たな(福島のような)犠牲となるマイノリティーが生まれるのではないかという疑問、そもそも正しい「抑止」とは何たるかということ、など晴れない疑問も多かった。無意識のうちに構造的差別の榨取側に層に属しているのかもしれないという認識を今回知見として得ることが出来たので、沖縄に対する注意は今後も向けていこうと決めた。(文Ⅲ・2年)

これまでの12回の中で一番面白い講義だった。自分としても主権国家でないシステムなど到底思いつきはしなかったもので、とても新しい知見を得られたと思う。だが、授業の中でも議論された通りそのラディカルさゆえに非常に多くの疑問点があるのもまた確かである。(文Ⅰ・1年)

「日毒」という言葉を初めて聞いたときにそのインパクトに驚かされた。戦争を経験したことがなく、またむしろ日本は戦争で甚大な被害を被ったという論調で報道するメディアのせいで、自分が残虐行為を行った日本の中の一人であるということを忘れかけていた。なんとなく他人事のように思っていた日本の残虐性や、更に、日本が琉球、アイヌを含みこんでいるという意味において完全単一民族国家でないことを、この短くも内容が詰まった詩集は自分に思い出させてくれた。逆にこの事実を理解せずに、沖縄の基地問題や辺野古の問題を日本の側から無条件に共感することは少し怖いと思った。(文I・1年)

日本史、世界史をとともに学んできましたが、日本が明治維新の時に「琉球併合」したときに琉球王国、琉球人の側からどう見たのか、ということは考えませんでした。日本国は米英を始めとする欧米諸国の「侵略」を防ぐために併合した。そのとき、そこにあった国は軍事力をもつてでも併合すべきであったという認識でしたが、逆に見たらそれこそ日本側の身勝手な「侵略」であったという点には驚いた。また、普段の生活では意識的には気付かない、沖縄に対して抱く「どこか違う地域」という意識に気付くことができた。町中には「沖縄料理店」や「沖縄の特産品店」といった店が目に入る。これは他の都道府県にはないもので、人々が沖縄という地方を1つの特異性をもった地域だと捉えていることに気付いた。(文I・1年)

シンポジウム「世界哲学としての中国哲学」

2019年7月7日（日）、中国社会科学学会2019年度大会の2日目のイベントとして、シンポジウム「世界哲学としての中国哲学」が東京大学文学部1番大教室にて開催された。本シンポジウムは地域哲学としての中国哲学を問い直し、世界哲学の一翼を担うものとして再定義する試みを検討することを目的し、中島隆博氏（EAA 副院長・中国社会科学学会理事長）の企画で実現された。当日は中国哲学をより広い文脈に置いて考え続けてきた2人の基調講演者、そして各報告者がそれぞれの研究分野から、地域研究としての中国哲学を乗り越える視座を提供し、討論を行った。

午前の部では、総合司会を務める中島隆博氏が企画趣旨の説明をした後、李晨陽氏（南洋理工大学）と張志強氏（中国社会科学院）が基調講演を行った。その際、納富信留氏（東京大学）と石田正人氏（ハワイ大学）がコメンテーターを務めた。

李晨陽氏は、“Chinese Philosophy as World Philosophy”という表題において、「世界哲学としての中国哲学」を儒教や道教に見いだされる哲学を地理的文化的表象とせず、世界的舞台において位置づけようというものであり、李氏の報告の焦点はこちらにある。李氏は中国哲学の世界化の必要性を指摘した上に、そのためには比較哲学的手法が有効であるとした。すなわち、比較かつ構築主義の仕方により概念化することが必要だということである。この点は哲学と歴史の関係という、非常に複雑な議論とつながり、李氏は中国哲学の「天下」という概念をめぐる近年の歴史側と哲学側の論争を批判的に論じながら、世界哲学としての中国哲学も、歴史との関係の中でそれと異なる哲学の特性とその役割を見出すことが重要であると指摘した。

続けて、張志強氏による「中国哲学のチャンスと哲学の歴史性」についての報告がなされた。張氏は、葉秀山の『哲学的希望』（2019）を出発点としながら、中国に哲学はあるのかという問題を提示した。十数年前に中国哲学界で起きた中国哲学の合法性をめぐる討論の結論は、中国に西洋的な意味での哲学はないということだった。しかし現在では、西洋現代哲学、特に時間性の認識によって、哲学的な方法は中国的原理を改変しないという立場からいわゆる中国哲学を語るができるようになっている。これはまさに哲学の「歴史性」の現前である。張氏は中国哲学と西洋哲学はともに同じ問題に取り組み、統一されうるものであると主張した。

コメンテーターの納富氏からは、以前「世界哲学としての日本哲学」というシンポジウムに参加した経験から、現在従来の1つの枠組みを超えて領域横断的・総合的哲学の試みがなされていることと、その中で西洋哲学と中国哲学が有意義な比較対象になっていくことが述べられた。その例として「和」をめぐる西洋哲学と中国哲学との議論について質問があった。もう一人のコメンテーターの石田氏からは、両氏がそれぞれ「儒家」の立場と「道家」の立場から中国哲学を捉えられていると述べられた。続いて、中国哲学が経済大国を背後にして成長していくとすれば、中国哲学の内在的価値とは何かという疑問が提示された。哲学と歴史の関係においても、ヘーゲルの歴史論と比較して、その独自性への批判的考察が必要であるとの指摘がなされた。

午後の部では石井剛氏（EAA 副院長）、井川義次氏（筑波大学）、志野好伸氏（明治大学）、朝倉友海氏（神戸市外国語大学）が個別報告を行った。

第一に、石井剛氏により「世界文献学から見た清代哲学の「言語論的転回」」を題して報告がなされた。石井氏は、世界哲学としての中国哲学を考える際に、中国哲学はそのままでは世界哲学に



なれない、まず「解体」と「再構築」の過程が前提になるべきだと論じた。この過程に1つの参照点になりうるのが世界文献学からみた清代哲学（〈一般には清代考証学とされる〉清代考証学）である。石井氏によれば、清代における「考証学」（ベンジャミン・エルマンによると Philology = 文献学）には、中国哲学のディスコースが世界と出会ったことによって生まれた文学のディスコースが反映されている。石井氏はこのことを清代における音韻学など「言語論的転回」を通して考察した。

第2に、井川義次氏は、「儒教を媒介とするヨーロッパ・日本・中国の近代化」という表題において、近代ヨーロッパ理性の形成に中国思想が大きな役割を果たしていたということを当時の文献資料を参照しながら報告した。日本・中国が学び取る対象とした西洋近代思想は、実はイエズス会士らキリスト教宣教師によって報告された新世界、すなわち日本・中国からの情報を吸収しながら形成されたものである。このことをライプニッツやヴォルフの思想を中心に考察することで解明した。哲学の運動というものを公平に見るには、また、世界哲学を考える際には、西から東への影響のみならず、逆の方向も見べきであると、井川氏は述べた。

第3に、「論理学者にとっての中国哲学—金岳霖、沈有鼎を中心に」を題とした志野好伸氏の発表が行われた。志野氏は、世界哲学としての中国哲学を考える場合には西洋哲学と異なるタイプの中国哲学、さらに中国だけで閉じた哲学ではなくて、普遍的な哲学に貢献しうる哲学が想定されるとし、論理学者である金岳霖（1895-1984）と沈有鼎（1908-1989）を取り上げ、中国的ではない中国哲学の検討を試みた。志野氏によると、金岳霖の哲学は「中国哲学であって、中国における哲学ではない」と評価され、例えば、「情」という中国の伝統思想であっても、その中に「日常生活の世界」、「この世界」、全人格が関わる元学、ソクラテス的な哲学、「彩のある世界」が見出され、世界哲学としての可能性を持っている。同じく、沈有鼎の哲学においても「超歴史的」の議論が取り上げられた。

最後に、朝倉友海氏による「東アジア哲学の理念と牟宗三」という表題の発表が行われた。朝倉氏は、中国哲学を世界哲学へと考える際には「媒介」が必要で、「媒介」となるのは「東アジア哲学」という考え方ではないのかとし、それを牟宗三を通して論じた。朝倉氏によると、牟宗三は、新儒家やカント主義者というイメージがあるが、実はラッセルの影響を除いて論じるのは難しい。これは、牟宗三を東アジアの論理分析家、論理に立脚した哲学者であるとして捉えられる根拠を提供する。牟宗三は論理というのは普遍的なものであり、科学や数理のような外延的普遍性と文学や芸術のような内包性普遍性を指摘したと朝倉氏は述べた。このような論理への関心は、（現在は非主流派であるが）日本の初期の西田哲学にも発見され、両者から東アジア思想を背景とした論理的・存在論的考察への貢献が共通点として見られると、朝倉氏は指摘し、中国哲学と世界哲学を媒



介する東アジア哲学の可能性を論じた。

総合討論においては、もう一度、哲学と歴史との関係、中国の台頭という国際秩序と中国哲学の関係、比較哲学として東アジア哲学の重要性などが取り上げられた。「世界哲学」とは何か、必要か、というそもそも論に対して、納富氏が指摘したように、「世界哲学」を繰り返し捉え続けることで、「世界哲学」の意味、その独自の枠組み、役割がより具体化していくのではないか。その意味で「中国哲学」と「世界哲学」、そして「世界哲学としての中国哲学」についての時間と場所の軸を超える幅広いかつ深い議論ができた非常に有意義なシンポジウムであった。

報告者：具裕珍（EAA 特任助教）・犬塚悠（EAA 特任研究員）

国際ワークショップ「東京学派と近代教養の編成」

7月8日（月）、東京大学東洋文化研究所にて国際ワークショップ「東京学派と近代教養の編成」が開催された。本ワークショップでは、石田正人（ハワイ大学）、町泉寿郎（二松學舎大学）、中島隆博（EAA 副院長）の三氏が発表を行い、来日中の Li Chanyang 氏（南洋理工大学）、張志強氏（中国社会科学院）によって、それぞれにコメントが寄せられた。

初めに、本ワークショップについて、中島隆博氏から趣旨説明がなされた。本ワークショップが掲げる「東京学派」とは、近代日本において東京大学を中心として形成された学術を指す発見的な概念である。よく知られる西田幾多郎を中心とする「京都学派」に比べ、その中心をなす人物をもたない「東京学派」の実態は複雑であり、その把握や批判的考察には困難が伴う。しかし、当時の東京大学でいかなる学知が形成されつつあったのかという問題は、近代日本の教養の編成に直接かわる重要な問題を孕むものである。そこで、本ワークショップでは、近代日本において東京大学の内と外で展開した学問に着目し、その問題系と思想的・政治的・社会的影響を明らかにすることを通して、「東京学派」の実態および近代教養の動的な在り様にアプローチすることを目指すものであることが確認された。

最初の発表者・石田正人氏は「伊波普猷について——何が〈沖縄学〉を生み出したのか」と題して、沖縄学の父として知られる伊波普猷を取り上げた。伊波は11歳の時はじめて標準語を学び、京都の第三高等学校で教育を受けた後、東京帝国大学で言語学を修め、沖縄出身の近代知識人として「文学士」となった最初の人物である。石田氏は、まず伊波の出自や教育環境について確認をした上で、東京帝大に提出した卒業論文における音韻論に着目し、その形成過程を検討した。よく知られるように、伊波はこの論文の中で、沖縄語と日本語は共通の祖語を有する姉妹語であり、琉球語にはより古い日本語の姿が残されていると主張した。その重要な根拠の1つとされたのが、日本語の子音における「P」→「F」→「H」の変化過程であり、伊波は古い子音がアイヌや八重山諸島や沖縄に保存されていると唱えたのである。石田氏は、この説が形成された知的基盤として、帝大における師・上田万年を経由しながらも、その師であるチェンバレンの仮説を引き継ぐものであることを確認し、さらにそのチェンバレンの説は当時のインド・ヨーロッパ語族の系統分析論を応用したものであったと指摘した。すなわち伊波の〈沖縄学〉は、自身のバックグラウンド、帝大における近代的言語学の訓練に加え、チェンバレンなどの〈日本学〉を生みだした地盤も共有してい



たことになる。最後に石田氏は、このような学術的な側面のみならず、伊波が人格的に優れた要素を持っていた点を同時代の様々な証言からあぶりだし、そうした伊波の人格が沖縄学の形成に果たした役割が大きかったことを強調した。

第2の発表者である町泉寿郎氏は、「方法論としての日本漢学」と題して発表された。町氏の提唱する「漢学」とは、それまで日本古典籍研究において脱落していた哲学思想文献、また和刻漢籍なども含む「漢文」（古典中国語）の研究を意味する。町氏はこのような立場から、「東京学派」における「漢学」の制度的位置づけの変遷を1920年代まで跡付けた。氏によれば、まず「東京学派」の源流である昌平坂学問所から「学制」制定に至る過程で「文」の断絶が生じた。その後、東京大学文学部の編成過程において、本科と別に「古典講習科」が置かれたが、本科生・古典講習科生・選科生の間には明確な待遇上の格差があったと指摘した。さらに氏は、東京大学文学部から帝国大学文科大学への改組後、制度史や学史（文学史・哲学史）が残り、漢作文などの技能教育は廃止されていった過程を明らかにした。最後に同氏は、日本漢学史と琉球の関係や東アジア各地の漢文教科書の問題にも触れ、中国・台湾・韓国・満洲、各地の教育の近代化における日本との関係について、今後総合的な把握が必要であると訴えた。

最後の発表者・中島隆博氏は、“Confucian Education in Modern Japan : Motoda Nagazane, Nakae Chōmin, and Mishima Chūshū”（「近代日本における儒学教育：元田永孚・中江兆民・三島中洲」）という題で発表を行った。その内容は主に、1890年に教育勅語が公布されるまで行われていた、明治時代の儒学教育についてであった。その主流は国家主義へと逸脱した儒学を提唱し、主流を代表する元田永孚は神道と儒学に基づく国家宗教の確立を目指した。元田は、教育の中心は人道に至るために「仁」「義」「忠」「孝」の意味を明らかにすることにあるという。儒学をめぐる元田、伊藤博文、井上毅らによる議論は、日本における儒学教育の広がり、そして教育勅語に直接に関係したと考えられる。他方で、中江兆民に代表される他の儒学的動向は主流を批判し、民権運動を推進した。三島中洲は元田と中江との間に自己を位置づけた学者である。彼の独創的な点は「義利合一論」を唱え、儒学によって近代資本主義を容認したことにある。近代日本の特徴を国家主義・公民権運動・資本主義のアマルガムとするならば、近代儒学と儒学教育はその共通の基盤として考えられると中島氏は指摘した。

以上、3つの発表に対し、2名のディスカッサントのうち、まずはLi Chanyang氏から応答があった。石田氏の発表については、中国において、チベットから中国本土で中国語を学んだ後地元に戻る知識人と、沖縄出自の知識人としての伊波との間には類似性があることが述べられた。また、町氏に対しては、日本における「漢学」と儒教との関係、また「哲学」と「理学」「宋学」の





関係についてなど言葉の定義に関する質問がなされた。さらに中島氏に対して、現代の儒教的教育との関係について質問された。これに対して、中島氏は儒教のうち、とりわけ陽明学が近代を形成する上で重要な役割を果たしたことを述べた。

続いて、張志強氏は、まず石田氏に対し、沖縄文化と日本文化の関係性における神話の役割について質問をし、石田氏は、伊波自身にとって神話は前近代的なものであり、それと近代的政治体制としての日本国家とを結び付けることはなかったと応答した。さらに町氏の発表について、近代の中国学が、中国と日本を分離したことで見失ったことがあったのではないかと問うた。これに対し町氏は、国家主義的なものを補強するために儒教が利用され再編されていくプロセスは、水戸学にまで遡ると述べた。最後に中島氏の発表に対し、哲学を内在するものと考えてるによって中国と日本の古典学の密接な関係性への確認に繋がるとし、それが東京学派を見直す意義でもある、と述べた。

以上、本ワークショップでは、「東京学派」の内／外を行き来する動的な近代教養の在り方を検討したが、それは同時に、日本が国際的に開かれていった状況と密接にかかわる問題であり、日本だけにとどまらない問題系を孕むものであることが明らかになったといえよう。本ワークショップは、海外からの研究者との連携によって、この問題を国際的な文脈の中で、今一度検討するものであった点で有意義であり、今後よりこの方向性において追及されるべき問題であると感じた。

報告者：宇野瑞木・犬塚悠（EAA 特任研究員）

2019 S セメスター第 13 回学術フロンティア講義

7月12日、第13回学術フロンティア講義は北京大学・ニューヨーク大学教授の張旭東氏を迎えて、「翻訳不可能を翻訳する——『コンタクト・ゾーン』と人文科学におけるフロンティア」というタイトルの講義が行われた。

張旭東氏はまず「コンタクト・ゾーン」という概念に触れた。異種の文化や言語が接触すると、この空間は言語や思考が混交する領域になる。これに対して2つの仮定 (assumption) が成り立つ。1つは「コンタクト・ゾーン」において、調和的、理性的コミュニケーションと相互理解が可能になることである。これは理想的であるが、しかしこれが成り立つことはきわめて困難であると張旭東氏は指摘した。実際は、接触することそれ自体が、対立、衝突ないし戦争をもたらすことがしばしばある。その場合「コンタクト・ゾーン」は「フロンティア (辺境地域)」になる。これについて張氏は、アメリカの歴史学者フレデリック・ターナー (Frederick J. Turner) が1983年に発表した論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義」(The Significance of the Frontier in American History. 日本語訳: 渡辺真治・西崎京子訳『フレデリック・J・ターナー』収載、アメリカ古典文庫9、研究社、1975年)を通じて説明した。ターナーに言わせれば、アメリカ文化の独自性は、移民らがヨーロッパの文化を引き継いだことによってではなく、西漸運動のフロンティアの中、厳しい自然環境や異なる言語・文化などの、なじみのない諸条件に対する挑戦との闘いを通して形成されたのである。その意味で、ヨーロッパ由来の文化がアメリカ大陸で一度生まれ変わってアメリカ文化になった。そのフロンティアにおける異文化との接触、あるいは互いに理解することが翻訳 (translating) ともいえる。

続いて張氏は、現代日本におけるフロンティアとは何か、と問いかけた。中国の方から見ると、中国は文化の源流で日本はただの受容者とのイメージになりがちだが、その「中国からの視点」は、実際日本を内部から、さらには「翻訳」の視点から理解しておらず、不平等である。翻訳は原作に基づかなければならない一方、原作を超える欲望もある。同時に、西洋文化は日本においては「内部の他者 (the other that is within)」であり、西洋諸言語の単語や概念は発音を移入する形でそのまま日本語に入っており、現代日本語はその異質性と主体性との混在状況にある。

フロンティア問題を考えるに際して、張旭東氏はドイツの哲学者・文芸批評家であるヴァルター・ベンヤミンの文章「翻訳者の使命」(内村博信訳『エッセイの思想』収載、ベンヤミン・コレクション2、ちくま学芸文庫)を参照し、その翻訳理論を紹介した。ベンヤミンによれば、翻訳は思考であり、読むこと、考えること、そして創作することに関するプラクシスである。重要なのは、情報を異言語に伝達し、その精密さを追求することが翻訳の本質ではない、ということだ。翻訳されたテキストを読むことは、自分の(翻訳)言語で哲学をすることと同値であり、外来のものを自分の言語に定着させるプロセスでもある。また、原作はそれ自体の内容に縛られているけれども、翻訳によって初めてテキストが自由になり、その制限を解除することができる。こうした翻訳のプラクシスという過程を通じて、人は「純粹言語」に漸近することができ、自由を得て、自己を形成する。

次に張氏はベンヤミンの「パン」の比喩に擬えて、東アジアの主食である「米」を例として翻訳の性格を説明した。中国人や日本人が「米」という漢字を使うとき、それは英語での「rice」(あ



るいは欧米系言語でそれに相当する単語)と同じニュアンスを表しているのか。「rice」は欧米ではただ穀物の一種に過ぎないが、「米」という単語には、東アジアにおいては人間の感情や記憶のレベルまで入り込んでおり、また、例えば日中で比べてみた場合、その意味合いはそれぞれ異なる。大貫恵美子氏の著書 *Rice as Self: Japanese Identities Through Time* (Princeton University Press, 1993) において、米は、日本人のセルフ・アイデンティティとして、純粹さ、富と美を象徴するものとして描かれているが、一方、蘇童の小説『米』(『蘇童文集』収載、江蘇文芸出版社、1996年)では、米は欲望、腐敗、死の象徴である。このように、事実的情報だけの伝達では原作の意味を十分に伝えられないことがわかる。

同時に翻訳は各言語に閉じこめられた意味をあらわにして、原作をより読みやすくし、オープンにすることもできるが、その中核にあるのは翻訳不可能性であるとベンヤミンは指摘している。伝達できない「詩的」部分ではあるが、その触れられないものを再解釈、再生産する必要がある。それに対して張氏は翻訳のいくつかのポイントを総括した。翻訳は生産的、先験的に原作との一致を目指すプロセスである。また、翻訳は愛を込めて原作を取り入れ、止揚し、「もっと偉大な言語」へと向かう活動である。そのために翻訳には「逐語翻訳」の手法をとるべきである。翻訳不可能な箇所を翻訳するに際して、優雅できれいな形式として完成させることは当然難しい。魯迅が主張する「硬訳」、つまりあえて渋い翻訳を選択するという方法がある。魯迅は「硬訳」を通して、中国語を変え、新思想を植えつけようとしたのである。

ではなぜ翻訳が必要なのか。ベンヤミンは人間共有の経験が存在すると信じ、また、その経験は真理にも繋がるが、翻訳を通じてさらに大いなる共同体を作り出すことができると考えた。それと同時に、翻訳はリーディングと類似して、瞬間的緊張感、不満足や衝突を引き起こすが、こうした経験を通して我々は、自分に対する理解を深め、自己を更新することができる。

最後に張氏は、現代社会でどう「翻訳」を理解するかについて述べ、また、EAAのプロジェクトに参加する学生たちへの期待について話した。翻訳は、テキストから言語を解放するが、同時に、我々を自らの言語から解放する。これによって我々は、「偶然的環境」(例えば自分の文化的背景)を超え、多元的視点へのアクセスを確保することができる。したがって翻訳は、文化的本質主義を克服する可能性を持っている。翻訳を通じて自分を再認識することによって初めて、他者との平等的対話が可能になる。また、翻訳は技術至上主義と全体主義とに対抗する有効な手段でもある。科学技術の進展に伴い、情報伝達に限っての翻訳はより簡単になるが、AIなどを使っても人間の本質に関わる個性性の問題、つまり翻訳不可能な部分は依然と解決しきれないものである。個

体性がなくなれば、人文学も成り立たなくなる。そういう意味で、翻訳を通して「人間とは何か」という哲学における根本的問題を考え直すことによって、人間の存在様式を確保することができるのではないか、と問いを開きつつ、張氏は講義を閉じた。

報告者：胡藤（EAA リサーチ・アシスタント）

学生からのコメントペーパー

「翻訳によって言語を解放する」という考え方は、非常に面白いと思いました。なぜならそれぞれに言語はその言語に固有の思考様式と密接に関わっている、という考えの方が一般的だからです。したがって、翻訳するという事は、原典の言語とは異なった思考様式を強いる言語に書き換えることであり、人文学では原典を重視する考え方が強いように思われます。しかし、先生の言っていたことを私なりに解釈すると、翻訳することは「それぞれの言語固有の思考様式」を乗り越えて、人類普遍の価値を持つ本質的な内容を顕在化する行為であると言えると思います。原典を読むときは、頭の中で日本語に自分なりに解釈することを意識しようと思いました。（文Ⅲ・2年）

translation が、unfamiliarity なものとの接合的な役割を果たす。translation という行為は、unfamiliarity なものとの接触を経て、個人に成長をもたらし、新たな identity を醸成する。では“translation”とは何か。今回の lecture を受けて、“translation”を「翻訳」と即座にしてしまうことにためらいを感じた。それを「探索」と訳してもいいと私は思う。「探索」という行為を通じて、肉体・精神的に何か必ず生まれると考える。（文Ⅰ・1年）

Because I had always thought of the frontier as something involving force, physical contact, and the creation of something new AT THE EXPENSE OF SOMETHING BEAUTIFUL AND OLD, your idea that the frontier experience can be intellectual, positive, constructive came as a surprise. The example of translation-exposing ourselves to an entirely different world and trying to bring that world into our world without being emotionally oppressive, transformative without being destructive, I assume that, the strength of language-its fluidity, its ability to absorb foreign things yet firmly maintain its uniqueness, its ability to accept “gray areas”, as in words that can't be translated and expressions that represent entire emotions that don't exist in other cultures-that makes positive interaction on the frontier possible. （文Ⅰ・1年）

やはり単一の言葉だけで理解するというのを越えて複数の言語を操ることが大切なのだと改めて実感しました。これは、13回の講義の中で何度も繰り返されてきました。まだまだそのような経験を体験していないので、言語学習にしっかりと取り組みたいです。その先に得られる人類全体に通底する“何か”に触れてみることでさらなる自己発展につながると信じています。フロンティアに立って難題に挑み続けることも大切だと感じました。それこそ「入学おめでとう」の精神を持ち続けていくことの意義だと思います。(文I・1年)

【EAA Dialogue】 Cheol-Hee Park × 中島隆博



On July 12, 2019, we held the first EAA Dialogue, whose aim is to explore a new liberal arts together with eminent scholars from around the world. In the setting of a relaxed dialogue, we have an opportunity to deepen our understanding of their thought and academic projects. This time, for the first EAA Dialog, we invited Cheol-Hee Park, who is Professor in the Graduate School of International Studies (GSIS), Seoul National University, currently a Visiting Professor of Tokyo College, UTokyo, as well as a columnist of the Tokyo Shimbun. Park is one of the well-known Japan specialists in the world, particularly concerning Japanese politics and the Liberal Democratic Party. His research interests also include Japan-Korea and East Asian relations. After having served as Dean of GSIS and Director of the Institute for Japanese Studies, SNU, Park is presently on sabbatical, traveling for research, three months in Washington, D.C. and now in Tokyo. The EAA Dialogue was an opportunity to hear the broad range of his experiences, from which his ideas have been shaped, his academic career, and dream for activities after retirement. Takahiro Nakajima, Professor of the Institute for Advanced Studies on Asia and Deputy Director of EAA, UTokyo, was a most apt partner for the dialog, almost the same age, sharing a similar social, political, and international background and, most of all, a vision for networking East Asia for the next generation.

The first part of the dialogue touched on Park's youth, university days, and time in the U.S. Park noted that he was also a boy finding himself immersed in philosophy, such as existentialism, positivism, etc., which prompted the two professors recall the old days as if they were both boys. During Park's youth, the sociopolitical turmoil in South Korea influenced his decision to university study, at which point he became inclined more to an inquiry concerning politics : e.g., how does



politics work : why did Korea fail to democratize in the 1960s ; what makes democracy work in Korea, etc. After serving in the military, Park was given an opportunity to study in the U.S. on a scholarship. At Columbia University in New York, he begin studying Japan, and met Gerald Curtis, who would become his teacher and lifetime mentor. His account of conducting fieldwork for his doctorate, which involved investigating how local groups were organized under the new electoral system in Japan (i.e., seeking a new face who could win), was challenging and exciting for listeners. Nakajima noted that he was rather relieved that a new face finally won the election.

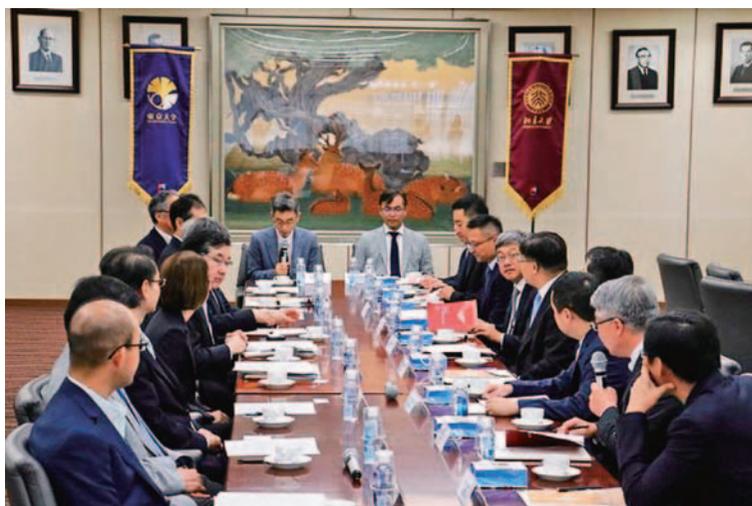
Gradually, the dialogue moved to the question of relations between Korea, Japan, East Asian countries, and those between the U.S. and China. The most significant concern for both Park and Nakajima was the looming trade war between China and the U.S., which reflects an apparently hegemonic power struggle, and the recent similar movement in Japan toward Korea, which inevitably undermines efforts to build confidence that have been firmly established over a period of decades.

Still, to recall the saying that the darkest hour is just before the dawn, Park and Nakajima once again recalled the role of university and a new liberal arts in the midst of heightened tensions in East Asian relations. Exemplified by the Campus Asia program, Park said EAA would be expected to redesign the map of exploring East Asia through the lens of a new liberal arts, which would offer a new blueprint for the role of the university in the East Asian community.

Lastly, some small talk about Park's dream after retirement changed the more tense atmosphere to return to a more pleasant discussion. Upon hearing the word "dream" in the dialog, Park seemed to ponder more deeply, which could easily be taken as an indication that the word might have long ago vanished from the hearts of established and renowned scholars, and the word "retirement," since he is still vigorously working as a professor, an advisor, and an opinion leader. After a subtle surprise, he blissfully replied "I want to be engrossed in the classics of the humanities and challenged to do business, while standing at the edge of globalization." In closing, his answer is likely to open another possibility for a new, future dialogue.

Reported by Yoojin Koo (EAA Project Assistant Professor)

2019年7月北京大学邱水平党書記一行来訪



2019年7月23日（火）に、北京大学・邱水平党書記一行が本学を来訪し、五神総長、白波瀬理事・副学長、羽田大学執行役・副学長（EAA 院長）等が対応した。本来訪にあわせて、東京大学-北京大学東アジア学ジョイントプログラム（東アジア藝文書院、East Asian Academy for New Liberal Arts, EAA）の設立記念セレモニーが開催された。

まず東京大学の石井剛教授の司会で五神総長が歓迎の挨拶を行った。五神総長は、東京大学と北京大学の様々な分野における長年の交流を基礎として、東アジア藝文書院がこれまでにない全く新しい研究・教育の東アジアにおけるプラットフォームを築き、今後の世界における新しい大学、新しい想像力のあり方を示していくよう、期待を示した。

五神総長の歓迎の言葉を受けて、邱書記が挨拶を行った。邱書記は両大学の友好関係が1903年の京師大学堂（北京大学の前身）による留学生派遣にまで遡るとし、その上に築かれた本ジョイン



トプログラムがさらなる交流を深めていくよう、期待を示した。また、北京大学は、語学交換のような従来のプログラムとは異なり、よりアカデミックな、例えば、古典の読解や分析を通じた新しい学問の構築を試みるこのプログラムを重要視していると述べた。そして、このプログラムが学内だけではなく、各々の社会、さらには世界に影響を及ぼすものになることを確信していると述べ、挨拶を終えた。

続いて、東京大学東アジア藝文書院・羽田正院長と北京大学元培学院の李猛院長、そして本学と産学協創協定を締結して、EAAの運営に寄附を提供しているダイキン工業株式会社の執行役員・米田裕二氏から、設立にあたってそれぞれ挨拶があった。

羽田院長は両大学首脳理解と支援に感謝の意を示すと共に、このプログラムは一朝一夕にできたものではなく、長年にわたる両大学の教員の交流と友情が土台を作ってきたことを強調した。李氏は多くの方々の支援と期待を預かっている分、責任が重いとしながら、高い関心の中で6月に選抜された10名の学生がこれからどのような想像力を持って新たなりベラル・アーツとしての東アジア学を築いていくかに対して大きな期待を寄せた。最後に米田氏は、中国の目覚ましい成長とともに発展してきたダイキン工業株式会社は中国の発展へのさらなる貢献を希望しており、東アジア藝文書院の設立をもって北京大学と東京大学の連携の仲間に入りたいと締めくくった。参加者からはダイキン工業株式会社の多大な支援に対する感謝の声が上がり、会場に和やかな雰囲気が流れた。

本式典を祝して北京大学と東京大学の旗章が特別に製作された。旗章にはEAAのロゴとダイキン工業株式会社の名前があらわれており、3者の協力による「知の共同体」を象徴している。

報告者：具裕珍（EAA 特任助教）



EAA フォーラム「東アジアから考える世界文学と世界哲学」

2019年7月23日午前に行われたEAA設立記念セレモニーに続き、同日午後、東洋文化研究所にて「東アジアから考える世界文学と世界哲学」と題するEAAフォーラムが開催された。これは、本書院の設立を記念して3月に北京大学で開かれたPKU-UTokyo Joint Program of East Asian Studies Launching Conference & Young Scholar Workshopに続くものである。「EAAフォーラム」の目的は、新しい「東アジア学」を徹底的に議論することを通して、東アジアにおける新たな「知」の模索と発信をすることにある。この日は、EAAに中心的に関わっている両大学の研究者らが集まり、世界文学と世界哲学に関する報告と討論を行った。

EAA副院長の中島隆博氏の挨拶後、本書院のリサーチユニットで活躍している伊達聖伸氏（東京大学）の司会で、まず世界文学について張旭東氏（北京大学・ニューヨーク大学）が報告を、それを受けて鈴木将久氏（東京大学）がコメントを行った。

張氏は、“Of Animal, Machine, and Ghost : World Literature and the Future of Humanity in Lao



She's Camel Xiangzi”（「動物・機械・幽霊：老舎『駱駝祥子』に見る世界文学と人文学の未来」）と題する発表を行った。今日に至るまで中国人の心に訴え、中国近代文学の中でおそらく最も影響力のある老舎（Lao She）の『駱駝祥子』（Camel Xiangzi, 1937）をもう一度「批判的」に読み直すことで、新たな人文学と世界文学の想像力が可能になるのではないかと張氏は述べた。そのために、張氏は一般的に問われる“Who is Xiangzi?”（「祥子とは誰か」）の代わりに“What is Xiangzi?”（「祥子とは何か」）という問いを立て、人道主義的でありながら現実主義者である小説の主人公、祥子の人物像に焦点を合わせるのではなく、祥子において描かれているテーマそのものが「何であるのか」を問うべきであると主張した。この問いのもとで、より具体的な四つの問い— 1) Is Xiangzi a human being?（祥子は人間か）2) Is Xiangzi an animal?（祥子は動物か）3) Is Xiangzi a machine?（祥子は機械か）and 3) Is Xiangzi a ghost?（祥子は幽霊か）—を検討し、『駱駝祥子』は今の時を生きている我々に依然として新たな意味を示唆すると張氏は論じた。特に、力車に対する祥子の感情と思いは、人間と機械、人々との連帯、個人と社会、人と労働といった様々な関係と矛盾を取り上げ、結局のところ、「国はどこにあるのか」という問いに私たちを導くとした。資本主義や近代国家が完成されていない時代に、老舎は『駱駝祥子』を通してそれらの本質を警告したかのようであった。

この発表を受けて、鈴木将久氏は『駱駝祥子』とモダニズムおよび動物性に関するコメントを述べた。まず鈴木氏は、文学における「モダニズム」はこれまで西洋中心主義的な視点から説かれてきたものであり、それを解体していく必要があると指摘した。張氏のこのような試みのように、魯迅などの他の中国文学もその意味を改めて読み解いていくことが重要である。そして鈴木氏は、最近文学において表象としての動物を取り上げる傾向が強い中、ラクダを登場させた老舎の意図に注目し、ラクダに対する同情心などの感情をどのように解釈すれば良いかについて議論を深めていくことを提案した。

参加者からは、『駱駝祥子』に出る都市「北京（当時の北平）」の地理的・文学装置的意味や、祥子が機械ではなく「何か（something else）」であり、それが「個人性」という意味における「幽霊」だとすると、それに対して老舎が望んでいた解決策とは何だったのかという問いが出され、興味深い議論が行われた。

2人目の報告者、納富信留氏（東京大学）の報告タイトルは“Promoting World Philosophy”（「世界哲学を促進する」）であった。報告内容は主に、World Philosophy（世界哲学）とは何か、World Philosophyをめぐるこれまでの納富氏らの活動、Worldの5つのとらえ方、将来の課題についてであった。報告後は、李猛氏（北京大学）によるコメント、参加者からの質問が寄せられた。

納富氏はまずWorld Philosophyとは何かを問う。それは単一の哲学でも、各地域の思想の寄せ集めでもない。それは「西洋哲学」という意味でのPHILOSOPHYを超えた哲学の構想、世界における様々な哲学的体系・伝統の再構成である。

ここで、Worldは5つの意味・問題系において考えられる。第1に、GlobeとしてのWorldである。地理的・文化的に欧米中心的なものから世界へ、東洋／西洋の枠を超えて多様性かつ普遍性が追求される。第2に、UniverseとしてのWorldである。自然科学者との協力において、環境・人間・生命が問われる。第3に、TimeとしてのWorldである。「世界」の「世」には、世代・時代というように時間的次元が含まれることを鑑み、世代間倫理、進化倫理が問われる。第4に、Our LifeとしてのWorldである。衣食住、ポップカルチャー、SNSといったものを含む日常生活

において、いかによく豊かに生きるか、「幸せ」が問われる。第5に、ThemeとしてのWorldである。ヤスパース、ハイデガー、マルクス・ガブリエルらが問うてきたWorldという哲学的テーマが問われる。

さらなる課題としては、World Philosophyをどの言語において行うか、日本人がイギリスにおいてギリシャ哲学を研究するという場合もWorld Philosophyとみなすか、日本哲学・漢字文化圏の可能性といったものが挙げられた。

納富氏の報告を受けて、李猛氏は納富氏の試みの意義を指摘しつつ、次の点も指摘した。それらは、1. アリストテレスが科学と哲学、すなわち分析するものと全体を扱うものを区別していたということ、2. ヘーゲルが東洋には哲学がないとしていたこと、3. 普遍性を求める世界哲学とは“Utopian” Philosophy、すなわち具体的な場所に根ざさない理想的・非現実的なものになってしまうのではないかというものであった。

李氏のコメントに対する返答の中で、納富氏はまず自らのギリシャ哲学研究の動機を話した。なぜ哲学はギリシャで生まれ、ギリシャ哲学が「哲学」であるとされているのか。他に数多くの形がありうる哲学に対して、ギリシャ哲学にはどのような特徴があるのかが、納富氏が抱える根本的関心であり、それがWorld philosophyのプロジェクトにも通じている。またUtopian Philosophyについては、全ての人が共に対話する哲学が理想的であるが、現実にはどこかの場所に根付いて行われるしかなく、その場所的・文化的特殊性こそが取り組まれるべき問題でもあると回答した。最後に、哲学と科学との関係は今日の大きな課題であり、今後も考えるべき難しい問題であるとした。





参加者からは、どこまでを「日本哲学」とみなすかという質問が挙がった。納富氏は、日本哲学を京都学派といった近代的なものに限らず、古典文学などにも広げて包括的にとらえたいと答えた。今回の報告を聞いて World Philosophy に高い関心をもったという院生も現れ、今後の展開が期待される報告となった。

報告者：具裕珍（EAA 特任助教）・犬塚悠（EAA 特任研究員）

【共催イベント】「自民党政権の現在と今後」



2019年7月24日、グローバル地域研究機構と東アジア藝文書院による初の共催セミナー「自民党政権の現在と今後」が開催された。本共催セミナーは、朴喆熙（パク・チョルヒ、ソウル大学）氏が東京カレッジ特任教授として滞在されているなか、内山融（東京大学）氏とのアカデミックの枠にとどまらない、長年の友情によって実現された。この日は特に7月21日の参議院議員選挙の結果も踏まえ、「一強」と呼ばれている、安倍首相下の自民党政権について、日本政治研究の先端を担う両氏による講演と対談が行われた。

まず、パク氏による講演がなされた。パク氏は今回の参院選において投票率（47.8%）が案外に低かったと指摘した上で、その原因として、有権者にとっての選択肢があまり存在しなかった点と、政治にはもう期待しないという風潮が明らかとなっていると分析した。パク氏は、得票率の低さを見ても今回の選挙があまり人々の関心を引かなかったことは指摘しつつも、自民党研究の観点からは興味深い点を観察することができるとした。それは、自民党の派閥の力学において、宏池会が敗北したことが持つ大きな意味である。これまで自民党は、1990年以降政党間連合（特に公明党との連立）や無党派層の取り組み、そして近年右派団体との連帯を通じて長期政権を構築・維持してきた。だが、その過程で自民党の派閥の弱体化が、安倍政権下でさらに顕著になったとのことである。

続けて、来たる2019年11月には安倍内閣が憲政史上最長の政権となる見込みを踏まえたうえで、安倍政権がいかにして成立しているのか、その行方と未来はどうなるのかについての議論がなされた。パク氏によると、安倍政権は「強い日本を取り戻す」というスローガンによって、経済面ではアベノミクス、外交・安全保障面ではかつてないほど強力な日米同盟のグローバル化（集团的自衛権行使容認等）を基軸とした精力的な政治活動を行っていると述べた。これに加えて、「誇りある美しい日本」といったナショナリズムを鼓舞し、それを政治的資源として活用できているとした。ここで特徴的であるのは、歴史問題をめぐる中国・韓国との関係の中で、日本の政治エリートがもはや「加害者意識」ではなく「被害者意識」を抱くようになってきている点であることを、パク氏は指摘した。この「加害者意識」の欠如こそ、近年の日韓関係を悪化させているという。最後



に、「ポスト安倍」について、もう一度自民党内の派閥の力学や野党の動き、そして外交面における課題が述べられた。

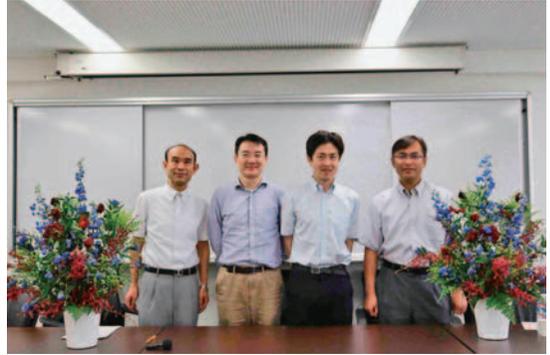
パク氏の講演を受けて、パク氏と内山氏の対談が行われた。内山氏は主に3つのテーマ—1) 若者の自民党支持の傾向、2) リーダーシップの性質と政権運営の変化、3) 野党の今後とその選択肢—について問いかけた。第1に、若者がなぜ自民党を支持しているのか（今回の選挙では20・30代の比例投票率は40%を超えている）については、大変不思議かつ学術的にも興味深い論点であることが両氏にとっての共通見解であった。考えられる仮説として、経済が好況（良い就職率）であることや、ネオリベラリズム的な言説の影響から「社会構造」に原因を求めるのではなく「自己責任」論に帰結する風潮が見られることが挙げられた。第2は安倍政権のイデオロギーをめぐる問いである。その右派的性質が党内の凝集性を高める一方で、イデオロギーの偏りを生じさせ、さらには外交問題を引き起こしていることが指摘された。これを踏まえて、リーダーシップの交替によって自民党のイデオロギーや政権運営は今後いかに変化するのか、という内山氏の質問がなされた。これについてパク氏は、自民党の本質は変わらないが、リーダーシップというのは本来自分のカラーを出さねばいけない性質を持っているため、変化が見られる可能性があると返答した。例えば、宏池会のリーダーに変わる場合、宏池会の「色」が出ざるを得ないとのことである。ここで、リーダーシップの重要性がうかがえる。第3に、自民党「一強」は野党の分裂に起因していることを指摘したうえで、日本政治における野党の現状と今後について両氏の見解が述べられた。両氏はまず94年度選挙制度改革（中選挙区制から小選挙区制へ）では、多くの政治学者が予想していたような「政策によって競争する二大政党制」の実現に失敗したことを指摘した。さらに、予想に反して野党の分裂が継続して見られるとのことである（この議論に関しては、政策をめぐる競争と言うより、後援会のような、組織による選挙戦略が依然として有効であることも含まれる）。しかし、パク氏は、今後国政選挙を重ねていくうちに、野党各党は統合に注力することは間違いないとも指摘した（これは政権獲得を目標とするというよりも、個々人の当選を最優先するからであるとのことである）。

質疑応答の際には、聴衆から、外交問題における安倍政権の対応、日本政治における共産党と組織、経済規制をめぐる日韓関係と今後、れいわ新選組の活躍などの質問が相次ぎ、予定された時間を大幅に越えてしまうほど活発な議論が展開された。日本の国会議員らとの親密なネットワークだ

けでなく、政治の現場を長らく見てきたパク氏による深い洞察と分析は、日本政治や、日本と東アジアの複雑な関係を理解することを促しただけなく、内山氏との対談や聴衆との議論を含めて、全てが非常に有意義なセミナーであった。

報告者：具裕珍（EAA 特任助教）

EAA フォーラム 「世界文学としての東アジア文学」



2019年7月26日、東洋文化研究所にて、EAA フォーラム「世界文学としての東アジア文学」が開催された。来日中の張旭東氏（北京大学・ニューヨーク大学）のほか、武田将明氏（東京大学）、鈴木正久氏（東京大学）が登壇し、魅力的なプレゼンテーションを行った。EAA フォーラムは、東アジアにおける新たな「知」の模索と発信を目的として、新しい「東アジア学」を徹底的に議論する場を創出することを目指して開催されている。去る23日に開催されたEAA フォーラム「東アジアから考える世界文学と世界哲学」に続き、今回のフォーラムにおいても、登壇者および参加者の積極的な参加を得て、上述の目的を果たすことができた。

3氏はそれぞれ、“Remarks on the End of Modern/National Literature and the Rise of World Literature in East Asia”（武田氏）、“How or Why are Bei Dao’s poems World Literature”（鈴木氏）、《“編年”与“诗史”——鲁迅晚期杂文再解读》（張氏）と題して発表を行った。武田氏は、日本の近代化と文学の関係を参照しつつ、英語やフランス語といった「ユニバーサル」な言語からの翻訳作業を通して、「日本語」という言語が「ローカル」なものから「ナショナル」なものへと変容していったことに言及した。また、近代小説という文学形式が、ナショナルな言語としての「日本語」と相補的に発展してきたことも指摘した。しかし昨今、こうしたナショナルな言語、あるいはナショナルな文学というものは衰退傾向にある。では、文学は「世界文学」へと移行していくのだろうか？ここでまず考察すべきなのは「世界」とは何を指すのか、という問いである。武田氏は小説家の Alpana Mishra 氏を例に挙げつつ、事態の複雑さを例示した。Mishra 氏は、ヒンディー語で小説を執筆し、デリー大学で教壇に立つ際には英語を使用し、さらにロシア語で書かれた文学に親しんできたという言語経験を持つ人物である。文学の「世界」性とは、Mishra 氏に見られるような、言語経験の多重性・多数性から考察する必要があるのではないかと武田氏は指摘した。

続く鈴木氏の発表では、現代中国の詩人 Bei Dao（北島）の「世界」性が論じられた。Bei Dao の作品（詩）は、世界的に広く読まれている。しかし、中国内部の読者を通して見える Bei Dao 像と、中国外部から見るそれとの間には、ズレが生じているということを鈴木氏は指摘した。その最大のポイントは「政治」である。Bei Dao の詩には、自身の中国における「政治」経験（とりわけ文化大革命の経験）が、深く刻印されている。しかし、こうした経験を翻訳する際には、必ず困難が伴う。場合によっては、こうした経験は翻訳されず、結果としてテキストが「脱-政治」化され

てしまうこともあり得る。しかし鈴木氏は、Bei Daoにとって言語とは、「政治」とは切り離すことができないものとしてあることを指摘する。したがって、Bei Daoの作品の「世界」性を考える際、翻訳され得ない、いわば翻訳の「剰余」（あるいは「はみ出し」）を考える必要がある。

続く張氏の発表では、晩年の魯迅に焦点が当てられた。張氏は、この時期の魯迅が執筆した「雑文（雑文）」という形式に着目した。「雑文」は、「文学」なのかそうでないのかというカテゴリ化、あるいは境界線を引こうとする欲望そのものを拒否する。「雑文」は、個人的なことから社会的なことまで、あるいは、実存主義や存在論といったあらゆる哲学的な視点を複雑に抱え込んでいる。また、そこにはブルジョワ的であるとか、プロレタリア的であるとか、はっきりと階級的に定められた視点はない。しかし、その複雑性ゆえに「雑文」は、政治的であり、歴史的であり、なおかつ美的であることが可能である。張氏は、「雑文」とは、魯迅が「世界」という現実そのものと格闘した結果生み出された「世界文学」であると指摘する。それは、「世界文学」たろうとする自己意識によって実現されるのではなく、結果として「世界」性を帯びるということである。こうした複雑性を、張氏は「詩史」という概念で言い表した。

3氏の発表を受けて、会場からは以下のような多岐にわたる質問が提起された。「東アジア文学」という時、その内部にある個々の経験を、どのようにすればつなぎ合わせることができるのか？ 英語帝国主義的ではなく、なおかつ「東アジア」を本質化する形ではなく、いかに「世界文学」を語るることができるのか？ また、「世界文学」を語る際、「歴史」はどのように関係してくるのか？ あるいは、「文学」において「政治」とは何を指すのか？ これらの質問に対する三氏の応答からは、次のような暫定的な答えが見えてきた。「世界文学」という潮流、あるいはそこにおける「東アジア文学」への注目は、文学作品が資本主義市場における「商品」であるという側面を映し出している。しかし、そのように制度化された「文学」というあり方そのものを打ち破る可能性も、同時に内包されている。その際重要なのはやはり、定義不可能な領域への着目である。「文学」とはこうでなければならない、あるいは「世界」とはこのようなものである、といった思考法によっては捉えることのできない領域こそが、「文学」を解放する鍵を握っている。それは例えば、“minor literature”（「小説」＝小さなお話）と呼ぶことができるかもしれない。言語が無効化されつつある（あるいは無効化されて久しい）昨今、「文学」を再考することが極めて困難であるなか、それでもなおその「解放」の可能性を多方面から模索する濃密な時間となった。

報告者：崎濱紗奈（EAA 特任研究員）

2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session (1) : July 29th Report



July 29th was the first day of 2019 CAMPUS Asia Tokyo session, at the Komaba campus of the University of Tokyo. We welcomed this year's participants — young undergraduates from Peking University, Seoul National University and UTokyo — with great pleasure. During a one-week session in Tokyo, they will attend lectures and do group projects together, whose aim is greater mutual understanding, as well as exploring the summer program topic “Environment and Life in East Asia”.

During the opening ceremony, Prof. Shimizu Takashi from UTokyo delivered greetings to all participants, explaining the purpose of CAMPUS Asia program, and encouraged the students to take part in activities and enjoy their stay in Tokyo. After that, all the students, professors and staff introduced themselves, and some necessary information about the schedule was also made clear.

Students and professors had lunch together at the Wakan (KPC Japanese-style House). Seeing the sushi prepared by staff, students from China and Korea were greatly delighted. Everyone chatted cheerfully, and the lunchtime finished in a warm atmosphere.

In the afternoon, Prof. Kim Bumsoo from Seoul National University gave our students the first lecture of Tokyo session, entitled “Culture and Difference in Everyday Life”. He started with the

question “what is the definition of culture ? ” and talked with the students about a number of everyday experiences in Korea, Japan and China, while also introducing the latest academic research on this topic. Prof. Kim emphasized the difficult problem of how to treat minorities and “bad” cultures while we promote cultural diversity in the modern world. As he asked students for their opinions on some recent news concerning this problem, the discussion heated up gradually, and the time passed quickly. Even with a lecture in a limited time, we believe the students will continue thinking about this topic, looking for their own answers.

Reported by Yingzi ZHANG (EAA Research Assistant)

2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session (2) : July 30th Report



The second day of the CAMPUS Asia Tokyo session was started by Prof. Maeda Akira from UTokyo with his lecture entitled “Environmental Management and Decision Analysis”. Focusing on the process of decision making, Prof. Maeda presented the audience with a detailed account of the key factors when people make judgments concerning environmental management. He introduced an analytical frame of “CBA” (i.e., C = cost, and B = benefit), but ultimately argued that an economic frame such as CBA is helpful but not sufficient, because environmental issues are much more complicated in the real world. For example, whereas CO₂ itself is harmless, it spreads widely and globally. By contrast, the areas/people that are affected by SO₂ (acid rain) are limited to a local region. Who should pay the costs? Who will enjoy the benefits? Also, insofar as the preferences of decision makers play the key role, how should we understand their criteria of selection? It is necessary to understand many factors when we try to solve environment problems in the real world.

In the afternoon, the students attending were divided into four groups to conduct a team activity whose aim was to understand more about the city of Tokyo. Each group included participants from three different universities. Students made their plans by themselves, deepening their collaborative

abilities and friendship.

Many of them visited Meiji Jingu, a famous site of great significance for Japanese history and culture. Group 1 tried yukata costumes, as it is now the summertime matsuri season in Japan. Group 2 found interesting differences between their cultures regarding public baths, as they explored Oedo Onsen Monogatari located in Odaiba. Group 3 learned about LINE in Harajuku, the social network service application that is widely-used in Japan. Group 4 visited the Imperial Palace and Yasukuni Shrine, both sites are important for understanding modern East Asian politics.

Although the weather was quite hot, the students reported that they enjoyed Tokyo city life very much.

Reported by Yingzi ZANG (EAA Research Assistant)



2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session (3) : July 31st Report



In the morning of the third day of their Tokyo session, students learned about the relationship between environment problems and human health. In her lecture entitled “Air Pollution, Climate Change and Human Health”, Prof. Kim Yoonhee of UTokyo first introduced the basic theory of environmental epidemiology, and then focused on air pollution to illustrate the topic. Looking back on the London smog of 1952, she showed how the smog influenced the death rate of local inhabitants and, from there, began analyzing the current situation in East Asia.

Prof. Kim emphasized that it is important to understand that solving air pollution problems involves the collaboration of many countries, that blaming neighbors is meaningless, and that we need solutions to broadly improve everyone’s health. She also discussed climate change, as it also poses a significant threat to human health. “What should we do? Mitigation and adaptation.” was Prof. Kim’s take-away message for all students.

This day’s afternoon also included time for team activities, in which four groups of students continued their explorations in Tokyo. Group 1 and Group 4 went to see the exhibition “teamLab Borderless” in the Mori Building Digital Art Museum together, Group 4 also visited Oedo Onsen Monogatari at Odaiba. Group 2 explored Akihabara, Asakusa and Tokyo Sky Tree. The Korean



members were surprised that entertainment plays such a huge part in Japanese daily life and the environment. Group 3 visited Tokyo Tower and the Tokyo National Museum. They were impressed by the night view and Buddhist Sculptures from Nara. Significantly, in two half-day activities, they managed to explore both traditional and modern, as well as particular and universal faces of Tokyo.

Reported by Yingzi ZANG (EAA Research Assistant)

2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session (4) : August 1st Report : Presentations in Tokyo and Travel to Osaka

After three days of lectures and group activities, the Campus Asia program 2019 welcomed the presentation day. In the morning, members of the four teams were busy preparing for the presentations scheduled in the afternoon. They were discussing, debating, and wrapping up ideas from the group activities held during the previous two days.

At 14 : 00, instructors and students gathered for the event. Professor Ha-kyoung Lee (Seoul National University), Professor Tsuyoshi Ishii, Professor Hidemi Takahashi and Professor Shiho Maeshima (University of Tokyo) participated in the session. Following the plan which had been decided the day before, Team 2 gave the first presentation on “Entertainment in ‘Life’ and ‘Environment’”. They discussed ways of enjoying leisure time by focusing on the Anime, Comics and Games (ACG) culture of Japan and onsen (hot spring) culture in Japan, Korea and China. Team 3 gave the second presentation, entitled “Waste Disposal and Recycling in Daily Life”. Originally inspired by their experiences with waste disposal on the Komaba campus, the team members extended their study to other sites in Tokyo, as well as to recent trends of recycling in Shanghai, China and recycling policies in Korea.

Team 4 chose “national identity” as their theme, drawing from historical controversies among the three countries and recent conflicts between Japan and Korea. Drawing from the thought of Friedrich Nietzsche and Jacques Derrida, they analyzing multi-cultural problems in Korea, China and Japan, covering issues such as refugees, ethnic minorities and immigrants, to reach the conclusion that national identity is established through difference and seems to be flexible.

The last to present was Team 1, with the title “Demographics in East Asia”. The presentation began with an overview of the demographics of Japan, China, and Korea, all of which are facing the common challenge of declining birth rate and ageing population. After introducing the ongoing policies of the three countries, they proposed their own policies, including working after retirement and mandatory parental leave for fathers and suggested that technological developments can be of great help in the future.





At the end of the presentation session, Professor Lee, Professor Takahashi and Professor Ishii commented on the four presentations. Professor Takahashi acknowledged the insights of the members but suggested they might situate their questions in a wider context, both spatially and chronologically.

After the presentation session, the students headed to Shinagawa station to catch the Shinkansen to Osaka. During the two-and-half hour train trip, they continued their discussion of the questions raised in the presentations, and some also used the time to learn Korean/Chinese/Japanese from their fellow team members.

Reported by Wenlu WANG (EAA Research Assistant)

2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session (5) : August 2nd Report



On the fifth day of this year's Campus Asia program, students visited DAIKIN's Yodogawa and Sakai Plants in Osaka, starting in the morning at the Technology and Innovation Center (TIC), in the Yodogawa Plant. Mr. Kagawa and Mr. Kobayashi welcomed the students, and gave an all-around introduction to DAIKIN and especially TIC. Following the introduction, Mr. Kobayashi led the participants on a tour of the TIC building, which has been certified as the highest level (platinum) of green building by LEED (an environmental assessment system developed by the U. S. Green Building Council).

The tour started from the first floor, where an exhibition space displays different DAIKIN products from the earliest models up to those of the present day. Mr. Kobayashi then guided students through the office floors, future lab and fellows room of the sixth floor and finally to the Chi-no-mori (forest of knowledge) on the third floor. During the tour, students asked Mr. Kobayashi and his colleagues, about DAIKIN's concept, products, and vision of future development. After the tour, all participants gathered at the TIC dining space, to enjoy a delicious and beautifully presented traditional Japanese-style lunch box prepared by DAIKIN.

After lunch, the group travelled to the Sakai Plant, where they were scheduled to visit the Rinkai



building. As in the morning, the students we given the tour after a short presentation. Mr. Kagayama was the guide, and Mr. Kobayashi kindly acted as the English interpreter. The students visited several manufacturing lines for components of commercial air conditioners, which were explained in some detail by Mr. Kagayama. After the tour, another two DAIKIN staff joined for a discussion session, in which the subject of working conditions, gender ratio and age distribution of the workers were discussed at length.

At the end the day-long tour, Professor Ishii, on behalf on the Campus Asia program and all the participants, expressed sincere gratitude to staff of DAIKIN for their hospitality. He also saw this trip as a great opportunity for the future generation to think and cooperate beyond borders in East Asia.

After bidding farewell to the Sakai Plant, students traveled to Shin-Osaka station by bus. Some of them also continued the themes of the discussion session with Mr. Kagawa, and Mr. Kobayashi who had accompanied them the whole day. On the Shinkansen back to Tokyo, all participants reflected on the trip to Osaka, wrote feedback, and enjoyed further discussion with their fellow members.

Reported by Wenlu WANG (EAA Research Assistant)

2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Peking session : August 5th-8th Report



8/5 Mon.

Everybody from SNU and UTokyo arrived at PKU for a welcome dinner at a restaurant on campus. After that, some students went to karaoke to have fun, and were surprised to find it fancier and bigger than ones in Japan.

8/6 Tue.

We attended lectures on how the traditional identity of the Chinese people was developed and found them very insightful. After the classes, some of us went to have hotpot and some went to have Xinjiang food with participants from the last winter program.

8/7 Wed.

In the morning, we went to Yonghe Palace and the Beijing Confucian Temple. It was very interesting to actually go and explore a site dedicated to Confucianism, which we learned about the day before. After that, we went to have lunch and explored some of Beijing's commercial districts.

8/8 Thu.

We went to Summer Palace and enjoyed the beautiful view, but it was very hot and everybody





was a little tired from sleepless days. We separated and went to have lunch after that.

Reported by UT Student Participants

第 24 回夏期教育セミナー

8月17日および18日、長野県松本市の旧制高等学校記念館に隣接する「あがたの森文化会館」にて開催された「第24回夏期教育セミナー」に、EAAから特任研究員の宇野瑞木とリサーチ・アシスタントの高原智史が参加した。

まず、本セミナーへの参加の経緯について説明したい。EAA 駒場オフィスを構えている駒場キャンパス 101 号館は、かつて第一高等学校の特設予科及び高等科として、中国から留学生を迎えていた校舎であった。この縁から EAA では東京大学と北京大学が共同で学生の教育に取り組む EAA の前史として位置付けるべく、一高特設予科・高等科に関するプロジェクトを発足し、一高に関する展示や研究・調査活動を継続して行っている。今回の旧制高等学校に関する「夏期セミナー」への参加も、この一高に関するプロジェクトの一環として位置付けられる。

セミナーの会場となった「あがたの森文化会館」は、旧制高等学校である松本高等学校の校舎で、建物の角の部分に正面玄関が設置された大正時代らしい開放的な造りの木造建築である。「あがたの森」の名称は、松本高等学校設立当時、校舎の周囲に植えられたヒマラヤ杉が成長し、森のようになったことに由来するという。

今年で24回目を迎える「夏期教育セミナー」は、研究者・教職者のみならず、旧制高校卒業生・市民が共に「学び」について意見を交わす場として運営されてきた。今年のテーマは、特に明確に設定されたわけではなかったが、緩やかには「寮生活」であったように思われる。旧制高校といえば「学生寮」というほど両者の結びつきは強い。今回は3世代にわたる思誠寮生が語ってくださった当時の貴重な体験談も含め、学生の生活や内面、また、それらを取り巻く学校の景観・モニュメント、さらに教育制度的な側面に至るまで多岐にわたる濃密な議論が交わされ、充実した会となった。

1日目は、渡邊匡一氏（信州大学）による「旧制松本高等学校関係資料の活用と電子アーカイブ構築への提言」と題された基調講演から始まった。その主な内容は、旧制松本高等学校関係資料の活用と電子アーカイブ構築への提言であった。旧制松本高校は、大正8年（1919）に、ナンバース



(旧制松本高等学校の校舎であった「あがたの森文化会館」の正面)

クールに次ぐ全国で9番目の高等学校として開校され、昭和25年(1950)に廃止された。渡邊氏は、旧制松本高校校舎である「あがたの森文化会館」に隣接する「旧制高等学校記念館」に所蔵される松本高等学校関係資料群から、旧制松本高校の「思誠寮」における学生たちの生活面や内面について窺える資料を紹介した。特に興味深かったのは、当時の『図書原簿』が残されているという話である。これにより当時の図書室の本棚を再現したいが、古い学校の校舎の取り壊しが進んだため、当時の雰囲気醸成するような木製の本棚がなかなか見つからないのだという。また『寮生日記』には戦時期の寮生の心が綴られる一方で、「回覧」の性質上、本心を見せにくい側面があったようである。一方で、クラス誌など内輪の気を許せる仲間たちの間では、例外的にはあったが戦争反対を打ち明けた場合もあったと述べられた。さらに、松本高等学校100周年を記念し、旧制高等学校記念館、日本文学分野、大学史料センターの共催で「松本人名録」を作成・展示したことが紹介され、今後この「人名録」を中核として「松高人物アーカイブ」を構築する構想について提言された。

続けて、「思誠寮の青春——旧制松本高校～信州大学3世代の体験談を通じて」と題された記念イベントでは、旧制松本高校及び信州大学の寮、思誠寮の寮生3世代に亘る3名から当時の寮の状況が語られた。

1人目は1950年に旧制松本高校を卒業した、松本高校としては最後の卒業生。当時、松本高校の寮は1年生のための寮で、その後の複数の学年が混在する寮とは違ったものだったと述べられた。戦時中の寮の雰囲気について、「人生二十三年、少尉に任官して戦死、二階級特進で、大尉になって死ぬ」というものから、戦後、「己を高めるため、敵ではなく己と戦う」というものへと移り変わっていった様が語られ、2つの時代を象徴する二つの寮歌の音源を流された。また寮内でゲゼルシャフト主義とゲマインシャフト主義、すなわち個人主義と家族主義、集団主義との対立があったことについても触れられた。

2人目は、1981年信州大学卒業生。当時から持ち上がっていた大学側からの廃寮政策、寮のアパート化について語られた。年2回の部屋替えでは、寮委員は苦労があるから5点、食堂に近いなどの利便性に依拠して3点、2点など元の部屋に点数が付き、その持ち点に応じて新しい部屋の希望が通るか否かが決まるのだという。また、住みたい部屋がある場合には期限までに「アタック」する必要があるなど、興味深い内実を話された。

3人目は2017年信州大学大学院修士課程修了生。寮には学部4年生の時に入寮した。移転、建て替え後の寮生活で、新しい寮は食堂がなく自炊で1人部屋であったという。他方、今でもやり方は異なってもストームが行われているなど共通点も多くあった。

三者三様、寮時代の苦労と楽しさが存分に語られたパートであった。

2日目は、研究者による研究発表会が3つのセッションに分かれて行われた。

第1部は、富田ゆり氏(学習院大学史料館)による「旧制松本高等学校時代における辻邦生の創作——寮雑誌『思誠』・日記『園生』を視座として」と題された文学的観点からの報告であった。辻邦生は旧制松本高校に昭和19年から昭和24年まで5年間在学したが、その在学中の昭和20年、戦前の寮雑誌『思誠』に小説「遠い園生」を発表した。辻の極初期の創作としてはこの作品が唯一とされ、〈原点〉とみなされてきたが、近年、学習院大学資料館が所蔵する辻邦生資料から、旧制松本高校時代に書かれた辻の日記が発見され、辻が当時いくつもの創作や文芸に関する活動を行っていたことが具体的に見えてきたという。とりわけ寮雑誌『思誠』第23号と『園生』と題された日記を対照する中で、戦時下の辻の創作が、留年により勤労働員を免れて寮に残るも、学校は機能



(2日目、第三セッションの様子)

せず、〈永遠の夏休み〉ともいうべき真空状態の中で生み出されたという従来の見方に対し、それを覆すような創作態度が明らかになった。1日目に寮生によって語られた寮歌「遠征」の作曲者・田中惇氏は辻の友人であったが、勤労働員中に肺炎で急死した。その追悼文を1945年刊行の『思誠』23号に書いた人物こそ辻であったこと、その出版のために奔走したことも日記から明らかにし、辻が自身を含む寮生のために、戦時下に創作の力をもって厳しい現実に向き合おうとしていたことを指摘した。

続いて第2部は、谷本宗生氏（大東文化大学）と田中智子氏（早稲田大学大学史資料センター）の発表であった。第二高等学校と第四高等学校における教育と学生生活についての発表で、それぞれ「旧制高等学校の教育システムと教育方針——第四高等学校長横淵進馬と第二高等学校長阿刀田令造を事例として」、「第二高等学校および第四高等学校の「校風」と学生生活」と題された。旧制高校のありようについて、前者は学校ないし教師の側から、後者は学生の側からアプローチしたものといえる。谷本氏は阿刀田につき、自身が帝大時代にいた近角常観の求道学舎での寮生活が彼の教育方針に強く影響していると指摘した。田中氏は第四高等学校の校風「超然主義」を紹介し、社会の弊風から離れ、我が道を行きつつ、同時に社会を指導することを目するものとされた。これと関連して、社会主義の学生運動や戦争に伴う寮自治の廃止の問題が論じられた。続いて第二高等学校につき、「雄大剛健」の校風が言われ、阿刀田が唱えた「和衷協同」や戦中には「日本精神」（反面、「衰弱」への排撃）が相俟って、第二高等学校の「雄大剛健」の校風が作られたと述べられた。最後のセッションにあたる第3部は、「一高校長時代の狩野亨吉——教養学部前史として——」と題されたパネルであった。はじめに、折茂克哉氏（東京大学駒場博物館）が、これまで駒場博物館を中心として東京大学教養学部前史として位置付けられる一高関連資料のアーカイブ化を進めてきた経緯と今後の資料活用の必要性や意義を述べられた上で、そのケーススタディとして各発表者の取り組みについて紹介された。

続いて、田村隆氏（東京大学）が「明治30年代の一高」と題し、近年本パネルのメンバーの科研にて進められている明治30年代に第一高等学校長であった狩野亨吉に関する調査の概況を話された。田村氏は、狩野亨吉校長時代の出来事として、清国留学生の受け入れ開始や寮歌「嗚呼玉杯」、また漱石の着任などに触れ、一高の旧蔵書について、主に昨年度駒場図書館で開催された展示「駒場の古典籍」での成果についても紹介された。さらに一高の外国人教師プッチールとアリ

ヴェールの銅像について、それが描かれた絵葉書や写った写真などを参照しながら当時の位置関係を復元し、こうした手がかりに目を凝らすことが当時の状況を把握する1つの有効な手立てとなること、また学内に残されたモニュメントの重要性について言及された。最後に、1号館南東の角に現在も立っている一高のシンボルの1つであるオリーブの木について、その保全の必要性を強調された。

続く発表者である丹羽みさと氏（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）は、「狩野亨吉と旧制一高医学部」と題し、千葉にあった一高医学部について発表された。駒場美術博物館の一高関連資料の整理を進めてこられた丹羽氏は、駒場美術博物館に当時の貴重な資料が残されていることについて述べられた上で、今回は狩野亨吉時代の一高医学部に関する貴重な資料を紹介された。特に狩野亨吉の校長として様々な場面における対応に着目され、狩野校長が教員を連れ立って振天府（皇居内、日清戦争の戦勝記念品を収納する建物）を訪れた出来事などについて、現在駒場図書館に収蔵されている書簡から丁寧に読み取り、当時の状況について解説された。

最後に、川下俊文氏（東京大学）が「第二臨時教員養成所——一高における教員養成」と題し、一高に付設されていた第二臨時教員養成所について発表された。臨時教員養成所は高等師範学校だけでは足りなかった中等教員養成のため、大学や高等学校などに設置されたものであるが、臨時ということで需給調節が利き、物的施設、教師を大学、高等学校で使い回すことで低コストを実現するものとされた。一高についても、時間割を示して、一高教授が臨時教員養成所でも授業をしている様子が示された。

全体討議では、旧制高校に関する資料が膨大に残っているにもかかわらず、現在十分に認知されているとはいえない点について、今後どのように具体的に周知し、また活用していけばよいか意見が交わされた。今回、旧制高校資料群は、教育史、学校史のみならず、文学・思想研究などの分野にも十分資するものであり、今後より学際的な研究の場として展開させていく必要性が共通の見通しとして得られたように思われる。さらに学内に残るシンボル樹木やモニュメントのような文化資源の保全の問題や資料のアーカイブ化に伴う公開・非公開の問題などについても話し合われた。

以上、2日間のセミナーを通して感じたのは、研究者だけではなく、旧制高校卒業生や市民が参加する、より開かれた場として継続されてきたことの意義であった。立場の異なる方々が自由に意見を言い合える空気は、一朝一夕で作れるものではない。そして、全体で共有されていたのは、この旧制高校の資料を今後どのように活かしていくか、という問題意識である。それは単に研究資源としてのみならず、よりよい教育や未来に向かっていくための資源としてどのように引き継ぎ、活用していくか、という思いである。今回、何度も耳にした「学都」たる松本の地に根付いているという「学び」を尊ぶ思いの深さや熱意に触れた思いがした。

報告者：高原智史（EAA リサーチ・アシスタント）・宇野瑞木（EAA 特任研究員）

上海インターンシップ報告



8月20日から23日にかけてダイキン工業株式会社を受け入れ先とする東京大学グローバル・インターンシップ・プログラム (UGIP) で2週間中国に滞在する学生たちに同行する形で、EAAより石井剛 (EAA 副院長) および伊達聖伸 (総合文化研究科准教授) が同行した。

到着日は、浦東空港から市街まで出て散策したあと、南京西路にあるダイキン工業のビルでカスタマーサービスセンターとショールームを視察した。上海はダイキン工業が中国に進出した最初のそして最大の拠点であり、高級ブランドとして市場を開拓してきた様子をうかがうことができた。

2日目は、午前中は上海工場と技術開発研究院 (R&D) を見学し、午後は田谷野憲氏 ((中国) 大金董事長兼総経理、ダイキン副社長) の講話をうかがった。変化が早く、巨大市場の勝者がグローバルスタンダードを握るという厳しい現実との対峙を強いられる中国で、世界統一品質にこだわりながら現地化を進めてきた様子と情熱を感じる事ができた。

3日目は、午前中は新幹線で蘇州に移動しダイキン蘇州工場を視察し、午後はインダストリアルパークエキシビジョンセンターを訪れた。上海工場と蘇州工場を続けて見ると、両者の特徴と違いも出てくる。エキシビジョンセンターでは、学生たちは進んだ中国の技術に感激しているようであった。

朝早くから夜遅くまで、行く先々でダイキンの社員の方々から熱烈歓迎を受けた。巨大企業ということもあって社員の価値観は多様で、食い違いさえ見られたが、それを隠すでもなく、むしろに



じみ出てきたのは関西系企業としての逞しさと、日本の技術を中国で守ることに賭ける挑戦の姿勢と、新しい業務文化を創設しようとする開拓魂が伝わってきた。

私自身にとっては初めての中国で、この年齢でもいろいろと刺激を受けたり、発見があったりしたのだが、きっと若い学生の感受性は、ずっと多くのものを、深く受け止めていることだろう。いささか抽象的で、漠然としていることも事実だが、私のなかには次の2つの問いがある。(1) 産学協定が珍しくない現在の日本の大学を取り巻く環境において、いわゆる文系部門に属する自分の学問研究の意義をどう位置づければいいのか。(2) フランス語圏地域研究に従事する東アジア藝文書院 (EAA) のメンバーとして、東アジア「から」考えるとはどういうことか。そう簡単に答えが出る問いではないが、今回の滞在はひとつのヒントになると思っている。

伊達聖伸 (総合文化研究科准教授)

EAA Forum with Young Visiting Scholars

2019年8月30日、東京大学赤門総合研究棟にて、EAAフォーラムが開催された。この度のフォーラムでは、東京大学に訪問研究員として滞在中の3名の若手研究者（Ju-Ling Lee氏、Kyle Peters氏、Michael Facius氏）による発表が行われた。冒頭の挨拶で、彼らの受け入れ教員である中島隆博氏（EAA 副院長）は、EAA という場が、若手研究者の交流のプラットフォームとなることへの期待を述べた。

はじめに、Ju-Ling Lee氏による発表“Image, Body and Colonialism : Taiwan under Japanese rule”が行われた。植民地における身体表象について考察する本発表では、特に、植民地台湾において発行されたポストカード「台湾美人」および「生蕃美人」をめぐる考察に焦点が当てられた。これらのポストカードは、植民者日本が植民地台湾に対していかなる眼差しを向けてきたのかを如実に語っている。「台湾美人」には、現代風な髪型をし、足元にはハイヒールを履いた女性が旗袍（いわゆるチャイナドレス）を着せられて写っている。ここで女性は、帝国日本によって与えられた「近代」を謳歌する存在として描かれつつも、植民者が求める台湾像——エキゾチックな存在——として表象されている。一方の「生蕃美人」は、顔面に入れ墨をし、彼女たちの伝統的な衣服を着せられて写っている。この表象は、「生蕃」の「野蛮」さを強調し、「野蛮」な存在に対する「文明」の伝道者としての植民者日本を正当化するために利用されてきた。Lee氏は、比較対象として、フランス領インドシナで撮影された別のポストカードを提示した。そこには、半裸の女性が無気力に横たわっている。「台湾美人」が、日本による近代化（あるいは「文明」化）の成果を強調しているのに対し、インドシナの女性は、より「遅れた」「未開の」存在として、エキゾチックに演出されている。報告者が興味深く感じたのは、植民者日本の「近代性」という問題だ。Lee氏が指摘したように、大日本帝国自身が後発国であり、他の列強諸国に比べると近代化に遅れを取っていた。それゆえに、日本が植民地において近代的統治者として振る舞おうとすると、ある種の滑稽さが伴う（例えば植民地台湾において、裸で街を闊歩していた内地人たちを、台湾の人々が滑稽に感じたという事例が紹介された）。身体とは、本来不分明である内地と植民地との間の境界線が、恣意的かつ暴力的に引かれる場としてあるのだ。

次に、Kyle Peters氏による発表“Early Nishida Philosophy and Autopoiesis : On Two





Frameworks of Self Formation”が行われた。本発表は、存在論的立場から、西田幾多郎の哲学における「自己形成」概念に着目し、その内容を「元来一の活動」と「体系的な発展」という2種類に分けて考察することを目指したものであった。Peters氏によれば、「元来一の活動」とは、「内面的な潜勢力・潜在性によって自ら発展・完成する活動」であり、他方、「体系的な発展」とは、「個物と個物の間、そして個物と全体のダイナミック的・相互的な限定によって自ら発展・完成する活動」を指す。Peters氏は、前者を植物の種子、後者を根・葉・幹・枝と樹全体との関係性に例えて説明した。種子は、発芽し生長していくという潜在性を内包している。こうした潜在性の中から、実際に現れでるのが「現実」であるが、西田は、潜在性と現実性を含みこむものとして「実在」を考えた。このように考察することによって、「個」という存在は、単に個々別々に単独的に存在しているのではなく、その実在を介して、他の一般性へと発展していくものとして理解することが可能になる。このような「個」が複数存在し、全体性を構成する活動というのが「体系的な発展」である。ここでは、「一」と「多」、「多」と「一」が、互いに排他的ではなく、相互的に関わり合っている。「個」に秘められた潜在性と、そこから現実化されたものが、ダイナミックに関わりあう活動である。Peter氏は、西田哲学のこのように解釈した上で、同時代の文化・思想活動と西田哲学との関係性を分析し、戦間期日本における社会のあり方について考察したいと述べた。オーディエンスからは、西田哲学における全体性の問題や、ヘーゲルやシェリングといったドイツの哲学者たちとの比較・相違についてのコメントが寄せられた。また、同席した佐野雅己氏（東京カレッジ副カレッジ長）からは、自らの専門である物理学と西田哲学の対応性についての貴重な見解が提示された。

最後に、Michael Facius氏による発表“Narrating Edo pasts : Between history and historying”が行われた。Facius氏は、「江戸」という時代に対するアカデミックなアプローチとして「learning from Edo（江戸から学ぶ）」、「Edo and popular culture（江戸とポピュラーカルチャー）」、「History, representation, and politics（歴史、表象、政治）」という3つの態度に分類した上で、特に「江戸とポピュラーカルチャー」についての豊富な事例を紹介した。ここで重要なのは、「historying」という概念である。直訳すると「歴史する」ということだが、ここでは、社会的・文化的に構成されるものとしての「歴史」という意味が込められている。本発表では「江戸」が、国内外においてコンテンツとして表象・消費されている事例が紹介された。例えば、日本においては「江戸」をモチーフとした大河ドラマやテーマパークが人気を誇っており、その人気は「江戸文化歴史



検定」なる検定試験が開催されるに至るほどである。また、Facijs氏はビデオゲームの事例を取り上げ、当時の服装や生活の様子を忠実に再現することにこだわった作品は、国内にとどまらず、海外のプレイヤーの人気も集めていることを紹介した。オーディエンスからは、このような「historying（歴史する）」という事象は、「江戸」以外の時代・地域（たとえば「平安」時代や、植民地下の台湾）においても見られることか、それとも「江戸」というコンテンツ特有の事象というべきか、という質問が寄せられた。また、「江戸」という時代への回顧は、時に、自らにとって都合の良い「美しい歴史」を創出するという政治性も伴うのではないかという指摘もなされた。

休憩なしの3時間という長丁場ではあったが、全体を通して、活発かつ有意義な議論が行われた。このような機会の積み重ねによって、EAAがより領域横断的で多様性に富んだ場へと発展していくことを期待したい。

報告者：崎濱紗奈（EAA 特任研究員）

EAA Forum “Recent Past & Remote Past”



2019年9月2日、東洋文化研究所第1会議室にて、EAA Forum “Recent Past & Remote Past”、直訳すれば「近い過去と遠い過去」が開催された。過去時制の複数性を想起させるこの企画は、中島隆博氏（EAA 副院長）との Yujie Zhu 氏（オーストラリア国立大学）、Yu Zou 氏（重慶大学）のこれまでの交流があって実現したものである。

午前中には、どのように東アジアにおいて新しい人文学のプラットフォームが作れるかについて、ブレイン・ストーミングが行われた。活動を書籍シリーズ化して風景を可視化する話から、教員学生の双方の学究のためのレジデンスの理想についてアイデアが交換された。自由闊達な時間であったが、根幹にあったのは、「普遍性（universality）」の再建をめぐる現場の率直な声である。新しさを生み出してゆくと同時に、どのように「クラシックス」を繰り返し読みつづけられるのか？ このような問いをめぐり、デリダの「条件なき大学」やドゥルーズの「反復」概念も参照しつつ、“Chinese literature”を“Chineseliterature”とするように、言葉をコンパウンドすることでその存在そのものの自明さが揺り動かされる境地を生み出す可能性が語られた。

昼食と散歩のあと、フォーラムは14時から始まった。

まず、Zhu 氏が「どのように現代中国はその過去を記憶することができるだろうか？」と題した発表を行った。David Laowenthal, *The Past as a Foreign Country* (1999 年刊) を導入とし、王朝交代に伴う文化遺産の創造と破壊の歴史を確認したあと、「遠い過去」については、複数の土地において中国の起源であることが主張されるなか、過去の扱いにヒエラルキーが生じている状況が、「近い過去」については、植民地時代、革命期、日中戦争、災害をめぐる異なる状況が整理された。発表後は、個人的記憶や集合的記憶の区別や、トラウマの克服可能性について質問があり、「過去」がドメスティックになってゆくことや、国際政治の影響が指摘された。

つづいて、八幡さくら氏（EAA 特任助教）が「シェリング芸術哲学からみる芸術における新しい神話」と題した発表を行った。シェリングは、理想的なギリシア神話の時代から時を隔てた自分自身の同時代のために、新しい神話が必要であると主張し、ゲートをはじめとする詩人の文学作品を神話と呼んで評価していたことが整理された。そして、神話が断片化した19世紀の危機と現代



とが類似していることが指摘された。フロアからは、それでもなお現代に神話は必要なのか、相対主義の外にどのように出ることができるのか、偶然性の問題があるのではないかと、といった質問があがった。

コーヒー・ブレイクのあと、Zou氏が「近代の道德説得：胡適と『終身大事』」と題した発表を行った。1919年に発表された胡適の小戯曲がどのような仕方でも重要であるのかについて、中国の戯曲史における口語文学の出現とともに、とりわけ半植民主義の視点からとり直された。そして、そのような伝統的でも西洋的でもない近代性と、最初の白話作品の男性中心主義からの脱出の新規性が、シェイクスピアをはじめとする戯曲翻案の歴史も組み込んだひとつの文学史として描き出された。

最後に、中島氏が、「古代中国と前近代日本における古の表象：荀子読解」と題した発表を行った。平野啓一郎氏の小説『ある男』（2018年刊）に描かれる戸籍交換のモチーフを例として、人はどのようにして過去に向き合うことができるのかと問いかけた。その上で、丸山眞男の荻生徂徠の理解は誤読とされているが、じつは、天と人を区別する視点を導入し、後王もまた「遠い過去」であるはずの先代の王とおなじ「近い過去」であると考えた荀子とおなじことを考えている、という構図がしめされた。

その後、参加者が一言ずつ、神話で神話を乗り越えることはできないのではないかと、世代によって依拠する理論に差異がある、といったコメントをし、つづけてゆくことの重要性が確認された。そして、中島氏が今後のフォーラムの課題として「未来の過去 (future's past)」という言葉投げかけ、フォーラムを締め括った。

報告者が振り返って思うのは、「リモート (remote)」という英語は、「リモート・コントロー

ラー（遠隔操作機）」のように、空間的な遠さもまた意味することである。フォーラム後、遠く離れ、ばらばらになったわたしたちは、どのようにつながりをたもちながら思考をつづけてゆくのだろうか。すでに、今回の発表者たちの問題意識も受け、EAA 内では、新しい企画やリーディング・グループが動き出そうとしている。どのような形でおたがいの思考をもちよって再会できるか、楽しみである。

報告者：高山花子（EAA 特任研究員）

EAA 北京大学集中講義 2019 (1)



2019年9月6日～10日の5日間、「北京大学集中講義 2019」が行われた。EAAではアジアの共通の未来を担う人材の育成を目的として東京大学と北京大学の学生が共に学ぶ集中講義を開講しており、今回、近代古典シリーズ講義の第一弾として「文明とその批判者」をテーマとする講義を開催する運びとなった。集中講義には両大学から各10名選抜された20名の学生が参加し、活発な議論と友情を分かち合った。

以下はその5日間の報告である。

2019年9月6日は移動日であった。今回は学部1年生が多かったため多少の懸念があったが、学生全員が待ち合わせ時間より早く集合するなど、すべての手続きが順調であった。学生同士とスタッフ・教員間のこうした協力と気配りは全日程において見いだされ、この研修を成功させる土壌となった。夜遅く無事に北京空港に到着した私たちは、空港まで迎えに来てくれた北京大学のTAと出会い、ホテルに到着、明日以降を楽しみにしながら1日目を終えた。

報告者：具裕珍（EAA 特任助教）

2019年9月7日の2日目は初の北京大学訪問となった。北京大学の西側に宿をとっていたため、西門から入校した。西門は北京大学のシンボルともなっており、北京大学の学生にとっても、北京大学を訪れる者にとっても重要なスポットである。門を入ると道が開け、池を中心とした自然豊かな景色が現れる。西門の外側の喧騒から一転して自然豊かな静かな空間が広がり、北京大学を初めて訪問する学生にとって、大きな衝撃となった。2日目に予定されていたのは、北京大学の学生との交流と石井剛氏（EAA 副院長）による講義である。私たちはその会場となる元培学院の建物「俄文楼」に向けて歩を進めた。

教室で待っていたのは、今回の受け入れ担当教授である章永楽氏（北京大学）と、10人の学生、そして補佐などを担当する四人の大学院生であった。席は両校の学生が隣同士に座れるよう配慮されており、席に着いた後、早速北京大学からの歓迎の挨拶を受け、続いて自己紹介の時間となっ



た。使用言語は英語・中国語・日本語の3ヶ国語、中国語が話せる東大の学生は中国語を使用し、北京大学の日本語学科の学生による流暢な日本語も披露された。自己紹介の後は5つの4人グループに分かれ、北京大学の学生の引率による校内見学が行われた。北京大学は非常に広大な敷地を有しており、教室や寮、食堂がある区画を歩くだけでも一時間近くかかる。また「未名湖」と呼ばれる大きな湖が学内にあり、雄大な景色を感じ取ることができる。東京大学の本郷キャンパスも広い敷地を有しているが、それをはるかに凌ぐ大きさに驚く学生も多かった。校内見学の後は教室に戻って音楽交流が行われた。北京大学側からは2人の学生がそれぞれのパフォーマンスをした。東大側は応援歌「ただ一つ」が2人の学生によって歌われた。

以上が午前の活動である。学食で昼食をとった後、午後は石井氏による3時間の講義が行われた。講義は2つのパートから成っており、前半はEAAの理念とその意義について語られた。これは最初の挨拶から何度も繰り返し強調されたことだが、今回の北京訪問は日中交流において歴史的な1ページになる。両国の交流はこれまで幾度となく行われたが、東京大学と北京大学が共通のプログラムを立て、学生と教員の交流を活発に推し進める試みはこれまで空前のことであった。今後の日中関係、そして東アジアの未来を考える上で、この交流は重要なスタート地点であり、学生に対して大きな期待を寄せている旨が語られた。

講義の後半は「Civilization and its Critics」と題され、岡倉天心や章炳麟など日本と中国の学者について語られた。西洋列強が東アジアに至ったことで、日本や中国の学者たちは従来とは全く異なるシステムや学問に触れる中で様々な反応と思索を繰り広げた。「civilization」は今でこそ「文明」と翻訳されるが、当時はこの翻訳自体が大きな問題となった。そして石井氏の専門でもある章

炳麟は「俱分進化論」において、社会の進化において善だけが進化するのではなく、悪も進化するという主張を展開した。西洋由来の「civilization」を如何に考えるか。今日の東アジアにおいて尚問題であり、同時に西洋にとっても常に再考を求められる問題でもある。石井氏の講義ではこうした問題に対して明確な結論は示されず、その場にいた全員に今後も考えて欲しい問題として投げかけられた。

講義後は少しの自由時間の後、夜には北京大学から歓迎の意を祝して食事会が開かれた。昼間に仲良くなった友人たちと席を共にしながら、次々と運ばれてくる豪勢な料理を堪能した。食事会には北京大学側で東アジア藝文書院のプログラムに参加している教員も訪れていた。そのうちの何人かは、今後北京大学の学生が東京大学に訪れた際にまた顔を合わせることになるだろう。両校の交流が今後も続いていくことを感じ取り、期待も高まった。

食事後、宿へ戻った。翌日にはEAAの教員である中島隆博氏の講義と、両校の学生によるグループワークが予定されている。グループワークへの少々不安と期待を抱きながら、翌日に備えて早めの休息をとった。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

EAA 北京大学集中講義 2019 (2)



9月8日には、前日の北京大学校内見学、石井剛氏（EAA 副院長）のレクチャーに引き続き、中島隆博氏（EAA 副院長）のレクチャーと、東大・北京大混合の学生チームによる、両教授のレクチャーを受けてのプレゼンテーションが行われた。

今回の全体のテーマは、「文明とその批判者」であったが、中島氏のレクチャーは、「文明」について論じた明治日本の代表的な思想家、福沢諭吉と中江兆民を題材にしたものであった。

中島氏はまず、「文明・civilization」が19世紀の日本や中国にとって何であったかを問うた。学生からの答えを受け、さらに civic や civility、city とは何か、その訳語である「文明」や「開化」は適切であろうか、についての議論が行われた。そこから中島氏は、「あなたが19世紀に生きていて、もし政策決定権があるとしたら、どうするのか」という刺激的な質問が飛びかかった。学生からはおのずと「文明」と「暴力・帝国主義」、「野蛮」、「宗教」との関係を取り上げられ、より踏み込んだ議論が展開された。

ここで、中島氏は、福沢と兆民のディスコースを用いて、「文明」について再考した。福沢にしても、兆民にしても、彼らの抱いた「文明」観に比べ、明治政府が実際に採用したプランは過度に「宗教的」であったと中島氏は指摘した。「文明」において「宗教」とは必要条件なのか、という問いに対し、日本と中国の近代化の道を振り返ってみたあと、学生からは最後に「文明」と「民主主義」の関係が問われた。「文明」をめぐる、中島氏と学生の間で brain storming なやりとりが行き来し、肝心のキーワードが次々と出て、結局「19世紀という文脈」と「東アジアにおける文明」、そして「今現在への意義」まで、大きなテーマに収斂していく、非常に密度のある講義であった。

中島氏のレクチャーの後、昼食を挟んで、学生たちはグループごとに分かれて、3時間、プレゼンテーションの準備のため、議論した。中には食事そっちのけで準備に没頭していたチームもあった。

プレゼンテーションの準備を終え、夕食をとってから、プレゼンテーションの本番が始まった。短い準備時間の中で、パワーポイントのスライドまで用意したチームもあり、いずれのチームも万全の準備だった。

1つ目のチームは、ヨーロッパの侵略に対して東洋の立場でどう対処するかにつき、兆民の『三酔人経綸問答』から考えるとしてプレゼンテーションをした。「文明」と戦争について考える趣旨



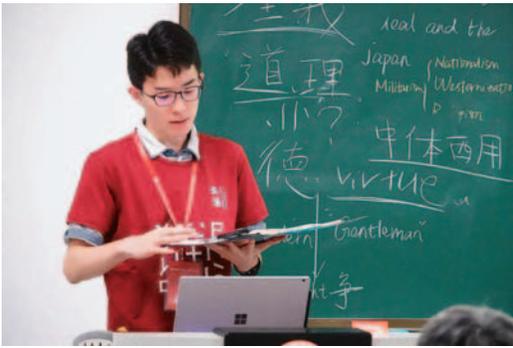
であった。教授陣からの講評として、西洋から見れば日中などは「野蛮」であるが、日本から見れば西洋、さらに中国こそが「野蛮」であるとされる。とすれば、「野蛮」とは主観的な概念であるといえるが、そこで人類学的観点との関係はどうであるか、ということが問われた。

2つ目のチームは、「文明」とは何かをやはり兆民の『三酔人経綸問答』のテキストから考えるとした。「三酔人」の一人、「豪傑君」は国家主権を説き、西洋の接近は経済力と軍事力の接近を意味したが、それに対して、皮相的ではあるものの、物質的な強化を彼は志向しているが、それはダーウィンやスペンサー、マキャベリに影響されてのことであるとの話題が出た。教授陣からの講評では、civilization という1つのユニバーサルな概念があるのか、それとも複数の culture があるのか、ということが問われた。

3つ目のチームは、社会進化について、中国の具体的な歴史的経験をめぐって、兆民に即して進化の図式に当てはめて考えるものだった。その中で「中体西用」(western tool with China spirit) や洋務運動、変法自強運動、辛亥革命などが論じられた。教授陣からの講評としては、歴史相対主義をどう考えるかということが問われた。

4つ目のチームは、前日に石井氏が扱った章炳麟の「俱分進化論」を取り上げ、章炳麟にとって「啓蒙」とは何であったかを問題にした。テキストにおける「西洋」と「東洋」の混じり合いや、章における「平等」について話題にされた。教授陣からの講評としては、中国語オリジナルのテキストと日本語訳との比較の問題が提起された。

5つ目のチームは、「文明」とは何かを究極の問題とし、それが時代によって変化するかを考えるとした。思想家たちは、社会進化とその国の位置づけや、「文明」の最終的なゴールについて考えた。宗教と「文明」について、2者が衝突するかは文明化の度合いにより、福沢の頃は両者が衝突する時代だったが、現在では状況が変わっている。そうして、「文明」には、宗教と科学という



2つの「深淵」があると結論した。教授陣からの講評としては、宗教の影響は減じてきているが、そのプロセスは国によって異なる、宗教のコアの部分は人々に道徳を植え付ける、他方で「文明」のコアというのは見つけられないのではないかという意見が述べられた。

全てのチームのプレゼンテーションが終わると、教授陣から改めて講評がなされ、表彰の意味で学生チーム全員にEAAのバッグが渡された。

朝9時の中島氏の講義から、プレゼンテーションの準備と本番まで、夜10時近くまでかかった長い1日は、充実の内に幕を閉じた。

報告者：高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

EAA 北京大学集中講義 2019 (3)



9月9日は校外「視察」である。確かに目で見る（視）だけでなく、五感全部を働かせて中国の現在を感じて知る（察）ことは今回の重要な目的でもあると思われる。午前中にはEAAプロジェクトの教授会合があり、学生たちは頤和園を訪ねた。頤和園はサマー・パレスと呼ばれ、北京大学の敷地の一部である暢春園と同じく、清朝皇室の避暑地である。グループに分かれて万寿山に登ったり、昆明湖で舟遊びをしたりして、皆で初秋の頤和園を満喫した。

午後は北京大側の厚意で、八達嶺長城に招待された。長城は北の遊牧民族から中原政権を防衛するために作られたものだったが、近代以来「中華民族の精神力のシンボル」とされ、人気高い観光地でもある。人気の理由は毛沢東「長城に到らずんば好漢に非ず」の影響が大きいだらう。共産党の軍事部門・紅軍が長征途中の貴州山間部で詠まれたこの一句は、革命成功・政権奪取の貫徹をめざす強い志を表しているが、今は観光用キャッチフレーズとなり、これを書かれた詩碑が登山ルートでよく見られる。こうした観光地の様子を見て歴史の不思議さを感じた。

最後に今回の北京研修の打ち上げとして、夕食は北京名物の羊しゃぶしゃぶ（涮羊肉）を食べながら、各自感想と今後の抱負を語り合った。

日本に来てからはじめて北京に行き、自分なりにはある意味で「北京」、そして「中国」を相対化することを心得ていると考えていたが、今回のプログラムのなかでも強い刺激を受ける機会が



あった。それは今回の授業と討論は全部英語で行われたということの意味についてである。参加したメンバーには中国語と日本語の両方ができる人も多くいる（北京大学日本語学科の学部生の語学力に対しても感服した）が、わざわざ英語を使うのはなぜか。自分の関心をむりやりに押し付けるかもしれないが、例えばディスカッションで多く扱われた中江兆民『三酔人経綸問答』に登場する「豪傑」という人物の名前は「champion」や「hero」などと、漠然として訳されたのである。しかしどういう訳語が適切か、あるいは自分の手に持つ訳本がなぜこの訳語を選んだのかは問題になっていなかった。訳語を選択することは、漢字で書かれたものを再考察・再理解することである。それゆえ、訳語の選択や考察を通じて中江兆民に対する理解、彼が直面していた時代的狀況と思想の闘いに対する理解を深めることもできるだろう。「東アジア」という広域で日本や中国、韓国などの個々の言語や文化を相対化するのは欠かせないが、同時に「東アジア」自体を相対化する必要もあるだろう。

また、3日間の短い日程で、東京大学と北京大学の学生の間で強い絆を生じたことにもすごく感心した。WeChat やメールアドレスの交換はもちろん、まったく臨時で決まった頤和園「視察」に同行する人もいて、私も北京大側の TA たちといろいろ話して楽しんだ。このように個々人の絆で可能となる相互の理解を深めていきたいと思う。その意味で、日中の中で学生同士の繋がりを作るのは、私たちの絶対に貫徹しないとイケない「永久革命」であろう。

9月10日には充実した時間を過ごした北京を後にして、2020年2月東京で開かれる予定の集中講義で再会することを楽しみにしながら、帰国の途につき、2019年9月の北京大学集中講義・研修は全日程が無事終了した。

報告者：胡藤（EAA リサーチ・アシスタント）

第6回日中哲学フォーラム



日本哲学会と中国社会科学院主催の「日中哲学フォーラム」は、第6回をむかえ、中華日本哲学会の協賛により広州市の中山大学で2019年9月20～23日の日程で開かれた。「東アジアにおける哲学の受容・変化と発展」をテーマにかかげ、今回はとりわけ日本哲学に関する基調講演や発表が多く行われた。大会は廖钦彬氏（中山大学）を中心に、中山大学哲学系の教員と学生の全面的な協力のもと、夏の終わりを感ぜさせる美しいキャンパスで、2日半に渡って活発な議論を行った。

日本側を代表して加藤泰史氏（一橋大学／日本哲学会前会長）が挨拶と基調講演を行い、中国側代表である王青氏（中国社会科学院／中華日本哲学会前会長）の挨拶で開会した。日本哲学については、藤田正勝氏（京都大学）、ジョン・クランメル氏（アメリカ日本哲学会会長）、嶺秀樹氏（関西学院大学）、上原麻有子氏（京都大学）らが西田幾多郎や田辺元を中心とする発表を行った。EAA 副院長の中島隆博（東京大学）は、中国語で「世界哲学としての中国哲学」の基調講演を行い、私は英語で「世界哲学におけるギリシア哲学：普遍性をめぐって」の発表を行った。「世界哲学」の理念と研究についても、日中の参加者と意見を交わすことができた。

大会は中国側60名、日本側40名程度の参加者があり、5会場に分かれて多様な研究テーマにわたって個別研究報告がなされた。私自身の発表は、西洋古代中世哲学のセッションで、司会の聂敏里氏（中国人民大学）や、中山大学でギリシア哲学を教える江路氏（中山大学）ら専門家との議論をつうじて、日中でのギリシア哲学の研究について交流を進めた。

私は第2回から5回目の参加となるが、今回は発表者の人数など規模が拡大したことで、これまで行われてきた一般発表での日本語・中国語間の原稿の事前翻訳が行われず、そのためどちらかの言語で行われた発表で参加者が理解できない場面が多かった。本フォーラムは英語を介する間接性のデメリットを考慮し、日本語と中国語での直接議論を重視する方針をとってきたが、大きな手間と費用がかかることから今回のやり方に変ったようである。有意義な研究交流の場であるだけに、今後の大会運営に慎重な議論が必要であろう。また、不安定な情勢により、香港からの複数の参加予定者がキャンセルになったことも残念であった。



なお、東京大学からは中島氏と私の他、駒場の大学院生・山野弘樹氏が参加発表したが、他大学と比べても若手の参加が少なく感じられた。国際学会での発表機会として積極的な参加が望まれる。なお、次回は2年後を目安に東北大学で開催される予定である。

報告者：納富信留（人文社会系研究科教授）

2019 年度秋学期 EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）第 1 回



2019 年度秋学期の EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）の第 1 回は、2019 年 10 月 1 日に東京大学駒場キャンパス 101 号館 11 号室で行われた。第 1 回の担当である報告者（王欽・EAA 特任講師）は、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズムについての名著『想像の共同体』とそれに対するマルク・レドフィールドの批判を取り上げた。

まず報告者は、1983 年に出版された『想像の共同体』を戦後ヨーロッパにおける左翼思想、特に左翼思想のマルクス主義の伝統への反省と調整の文脈に置くべきだと述べた。マルクス主義の伝統に従えば、「ネーション」は「上部構造」に属し、受動的に「下部構造」に規定されると見なされがちである。こうした理解のうえで、後にゲルナーがマルクスは「階級」と書いてある手紙を「ネーション」と書いてあるメールボックスに投げてしまったと論じたように、マルクス自身は第一次世界大戦の結果を正しく予想できなかった。戦後ヨーロッパにおける左翼思想の行った、マルクス理論における「下部構造／上部構造」への批判と再解釈は、主に重点を「上部構造」の自律性に置いている。典型的な例はグラムシの提出した「文化ヘゲモニー」である。もっと広範的な意味で、フーコーの権力論とサイドの「文化帝国主義」に関する分析も、同じ文脈に入るであろう。

戦後に行われたマルクス主義への反省と再解釈という特定の視野からして、アンダーソンの民族主義的言説に対しての分析は、事実として、以上のような「文化的転向」の延長線上にあるわけである。アンダーソンの民族主義的言説を成り立たせるいくつかの要素（印刷資本主義、リーディングの経験、同質化された時間感覚など）についての分析は、過去のナショナリズムに対しての本質主義的論述、またはマルクス主義の経済的基礎を中心とした論述を、「文化的」分析へと舵を切った。それは、つまりアンダーソンの言う「社会の自律性」への強調にほかならない。このように、アンダーソンはナショナリズムの近代における位置を、18～19 世紀に形成された近代ヨーロッパの国民国家という政治実体のところに置いた。いいかえれば、彼は『想像の共同体』の中で民族主義的言説の「原因」を究明するよりも、むしろネーションを形成することに「影響」を与えるかもしれないいくつかの要素を取り上げているのである。

報告者は『想像の共同体』に対する批判の中で大多数を占める「外部批判」よりも——例えば、共同体はあくまで「想像」の産物ではないとし、近代民族主義的言説における女性の地位と役割に対するアンダーソンの分析が不足であるというような批判——アメリカ学者のレドフィールドが行った脱構築的批判は、ある意味でアンダーソンの論述との「内在的」対話になっていると述べた。「イマジーネーション」という文章で、レドフィールドはジャック・デリダの「散種」論を出発点として、アンダーソンを批判した。つまり、アンダーソンの論述における、ナショナリズムの

アイデンティティを構成する要素の1つとしての印刷資本主義は、アンダーソンの予想通りに読者の間で共同体意識をつくり出すことが不可能である、と。レドフィールドははっきりとは書いていないが、ここで注意すべきは、アンダーソンが今までの民族主義研究において文学が十分に言及されていないことに不満を言いつつも、他方で、アンダーソン自身があたかも新聞や雑誌を扱っているように、文学を民族的同一性の意志を培う方法として論じている。この論述に従って、レドフィールドは「想像の共同体」論をフィヒテのドイツ民族への講演（1808年）とともに論じている。なぜなら、フィヒテの場合と同じように「想像の共同体」論の要は、アンダーソンの強調したようなリーディングの経験とか、同質的時間意識とかいうものでなく、むしろ共同体形成への意志だからである。大切なのは、人々は共同体に関する言説を本当に信じているかどうかではなく、人々はこれを信じたいということである。もしわれわれはレドフィールドの批判的読み方を広げれば、いわばアンダーソンの「想像の共同体」論ははじめに結論を先取りにしているといってもいいであろう。すなわち、互いに認め合う民族的同士としての個体、本を読む能力・時間を読む能力・ある言語で他人とやり取りすることのできる個体、そのような特定の個体を出発点としたからこそ、印刷資本主義や同質的時間やリーディングの経験などについての結論は成立する。しかし、そもそも問題はこのような民族的個性の由来にあるのではないだろうか。

マーク・ロバーツ氏は、アンダーソンが「印刷資本主義」という曖昧な語彙を用いて、いままで民族主義研究において着目した多くの概念と次元（例えば、マルクス主義における生産様式）をあらかじめ排除したが、一方で、レドフィールドの触れたフィヒテのテキストにおいては、古代ギリシャ語の受け継ぎとして自ら言い張ったドイツ語は、簡単にアンダーソンのいう「文化的根源」に回収できないこともある、と主張した。現実には、「民族主義的言説」と「公の民族主義的言説」の間に存在している亀裂と衝突も、アンダーソンの論じることよりさらに複雑である、とロバーツは述べた。胡藤氏は、フィヒテの強調しているドイツ語とギリシャ語の関係は、結局、いわゆる「自然的力」に収束したので、ここでナショナリズムの自然性と人為性に関する問題も実に面白い、と主張した。八幡さくら氏によると、フィヒテのこのテキストは、実は近代国民国家としてのドイツが成立するだいぶ前に発表されたものだから、フィヒテはここでギリシャ思想からドイツ国家を形成する糸を探している。そうすると、ギリシャ思想にとっての重要な概念の1つの「自然」は、そのままフィヒテの論述でも重みを持ってきた。佐藤麻貴氏はアンダーソンの論じた「無名戦士の碑」を参照しつつ、靖国神社の問題に触れた。つまり、神様の位置まで昇華された死んだ戦士の魂が、彼らの複雑なアイデンティティは、国家イデオロギーとは違う、ある「共同体」をつくり出したのではないか、という。建部良平氏も日本の状況を言及した。アンダーソンの分析に応じて、同じようなことは日本の「三種の神器」に関しても言いうるであろう。つまり、空っぽの内部でありながら、神話的ナラティブとして民族アイデンティティを形成する過程で役に立っている、と彼は主張した。高原智史氏は、アンダーソンの論述では、民族の場合には、過去への追及が重要なポイントであるが、同じような過去への追及・想像・創造はそのまま個人の場合に当てはまるか、と疑問を呈した。一方で、高山花子氏は、テレ・コミュニケーションはどのような想像によって共同体を形成しているか、その背後にある条件は何か、と問うた。それに関連して、国民国家の境界が流動的ものになりつつある今の世界で、多重アイデンティティさえ珍しくないことになる場合には、「想像の共同体」論はどの程度解釈力をまだ持っているか、と高山氏は指摘した。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

中國文化大學・東亜人文社会科学研究院 国際学会



台湾・台北市北部の美しい山中にある中国文化大学で2019年10月4～5日に開催された国際学会「東亜人文社会科学研究の新天地—人物、文化、思想、海洋與經濟的交匯」に参加した。これは、日本研究者である徐興慶氏（中国文化大学学長）の主導で創立された研究機関「東亜人文社会科学研究院」で、内外から多数の研究者を招いて2日間にわたって開かれた設立記念イベントであった。

中国文化大学は日本や韓国の文化・言語の研究分野で台湾を代表する大学で、その利点を生かして人文・社会科学のさまざまな分野の研究者の交流の拠点となるべくこの研究院を設立した。今回の国際学会には日本や韓国の諸大学に加えてベトナム、中国、香港から、40名あまりの研究者が発表者や司会者として議論に加わった。文化、歴史、言語、宗教、政治、経済といった広範のトピックで、中国語、日本語、韓国語で、特に通訳は入らずに活発な議論が行われた。

私は、香港出身で東京大学駒場キャンパスで教えた経験もある林永強氏（獨協大學）の呼びかけで、シンポジウム「明治思想と東アジア（明治思想與東亞）」に提題者として参加した。林氏は専門である西田幾多郎の哲学を新儒学との関係で東アジアの思想文脈に位置づける発表を行い、私は「明治思想と西洋哲学」というタイトルで、東京大学哲学科を中心とした19世紀の西洋哲学受容について報告した（現在、人文社会系研究科・哲学研究室で進行している科学研究費補助金プロジェクト〔代表・鈴木泉〕の成果の一部）。村上保史氏（大谷大学）は清澤満之の宗教哲学について報告を行い、竹花洋佑氏（大谷大学）は近代哲学を代表する西田幾多郎『善の研究』の最先端の研究成果を発表した。その後、提題者4名の間で意見交換が行われ、フロアからの質問を受けてセッションを終了した。東アジアの哲学を考える上で19世紀の日本が果たした役割に関心が集まっており、とりわけ、これまで良く知られてきた西田哲学より以前の重要性の認識が広まりつつある。

この国際学会には日本から、二松學舎大学、創価大学、天理大学、早稲田大学、長崎大学、弘前大学などから研究者が参加し、学术交流に興味深い場ができた。近年、共通するテーマで研究活動を行う国際的な拠点やプロジェクトも多数できているが、それらの間での有意義な情報交換と効率的な連携が大切になってくる。今回は台湾の地で日本語で存分に議論する貴重な機会を得て、東ア

ジアの人文学の可能性を感じた。

報告者：納富信留（人文社会系研究科教授）

2019 年度秋学期 EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）第 2 回

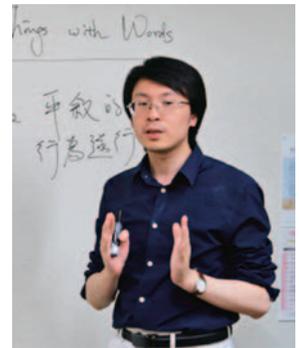
2019 年度秋学期の EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）の第 2 回は、2019 年 10 月 15 日に東京大学本郷キャンパス EAA 本郷オフィス（東文研 208 号室）で行われた。第 2 回の担当である報告者（王欽・EAA 特任講師）は、ジャック・デリダの「署名 出来事 コンテキスト」を取り上げた。

デリダの論文を読む前に報告者はこのテキストと第 1 回のディスカッションとの関係について説明した。アンダーソンが、自分がナショナリズムの言説を論じている時、いままであまり重視されていない「文学」を勘定に入れた、と主張しているから、われわれはエクリチュールとしての「文学」の

性質を議論すべきだ、と報告者は述べた。マーク・ロバーツ氏はまずデリダのこの論文がもたらした思想的争議ないし分裂を紹介した。つまり、「言語行動理論」の代表者としてのジョン・サールからの反論とデリダからのイロニーに満ちた再反論は、いわゆる「ヨーロッパ的哲学」と「アングロサクソンの哲学」の緊張かつ対立的関係をもたらし、という。これは今回の読書会の出発点になっている。

デリダの論文が取り上げているのは、哲学者オースティンの『いかにして言語でものごとを行うか』によって提起された「平叙的発話」と「行為遂行的発話」の区別である。まず、オースティンにおいては、「行為遂行的発話」が一種の特別な発話になっており、単に事態を描写している発話から区別されている。しかし、興味深いことに、オースティンはこの区別を必要としなかった、と報告者は指摘した。むしろ、オースティンの論考が進むと、もともと単なる平叙的かのように見える発話は、ますます「行為遂行的」なものになっていく。なぜならば、事態を描写することさえ、言語のレベルで「かつてない現実そのもの」を露呈しているからである。その意味で、もはやオースティン自身は「平叙的発話／行為遂行的発話」という対立を「脱構築」したといってもよい。

だが、デリダの脱構築的読み方はこの先へもう一歩進んだ。オースティンにおける「行為遂行的発話」の開示は、エクリチュールに関する大事な事実、いままで重要視されていない事実を提示している、とデリダは論じている。つまり、あらゆるテキストは一旦作者（発信者）から離れたら、誰もこのテキストの到達点と受信者を予測できないし、このテキストについての解釈も規定できな



い。したがって、作者の意図は、テキストの意味に直接的に対応・決定しなくなる。テキストの流通・コミュニケーションの特徴は、デリダのいう「反復可能性 (iterability)」にある。デリダは「iter-」という両義の文字を通じて、「反復」することが繰り返されながら差異化していることを強調した。「反復可能性」なしには、テキストの意味構成も不可能である。「行為遂行的発話」があるために、発話者の意図はもはや発話の効力を拘束できなくなり、あらゆる言語は特定のコンテキストのもとに理解されていなければならない。ここで重要なポイントは、デリダは単に「意図」を「コンテキスト」に変えたわけではなく、むしろ「コンテキスト」の決定不可能性を強調していることにある。すると、オースティンが「冗談的な発話」をディスカッションから排除したとき、彼はまさに自分の「行為遂行的発話」に関する議論を裏切ってしまう。なぜならば、「冗談的／嚴肅的」という区別によって、彼は改めて発話者の「意図」を潜らせたからである。一方で、デリダはコンテキストがつねに十分に規定されえないこと、あらゆるコンテキストが「反復的に」調整され、再構築されることを主張している。同じことを署名の場合にも見出せる。つまり、一つの署名はかけがえのない独得的な事件でありながら、署名の「事件性」は独自のアイデンティティを持っているわけではない。それどころか、1つの署名のもつ差異的同一性こそ、署名の効力を保障している。1つの名前に関して言えば、もし全く同じな署名が2つあるとしたら、いずれは偽物に見なされるに決まっているが、一方で、もし2つの署名が全く違うとしたら、いずれも偽物に見なされるかもしれない。署名が示しているのは署名者の現前ではなく、むしろ「作者」の不在的現前という効果をもたらす言語の「反復」にほかならない。

建部良平氏は夏目漱石の逸話にある「月が綺麗ですね」に対し独自の解釈を取り上げ、同じ文章が別々のコンテキストで違う言語的効果を生み出せることを、デリダの分析に沿って論じた。彼によると、デリダのオースティンに対しての脱構築的作業の中心は、後者において「行為遂行的発話」の中で確立されたヒエラルキーをぶち壊すことにある。具裕珍氏は、「フェイク・ニュース」の作者の意図という話題を提起し、ニュースに関するエクリチュールに対しての社会学的分析をデリダの分析と関連して論じた。最後に、報告者はアメリカ哲学者スタンリー・カヴェルの反論に言及した。カヴェルによると、デリダがオースティンの行った「冗談的発話」の排除を誤解した。なぜなら、オースティンが『いかにして言語でものごとを行うか』の中で「冗談的」な事例を考えないことにしたのは、彼は別のところでこの問題を取り上げたからである。しかし、デリダの脱構築的な読み方が狙うのは、オースティンの行った「排除」より、彼において「冗談的発話」が「嚴肅的発話」の「寄生物」または「派生物」になる、ということである。すなわち、結局のところ、オースティンは別の形で「意図」の形而上学的優位を確立した。

デリダの論述と「文学と共同体の思想」というテーマの関係について、報告者は以下のように説明した。もしテキストの流通・解釈は作者の意図から解放され、ある共同体とその共同的文化・言語から解放されることができたら、テキストのさまざまな共同体の間に「反復」されていくことは、まさにデリダのいう「散種」にほかならぬ、といってもいい。しかも、もっと広範的な意味で、テキストが「散種」されるのは、未来の他者へ開放されることである。これは決してすべての解釈が同じように正しいということの意味しない。ただ、反復と散種は、テキストに対する解釈の可能性を実質的措定——言語、民族、性別など——に課された制限から解放されていく。もしかしたら、これは文学的共同体への第一歩になるかもしれない、報告者は結論した。

報告者：王欽 (EAA 特任講師)

EAA セミナー

「『イスラーム世界への公開書簡』を読む」



講師：アブデヌール・ビダール（フランス国民教育省・高等研究実習院）
司会・通訳：伊達聖伸（東京大学）

10月16日（水）開催の国際シンポジウム「イスラーム世界を見る視線の交錯—日本とフランスの対話」に先立ち、本セミナーでは大学院地域文化研究専攻の伊達ゼミが中心となって『イスラーム世界への公開書簡』を読み解くことを試みた。今回はシンポジウムの登壇者であり、このテキストの著者であるビダール氏をお招きし、参加者の質問にお答えいただく形で理解を深めた。

冒頭、自己紹介を通し参加者の関心を共有した。その中で、早速ライシテについてコメントがあった。ビダール氏はイスラームの専門家としてフランスの統合高等評議会（HCD）でライシテの問題に取り組んだが、ライシテの問題を考える上では宗教的世界観の理解が欠かせないという。宗教と世俗を切り離されたものとして扱うのではなく、世俗が宗教から出てきたという連関の視点を持つことが重要だと考えるからだ。

続くセミナーの中では「イスラーム世界」「スピリチュアリティ」「ムハンマド・イクバル」の3つのキーワードが話題となった。

まず、本報告執筆者である中村拓人（東京大学大学院修士課程）から、ビダール氏が『公開書簡』の中で用いる「イスラーム世界 le monde musulman」という言葉の射程について質問をした。文中では明確な定義が与えられておらず、具体的に誰に対するメッセージなのか曖昧であったからだ。イスラーム圏は中東を中心に、ヨーロッパにアジアにと世界中に分布するが、その全てを包括する意味で「イスラーム世界」と表現しているのか。また著者自身も対話相手であるこの「世界」の一員であると考えているのか。これらの関心からこの『書簡』の位置付けを問うた。

ビダール氏が「イスラーム世界」として想定しているのは、主に国家としての機構が直接的にせよ間接的にせよイスラームを参照している地域である。社会通念としてイスラームが根付いている地域であり、そこでは無宗教や無神論者であることが困難である。チュニジアの憲法学者ヤズ・ベナシュルの表現を借りれば「大衆の抗えない正統性」が働いている。その中にはトルコやイラン、チュニジアのように体制としては世俗的な形態をとっている国々も入る。もちろん、そうした社会とは異なる、フランス、あるいは日本におけるマイノリティとしてのムスリム、亡命者としてのム



スリム、あるいは（実体を伴わない）信仰共同体としてのウンマといったものも想定しうる。しかし、ビダール氏はいずれにせよ本質主義的な見方には反対であり、また「イスラーム世界は普遍である」「イスラーム世界など存在しない」といった両極端の見方にも反対だという。

ここで、「イスラーム世界はどこか」というトピックに関連して伊達聖伸氏は、タリク・ラマダンがヨーロッパを「イスラームの家 Dar al-Islam」や「戦争の家 Dar al-Harb」ではなく「証言の家 Dar ash-Shahada」として見ることを提案したことについて、ビダール氏の見解を訪ねた。

ビダール氏は、ラマダンがイスラームへの批判的な再検討を免れようとする意図を持っていることを指摘しつつ、これを踏まえるとそのラマダンの提案には賛同できないとし、次のように述べた。今日ほとんどのイスラーム圏で、コーラン成立の過程や創設神話への批判的な検討は顧みられず、神への冒瀆と見なされてしまう。例えば、ドイツの学者クリストフ・ルクセンブルクによるコーランの起源に関する言語的検討や、20世紀初頭に『イスラームと権力の基盤』を著したアリ＝アブデラジックや今日のアブドゥ・フィラリ＝アンサーリーの研究は、イスラーム圏の大学で参照することが許されない。しかし、ここで語られる創設神話は、権力の正統性を求める歴代のスルタンやカリフ、アミールが繰り返し用いることで浸透してきたものである。

次に、白尾安紗美氏（東京大学大学院修士課程）から、ビダール氏が論じるスピリチュアリティに関する発言があった。スピリチュアリティの意味、また高度に世俗化された社会においてそれがどのような意義を持ちうるのかを質問した。また白尾さんは、ジャン＝ポール・ヴィレームがスピリチュアリティは民主主義のモラルの源泉であると述べていることにも言及しながら、ライシテの袋小路に入っている現在のフランス社会はスピリチュアリティを受け入れる準備はあるのか疑問を投げかけた。

ビダール氏は白尾氏の指摘が彼の仕事の核心に触れる重要な指摘であると答え、スピリチュアリティに関する両面的な批判をしていることを説明した。一方では、スピリチュアルなものが宗教のドグマ的な重みによって押しつぶされているということである。これについてビダール氏はサルトルの実存主義のような意味合いを取り入れたいという。他方では、超世俗化によってスピリチュアリティが阻害されているということである。ハンナ・アレントが分析するように人間は労働や消費によって阻害されており、スピリチュアリティを養ってくれるものがない。こうしたことから現代のスピリチュアリティは二重の袋小路状態に陥っているという問題意識を示した。

一般に宗教とスピリチュアリティは同一視されたり、宗教がスピリチュアリティを独占していると見なされがちだが、ビダール氏はスピリチュアリティは宗教から独立した異なるものであると考える。そこで、スピリチュアリティの定義が問題になる。ビダール氏は、個人あるいは社会が超越

と個人的あるいは集合的な関係を結び、(現象学の用語でいえば)「生きられた」時に出来てくるものであるという。最近出版した『紡ぐ者たち Les Tisserands』において、スピリチュアリティとの絆を3つのタイプに整理している。第1に自己の内面にあり、自身に対して呼びかけてくるもの、自身を超えるものとの絆。第2に共感や助け合いなどを通じた他者との絆。第3に自然や宇宙との絆である。

最後に、田中浩喜氏(東京大学大学院博士課程)から、ムハンマド・イクバル(1877-1938)のアクチュアリティに関する質問があった。つまり、ビダール氏の研究対象であるイクバルの思想と現代の状況にどのような連続性があるのかということについてだ。ビダール氏は『神の死に直面するイスラーム』を出版している(『ムハンマド・イクバルのスピリチュアルなイスラーム』の書名で再版)。

イクバルは20世紀前半、ジンナーらと共に全インド・ムスリム連盟を率いパキスタン独立に貢献した人物である。彼は、英国支配下のインドにおけるムスリムという二重のマイノリティであったアジア的なムスリムが、知的、道徳的なバイタリティを失ってしまったことを論じた。

ビダール氏の考えでは、イクバルが提出した問いは継続している。それは、イスラーム世界が自身に固有の近代の道を見つけていないということである。これまで西洋に直面する反応は二つある。一方では、パン・アラブ主義に見られるような世俗的な西洋への追従的な模倣である。世俗化を掲げつつも権威主義的な体制であることは、固有の道を見つけることができない無力さの表明である。他方では、宗教への回帰という動きがある。1979年の革命を経たイラン・イスラーム共和国や、また今日であればイスラーム国もその例といえる。こうした状況に照らすと、イスラームがいかに固有の道を見つけることができるかという問いはアクチュアリティを保っている。ビダール氏自身は既にイクバルが開いてくれた道筋に倣うという立場である。

以上、約1時間半という限られた時間であったが、充実した議論がなされ、ビダール氏の主張やテキストに対する理解が深まった。

報告者：中村拓人(東京大学大学院修士課程)

国際シンポジウム

「イスラーム世界を見る視線の交錯——日本とフランスの対話」



2019年10月16日、東京大学駒場キャンパス数理科学研究科大講義室にて、国際シンポジウム「イスラーム世界を見る視線の交錯——日本とフランスの対話」が開催された。本シンポジウムは、伊達聖伸氏（東京大学）の企画に基づく東京大学東アジア藝文書院（EAA）のイベントであり、鶴飼哲氏（一橋大学）が司会を務め、アブデヌール・ビダール氏（フランス国民教育省・高等研究実習院）、中田孝氏（同志社大学客員フェロー）、池内恵氏（東京大学）がパネリストとして登壇した。

本シンポジウムの趣旨は、2014年に『イスラーム世界への公開書簡』を発表したフランスのムスリム哲学者ビダール氏の問題提起に対して、イスラーム神学者の中田氏と中東地域研究者の池内氏が応答するというかたちで、イスラーム世界の過去と現在と未来について議論することであった。結果として、本シンポジウムでは、異なる背景をもつ3人のパネリストが、イスラーム世界について独自の見解を披瀝することになった。本報告では以下、3者の議論を順に要約する。

最初のパネリストはビダール氏である。ビダール氏の議論の第1の特徴は、イスラーム世界と西洋世界の両方に批判的な眼差しを向けていることにある。ビダール氏によれば、一方のイスラーム世界は、「イスラーム国」をみずからと無関係のものと捉える保身的態度から抜けだし、それがみずからの内部から生まれた病であることを反省的に受けとめるべきであり、他方の西洋世界は、世俗主義の普及とともに忘却してしまった宗教的なものの重要性を再認識すべきである。

ビダール氏の議論の第2の特徴は、現代に即した新しいイスラームのあり方を提示していることにある。ビダール氏はそのイスラームのあり方を「セルフ・イスラーム」と呼ぶ。それは「内側から出発する、つまり内在的で内面的で個人的な超越から出発する、生きられたイスラーム」である。さらに、ビダール氏によれば、この「セルフ・イスラーム」は、人間を袋小路に追い詰めてし



まった西洋近代的な個人主義的ではない。それは、万人が差異への権利をもつ、内的多様性に開かれたムスリム共同体のイメージを伴っているという。

2番目のパネリストは中田氏である。まず、中田氏は日本人ムスリムとして、中東のイスラームを日本の仏教に喩えた。大多数の日本人は仏教徒とされるが、釈迦の教えに従って日々生活しているわけではない。中田氏によれば、中東のイスラームも日本の仏教のようなものであり、中東の社会現象をイスラームだけで説明することは難しいという。こう指摘すると同時に、中田氏はイスラーム神学者として、そうした現在のイスラームは「末法」状態にあるという批判的な見方を示した。

また、中田氏は、「イスラーム国」がイスラーム世界の内部から生じたというビダール氏の認識を共有しつつも、「イスラーム国」が「怪物（リヴァイアサン）」であるとするならば、西欧の領域国民国家もまた「怪物」であると論じた。中田氏によれば、西洋世界が中東難民の受入れを拒否するなか、「イスラーム国」は「移動の自由」という最も基本的な権利を保障することで、西洋世界が「民族主義（ナショナリズム）」や「国家崇拜」に陥っている事実、西洋世界が人権や民主主義という大義名分を掲げることの欺瞞を暴露した。

最後のパネリストは、池内氏である。池内氏は、グローバル化の進展とメディアの変容という2つの観点からイスラーム世界を分析した。第一に、池内氏によれば、グローバル化の歴史は2段階に区別できる。グローバル化の第一段階では、世俗的な西洋世界の規範が、イスラーム世界に一方的に輸出されていた。しかし、グローバル化がさらに進んだ現代、グローバル化の第2段階では、イスラーム世界の方も、西洋世界に影響を与えることができるようになってきているという。

第2に、池内氏によれば、イスラーム史はメディアの観点から3段階に区別できる。前近代では教説が口承により伝達されていたのに対し、近代では印刷技術と教育の発達により教説と伝達手段が多様化する。さらに、現代ではインターネットの普及により、解釈者の多元化が飛躍的に進んでいる。これはたしかに「民主化」にみえるかもしれないが、実際には、より多くの人びとに求められる教説だけが、その質を保障されないまま流通する状況を生んでいるという。

その後の討議では、大きく2つの論点について議論がなされた。ひとつは、イスラームのスピリチュアリティという論点である。ビダール氏は、西洋世界の霊的危機への解決策として、スーフィズムに期待している。しかし、池内氏によれば、たしかにイスラーム内部には、スーフィズムのように西洋の価値観と相性のよいスピリチュアリティがあるものの、あくまで周縁的な存在なので、スーフィズムに注目しても、中心部の律法主義的なムスリムとの対話には繋がりにくい。

もうひとつは、中東社会における自由という論点である。池内氏は、中東世界にはまったく自由がないという誤解に警鐘を鳴らした。中東にはたしかに政治的自由は少ないものの、現実には、中東世界の人びとは絶対的な神への信頼を抱きつつ、自由かつ伸びやかに暮らしている。それゆえ、西洋の価値観に照らして中東の人びとに自由を教える必要はないのではないか、と池内氏は述べた。これに対してビダール氏は、中東では女性とマイノリティの自由が保障されていないことを指摘して、中東世界で自由が保障されているという考えには留保が必要であるという見方を示した。

報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

EAA 講演会

「明治日本における「中国哲学」——学問領域の誕生」



2019年10月21日、納富信留氏（人文社会系研究科教授）の発案で、東京大学東アジア藝文書院の主催により、国立台湾大学哲学系教授の佐藤将之氏を招いた講演会「明治日本における「中国哲学」——学問領域の誕生」が、東京大学文学部哲学研究室にて行われた。今回の講演では、佐藤氏は明治期における「中国哲学」という学問領域の成立や、それを捉える近代日本思想史の方法論の見直しを論じるとともに、「中国哲学」の誕生や近代中国知識人の成立を考える上で、井上円了がキーパーソンになることを強調した。以下、その内容を詳述する。

佐藤氏はまず19世紀半ばから20世紀の日本における古代中国思想研究を3つの時期に区分することを提案した。その区分によれば、第一期（1860年代～1910年代）において、伝統的な漢学の土壌に西洋哲学のディシプリンが加わることで、「中国哲学（支那哲学）」という学問分野が成立し、次いで第2期（1920年代～1945年）には、中国哲学（支那哲学）に反発する形で、文献研究を重視する「支那学」が誕生し、両者が併存することになったと捉えられる。そして、第3期（1945年～1998年）においては、戦前・戦中期に対する反省から、文献思想史学を核とするネオ支那学派が隆盛したとされる。

こうした思潮の変化を捉えるにあたり、佐藤氏は丸山真男の日本政治思想史研究を引き合いに出しつつ、近代日本が西洋的学問を受容したことにより、「漢学的世界観が別の世界観に取って代わった」と捉えるパラダイム論的発想には限界があると指摘する。そのうえで、「哲学のディシプリンを受容することで、かえって伝統的な世界観が強化された」と捉える新たな見方を提案し、さらにそれが近代日本における国民道徳論や東亜協同体論を解明する手がかりになりうると示唆した。

続けて、佐藤氏は第1期に焦点を当て、加藤弘之、フェノロサ、井上哲次郎、島田重礼、井上円了を取り上げながら、学問領域としての「中国哲学」の成立事情を探ることを試みた。その中では次の5点が特に強調された。(a) 加藤弘之が創設まもない東京大学文学部の教育方針について指導的な役割を果たしたこと。(b) フェノロサが哲学または社会学を講義する中で、「中国哲学的発展」という主題を取り上げたこと。(c) 哲学科第一期生の井上哲次郎が卒業後、「東洋哲学史」講義を行ったこと。(d) 島田重礼が初の中国哲学の通史を講義したこと。(e) 井上円了が自ら出版



した哲学の通史において、中国哲学の位置づけを明示するとともに、中国哲学を主題とした学術論文を書いたこと。佐藤氏によれば、こうした一連の動きの結果として、1910年代に儒教における「性」の問題が哲学の問題になり、孔子が聖人から哲学者になったことが、中国哲学の成立の上で画期的だったと見ることができるという。

これに関して、佐藤氏はさらに2つの興味深い事実を付け加える。1つは、フェノロサによる古代中国哲学の学派区分の仕方と、井上円了による孔子・老子の対照の仕方が似ていることである。この事実は、フェノロサの講義が、円了による中国哲学の体系的な把握に何らかの影響を与えた可能性があることを示唆している。もう1つは、円了がその著作を通して、蔡元培、梁啓超、康有為、章炳麟ら近代中国知識人の啓蒙運動に影響を与えていたことである。実際、当時円了の著作のいくつかは、中国知識人の手で中国語に翻訳されている。また、佐藤氏によれば、円了『星界想遊記』と康有為『大同書』には類似が見られるという。

最後に、佐藤氏は「中国哲学」という学問領域の形成における井上円了のこうした開拓的役割の重要性を強調し、1時間半の講演を結んだ。

講演後には質疑応答が行われ、井上哲次郎や井上円了の漢学の素養、アカデミズム内外における井上円了の影響、国内外での井上哲次郎による東洋哲学史の受け止められ方の差などに関して、活発な議論がなされた。哲学、中国思想、宗教学など、多分野の研究者が大いに刺激を受けた講演会となった。

報告者：笠松和也（東京大学大学院博士課程）

EAA「中国近現代文学研究会」第1回

鈴木将久（人文社会系研究科教授）と報告者王欽（EAA 特任講師）が主催する2019秋学期のEAA「中国近現代文学研究会」の第1回は、10月24日に東京大学本郷キャンパス・赤門総合研究棟で行われた。裴亮（武漢大学）、陳琦、田中雄大などの数名の東京大学の研究員と学生が参加した。

今回の研究会は程凱「社会史的視野における中国近現代文学研究の狙い」、薩支山「社会史視野の“現代文学”研究のある問題点」、劉卓「近現代文学研究における“歴史化”を手掛かりとして、最近中国近現代文学研究において注目を浴びている重要なアプローチ、つまり「社会史的視野・研究」というものについてディスカッションした。鈴木氏はまず「社会史的視野」の起因を紹介した。10年前ころより中国社会科学院教授の賀照田をはじめとして、一連の若手研究者は、1980年代以降にはやった「啓蒙論」かつ「近代化論」という視野と区別される新しい方法で中国現代歴史を全体的に解釈し直し始めた。彼らの主旨は、1980年代に生み出された啓蒙論的・近代化論的なアプローチは、現代歴史のコンテキストに当てはまらない、ということである。これに関連して、彼らのもう1つの発想は、歴史を歴史学から解放し、いわゆる「心身構造」に及ぶようにさせることにある。「心身構造」は、ほかならぬ歴史現場においての人々の持つ心身状態のことを含意している。手掛かりとして彼らを選んだのは、強い影響力を持った『中国青年』という雑誌である。

続いて、報告者（王欽）は「社会史的視野」のいくつかのポイントを列挙した。このアプローチは、一方では1980年代以降の「再解釈」思潮を批判的に反省・変革するために、他方では1950年代から60年代にかけての「政治的文学解釈」と呼ばれる読解に文学作品を還元しないために、取り上げられたものにほかならない。「社会史的視野」においては、1980年代以降に行われてきた中国近現代文学に関しての「再解釈」と「文学史の書き直し」は、政治化から隔たる文学的自律性を標榜しているが、実は槍玉に挙げられた「唯物論的・政治化的解釈」と同じように、現代中国歴史における「政治」、特に中国共産党政治を単純化している。「歴史現場に帰れ」という「社会史的視



野」のスローガンは、その意味で、「新中国」が確立されたことに次いで実施された一連の社会主義的な政治—経済変革においての政治と文学の相互的関連に研究の重点を置いている。そのような関連のなかで、政治は文芸実践の様式と条件を規定している一方で、文学は総体的社会変革の分離されえない内在的一環として、社会主義的改造の可能性の条件とその危機を表象しつつある。その意味で、社会史的視野が提起しているのは、実は政治と文学をより広い社会的総体性のもとで再構築することなのである。

鈴木氏は報告者（王欽）の議論に対し「社会史的視野」の提唱者たちが孫歌教授の紹介した竹内好に詳しい理由について指摘した。竹内好は『鲁迅』において、政治と文学の厄介な関係に触れた。彼によると、文学の自律性は文学自身によって確立されうるものではなく、文学が政治によって抑制されつつあることを自覚した上でしか取得しようもないものであり、政治と緊張しつつある関係の中でしか確立できないものである。竹内の文学論にしたがって、しかも竹内の文学論に応える形で、「社会史的視野」の提唱者は新しい角度から文学と政治の関係を把握しようとするのではないかと鈴木氏は述べた。裴氏は、「社会史的視野」の基礎としての史料さがしについて疑問を呈した。違う世代は別々の歴史経験と感覚を持っているので、同じ史料を読んでも、世代によって違う読み方を駆使し、違う結論を出すことが往々にしてある。われわれは自分の世代的局限を意識しながら、史料を探して、史料を問題化して、具体的な問題点に史料をもって切り込むしかない、と述べた。「歴史現場に帰れ」というスローガンが中国近現代文学研究において主導的なものになっている現在、いかにして「社会学的方法」で歴史を「問題化」して、社会史と政治史と文学史との相互関係をつけるかということ、は「社会史的視野」においての難問である。続いて、裴氏は2つの質問を出した。第1に、これらの研究者はテキストから「感性的経験」を取り出す場合、彼らの選んだテキストはもしままでの文学史に重視されていないものであったら、これらのテキストは、政治的にしろ文学的にしろ、はたしてそれほど多くの豊富性を持つことに耐えられるか。第2に、もし文学的テキストは同時代の事件とある「遅れ」または「時差」があるとしたら、また文学に社会的時間が圧縮されているとしたら、いかに文学を通じて同時代の政治を把握すべきか。

田中氏も「社会史的視野」に関する3つの論文について、以下の3つの質問を出した。第1に、具体的なテキストを選ぶ基準ははっきりしていないのではないかと。第2に、頻りに使われている「具体」「還元」などの概念は何を意味しているのかをもっと説明しなければならない。そうしないと、「具体性」を浪漫化するおそれがあるからである。第3に、「政治」という語彙を、フーコーのいう「権力」と似たように、いままでの特権化的位置からずらしているかのように見えながらも、なぜあくまで「政治」に固執しているのかは逆にわからないことになる。この上で、陳氏は「ピピットの経験」という言い方がアイマイであり、「社会史」という言葉もアイマイである、と指摘した。鈴木氏は、「社会史的視野」を運用している研究者たちは、おおよそ明確な方法論意識を持っているわけではない、とした。つまり、1950年代初期の中国社会と中国文学を分析するとき、彼らの方法はもっとも適当なのかもしれないが、1950年代初期の中国における百姓と政府のダイナミックな関係はあくまで独自の現象であるから、1955年以降の中国文学にも1949年以前の中国文学にも当てはまらない可能性が高いというのである。

次回の研究会は11月7日に行われる。次回は、「社会史」のアプローチで行われた柳青研究を対象としてディスカッションする予定である。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

2019 年度秋学期 EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）第 3 回



2019 年度秋学期の EAA 読書会「文学と共同体の思想」の第 3 回は、10 月 29 日に東京大学本郷キャンパス・EAA 本郷オフィス（東洋文化研究所 208 号室）にて行われた。今回読まれたのは酒井直樹の *Translation and Subjectivity: On Japan and Cultural Nationalism* (University of Minnesota Press, 1997) の第 4 章「Subject and/or Sbutai and the Inscription of Cultural Difference」と第 5 章「Modernity and Its Critique: The Problem of Universalism and Particularism」である。議論の導入として本テキストを選択した佐藤麻貴氏（東京大学ヒューマニティーズセンター特任助教）が概要や自身の疑問を提示し、それに応答する形で議論が進められた。

まず第 4 章「Subject and/or Sbutai and the Inscription of Cultural Difference」に関しては、酒井が何を念頭に置きながらこれを書いていたのかという問いから始まった。マーク・ロバーツ氏は、本テキストは北米で東アジア学を専攻している者に向けて書かれているのではと考えた。研究は常に何かしらの対象を持って初めて成立するものであるが、その対象と如何なる関係を結ぶかでその研究に差異が生じる。北米で、あるいは英語などを主言語とする者がアジアを研究する際、対象となるものは言語的に大きくことなるものであり、自らとは異なるものとして対象との一定の距離感を生じさせやすくなる。酒井は「ピエール・ブルデューが『客観的な・客観化する観察者というあらかじめ割り振られ承認された位置』と呼ぶものを問い続ける必要がある」（p. 118）と言っているように、北米においてアジア研究に従事する者にとって、単なる観察者としてアジアを見るにとどまるのではなく、自己と対象の距離、対象への関与の度合いを常に問題にすることの必要性を主張している。これに対して佐藤麻貴氏は、酒井自身は如何なる立場でアジアを論じているのかを問題とした。酒井自身は東アジアを 1 つの軸足としているが、同時に西洋からの視点も常に意識

している。

Subject・主体・シュタイが論じられる中で、酒井自身のアジアとの関与の度合いを考えることの必要性が提起された。これはアジア研究という枠にとどまらず、新しい形の地域研究にも関わってくる問題である。

続いて問題となったのは、第4章で存在感を放っている和辻哲郎に関する議論である。酒井は、和辻は帝国主義には反対しながらも、実は帝国主義的な観察者の立場から日本の風土論や中国を論じてしまっていると批判する。和辻の著作は英語にも翻訳され、多くの読者を獲得している。しかし、和辻の関心はあくまで日本人或いは日本国としての同一性を他国との差異の記述によって明らかにしようとした点にあり、佐藤氏は今日において和辻を、とりわけアメリカの研究者がこれを読むことにどれだけの意味があるのか疑問を提示した。ロバーツ氏は和辻の問題設定には確かに問題もあるが、倫理学などにおける彼の成果については肯定的な評価も可能だと述べた。

また酒井直樹の文章の書き方についても議論になった。本書中ではJ. S. ミル、ピエール・ブルデュエ、ホミ・バーバ、リオタール、ジャン＝リュック・ナンシー、ラカンなどの様々な人物の言葉や議論が引用されている。これが酒井の文章を面白くもしており、同時に難解なものにもしている。王欽氏はとりわけラカンを引用している点に注目した。精神分析を主とするラカンをアジア研究の文脈で語ることは非常に酒井の特徴が現れており、ここにおいて酒井が脱歴史的な語りへの試みを見いだせると王氏は読んでいる。また八幡さくら氏は、酒井直樹の議論の面白さを認めた上で、これを受けた私たちは如何にして彼の議論を語るか、或いは哲学研究やアジア研究において酒井の議論を如何に吸収するかを考える必要があると述べた。

時間の関係もあり、第5章「Modernity and Its Critique : The Problem of Universalism and Particularism」についてはあまり議論に長い時間を費やせなかった。胡藤氏は本章は議論の面白さもあるが、それ以上に近代や普遍性、特殊性等をめぐる様々な言説を考える上で、その全体像を俯瞰するのに非常に有用であると述べた。また佐藤氏は本章で語られる高坂正顕が語る「有的普遍」と「無的普遍」が良くわからないという疑問を抱いていたが、建部良平氏は酒井直樹『死産される日本語・日本人』（新曜社、1996年）所収の「自己陶醉としての天皇制：アメリカで読む天皇制論議」にて批判されている、「東洋の無対西洋の有」という図式のことを指しているのではとコメントした。

第5章の末尾では竹内好の魯迅論が取り上げられている。そこで議論されるのは抵抗と解放、そして希望と絶望である。抵抗とは如何なるものなのか。魯迅—竹内による重要な問いかけが酒井によって語られている。非常に読解の難しい箇所であるが、それでもある種の仕方で魯迅・竹内・酒井の3者はいずれも未来について真剣に考えている。文学と共同体の今後について考える本読書会にとって、非常に示唆的な意味を持っている。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

北京フォーラム 2019 第 13 分科会「書院によるリベラルアーツ教育：世界の経験とアジアの経験」参加報告

今年になって3回目の北京訪問は、秋雨のそぼ降る中でのことだった。それでも空港から会場の北京大学へ向かう車窓から見える街頭の槐は、その葉を黄色くかがやかせながらわたしを歓迎してくれている。今回の訪問先も北京大学。2004年以來、毎年北京大学にて開催されている北京論壇という大がかりな国際フォーラムへの出席が目的である。わたしが招かれたのは、元培学院が主催する同フォーラムの第13分科会「書院によるリベラルアーツ教育：世界の経験とアジアの経験 Liberal Education through College : World's Experience and Asian Experience」。元培学院は北京大学のリベラルアーツ学部としてその名を知られ、東大はソウル国立大学と共にキャンパスアジアを通じて学部生の交換を行っている。EAAの交流でも元培学院が北京大学側の窓口学部となっており、両者はともに「東アジア発のリベラルアーツ」を作っていくパートナーであると言ってよい。

「書院によるリベラルアーツ教育」とはわかりにくいテーマだ。香港の大学ではイギリスの大学に見られるカレッジの制度を移入して「書院」と呼ばれるので、語源はこの辺りにあるものと思われる。学生たちは学部にも所属するほかに、寄宿舎機能と一体化したカレッジにも所属し、寝食を共にしながら全人的教育を受ける。現代新儒学の拠点の一つと言わなければならない香港中文大学新亞書院などはその最も典型的な例だろう。中国では古くから民間に多くの書院があった。例えば、南宋時代に朱熹が再興したことで有名な白鹿洞書院や、湖南省の岳麓書院などがよく知られており、EAAが新しいリベラルアーツ研究教育のプラットフォームたるために「書院」を名乗るようになったのは、こうした中国古来の問学スタイルに範を取ったからでもある。

元培学院は近年、自らの学生宿舎機能を大幅に強化し、residential college（寄宿制書院）をベースにしたリベラルアーツ教育に注力している。寮には図書室、自習室、多目的室、音楽室、フィットネス室などが備わるほか、学生たちの自主活動は寮だけではなく、学院のビル（俄文楼）でも昼夜の別なく繰り広げられる。9月に行われた集中講義の際にも、夜間に教室で課外活動を行うグループに遭遇して、東大生を驚かせていた。俄文楼3階が元培学院の学生による学生のための専用カフェとなっていることは、今回の訪問でわたしも初めて知ることになる。

分科会会議は2019年11月2日と3日に行われ、各大学の経験を共有すると共に、今後、参加大学がリベラルアーツ・カレッジ・コンソーシアムの設立に向けて協力関係を構築するためのラウンドテーブル・ディスカッションが併せて行われた。

この会議に招かれたのは、EAAについて紹介することが目的だった。ヴァッサー・カレッジ（Vassar College）やドルー大学（Drew University）のようなりベラルアーツ・カレッジや、総合大学でありながらすぐれたリベラルアーツ教育として「コアカリキュラム」を運営するシカゴ大学など、アメリカのリベラルアーツの伝統を体現する大学が集まってきたほか、ソウル国立大学自由専攻学部、中山大學博雅學院、清華大學新雅書院といった21世紀に入って勃興著しい東アジアのリベラルアーツ学部が一堂に会する中で、誕生間もないわが東京大学東アジア藝文書院もまた、それらに列すべき存在であると期待されてのことである。

言うまでもなく、EAAは北京大学とのジョイントプログラムであることが最大の特色であり、



2020年度に発足する学部後期課程プログラム「東アジア教養学」は、北京大学との交換留学を含みながら、英語、中国語、日本語のトライリンガル（TLP）モデルにより、「世界哲学」、「世界歴史」、「世界文学」、「社会・環境・健康」という4つのカテゴリーのもとで、「東アジア発のリベラルアーツとしての東アジア学」を創造することを目指している。プログラム生の募集を今冬に控えたこのタイミングでのこの会議参加は、いわば、リベラルアーツ教育の伝統と現在に対して、EAAが未来に向けてマニフェスト宣言を行う場であったということになる。

思いのほか、この宣言は反響を呼んだ。中山大学博雅学院を立ち上げ、その後、清華大学に移って新雅書院の設立に携わった甘陽（Gan Yang）氏が、EAAの、特にTLP教育モデルに強い疑義を投げかけたのだ。その要点は2つある。1つは、英語ですらも身につけることが難しいのにトライリンガルをどうやって実現するのか、理想論だけが先行していても浮ついた結果しかもたらさないだろうという批判。もう1つは、せっかく日本と中国の大学生がともに学びあう場を作ったのになぜ英語を媒介語にする必要があるのかという不満である。前者については、語学教育の理想と方法の両面から丁寧に論じる必要があるだろうが、現実に東大ではTLPを通じて、英語と中国語の両方を第2言語としてかなり高いレベルで操れる学生が育てていることは言うまでもない。EAAの「東アジア教養学」ではそれらの基礎の上に、それらの言語を使って何を学ぶかへと重点を移すのであり、それが可能であることは言を俟たない。2つ目の問題については、日本と中国の現状のちがいが現れておりやや複雑だ。だが、日本語と中国語だけで不十分であるのは、英語を介さないことには、相互の位置関係を適切に測量することができないからである。トライリンガルとはいわば「出会いの三点測量」なのだ。

1980年代以来、中国の人文を牽引してきた甘陽氏がこうしてEAAの目指す教育に疑義を呈したこと自体が、わたしたちのプロジェクトのインパクトを物語っている。しかし、このプロジェクトはまだ始まってはいない。そして、今回の会議に象徴されたように、「東アジア発のリベラルアーツ」が今後北京大学をハブとして、その存在感を増していくことになる可能性はたしかにある。わたしたちのプロジェクトは、本当に緒に就いたばかりだ。「30年後の世界」へと豊かな想像力にあふれた人材を、この会議に集まった人々と共に送り出す。夢は大きく、そして明るい。

報告者：石井剛（EAA 副院長）

EAA「中国近現代文学研究会」第2回



2019年度秋学期 EAA 中国近現代文学研究会の第2回イベントは11月7日に本郷キャンパス・赤門総合研究棟で行われた。今回のディスカッションは、何浩『『創業史』と建国初期の創業史』、程凱『『創業史』前史』、何翔『『柳青随筆録』によって『創業史』における愛情物語を再論する』、劉卓「対象化されず、独立性を保つ」の4つの論文を対象として最近の「社会史的視野」という研究アプローチによって行われる柳青研究を検討した。

まず、報告者（王欽・EAA 特任講師）は何浩の論文を例にとって論じた。何浩の論文が典型としているのは、「社会史的視野」が文学分析へ背景を提供しながら、実質的な部分は相変わらず伝統的テキスト分析にほかならない、ということである。問題意識のレベルでいうと、何浩の郭振山という人物に対しての分析は、まさに文学的テキストと非文学的テキストとの差異を浮き彫りにして、『創業史』の文学としての独立性を強調した。何浩の文章は「性気」を出発点と終着点に置いたが、「性気」はあまり人物像の分析にかかわっていない。何浩と対照すると、何翔の論文は言語的・技術的セッティングが如何に小説の構築で役立つかということを典型的に露呈させる。王柳は、「社会史的視野」が歴史的現場へ帰るキッカケになるかもしれないが、テキストの読解はあくまで現代の読者の問題意識次第であり、「社会史的視野」は中文系の研究にとって外部的なものに過ぎない、と述べた。趙は、程凱の論文はほとんど『創業史』とかかわらないと指摘した。したがって、「社会史的視野」は文学と密接していない。しかも、程凱の提起した特殊経験と柳青の創作の関係もはっきりしていないのみならず、『創業史』がいままで議論されている所以は、「社会史的視野」的読解が強調しているものではない。

鈴木将久氏（人文社会系研究科教授）は、何浩の論文は明らかにいわゆる「心身構築」を体現している、と強調した。つまり、人々の行動と思想に動力をつけるのは人間関係である。もし「心身構築」に関しての関心がなければ、郭振山をもきちんと把握しえない。程凱の論文は政策のレベルに重点を置くものの、それはあくまで『創業史』を分析する前の準備であり、『創業史』を読解すればおそらく「心身構造」を強調するであろう、と鈴木は述べた。一方で、劉卓の処理しようとするのは、文学的テキストと非文学的テキストの関係であり、「社会史的視野」の要も文学と歴史の

関係にあるため、彼女が言おうとするのは、「背景」と「前景」の関係の多様性らしい。劉卓と程凱は、ふたりとも社会学的な「口述史」から距離を保とうとしているようである、と鈴木氏は結論した。

裴亮氏（武漢大学）によると、この4つの論文は柳青『創業史』を仲介として、歴史的事実と歴史的经验と歴史的表现の関係を検討している。劉卓の言及した「反思性」は、柳青への読解の前提を読者に伝えている。つまり、柳青は自分を対象化しながらも、自分の独立性を保っている。何翔の論文は『創業史』についての論争を取り組んでいる。他方で、何浩は「社会史」の意識をもっているが、作家経験とテキスト分析に頼りながら論考を行っている。程凱の論文は、あたかも「沈没的劇」のように、より豊富的に「社会史的視野」によつての史料扱いを露呈している、と裴氏は述べた。しかし、むしろ問題になるのは、もう一歩進めば、つまり、「心身構造」に関する歴史的资料に基づき、歴史的事実と審美まで突き詰めてゆけば、どういふ結論が出されるか、ということである。それと関連して、いわゆる「新中国の歴史的经验」のような文章が示しているように、全体的な歴史の視野は果たしてありえるか、ということであろう。

次回のディスカッションは、11月28日に行われる予定である。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

2019 年度秋学期 EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）第 4 回



2019 年度秋学期の EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）の第 4 回は、2019 年 11 月 12 日に東京大学本郷キャンパス・EAA 本郷オフィス（東文研 208 号室）で行われた。今回は丸山真男の福沢諭吉に関する 2 つのテキストを中心に進めた。担当者建部良平氏はまず文章の内容と自身の疑問を提示し、それをめぐって討論した。

戦後まもなく書かれた「福沢諭吉における『実学』の転回」と「福沢諭吉の哲学」のなかで、福沢の唱えた近代自然科学及びそれに基づく近代的自由観が画期的な思想史的転回になるのは、アンシャン・レジームの自然と社会と一体化した思想を解体させたことにある、と丸山は指摘した。またそれを支えた福沢の哲学とは、単一の価値観に執着せず、その場その場に応じて「進歩」に向けて決定を下すというプロセスで表れる思惟様式、言い換えれば「強靱な主体性」である。建部氏はそれに対して 2 つの疑問を呈した。まずは「強靱な主体性」について、丸山が「強靱」と評した福沢の主体性はその流動性とはどうつながっているのか。丸山は流動性を福沢の「強靱」とみなしているようである。そうだとしたら、竹内好がやや批判的に提起した日本思想における「転向」とはどう区別できるか。さらに、竹内の「回心」や前回も取り上げた酒井直樹の「抵抗」における主体性をどう理解するか。また、丸山が「福沢諭吉の哲学」の最後に、「戯れの人生」と「真面目な人生」と相互に機能化することによって精神的主体性へと到達すると提示したが、その「戯れの人生」についてさらなる説明がないため、理解しにくい。

王欽氏は主体性について、竹内の魯迅論と丸山の福沢論を理解するために、竹内の福沢論を介せば助けになると指摘した。竹内が『日本とアジア』で考察した福沢の文明論は、ヨーロッパに仲間入りできなく、アジアから「脱却」もできないとの緊張関係でこそ成立したものである。しかし明治政府の政策によってこうした緊張が解消され、その主体性を支えたエレメントもなくなった。それで竹内にとって、革命が失敗した中国にある魯迅のような主体性の在り方がうきぼりになったのである。

続いて、張瀛子氏は福沢が文明の基準とする「進歩」とは具体的になにかと問った。建部氏は福沢にとって「進歩」には何かの基準があるより、これで問題が解決できるという見方の性格が強いと答えた。さらに王氏は当時国際関係をリードしていた、いわゆる「ヨーロッパ共同体」に参加し

ようとする考えが福沢にとって大きな「目標」だと説明した。また丸山がそういった「西欧国家」像を2つのベクトルに分けて理解していると王氏は補足した。「近代化」との基準では確かにヨーロッパが「進歩的」である一方、地理的、現実的に見れば、ヨーロッパ型の近代国家制度は必ずしも近代化の理想形ではなく、あくまで効率の良い選択肢に過ぎないと。

具裕珍氏は「脱亜論」で知られる福沢像と戦後日本民主主義の旗手である丸山像のあいだのズレを提示し、丸山が福沢を再評価する意図とはなにかとの問いを投げた。また福沢のいわゆる「東洋と西洋との介在役」という国際関係の発想は現代日本の「ミドル・パワー」論にも延々と継がされているか。建部氏と王氏は福沢の「脱亜論」を歴史的に理解する必要があると答えた。坂野潤治や中島隆博などの研究によると、福沢は「儒教的」旧体制（アンシャンレジーム）に強く嫌悪感を感じて、そのために中国や韓国の反体制運動を支持したが、革命の失敗を受けて「アジアの悪友」から離れようとの主張になった。そこでも「進歩」という基準が働いている。丸山はまさにこの「進歩」に対する態度を戦後の日本社会において、「近代性」の成立という目標でより普遍的視座で再解釈するのである。これは先ほど佐藤麻貴と胡藤の疑問に関連する。より「普遍的」視座で福沢の近代論を再評価しようとする丸山は、なぜ福沢の哲学を「変動的」に捉えるのか。個々の事例を取り出す哲学とはどういう意味を持つだろうか。

話題が建部氏が提起した第2問に移っていくが、今回その問題について結論を出なかった。ただデリダとシュミットの「戯れ」論を比較した結果、丸山がそれと別のものに注目していると皆で確認した。ここで丸山のテキストの討論が終わり、さらに現代の国際事情などについていろいろな話がありますが、ここで一旦筆を置きたい。今回の読書会で、前の世代の人によるさらに前の世代の人への読解をともに読むことで、それぞれの知見を交わし、視野を開くことは、人と人とのつながりを確実に築き上げていくと深い感銘を受けた。

報告者：胡藤（EAAリサーチ・アシスタント）

韓国出張報告①：国際学術大会「『沖縄学』は可能なのか——ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」

2019年11月14日（木）から19日（火）までの6日間、EAAからの支援を受けて、報告者（崎濱紗奈・EAA 特任研究員）は韓国（水原市・済州特別自治道）に出張した。15日（金）には、慶熙大学にて行われた国際学術大会「『沖縄学』は可能なのか——ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」に参加した。翌16日（土）・17日（日）は、NPO法人Jeju Dark Toursによる済州4.3事件跡地をめぐるダークツアーに参加した。18日（月）は、報告者の友人で教育学研究者の吉田直子氏（東京大学）が主宰するスタディツアーに参加した。以下、国際学術大会については韓国出張報告①、ダークツアー・スタディツアーについては韓国出張報告②として報告する。

この度の出張の目的は、沖縄をめぐる問題と、韓国・済州島をめぐる問題を突き合わせて、比較検討するというものであった。キム・ウネ氏（東京外国語大学国際日本研究センター）、そして吉田直子氏のご尽力によって実現したものである。このお二人なくしては、今回の企画は実現しなかった。沖縄研究に携わる者が一堂に会する（しかも韓国で!）という貴重な機会を作ってくださったお二人に、心からの謝意を表したい。また、ソン・ジョン氏（慶熙大学グローバル琉球・沖縄研究センター長）、キム・ドンヒョン氏（済州大学校）、チョ・ユミ氏（グローバル琉球・沖縄研究センター）をはじめとする慶熙大学・済州大学校の先生方、友常勉氏（東京外国語大学国際日本研究センター長）のご尽力に、感謝申し上げたい。このほか、大城貞俊氏（作家）は、15日および16日の基調講演の中で、沖縄と済州の経験を繋ぐ貴重な言葉を紡いでくださった。全てについての詳細な報告は、紙幅の関係上叶わないが、全体を通しての考察を以下に報告する。



全体集合写真



慶熙大学グローバル琉球・沖縄研究センター長ソン・ジョン氏による開会のご挨拶



なぜ、沖縄と済州という2つの場所を比較検討するのか。それは、「東アジア」という地域について考える際、この2つの場所が必要不可欠だからである。15日のシンポジウムで、佐藤泉氏（青山学院大学教授）より、次のような発言があった。「東アジアを、単なる地理空間の名称としてではなく、アメリカによって構成されるヘゲモニー空間として考える必要がある」。1945年の日本の敗戦により、植民地支配から解放された朝鮮半島は、息つく間もなく、アメリカとソ連の覇権争いの場となった。済州島で起こった「4.3事件」（報告ブログ②で後述するように、この事件の名称は未だ定まっていない）は、その象徴的な出来事である。沖縄もまた、沖縄戦を経て、アメリカ軍の統治下に置かれ、軍事要塞化が進められた。歴史家の白永瑞氏は、済州や沖縄を、「核心現場」という言葉で表している。「核心現場」とは、「東アジア」における矛盾や歪みが凝集したような場所を指す。済州と沖縄の歴史経験を、同様のものとして並列して語ることは決してできないが、両者ともに、大日本帝国、そしてアメリカという大国（あるいは帝国）の覇権（ヘゲモニー）が、どのようにして「東アジア」と呼ばれる空間を構成してきたのか、そのプロセスを観察する最適な場所であるのだ（白永瑞『共生への道と核心現場——実践課題としての東アジア』法政大学出版社、2016年）。

白氏が「核心現場」と呼んだ概念は、あるいは「辺境」という概念によっても考えることができるかもしれない。ここで「辺境」とは、単に中央に対する地方、といった地理的な意味ではなく、資本主義的文脈の中で理解される必要がある。すなわち、資本主義システムの内部に包摂されているながら、いわば使い物にならない土地として放置・遺棄される場所のことを指す。経済学者の向井清史氏（『沖縄近代経済史——資本主義の発達と辺境地農業』日本経済評論社、1988年）によって

提出されたこの「辺境」概念に依拠しつつ、歴史学者の富山一郎氏（『近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるということ』）は、沖縄が置かれた特殊な位置を理解しようと試みた。15日に行われたシンポジウムで報告者は、「伊波普猷という問題——『沖縄』という主体をめぐって」と題し、向井・富山両氏の研究を踏まえ、近代沖縄を代表する思想家である伊波普猷（1876-1947）が1910年代に展開した議論（発表ではこれを「個性」論と呼んだ）の限界について検討した。資本主義的に構成される辺境としての「沖縄」に対して、別の「個性」を立ち上げようと伊波は試みたものの、それは結果的に、より洗練された統治法（多文化主義的な統治）を先取りしてしまうという限界を内包していたことを指摘した。発表に対して、ナム・サンウク氏（仁川大学）、キム・ジェヨン氏（圓光大学）より貴重なコメントを頂戴した。頂いたコメントを通して、韓国（および植民地朝鮮）という文脈から伊波普猷を読むという新たな観点に気づかされ、今までにない新鮮な発見を得ることができた。

報告者：崎濱紗奈（EAA 特任研究員）

韓国出張報告②：済州島ダークツアー・スタディツアー

翌11月16日からは3日間かけて済州島でのフィールドワークを行った。済州もまた、沖縄のように「辺境」であったのだろうか。「辺境」という概念についての詳細は、出張報告①を参照のこと。)向井氏が言う「辺境」は、制度上は「内地」であった沖縄について、その奇形的な資本主義への包摂のされ方を指し示した概念であることを考えると、植民地朝鮮の一部であった済州を、直ちに(沖縄同様の)「辺境」と呼ぶことはできない。しかし、あえて両者の共通項を指摘するならば、済州もまた、放置・遺棄された場所として考えることは可能なのではないか。少々乱暴に言うならば、沖縄が「内地」における「辺境」ならば、済州は「植民地朝鮮」における「辺境」として考えることができるかもしれない。植民地朝鮮の中であって、とりわけ貧しい地域であり続けた済州からは、日本本土(その代表的な渡航先は大阪であった)へ多くの人々が賃金労働者として奔出していった。京城(ソウル)や平壤へ出るよりも、船一本でたどり着ける大阪の方が近かったからである(日本と済州島との関係については、次の書籍の第4部を参照:梁聖宗ほか編著『済州島を知るための55章』明石書店、2018年)。日本の敗戦を境目に、大日本帝国が構成したこのような空間的広がり、人々の頭の中から忽然と消失してしまっただけに見える。しかし、「4.3事件」、そしてこの出来事を契機として日本へ脱出せざるを得ず「在日」となった人々の経験と歴史を考える上で、このような空間をいま一度思い起こすことがきわめて重要であることを、今回の出張では再確認した。

先述したように、「4.3事件」は、未だ名称が定まらない出来事に仮に付けられた名前である(韓国では「4.3」というように、日付のみで語られることも多くあるとのことである)。朝鮮半島



金石範『海の底から、地の底から』(講談社、2000年)。軍事政権下、「4.3事件」について語ることがほとんど不可能な中、はじめに重い口を開いたのは、在日の人々だった。画像は講談社BOOK倶楽部ウェブサイトより：<http://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000179893>



玄基榮『順伊おばさん』(新幹社、2012年)。軍事政権下の韓国において「4.3事件」をテーマとして扱った初めての作品。1978年発表。筆者の玄基榮はこの作品を発表したことによって拘束された。画像は新幹社公式ブログより：<https://shinkansha.exblog.jp/18229613/>

南部に大韓民国を建国するための選挙（アメリカによって先導された、いわゆる「単独選挙」）に反対し、自らの自治を求めた人々に対して、警官隊が発砲したことを契機として始まったこの事件は、最終的に6万人にも及ぶ犠牲者を生んだ。南朝鮮労働党が組織する武装隊が、島の「アカ」化を誘導しているとして、軍警（およびそこに組織された討伐隊）が島民に対する大粛清を行った結果だった。一方で、武装隊による村民の殺戮も行われた。誰が「アカ」でそうでないのかという探り合いは、女性・子供・老人を含む全ての人々を巻き込み、済州の共同体を引き裂いた。

済州島の受難は「4.3事件」だけではない。「レッド・アイランド」とみなされた済州島では、朝鮮戦争開戦に伴う予備検束によって、共産主義者だと疑われる人物百名以上が処刑された。

軍事政権下の韓国においては、「4.3事件」について語ることもできず、何十年もの沈黙を強いられた。80年代の民主化闘争を経て、2000年、キム・デジュン大統領のもとで4.3真相究明特別法が制定され、ようやく真相解明のための調査が本格的に行えるようになった。

2003年、ノ・ムヒョン大統領は大統領として初めて、島民に対して正式に謝罪を行った。しかし、この事件について、どの立場からどのように語るべきかということについては、未だ決着はついていない。当時の軍・警察の立場から言えば「4.3暴動」であるが、反対に、南朝鮮労働党の立場からすれば「4.3民主化闘争」である。また、特定のイデオロギーに与したわけではないが、自治を求め立ち上がった人々もいたであろう。様々な立場が錯綜し、未だ過去の歴史として語ること



4.3 平和記念館の礎。犠牲者の名前が刻まれている。ただし、武装隊に参加した者の名は、一旦刻まれましたものの、その後消去された。



4.3 平和記念館の母子像



予備検束者の慰霊碑・墓（百祖一孫の墓）。ここに限らず、慰霊碑のそばには、必ずといってよほど大韓民国の国旗がはためいている。軍事政権下において「4.3」を語ることで、慰霊することさえもタブーだった時代、国旗を掲げることによって、国家への反逆心が無いことを証明する拠り所となった。しかし、こうした文脈とは別のところで、「4.3」を大韓民国の歴史として語る姿勢も昨今登場している。単独選挙への反対を契機として起こった「4.3事件」を、大韓民国という国民国家の語り回収することには、批判の声もある。



予備検束者の処刑地。左手にある二つの穴は、もともと日本軍が掘ったもの。処刑後、この穴に遺体が埋められた。犠牲者の中には、海に流された者もいた。済州島から程近い対馬にも遺体が漂着したという。



未だ名前の刻まれることのないまっさらな碑石



カンジョン基地ゲート前



軍民共有施設として建設された公共施設。このほか、運動場等の施設も整備された。



戦闘機の格納庫。現在はモニュメントが格納されている。



格納庫の周辺には黙認工作地が広がっている

ができないのが「4.3事件」である。それゆえ、済州4.3平和記念館の最初の展示室にある「白碑」には、4.3に対する「正しい名」が未だ刻まれずに横たわっている。

最終日のフィールドワークでは、カンジョン海軍基地周辺を見学した。2007年にカンジョン村が候補地として選定され、2017年に完成した。建設に至る中、住民に十分な説明がなされなかったこと、また、サンゴ礁の破壊といった環境問題があることなどから、住民・市民団体による反対運動が続けられてきた。現地を案内してくださった聖フランシス平和センターの方の説明によると、カンジョン基地は、在沖米軍基地、在グアム米軍基地と連動する形で、東アジア地域一帯における米軍の戦略の一環として位置付けられている。対中国を第一の目的として建設されたこの基地は、韓国海軍のみならず、米軍をはじめとする他の同盟国軍が使用することが懸念されている（実



日本軍陣地



壕の中から。壕の掘削作業には多くの島民が動員された。



穏やかで透き通った海。海女さんが採ってくる貝や、近海で採れるサバや太刀魚が濟州島の名物だ。

際、2018年に行われた大韓国海軍国際観艦式では、米軍やカナダ軍の軍艦が入港した)。この基地の建設を進めたのは、「4.3事件」について初の公式謝罪を行ったノ・ムヒョン大統領であった。「4.3事件」に向き合うことと、(現在の)国民国家の維持という、原理的に突き詰めれば本来両立し得ない事柄を両立させるというアポリアが、ここにはある。

濟州島と軍事基地との深い関係について、私たちは前日までのフィールドワークによって学んでいた。第2次大戦中、南京を爆撃するための戦闘機が配備された飛行場は、朝鮮戦争時には米軍のアルトゥル飛行場として使用された。現在もその土地は韓国国防省の管轄下にある。

他にも、日本軍が使用した陣地や無数に掘られた壕も見学した。沖縄と濟州の辿ってきた経験を、安易に比較することはできないが、しかし、太平洋戦争中に日本軍、そして冷戦時には米軍によって軍事要塞化され、なおかつこの構造が現在進行形であるという点において、両者は共通していると言えよう。

以上が、今回の出張の報告である。あまりにも濃密な数日間で、ここには書くことができず割愛せざるを得なかったこともたくさんある。強調しておきたいのは、濟州は魅力的な島であるということだ。是非、一度彼の地を訪れ、美しい景色に触れながら、島の経験を自らの足で辿ることをお勧めしたい。

最後に、今回の企画を立案し、実現してくださったキム・ウネ氏、そして吉田直子氏に最大限の謝意を示したい。加えて、この濃密な数日間を共にしてくださった参加者の皆様、出張をバックアップしてくださったEAAの先生方・スタッフの皆様、そして、私たちに自由な研究の場を提供くださっているダイキン工業株式会社に心より感謝申し上げたい。

報告者：崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)

中国社会文化学会 2019 年第 2 回例会 歴史学のなかの「南京事件」

2019 年 11 月 15 日（金）、「歴史学のなかの「南京事件」」と題した講演会が行われた。講演者は孫江氏（南京大学）である。東京大学・総合文化研究科・地域文化研究専攻を 1999 年に卒業し、現在は南京大学の学衡研究院に所属している。孫江氏は様々な方面に関心を持って研究しているが、今回の講演では「南京事件」について話された。氏の注目するところは、南京での虐殺行為に関する歴史的な考証ではなく、その語り方に注目するものである。南京大虐殺という「事実」について考えるのではなく、その「事実」が当時や後世において如何に語られてきたか、「南京事件」という呼称も、「事件」は「事実」の表象であるという考えに基づいている。講演の中で氏が一貫して主張していたのは声を聞くことである。南京で命を落とした「死者の声」、生存した「生者の声」、そしてその事件を目撃した「他者の声」。「事実」を主とする歴史叙述では、集団的な記憶や事象の記述に中心が置かれ、当時の人の日記や記録、生存者の証言は全て集団との連関の中で語られる。孫江氏の問題意識は、そういった集団的歴史叙述においてかき消されてしまっている、個人の声に再び耳を傾けようというものだ。

「死者の声」は聞くことはできない。しかし死者が生時に残した日記、生時に関わっていた人々の回想などを手掛かりに、死者に近づくことができる。「生者の声」は解釈が難しい。孫江氏はアリソン事件（日本兵のアメリカ領事に対する暴行事件）の背後には、日本兵婦人暴行があったことに触れる。アリソンが殴られたのはこの婦人暴行に対する抗議を行った際であった。しかし問題な



のは、日本の公文書にもアメリカの公文書にもこの暴行を受けた女性の名前が書かれていないことである。個人としてではなく、女性という枠組みに回収されてしまう。しかし、個人名は分からずともこの女性の経験は公文書からも読み取ることができる。孫江氏はそこに注目することで当時を生きた人の声を聞こうとした。「他者の声」、それは当時の南京に身を置いていたが、日本兵による被害を直接受けなかった人などの声である。講演で言及されたのは当時の政治家である陶保晋（1875-1948）である。彼は南京で人々の救護活動をしていたが、日本への留学経験もあったため、南京の占領軍と関係を持ってしまった。戦後彼は「漢奸」として収容されたが、当時彼が残した文章はまだ残っており、その読解から南京大虐殺事件と複雑な絡み方をした人物の声が浮き上がってくる。

孫江氏の研究は様々な声を丁寧に聞き取ろうとするところに最大の特徴がある。過去の人々の声を完全に聞き取るとは不可能かもしれない（それは同時代人の全ての声を聞けないのと同じことである）。しかし様々な方法を駆使して歴史における個人に近づいていく。その近さが声を聞き取れることを可能にする。歴史学研究はともすれば非常に冷静に、客観的事実のみを扱う学問であるという印象をもたれるが、孫江氏の研究は個人の声に限りなく接近していこうという点で、非常に熱のこもった研究である。その姿勢に聴講者の多くが刺激を受けただろう。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

EAA「中国近現代文学研究会」第3回

2019年度秋学期 EAA 中国近現代文学研究会（第3回）が、11月28日に本郷キャンパス・赤門総合研究棟で行われた。今回は朱羽の近著『社会主義と“自然”——1950-1960年代中国美学論争と文芸実践研究』（北京大学出版社、2018年）を中心としてディスカッションした。

鈴木将久氏（人文社会系研究科教授）は、まずこれまでにディスカッションしてきた、中国社会科学院の研究者たちが代表する「社会史的視野」派の研究のもっている問題意識についていくつかの点を補充した。「社会史」派と朱羽は、ともに社会主義文芸実践の可能性とジレンマという問題に集中しながら、歴史的現場へ接近しようとする。さらに重要なことに、われわれのもっている歴史観それ自体に問題があるから、反省が不可欠だと両者とも論じている。両者が異なる点は、「社会史」派は往々にして歴史的アーカイブを分析することに関心を持っているのに対して、朱羽の著作は理論的洞察を通じて論述を行っていることである。むしろ、両側面は互いに働き合うべきものである。両者にとって、難問はいわゆる「大躍進」時期の文芸創作を如何に理解すればいいか、ということに尽きる、と鈴木氏は述べた。なぜなら、歴史的資料が欠如しているだけでなく、イデオロギーに関する問題も絡んでいるからである。ただ、「社会史」派にしろ朱羽にしろ、つまるところ、彼らの共有している関心は、歴史そのものでなく、現代の中国歴史にある、と鈴木氏は強調した。いまだ「社会史」派の営みはまだ終わっておらず、これからいかなる方法で彼らの研究と関連していくのか、というのも考えなければならないことである。

報告者（王欽・EAA 特任講師）は、朱羽の著作のタイトルについて紹介した。いわゆる「自然」の問題は、はじめから芸術的に表象され、経済的に搾取されるものではなく、社会主義の制度化や自己確認や価値生成や正当化などの一連の難問に緊密に繋がっている問題系の総命名。「自然」という概念を通じて、並列しているようにみえる様々な議題を統一させて、社会主義文芸実践の内包した「自然」問題はあの特定の時期に実践された文芸における多くの矛盾、緊張、活力、可能性を集約しているということ、作者は表している。「大躍進」時期の「新民歌」を分析することによって、朱羽はこの社会主義的文芸実践のなかでもっとも政治的強度に満ちた瞬間が、ドイツロマン派的芸術に近づいていることを提示している。つまり、芸術の価値は作品のなかにあるのではなく、創作活動によって露呈されるものだ。それと関連して、「大躍進」の革命的要請は芸術生産のリズムと速度を、普段に全体的に革命化された生活様式の中へ回収しようとし、したがって、芸術の生産様式を変えたのみならず、芸術作品に対する受け取り方と理解の仕方変わった。もし「大躍進」時期の政治的強度は人々の革命的意識を措定しているとすれば、対極にあるのは朱羽の提示した「革命的に気を散らす」ことである。後者は人々の日常生活に適合し、もっと「自然的」なように見えながらも、実は社会主義「政教機制」の危機をはらんでいる。なぜなら、社会主義革命は、「革命的に気を散らす」ことを日常化することを要請する一方で、否定されるべき些細な日常生活を不断に再生産しているからである。

鈴木氏は、朱羽の「革命的に気を散らす」ことに関する論述は、実際蔡翔の『革命／叙述』で論じたことを受けている、と言った。問題になるのは、文芸的表象を対象として「革命的に気を散らす」というべき現象を考えることが相対的に容易なことだが、歴史的アーカイブから同じような現象を見出せるかどうか、ということである。一方で、鈴木氏は朱羽の社会主義的「山水画」の分析

に言及した。つまり、「社会史」派は画の内容に集中しがちであるが、朱羽の分析は画の形式に集中している、と鈴木は言った。興味深いことに、「山水画」についての論考が終わると、朱羽はただちに周立波のテキストを例にとって論じた。両者のつながりは実に意味深い、もし内容的分析と形式的分析を融合して切り込み、歴史的分析と理論的分析を結合させて論じれば、「山水画」の面した歴史的文脈をもっと全面的に展開できるであろうと鈴木氏は判断した。

王柳氏は朱羽の著作のもっている方法論的啓発を強調した。このテキストが「社会主義実践は如何に行われるべきか」という難問に直面しながら、いまでも存在している社会問題に示唆を多く与えた。1980年代研究にとっても、朱羽の著作は興味深いものだ。これに関して、鈴木氏は李準の創作を引き合いに出した。例えば、李準の1980年代に書いた作品と社会主義時代に書いた『李双双』は、スタイルから内容まで、全然違うが、この転化をもたらした動機は必ずしも「文化大革命」につけるものではなく、むしろ別の新たな方式で社会主義農村の変革のあり様を描き出す企図にかかわっているかもしれない。この例も、われわれに1980年代文芸実践を再考する手掛かりを与えている、と鈴木氏は指摘した。朱羽の著作は、珍しく社会主義の精神に沿って社会主義を理解しようとする試みであり、社会主義実践を社会管理まで還元するものではない、と王は補充した。鈴木氏は、この特徴が蔡翔の著作にもあり、それは社会科学的アプローチと違った角度で社会主義的革命的実践を文学的に把握しようとする両者の共有する姿勢をはっきり浮き彫りにした、と述べた。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

EAA フォーラム

「舞踏の越境——メテオール《土方巽とその分身》をめぐって」



2019年12月1日（日）、東京大学駒場キャンパス18号館ホールにて、EAAフォーラム「舞踏の越境——メテオール《土方巽とその分身》をめぐって」が開催された。本フォーラムは、ブルガリアのアーティスト・コレクティブ「メテオール」の舞台作品《土方巽とその分身》（Hijikata and his Double, 2019）の紹介を通じて、舞踏の世界的な伝播、およびその背後にある1968年前後の文化状況を問いなおすことを企図したものである。

このほど来日したメテオールの3人は、これまでおもにブルガリア国内で《フランケンシュタイン》（2012）、《マルドロール》（2015）、《ラヴクラフト》（2016）といった実験的なパフォーマンス作品を発表し、高い評価を受けてきた。2017年からは出版事業も始め、哲学や舞台芸術に関する英語、ブルガリア語の理論書を数多く刊行している。

そのメテオールによる《土方巽とその分身》は、2019年9月20日（金）にブルガリアのプロヴディフで初演され、翌10月30日（水）と31日（木）には首都ソフィアで再演された。この90分ほどのパフォーマンス作品は、タイトルにもあるように、日本の舞踏家である土方巽（1928-1986）、および彼と深い関わりのあった三島由紀夫や細江英公をテーマとしたソロ・パフォーマンス作品である。メテオールのこれまでの作品と同じく、本作品もワーク・イン・プログレスの形態をとっており、今回の来日も慶應義塾大学アートセンターの土方巽アーカイヴの調査、関係者へのインタビューなどを目的とするものであった。

本フォーラムは、企画者のひとりである星野太（金沢美術工芸大学）の導入から始まり、ボヤン・マンチェフ（哲学者／ドラマトウルク）、アニ・ヴァセヴァ（アーティスト／演出）、レオニード・ヨフチェフ（出演）の三者によるレクチャーおよびパフォーマンス、そして彼らと交流のある小林康夫（青山学院大学）、國分功一郎（東京工業大学）を交えたラウンドテーブルがそれに続いた。

とりわけ、メテオールの中心メンバーのひとりであるボヤン・マンチェフは、新ブルガリア大学とベルリン芸術大学で教鞭をとる哲学者でもあり、これまで英語、フランス語、ブルガリア語をはじめとする複数の言語で数多くの著書、論文を発表している（そのうちの数篇は日本語にも翻訳されているほか、来年には主著のひとつである『世界の他化——ラディカルな美学のために（L'al-tération du monde : Pour une esthétique radicale）』の邦訳刊行が予定されている）。遡ること9年

前には、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター（UTCP）」の招聘により、同じ駒場キャンパス 18 号館で行なわれた国際シンポジウムにも出席している。今回の《土方巽とその分身》の上演や当フォーラムもまた、これまで日本とブルガリアのあいだで継続されてきた研究交流の成果のひとつである、と言ってよいだろう。

ここ数年、土方巽をモチーフとした作品は、国内外問わず多くの例を見ることができる。たとえば国内では、田辺知美・川口隆夫による《ザ・シック・ダンサー》(2012) を、国外では、今年の KYOTO EXPERIMENT で初上演されたチョイ・カフェイの《存在の耐えられない暗黒》(2019) を挙げることができよう。また、「舞踏」そのものの世界的な伝播については言うにおよばず、土方自身のテキストも、The Drama Review における 2000 年の特集号をはじめ、他言語への翻訳が進んでいる状況である。今回、「舞踏の越境」というタイトルでこのフォーラムを企画したのは、土方が没してから 30 年余りが経過した現在、舞踏がどのような仕方で世界を駆けめぐっているのか——という問いを、東ヨーロッパを拠点とするメテオールと、東アジアにいるわれわれとの対話を通じて考えてみたい、という目的あつてのことだった。今回、その主旨をご理解いただいた東京大学・東アジア藝文書院（EAA）のみなさんのご協力を得て、このフォーラムを開催することができた。東アジア藝文書院の中島隆博先生をはじめ、この場を借りて、開催にご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げたい。

報告者：星野太（金沢美術工芸大学講師）

「世界人間学宣言」座談会報告



2019年12月9日（月）、東京大学駒場キャンパスのEAAセミナー室にて、「世界人間学宣言」をテーマとした座談会が行われた。現在我々は、グローバリゼーション、テクノロジーの飛躍的な進歩、気候変動といった抜本的な変容に晒されている。「世界人間学（World Human Studies）」とは、こうした潮流を受動的に受け入れるのではなく、かといって保守的に現状維持を図るのでもない、新しい学問のフロンティアを創造する学芸（アーツ）の名である。これは、既存の世界秩序の更新を促すことを企図する、野心的な営みである。東京大学総合文化研究科および東洋文化研究所より、石井剛氏、太田邦史氏、武田将明氏、伊達聖伸氏、田辺明生氏、中島隆博氏、馬路智仁氏が参加し、多分野的な議論が繰り広げられた。

モデレーターである中島隆博氏の趣旨説明は、21世紀は「人間」という概念が問い直される時代であるという指摘から始まった。近代以来の人間中心のなヒューマニズムはすでに維持できなくなっており、同時に、グローバリゼーションは人間を取り巻く「世界」を大きく変化させている。このような状況を前に、「人間という概念を開いていく、地平としての世界」を描き出し、新たな学の運動を引き起こしたいという願いを語った。

最初の報告では、石井剛氏が、「世界人間学」を考える際に中国哲学から得られるヒントを模索した。まず、近代的な「自然／人為」の二項対立を、荀子と荘子の議論を引いて再考を試みた。



「自然」は自生的・自発的なものでなく、人間の働きによって構築され、人為が盛んであるほど、そこには「文理」がある。「文」の反面は主に「野蛮」と理解される「野」である。しかし、「文」と「野」は互いに入れ替わる相対的關係であり、石井氏は、「野」には包括しきれないある種の「文」と「理」が混濁するカオティックな空間を「江湖」と称した。「文」と「野」が混じり合う場所からこそ、既存の秩序を覆す可能性が生起しうるのだと、石井氏は強調した。

続いての太田邦史氏の報告は、生命科学の視座から、これからの人間のあり方について、テクノロジー界の最新のポイントをもとに論じた。多様性は生命が生き残るために重要だが、人間が主な原因である生物の絶滅はそれを失わせてしまっている。AI技術や情報化は、命を含むすべてのものを数値化していくが、「人間」にとって、果たしてそれはいいのだろうか。ゲノム編集技術は、すでに人類による新しい生命体の創造を可能にしている。「人類はすでに神に達している。ここで



立ち止まって、新しい人間学を構築するのは極めて重要である。」なお、石井剛氏の「江湖」による変容は理学的にも裏付けられ、「カオスの縁」に相応すると補足した。

3番目の田辺明生氏の報告は、「人新世 (Anthropocene)」という概念のもとで「世界人間学」と「人間」の可能性を考えた。「人新世」は、近代以来の啓蒙主義・進歩主義が有効性を失い、人間が自身の生存基盤・自然や他者とのつながりを再認識する段階である。そこでは人間は孤立した「human being」ではなく、意識さらには情動レベルで他者と相互に影響しながら構造され、また構造していく「human co-becoming」なのだ。このようなつながりと相互関係性に着目し、人間と世界を結び直す新たな言葉を生む学芸 (アーツ) が、世界人間学の目標だろうと論じた。

4番目の武田将明氏は、18世紀イギリス文学をもとに、近年注目を浴びている「世界文学」の歴史とその意味について講演した。史上最初の近代小説として知られる『ロビンソン・クルーソー』は、経験主義・個人主義に根付いたイングランド的なものでもあり、すなわち「国民文学」の端緒であった。ただし、ここで注意に値するのは、『ロビンソン・クルーソー』はグローバリズムの進展なしでは成立できないことである。近年、文学研究また文学そのものに対する悲観的な声が目立つが、それは実は国民文学を前提にした近代文学にとってであり、国家を超えた「世界文学」には通用しない。「近代文学・国民文学の、もとよりあった世界的な面に立ち戻り、文学を考え直す必要がある」と論じ、従来の精読に代わる「遠読 (distant reading)」という手法を紹介した。

5番目の伊達聖伸氏は、フランス語圏の宗教学という視点から、世界人間学に自身の角度をつけて応えていった。フランスの人文社会学は、もとより英語中心主義のグローバリズムへの適用と対

抗という性質を持っており、その中でも宗教と世俗というテーマに着目した。ライシテ（政教分離・世俗主義）は、宗教から自立した政治・社会のあり方、すなわち一つの「世俗的世界」を構築するシステムであったが、新しい人間観が展開し、「世俗」の意味が変容する現代では行き詰まりにぶつかっている。同時に、近代的な宗教概念も反省を促されており、この問題は、日本の近代と戦後にも通じている。柄谷行人の「世界宗教」を参照し、失敗を経験したゆえに可能性を持っている日本からのアプローチの可能性を提示した。

6番目の馬路智仁氏は、「既存のヨーロッパ政治思想史をどう語り直すか？」という自身の問題関心から議論を始めた。「人間学宣言」を読み、まず感じたのは、「グローバリゼーション」に代わるような世界観を凝縮する言葉の不在であった。これは、新しい世界像の構築に必要な、新しいカテゴリーが未だに創造されていないことを意味し、同様の問題は、ポストコロナルな世界史・政治思想史の叙述方法をめぐる論争にも通じている。人間は「カテゴリー／集合名詞」を通じて「自分」を語る。しかし他方で、このような思考法はカテゴリーの枠内に閉じ込められてしまうという限界も持つ。「アイデンティティ」を完全に手放すことができないにしても、複数性をどのように書き込んでいくことができるか、ということが問われている。

最後の総合討論は、中島隆博氏が4時間ほどにわたる議論を貫通できる一つの概念を取り上げ、来場者全員の意見を求めた。それは、近代的な「私／プライベート」でなければ、「公／パブリック」でもない、「パーソナル」である。本質主義的ではない方法で、「このものの性」（「それ」が「それ」であること）について、どのように思考することができるか。「パーソナル」とは、「それ」が「それ」であることを語ろうとするときに、必然的に他者との関係性を語らざるを得なくなる場のことである。近代カトリックの「ペルソナリズム」、文学における人称の問題、政治参加の概念としての主体などについて、今回の討論全体を振り返りながら、この座談会で得られたある種の知的コンセンサスを再確認していった。終わりには、6名の講演者からコメントをもらい、今後、このような議論の機会がより多くなる願いを互いに語りながら、座談会を締めくくった。

報告者：張瀛子（EAA リサーチ・アシスタント）

2019 年度秋学期 EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）第 5 回

EAA 読書会（「文学と共同体の思想」）2019 年度秋学期の最終回は、12 月 10 日（火）、東京大学駒場キャンパスの EAA セミナー室で行われた。担当者は具裕珍氏（EAA 特任助教）であり、小熊英二の名著『日本社会のしくみ：雇用・教育・福祉の歴史社会学』（講談社現代新書、2019 年）について議論した。

具氏は、まず、当著の内容を要約しながら、参加者と共に振り返った。経団連の正副会長 19 人の構成という具体的な切り口を通じて、日本社会の構成原理を明らかにし、この原理が支えている日本社会の「しくみ」を説明する。簡単に言えば、それは学歴重視（学校名だけ、何を学んだかは別）・年功序列重視（1つの企業での勤務年数だけ）であり、結果、都市と地方の対立や、女性と外国人の立場の弱さなど、社会全体の閉鎖感をもたらしているのである。小熊氏によると、日本社会では、暗黙のルールとなっている「慣習の束」が存在しており、その解明が本書の主題だ。本書において、日本社会は「カイシャ」と「ムラ」によって構成されているとされ、その中での働き方・生き方は 3つのカテゴリーに分けられる：「大企業型」、「地元型」（自営業、農林水産など地元根ざす）、「残余型」（大企業にも地元型にも当てはまらない、非正規労働者など）。小熊氏は、これらについての大量のデータと史料を分析し、日本の経済史と労働史、それからある種の「日本論」を導き出すのである。

参加メンバーの討論は、王欽氏（EAA 特任講師）の本書に対する 2つの疑問から始まった。まず、小熊氏が取り上げている社会問題は日本特有というより、東アジアないし資本主義国家に共有されている。したがって、そこから日本社会の「しくみ」を見ようとするのは、方法論的に問題があるのではないか。次に、小熊氏の叙述は、日本の社会と経済に大きな変化はなかったように進められているが、それは事実なのかという疑問である。例えば 90 年代のバブル崩壊は日本社会に確実に衝撃を与え、さらに近年はその時からまた変化しているのではないか。

具氏は、これらの疑問に対して「どうすれば日本を変えられるのか」が小熊氏の真の問題意識と考えられると答えた。ただ、王欽氏が問うているように、本書は詳細なデータを提示しながら、結論が曖昧になっている感は否めない。なお、本書では学歴重視・年功序列が問題の原因とされているが、注意すべきは、戦後日本の高度経済成長期において、これらは日本企業の強みとされていたことだ。また、小熊氏は本書の中で「日本型雇用」に大いに着目しており、自分もこの点に興味を持っていると述べた。そこで八幡さくら氏は、自身と知人の経験を参照し、ドイツの状況と比較しながら、日本企業における雇用の基準を分析した。すなわち、市場原理主義を取り入れることによって、政府が介入することなく、企業側の利益に合わせて新卒学生を採用するという「しくみ」ができています。その「しくみ」はほとんどの場合、学歴によってポテンシャルの高い学生を判断することである。

なお、小熊氏が提示した 3つのカテゴリーの有効性も読書会メンバーの疑問の対象となった。例えば、伝統的な価値観を持つ「大企業型」と「地元型」に対し、90 年代以降の現代的な社会問題の中において、数が増えている「残余型」は、どうして政治力が低いのだろうか？ 具氏は、これについて小熊氏は、「残余型」の人々が陥っている経済的・環境的な貧困に原因があると考えていると答えた。また、日本社会における不満のあり方、すなわち政治運動の形式の変化は注意に値すると



付け加えた。60年代～70年代の激しい暴力闘争の記憶、日本独特の労働組合の構造と現状、SNSの発展と2011年原発事故の影響など、幾つもの具体例をめぐり、読書会は自由な討論へと進んでいった。

今回の読書会は、対象とする書物の内容に対する疑問に終始したが、小熊氏の著作が提示した問題意識は、自分たちにとって身近な現在進行中の日本についての実体験や感想を交わす機会となった。令和元年も残りあとわずかである。各自の新しい年への展望を思いながら、読書会は終了した。

報告者：張瀛子（EAA リサーチ・アシスタント）

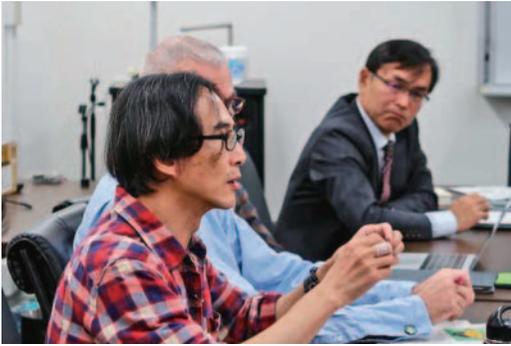
大学再考：リベラルアーツの制度化の問題



2019年12月12日、EAA・ATN（Asia Theories Network：アジアにおける批判的理論研究ネットワーク）共催イベント“Rethinking (Asian) University：Institutionalizing the Liberal Arts”（「大学再考：リベラルアーツの制度化の問題」）が開催されました。以下、ブレガム・ダルグリーシュ氏（東京大学）による報告文を掲載いたします。

On Thursday, 12 December 2019, scholars from several leading universities from around the world met at the Institute of Advanced Studies on Asia (Tobunken) at the University of Tokyo. Hosted by East Asian Academy for New Liberal Arts (EAA) under the auspices of Takahiro Nakajima, scholars from the Asia Theories Network (ATN) were invited to take part in a discussion on Rethinking The (Asian) University：Institutionalising the Liberal Arts (please see below for a list of participants).

The logic behind the ATN/EAA seminar theme derives from the fact that the rigours of neoliberal governance are now part and parcel of the university landscape. While numerous critiques abound with its quantitative management techniques, and most notably the evaluation of knowledge in terms of its instrumental utility, many critics end up playing a zero-sum game with the university, which typically doubles-down on its corporate logic of accountability and the concomitant disparagement of the liberal arts. The aim of the ATN/EAA seminar was to deploy



philosophy to imagine a concrete way forward that goes beyond this bind. Some of the key questions for the participants included how does one institutionalise the liberal arts as a means to rethink the university in an alternative (Asian) manner to that of the European humanist tradition, as well as the neoliberal model? A second key question asked participants to reflect upon how to evaluate the worth of the liberal arts that, firstly, counters neoliberalism's managerialist imperatives and, secondly, demonstrates the benefits in a politico-moral register that speaks to both the socio-economic concerns of parents and the ethico-cultural aspirations of students?

Takahiro Nakajima opened the discussion by highlighting the liberal arts initiative between the University of Tokyo and Peking University. It is founded on what he calls "world philosophy," which is neither radically local nor transcendental. Rather, "world philosophy" is a mode of thinking grounded in the liberal arts that seeks to be universalising in the sense of building bridges across traditions with a view to coexistence. Several ATN members then responded, starting with David Theo Goldberg, who highlighted the general crisis of the humanities in American academe and how, even in state universities, such as the University of California, only about 10% of funding comes from the public purse. This in turn puts pressure on the purpose of the liberal arts that have historically served as a training ground that produces the public good of the cultivated citizen. Yogita Goyal followed on from this and noted how, in the context of India, the rise of Hindi nationalism has seen the weaponisation of the liberal arts to restrict critical thinking through imposing Hindi as a compulsory language. ATN members from other regions in the world alluded to similar tendencies. In Hong Kong, for example, Kwai-Cheung Lo reminded us of the importance of the university as a site that can resist state infringement of basic civil liberties, while Woosung Kang spoke of the need to fight the "internal enemies" of the liberal arts, namely, those (often STEM) faculties that reiterate the neoliberal disparagement of the humanities and question their efficiency and function. For his part, Alex Taek-Gwang Lee expressed concerns about intellectual freedom in South Korea and called for its revitalisation in terms of a critical "experimental thought", which Oscar Campomanes seconded in respect of the Philippines and the push for "eco-critical thinking." Likewise, and drawing on the South African post-colonial context, Sarah Nuttall spoke of the need to articulate a post-humanities "critical studies." It may also necessitate dismantling the colonial university and charting a way forward by drawing productively on the further undoing of its legacies, as well as the affirmative proliferation of knowledge terrains that are

emerging in relation to twentieth century concerns.

The discussion therefore evolved naturally into a consideration of the role of the liberal arts within an idea of the university that seeks to move beyond its humanist (European) blueprint. Hung-chiung Li suggested the need to reduce the number of courses required in any future liberal arts curriculum in the name of fostering deeper engagement with the subject material. Similarly, he advocated a “diagonal university” that could serve as a platform for interdisciplinarity. Such a tendency, Christophe Thouny pointed out, might also involve acknowledging how research is increasingly done at the interface of universities and through scholars collaborating in networks, such as the ATN. It implies an acceptance of the divorce of research from the university and the deployment of the latter for teaching only. In this case, Nobutaka Otake and Yuji Nishiyama argued, we may be left with a streamlined vision of the humanities and their propagation as “neoliberal arts” that cater—especially in the Asian context—to the demands of parents, students and economic actors for a more pragmatic, skills-based education.

In summary, Bregham Dalgliesh observed that the ATN/EAA seminar had been an extremely rich and fruitful exchange of ideas. In some senses the participants had gathered to mourn the death of the university and to question whether the liberal arts are part of the problem. Indeed, they might even be holding back a thorough epistemological, ontological and cultural spring-cleaning of the university and its institutional rebooting and the concomitant rethinking of its mission. In short, the ATN/EAA seminar gestured towards what Sarah Nuttall called the “redistributed university” and its normative reinitialising that might be considered within the purview of the liberal arts. By way of concluding this report, she asks if the “debates about how Universities can make their walls more porous, about what constitutes their inside and their outside, about their publics, and about the figure of the activist-scholars who straddles the harsh boundaries of university and society, have been superseded at some level by the fact that knowledge as such is being driven increasingly by extra-institutional formations, less circumscribed by institutions and disciplines? That knowledge itself is less bounded, unmoored from the University as such, redistributed, uncontainable within its walls and easily searchable?” (Sarah Nuttall. 2019. Afterword : the shock of the new old. *Social Dynamics : A journal of African studies* 45 (2), 280-285. <https://doi.org/10.1080/02533952.2019.1619297>.)

Report by compiled by Bregham Dalgliesh (University of Tokyo)

Associate Professor Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo

Seminar participants

Oscar V. Campomanes (Associate Professor of Literary and Cultural Studies, Ateneo de Manila University, Philippines)

Chun-Mei Chuang (Professor of Sociology, Soochow University, Taiwan)

Bregham Dalgliesh (Associate Professor of Philosophy, University of Tokyo, Japan)

David Theo Goldberg (Distinguished Professor of Comparative Literature, Anthropology, and Criminology, Law and Society, University of California Irvine, USA)

Yogita Goyal (Professor of African American Studies and English, University of California Los Angeles, USA)

Woosung Kang (Professor of English Language and Literature, Seoul National University, South Korea)

Satofumi Kawamura (Assistant Professor of Political Theory and Media Studies, Kanto Gakuin University, Japan)

Hitomi Koyama (Associate Professor of Comparative Political Theory and Global History, Ritsumeikan University, Japan)

Alex Taek-Gwang Lee (Professor of Cultural Studies, Kyung Hee University, South Korea)

Hung-Chiung Li (Associate Professor of Philosophy and Critical Theory, National Taiwan University, Taiwan)

Kwai-Cheung Lo (Professor of Humanities and Creative Writing, Hong Kong Baptist University, HKSAR)

Takahiro Nakajima (Professor of Chinese Philosophy and Comparative Philosophy, University of Tokyo, Japan)

Yuji Nishiyama (Associate Professor of Modern French Philosophy, Tokyo Metropolitan University, Japan)

Sarah Nuttall (Professor of Literature, University of the Witwatersrand, Johannesburg, South Africa)

Nobutaka Otake (Associate Professor of Political Theory, Osaka University, Japan)

Vincenz Serrano (Associate Professor of Literature and Creative Writing, Ateneo de Manila University, Philippines)

Christophe Thouny (Associate Professor of East Asian Cultural Studies, Ritsumeikan University, Japan)

GJS セミナー「和辻哲郎の儒教的絆」報告



2019年12月13日、東洋文化研究所1階ロビーにて、国際総合日本学ネットワーク（GIS）主催、東アジア藝文書院（EAA）共催で第63回GJSセミナーが開催された。発表者はカイル・シャトルワース氏（日本女子大学）、発表題目は“Watsuji Tetsurō’s Confucian Bonds : From Totalitarianism to New Confucianism”（和辻哲郎の儒教的絆：全体主義から新儒家へ）であった。

シャトルワース氏は、はじめに和辻倫理学にしばしば向けられる批判、全体主義の問題について言及した。その批判は、主に彼の倫理学においては国家への服従が個人に求められるというものである。そして本発表において氏は、問柄の理論が展開される『倫理学』上巻（1939）ではなく、具体的事例の分析が見られる『倫理学』中巻（1942、改訂版1946）に注目する。その狙いは次の3点、すなわち1. 和辻倫理学が全体主義と見られる原因の1つとして、当該倫理学における儒教的「五倫」の組み込みがあること、2. 和辻は1946年に『倫理学』中巻の改訂において新儒教的枠組みの内に彼の倫理学を据え直すことで、この批判を乗り越えていること、3. 全体主義であるという非難を乗り越えられたとしても、和辻の家族に関する儒教的立場は未だ保守主義として非難されるものであるということを示すことにある。

これら3つの狙いをもつ本発表の中で、氏は第1に『倫理学』における「五倫」の記述について解説し、続いて第2に和辻を全体主義者として批判する欧米の研究者の議論を取り上げた。特に、これらの批判が、和辻倫理学の儒教的側面に起因するものであると氏は主張した。第3に、牟宗三・唐君毅・徐復観・張君勱による『為中国文化敬告世界人士宣言』（1958）に代表される中国で

の新儒家の登場について氏は言及し、儒教批判に対抗して儒教と民主主義との両立を図る新儒家の試みと同様のものを、我々は和辻の『倫理学』中巻の改訂に見出すことができると述べた。最終的に、氏は新儒教に対する今日の批判を取り上げ、それが和辻の倫理学にも向けられ得るものであると論じた。

会場からは、今日における儒教的フレームワークの可能性や、上巻で展開される和辻倫理学の理論ではなくあえて中巻の議論を分析することの方法論的妥当性、和辻における「民族」の理解などについての質問・意見が出た。今回の参加者の多くは外国人研究者であり、現在上巻しか英訳されていない和辻の『倫理学』について見識を深めることができたという声も聞かれ、世界的な観点から見ても今後の和辻研究・日本研究にとって有意義なセミナーとなったと考えられる。

報告者：犬塚悠（EAA 特任研究員）

ジャーナリズム研究会第1回公開研究会



2019年12月15日15時より、駒場キャンパスにてジャーナリズム研究会主催第1回公開研究会が催された。ジャーナリズム研究会は、東アジアにおけるジャーナリズムの生成が、国際的な現象として起こりながら、これまで各国ごとの枠組みの中で個別に研究が進展してきたのに対し、アジア大の、さらには世界大の視点から見直してみようとの趣旨で、EAA所属教員の前島志保氏（総合文化研究科准教授）の主宰で行われている研究会である。

第一回研究会は、ベトナムの言語社会学と言語政策を専門とする岩月純一氏（総合文化研究科教授）と、日露比較文学・比較文化および日露文化交流史を専門とする松枝佳奈氏（教養学部附属東アジアリベラルアーツイニシアティブ特任助教）を講師に招き、国・言語・分野を越えた枠組みからアジアにおけるジャーナリズムの生成を再検討するという、まさに本会の主旨に適うものとなった。

主宰者による会の主旨の説明に続き、1人目の講師・岩月氏は、「近代ベトナムにおける新聞・雑誌の形成——文字言語の交代との関わりを中心に」を演題に、リテラシーという観点からベトナムにおける新聞、雑誌の発刊がいかなる意味をもつかということについて話された。岩月氏によれば、ベトナムにおいて出版の発展は読者層の形成と並行している。ベトナムが植民地化されると、これまでの漢文、チュノムという在来のリテラシーの外側にフランス語、ローマ字ベトナム語（クォックグー）というリテラシーが形成された。新聞・雑誌の刊行状況は、これら複数のリテラシーの競合を反映しているという。

続いて、岩月氏は、ローマ字化が一気に進んだのではなく、段階的に、また場面や地域によって不均衡な経過をたどったことを説明した。コーチシナは割譲されフランス領となったため徹底的にフランス化されたのに対し、アンナンやトンキンは間接統治でフランス化は緩やかだったのだ。ベトナム側知識人は、(中華)文明への精神的な土台としての言語、文字という意識からそれを奪おうとするフランスの文化侵略に抵抗したが、フランス側はその鎮圧を図ったという。

次に岩月氏は、各地の新聞発行の展開について触れた。フランスが入る前、阮朝は情報流通を警戒していたために新聞発行の歴史はなく、フランス植民地政府がフランス語で新聞を出したのが最初だった。コーチシナでは漢文を公文書に用いるのが禁止され、フランス語とローマ字ベトナム語のみが用いられた。ローマ字新聞は当初、ほぼ官報で面白みはなく、1900年ごろから複数の新聞

が発行され、時事解説や自然科学的な知識の普及記事も載るようになったという。一方、間接統治下のトンキンではドラスティックな政策は行われず、漢文での新聞が19世紀末に発行されていた。そこから20世紀初頭にローマ字併用の新聞も出始め、さらには開明派知識人の集団と植民地政庁とでローマ字新聞が争って出され、読者獲得競争が起こり、そこでは、どの文字を使うかが争点になったという。また、アンナンでは、阮朝皇帝のお膝元として、新聞事業そのものが起こらなかった。ローマ字新聞が出るのは1927年で、ハノイやサイゴンから新聞が流入はしてくるがアンナンから発信されることはない、という状況だったという。

発表の後半は、言語教育政策に関する説明がなされた。コーチシナでは、科挙が廃止され、通訳学校でフランス語とローマ字ベトナム語が教えられた。1900年代に入って、ローマ字を理解する新知識人層が出現し、それによって新聞の発行が可能になった。リテラシーと官吏登用はリンクしており、処世の術が、漢文を学んで科挙で出世するという方法から、ローマ字を覚えて植民地の下級官吏になることへと移っていったという。

他方、チュノムはしばらく残り、全体のリテラシーが一変したわけではなかった。トップ層で何がメインとなるかが変わり、底辺で漢字しか読めない層にはそのための出版が残る。また、漢文を学んだが、科挙に受からなかった人が村で漢字を教えるということがあり、さらに1930年代からは、そうした農村の私塾でもローマ字が教えられるようになった。農村の私塾は1940年代まで残ったが、ローマ字の普及にはこうした農村の漢字私塾が果たした役割が大きいという。

地域性について目を移すと、コーチシナで他の地域に先駆けてローマ字文化がまずできていたことが、ローマ字表記の全国化の足がかりになったという。組版の技術などがコーチシナから他の地域に輸出されることもあった。したがって、地域的差異は、ローマ字の普及の阻害要因ではなく、促進要因という側面もあったのだ。漢文が最後まで残ったのは、フエの宮廷だった。ラストエンペラーであるバオダイ帝がフランスから帰国し親政を始めた1933年より後、1940年代ごろから、公文書が漢文からフランス語、ローマ字ベトナム語へ徐々に移行してゆく。漢文の暦書は1954年まで確認でき、ホーチミンの1946年の日記や1966年の手稿を見ると、漢字とローマ字が混在しているのが確認できるという。

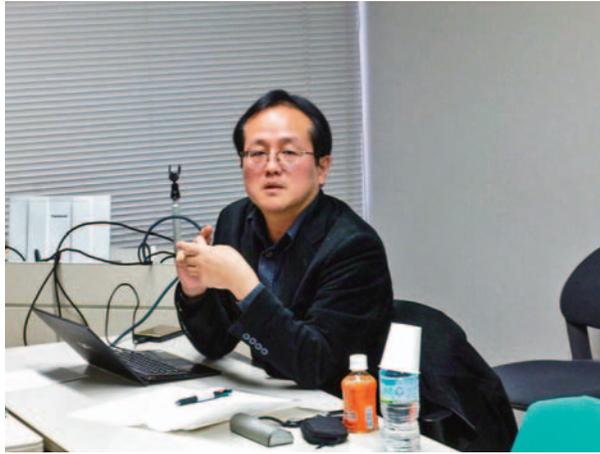
リテラシーがローマ字に一本化されている現在のベトナムからすると、リテラシーの複数性、並行性が見えにくくなっているのではないかという指摘とともに、岩月氏は講演を閉じられた。

フロアからは、中華圏の新聞の流入はあったかとの質問があり、これに対して、フランス政府がほぼ禁輸していて、こっそり流通するか手書きのものが回覧されたこと、中国の新聞からの影響は大きく、中越の新聞の形式・組版などはよく似ているとのことが説明された。また、後の日本進駐時にベトナムのメディアに変化はあったかとの質問には、1940年代ともなるとメディアは固まっておりとくに変更はない、日本側も日本語版新聞は発行しなかったとの答えが示された。

2人目の講師、松枝氏の講演は、「明治期知露派文人ジャーナリストのキャリア形成——二葉亭四迷・大庭柯公の場合」と題され、二葉亭、大庭の両者を並置しながら、彼らがどのようにしてジャーナリストとなったのか、あるいはならざるをえなかったのかを検討していくものであった。

まず松枝氏は、「知露派文人ジャーナリスト」という言葉についての定義を行った。そこで、「知露派」というのが幅広い分野についてロシアの地域研究を行っていたことを示すとともに、「ジャーナリスト」というのが、もともとは職業を指す言葉でなく文学者の意味を含んでいたことを指摘した。

次に松枝氏は、二葉亭、大庭の出自と世代を比較し、ともに江戸末期から明治ゼロ年代の生まれ



であること、下級氏族階級の出身であることを明らかにした。そのうえで、両名が明治維新や自由民権運動を経験し、国が富国強兵策・対外膨張政策を進めるなかで成長したことが、その後の対外意識の形成に大きく影響していると述べた。つまり、ふたりは、立身出世、天下国家、経世済民に関心を持つ世代であったのである。

ほかにも、両者の共通点は存在する。それは、教育や生育環境である。具体的には、漢籍・漢詩文の素養を持っていた点、（これはとくに大庭柯公についてであるが）小学校における「作文」教育がジャーナリストとしての文体を形成した点、政治小説や偉人伝に熱中して外国や革命運動への憧れを醸成していった点、高等教育を修了していない点などが挙げられるという。当時はまだ高等教育を受けていなくとも、ジャーナリスト・新聞記者になることができたのである。また、二葉亭と大庭の共通のロシア語の師・古川常一郎の存在についても言及があった。当時の日本では、ロシア事情をロシアの文献から収集し日本に知らせる人物が必要とされており、二葉亭や大庭はその要求を満たす人物であった。換言すれば、このような時代の要求が、彼らにジャーナリストへの道を拓いたと松枝氏は指摘した。

このあと松枝氏は、二葉亭と大庭が書いた記事の実例を示しながら、両者の差異に言及した。二葉亭は、ロシア情勢（政治や経済など）にも精通し、最新の情報を伝える記事を書きたいと願いながらも、あくまでも小説家たることを世間から求められた。一方、大庭は二葉亭がもっともやりたかったロシアの最新の事情を論説記事として描き、人気記者となっていったのである。

また、具体例を確認しながら、松枝氏は両者の思想面についても触れた。両者とも、自由主義、議会政治、世論の重要性を認識し、新聞雑誌における言論活動の活性化に力を入れた人物であったという。大庭のほうがより実践的であり、言論の力によって普通選挙を促進する活動にも携わり、ロシア革命の進展とともに社会主義・共産主義に傾斜し、入露の際に官憲に捕まり、殺害されたと推定されると紹介した。

以上のように二葉亭四迷、大庭柯公という二者について検討することにより、明治大正期には文学者とジャーナリストは分離しておらず、むしろ一人の人物が両方の役割を担っていたことを松枝氏は明らかにした。さらに、立身出世を夢見ながらもそこから脱落した明治の「士大夫」たちが、それでも経世済民の夢を諦めきれなかった結果、ジャーナリストという道を行って行ったことへ着目しなければならないとも主張した。このような事情でジャーナリストを選びとる経緯は、19～20世紀のロシアの知識人（インテリゲンツィア）と実は共通しているのだという。最後には、二葉



亭、大庭の出自・教育・思想の特徴は、知露派文人にのみ当てはまるのではなく、国木田独歩などの文人かつジャーナリストにも適応可能であることを言い添えた。

松枝氏の講演は、明治大正期の文学者とジャーナリストの境が曖昧であることを、実例に即して的確に示すものであり、作家としての側面ばかりが強調されがちな当時の知識人たちの見方に修正を迫る刺戟的なものであった。

フロアからは、二葉亭と大庭の活躍の仕方の違い、また、二葉亭の署名記事と無署名記事の使い分けについて質問があがり、これに対して、松枝氏は、日露関係の変化とともに、作家と記者のどちらの立場で先に名を成していたのが両者の活動の相違に反映されていた、このため、早くから作家として筆名と本名が知られていた二葉亭が時事的な記事を著す際には無署名で書かなければならなかったのではないか、と回答した。

報告者：高原智史（EAA リサーチ・アシスタント）・石川真奈実（東京大学大学院博士課程）

EAA Workshop “Chinese and Japanese Ethics : History and Prospects”



On December 17, the EAA Workshop 《Chinese and Japanese Ethics : History and Prospects》 was held in Conference Room 1, at the Institute for Advanced Studies on Asia. The object of the workshop this time was to consider the traditions of Chinese and Japanese Ethics and their applications to society in relation to contemporary moral philosophy.

The first presentation was “Maruyama Masao’s Fukuzawa Yukichi, Takeuchi Yoshimi’s Luxun” by Ryohei Tatebe (EAA Research Assistant). He introduced their ways of readings based on his recent interest. In the discussion, the concept of 《subjectivity》 in Maruyama, the Kyoto School’s influence on Takeuchi, and the political possibilities of both inquiries were posed to reconsider the meaning of this approach.

The second presentation was “Exploring the Thought of Filial Piety in Japan : Its Acceptance and Development in Pre-Modern Times” by Mizuki Uno (EAA Project Research Fellow). She presented how the twenty-four paragons were used for moral teaching in China and Japan. Invoking Lu Xun’s reading of the twenty-four paragons (first encountered as a picture book during his childhood), she contrasted the different ways in which the text was used in the Tokugawa and in Meiji eras.

The third presentation was “Mencian Philosophy of Co-action as Compatibilism” by Rika Dunlap (University of Guam). Her main line of inquiry concerns the idea that Mencian discourse on human nature can be read as a form of compatibilism, i.e., a balance between free will and determinism. In a manner recalling Zhuangzi’s argument, questions of punishment and the difference between casual and moral responsibility were discussed following the presentation.

The fourth presentation was “Mozi’s Pantheism and Berkeley’s Theism : Dissolving (Or Not) the Tension between Consequentialism and Divine Command Theory” by Michael Hemmingsen (University of Guam). It was a complicated discussion for non-specialists, but after the presentation, the possibility of comparison with Wang Yangming’s thought, the question of profit, and the difference between determinism and reductionism in this context were posed.

While the central points of each presentation were articulated — and with thanks to Takahiro



Nakajima (EAA Deputy Director)'s helpful moderation —, some participants in the workshop voiced an interest in more context regarding the various traditions of moral and ethical thought, in so far as they were quite diverse and at moments seemingly difficult to square. There were also members of the audience who wondered aloud about how we might apply such moral or ethical theories to our contemporary situation. For example, how might we make sense of a recent case in Kawasaki, in which an unemployed hikikomori attacked others, or the heartbreaking case of filicide committed by a father anguished over the future of his hikikomori son? Similarly, how might these traditions of ethical thought help us to understand the controversial issue of Artificial Intelligence? These issues suggest that sharing fundamental knowledge and opening a horizon to discuss the subject further would be a worthy assignment for the future.

In closing, I would like to thank our two guests for traveling all the way to Tokyo and sharing their thoughts and research with us. I look forward to seeing you both again, and having another opportunity to share ideas. Lastly, I would like to thank Daikin Industries for its continual support for us, and the EAA staff for their help organizing this workshop.

Reported by Hanako Takayama (EAA Project Research Fellow)

EAA セミナー「フランスの公共空間における宗教的中立性の拡大：新しいライシテに向かって？」報告



2019年12月17日、フランス・ポワティエ大学からエマニュエル・オーバン副学長をお招きし、伊達聖伸氏（東京大学）、山元一氏（慶應義塾大学）をディスカッサントとして合同ゼミ形式の講演会を行った。通訳は日本とフランスで弁護士の資格を持つ金塚綾乃氏が務めた。

本講演では、フランス流のライシテの起源、そして近年攻撃的になってきているライシテの性質を解明することを趣旨として、最近の事例を交えながら、フランス社会で度々議論になる公共空間における宗教的中立性について理解を深めた。

オーバン氏はまず、ライシテは学際的なアプローチを必要とするとして、法学、社会学、哲学の観点を提示した。法学におけるライシテは、ギリシャ神話のヤヌスのように、自由と禁止という「2つの顔」を持つ。このようなライシテと共和国との密接な関係性は憲法に記載されているが、ライシテの法学的定義は存在しない。よってこの概念を捉えるためには社会学的アプローチが必要となる。ここではジャン・ボベロが整理したフランスの7つのライシテが参照され、「反宗教的」「ガリカニスム」「アイデンティティ」「政教協約」といった側面からとらえるライシテが紹介された。哲学の観点からは、アンリ・ペナルイスの「倫理的ライシテ」が取りあげられ、これによればライシテは国家公務員に課せられる義務の側面もあり、共同体主義の批判に用いられてはならないという。

続いてオーバン氏は「フロンティア」という語を通したライシテ理解の方法を提示した。まず、「不可分」と謳われるフランスの「領土的フロンティア」として象徴的なのは、ライシテが適用されていないアルザス＝モゼル、仏領ギアナ、マヨットである。これらの地域では政教関係を規定する例外的な法が効力を有し、近年の「合憲性の優先問題」審査（ある法律規定が憲法の保障する自由や権利を侵害していると異議申し立てできる制度）はこうした特例の憲法的価値を認めている。このようなライシテ適用の地域的差異の容認とは別に「知的フロンティア」として、1905年法が目指していた国家と諸教会の分離と宗教的中立性をめぐる解釈の問題がある。リベラルなライシテ誕生の背景にはアリストイド・ブリアンの功績があるが、今日引き起こされるイデオロギー的な論争では第28条で規定される宗教的中立性が争点になっており、この象徴的な現場が学校だ。



学校の宗教的中立性で想起されるのは2004年のいわゆる「スカーフ禁止法」だが、こうした公共空間における宗教的標章に対して、近年ライシテがより攻撃的になってきているとオーバン氏は指摘する。比較的リベラルなライシテを取り入れているコンセイユ・デタは、厳密な中立性を求める訴えが市民からあった場合、そこに強い宗教的勧誘の性質があるかどうかで逐一判断するそうだが、ここでの争点は中立性が課せられるアクターだ。それは主に公的サービスを提供する公務員になるのだが、最近の利用者側や公共空間全体における宗教的標章への拒絶反応が増し、とりわけイスラームに対しては厳しい姿勢が前面に出ている。ここでオーバン氏はライシテの原点がリベラルで寛容さを求めるものだったことに再び触れ、アカデミー・フランセーズ会員の作家、ダニエル・サルナーヴの「好ましいライシテ」(laïcité aimable)を引用しながら、対話を重視することでこうした攻撃的なライシテを回避させられるという展望を示した。

ディスカッサントの伊達氏からは、中立性が課せられるアクターとして、公務員と議員の違いはフランス社会に認識されているのか、実際にはどのような法的な規定があるのかについての質問があった。また、山元氏は、公務員という職種からイスラームの女性が排除されない「より好ましいライシテ」の可能性について問い、「好ましいライシテ」を実現するためには、中立性を守るべき公務員のなかにも、いくつかの段階があるのではないかという論点を出した。ほかにもフロアからは活発に質問やコメントが投げかけられた。限られた時間ではあったが、ライシテを多角的に理解するための視点を得るにあたり有意義なセミナーとなった。

報告者：白尾安紗美（東京大学大学院修士課程）

EAA セミナー「近現代中国の目に映るトルコ」報告



さる 2019 年 12 月 18 日、駒場キャンパス 101 号館 11 号室で、EAA 招聘教授魯濤氏 (Tao ZAN、北京大学) を迎え、「近現代中国人のみたトルコ」を題として講演を行なった。石井剛氏 (EAA 副院長) がモデレーターを務めた。

はじめに、魯氏は今回の講演は具体的な歴史的事実に基づく近代以降中国のトルコに対する認識が主題となると説明した。現代トルコの源流とされる「突厥」は、元来ある部族政権の呼称であったが、突厥可汗国の影響の大きさと情報の不足のためか、ペルシャ・アラブ人の認識において「突厥」はインナーアジア (Inner Asia、内陸アジア) 遊牧諸民族の総称となり、さらに西欧へと広がった。その後、いわゆるチュルク系の各部族や民族の自己認識もかなりこれに影響された。しかし、古代中国王朝は突厥各部族とより頻繁に接触し、情報システムもより発達していたために、古代中国語で書かれた史料には精確な記録が残されており、19 世紀末期以来解読されるようになった古代チュルク語資料と互いに証明し合えるものも多いが、残念ながら現在の学問界に十分に反映されていない状況である。

近代になると、オスマン帝国は 1789 年から一連の近代的改革を行なったが、世界情勢の変動も背景に衰退を示し始め、帝国の支配力の弱体化から領土問題や民族問題が相次いだ。19 世紀末の康有為などの中国知識人はこの状況にいたく同情した。時代が下ると、中国では 1905 年に日露戦争があり、対してトルコでは 1908 年の青年トルコ人革命が起こりオスマン帝国の憲政民主制度が復活したことを受け、中国人にとってオスマン帝国としてのトルコは政治改革と排満革命の参考にもなった。1920 年代、ムスタファ・ケマルによる革命を経たトルコはまた、後進民族が帝国主義に抵抗し、独立を成し遂げ、近代的国家を建設する典型として見られた。トルコは中華民国の知識エリートの政治言説によく取り上げられ、近代化 (modernization) の視点からのトルコ研究も始まりを告げた。一方、階級分析を堅持する左翼知識人はトルコ政権のブルジョワ階級性と世界範囲内の共産主義革命の情勢から出発し、トルコに対して選択的に肯定し、批判した。

魯氏は、このような経緯で近代以降の中国におけるトルコのイメージの大半は、相手との直接な経験と理解がない状況で形成されたと指摘した。しかしそこから同時代の中国人の民族国家や世界情勢への問題意識、個人の意見と立場が見られる。今回の講演で氏はいくつかのテキストを精読を

通じ、その特徴を明らかにした。さらに答氏は改革開放以来のトルコ研究、特に近年のトルコやオスマン帝国に関する翻訳書や一般向けの本の流行を顧み、その背後に中国の国力の上昇、西欧ではない世界への関心の高まり、営利目的のプロモーションなどの思想史的原因があると説明した。

質疑では参加者からコメント・質問が寄せられ、特にトルコの近代化におけるイスラム教の役割について議論が活発に行われた。答氏は近代トルコのイスラム教問題と、近代中国における儒教を含む「伝統」問題との間に類似点が存在すると見て、具体的に3つの傾向性があるとした。ムスタファ・ケマルなどの近代トルコ国家の指導者は基本的にイスラム教を近代化の反対側と見て、宗教を政府の管理の下に置いたが、イスラム教は国民アイデンティティーにもつながるため、トルコとギリシャとの住民交換の際も民族を決める基準（反面では浄化でもあるが）として機能した。さらにイスラム原理主義的思想も消えておらず、近年も保守思想の台頭が目立つようになっている。それに対しては石井氏が日本近代の国家神道問題を提起し、世界の（非西洋の）知識人は類似した問題に直面しているのではとコメントした。

答氏の講演でも触れたように、中国のトルコ研究は「近代化」という目標から始まったものである。これには時代的制限がある一方、「近代化」そのものへの追究は今でも意義が大きい。東アジアの諸文明の近代化に対する比較研究は豊富な成果を出しており、トルコという「非西洋」かつ「非東洋」的ケースは近代化の多様性や未来の可能性を提示してくれるものといえよう。

報告者：胡藤（EAA リサーチ・アシスタント）

EAA/IASA Seminar “The Writing of National History in the Early Period of Turkish Republic : Centering on Turkish History Thesis” 報告

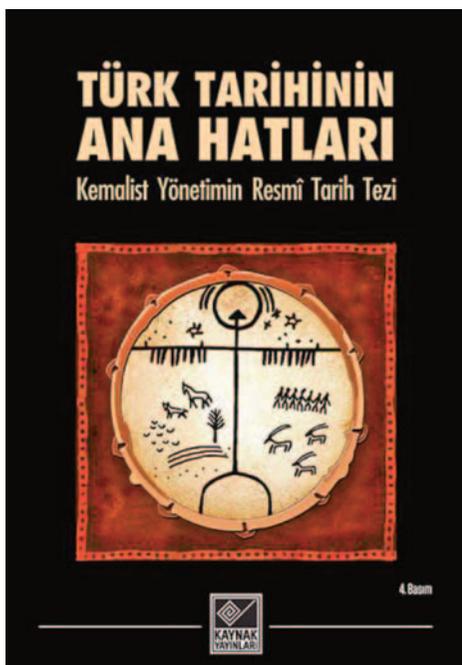


2019年12月19日、東洋文化研究所第一会議室にて、東アジア藝文書院・東洋文化研究所共催のEAA/IASAセミナーが開催された。講演者として、EAA 招聘教授（北京大学）の咎涛氏をお迎えした。モデレーター、コメンテーターを、それぞれ中島隆博氏（EAA 副院長）、秋葉淳氏（東洋文化研究所准教授）が務めた。

咎氏はトルコ近現代史を専門としており、近年はグローバル・ヒストリーの観点から、特にトルコ・中国関係に関する研究も行なっている。当日は“The Writing of National History in the Early Period of Turkish Republic : Centering on Turkish History Thesis”と題した発表を行なった。

発表では、トルコが近代国民国家として自らを規定する際、いかにしてナショナル・ヒストリーを構築してきたのか、そのプロセスが詳細に検討された。咎氏は、トルコにおけるナショナル・ヒストリー（トルコ史観=Turk Tarih Tezi=Turkish History Thesis）誕生の契機として、1933年に行われた、歴史学者・政治家による会議に注目した。その中心的人物となったのが、ムスタファ・ケマル・アタテュルクであった。トルコ建国の父として知られ、類稀なるリーダーとして君臨した彼は、自国史を書くという行為の重要性を熟知していた。巨大帝国であったオスマン帝国は、その支配下に多くの民族・宗教を含みこんだ多文化主義的空間であった。こうした前近代的な帝国の歴史を近代国民国家的語りの中に回収し、国家の輪郭を改めて設定することは、トルコの近代化、そしてトルコナショナリズムの構築にとって必要不可欠であった。

咎氏は、「トルコ史観=Turk Tarih Tezi」誕生の背景には、西洋諸国におけるトルコ表象が大きく影響を与えたことを指摘した。つまり、自己表象を構築しようとする際、必ず他者の目線がそこには必要とされるということである（裏を返せば、「西洋」もまた「東洋」という他者を必要としたということになる）。近代化を遂行しようと努力するトルコの知識人たちにとって、ヨーロッパ世界における歪で一方的なオリエンタルなトルコ表象は、耐え難いものであった。こうしたイメー



西洋世界から一方的に与えられたイメージからの脱却を目指して編まれた自国史 *Türk Tarih Anahatları* には、中東諸国、地中海諸国と並んで、中国との関係についても多く語られている。イメージは Kaynak Yayınları 社のウェブサイトより転載：<https://www.kaynak yayinlari.com/turk-tarihinin-ana-hatlari-p363234.html>

に抗い、自らの手によって自国史を描き直すことは、トルコにとっての悲願であった。また咎氏は、ムスタファ・ケマル・アタテュルクが、当時流行した H.G. ウェルズの *The Outline of History* を愛読していたことに触れ、同書が彼に与えた影響についても指摘した。

咎氏の発表を受けて、秋葉氏は、日本におけるトルコ研究の状況を紹介し、特に、「トルコ史観 = Turk Tarih Tezi」に関する研究として、永田雄三氏および小笠原弘幸氏の仕事を紹介した。また秋葉氏は、トルコの近代化がヨーロッパ近代を強く意識しながら遂行されたという咎氏の指摘を受けて、ツラニズム (Turanism: 中央アジアを起源とする民族の団結を主張する言説) やアナトリア仮説 (インド = ヨーロッパ語族の起源をアナトリアとする言説) についても言及した。

質疑応答では、小笠原弘幸氏 (九州大学) を始め、多くの参加者からコメント・質問が寄せられた。モデレーターを務めた中島氏によれば、中国におけるトルコ研究者は大変少ないという (秋葉氏によれば、日本はトルコ・アメリカに次いでトルコ研究が盛んな地域である)。トルコ同様、巨大帝国から近代国民国家への脱皮を図った経験を持つ中国において、トルコ研究が行われることの意義は大きいと言えよう。また、西洋からの視線を意識しつつ自己イメージを練り上げていった経験は、日本の近代化とも通じる。報告者自身は、トルコ研究については全く無知であるものの、非西洋世界における近代化、帝国と近代国民国家といったテーマは、自身の研究にも深く繋がっており、多くのインスピレーションを得ることができた。

報告者：崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)

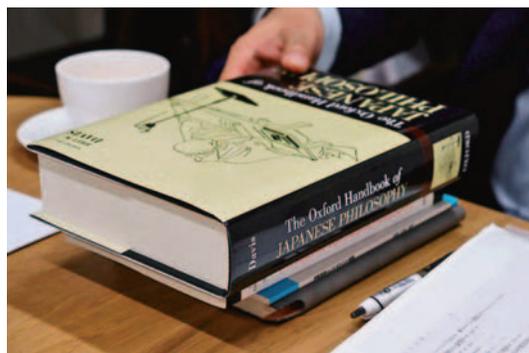
【EAA Dialogue】 Bret W. Davis × 中島隆博



2019年12月19日、EAA本郷オフィスにて、第2回EAAダイアログが開催された。今回のゲストはブレット・デービス氏（ロヨラ大学メリーランド校）であり、本書院の中島隆博氏と対談を行った。デービス氏は2019年9月に *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy* という実に814ページからなる大著を編者として刊行したばかりである。対談では主にデービス氏の研究の背景や、日本哲学の位置づけ、世界哲学の方向性などが話題となった。

本対談で中島氏はデービス氏に、研究の背景としての幼少期から大学時代までの話を尋ねた。デービス氏は、高校時代に西洋哲学と禅についての2冊の本を購入したことや、大学時代に休学して4年弱関西に留学したこと、またアメリカに帰国の後、大学院進学後に改めて京都に留学したことを述べた。アメリカと日本、西洋哲学（ハイデガーなど）と東洋哲学（西谷啓治など）との間を行き来したことが、「意志」をめぐる氏の研究に大きく影響した。特に、後期ハイデガーと東洋哲学には意志の放下という共通したテーマがみられ、氏はそのことに強い関心を抱いてきた。

また対談の中でデービス氏は、欧米の哲学界における非西洋哲学の扱いを問題とした。欧米の哲学研究者に日本哲学や中国哲学の議論を聞いてもらうためには、まず徹底的に自身が西洋哲学をやらないと相手にしてもらえない。そのことに気が付いた氏は、ハイデガーを中心に本を執筆し翻訳を行った。氏が他の編者とまとめた *Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School* (2011) も、このような状況を背景としている。自分の役割は西洋哲学界の端からではなく中心から西谷啓治・老荘思想・禅などを紹介することであるとデービス氏は述べた。この点



について中島氏も共感し、中国哲学の研究者がその分野内にとどまるのではなく、他との交流が必要であると述べた。中島氏が現在「世界哲学」のプロジェクトを進めるのも、安易な「比較哲学」ではなく、「日本哲学」や「世界」そして「哲学」そのものの枠組み自体を問題視したいと考えるためである。

企画から出版までに8年の歳月を要した大著 *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy* は、*Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Edited by J. W. Heisig, T. P. Kasulis and J. C. Maraldo, Honolulu: University of Hawaii Press, 2011) や *Engaging Japanese Philosophy: A Short History* (Thomas P. Kasulis, 2017) と並び、これからの日本哲学研究の基本書となるだろう。本対談では他にも、デービス氏のハイデガー研究や、「哲学」や「人格」といった訳語の問題など、様々な議論が交わされた。詳細はEAAダイアログをまとめた本を将来刊行予定であるため、そちらを参考にされたい。

報告者：犬塚悠（EAA 特任研究員）

EAA「中国近現代文学研究会」第4回



2019年度秋学期EAA中国近現代文学研究会の第4回イベントは12月19日に本郷キャンパス・赤門総合研究棟で行われた。今回は朱羽の近著『社会主義と“自然”——1950-1960年代中国美学論争と文芸実践研究』（北京大学出版社2018年）について、ディスカッションを続けた。

まず、田中雄大氏は「自然」という語彙の含んだ多義性を指摘した。朱羽のいう「第二自然」といわゆる「客観的自然」は意味がだいぶ違っているが、互いに関連するところが少ないように見える。各章に触れている「自然」が様々な意味を持つが、それらの意味の間にある関係性がはっきりしない。

しかも、朱羽は狭い意味での「文学」を議論するときに重点を「客観的自然」に置いているが、いわゆる新民歌、新壁画を論じるときに「第二自然」を強調することが多い。それと同じように、文学作品の「作家」に対する態度とほかの芸術実践における「作者」に対する態度も全然違う、と田中氏は言った。

趙陝氏は、新民歌や新漫才など、朱羽の選択した研究対象について疑問を呈した。なぜこれらのジャンルに絞っているのでしょうか。その上、「社会主義山水画」についての定義を明らかにしていないだけでなく、これらの作者の創作したほかの絵画作品を考察対象に入れていない、と趙氏は言った。例えば、当時スターリンを再現したたくさんの絵画を如何に理解したらいいか。それと関連して、芸術創作における動機と芸術形式の歴史的地位も、作品を評価するのに不可欠なエレメントである。もし「笑い」の問題がまさに歴史的コンテクストから離れては論じられないのであれば、様々な歴史時期を貫く普遍的価値のようなものがあるか、と趙氏は問うた。

陳雪氏は、「社会主義新人」の訴求と克服されるべきものとされる「人性」が、社会主義時期における一連の芸術実践においては、各々の矛盾衝突を露呈したはずだが、「新山水画」に関する論議の中で作者の意図が十分に論じられていないので、結果として、作者が自分の芸術的追求を作品に注いだかどうか、果たして作者自身がそれらの作品を芸術として見ているかどうかは不明のままである、と述べた。

漫才（相声）についての分析は、最も面白い部分だと鈴木将久氏は言った。なぜなら、社会主義



時期の漫才こそ、この時期の社会主義的芸術が内包しているジレンマを表現しているからだ。「笑い」についていえば、「人性」がはたして客観的存在であるか、それとも特定の社会機制をディシプリンにしたものなのか、という緊張に満ちた難問は漫才を通じて浮き彫りにされた、と報告者（王欽・EAA 特任講師）は補足した。同時に、田中氏の提起した問題に対して、報告者は、朱羽の論述が人為的に「自然」のもついくつかの側面を引き分けるのではなく、むしろ、全体性のもつ社会主義的实践がもともと「自然」の意味群を同時に包含しているが、そういう実践の歴史的敗北こそが、いまの研究者が当時における「自然」を「有機的」に論じる適当な言語と考え方を持っていない状況をもたらした、と強調した。

鈴木氏は、朱羽が当時の芸術家たちの政治に対する「抵抗」を論じていないが、それは彼の問題意識がそこにあるわけではないからだ、と言った。朱羽は中国共産党の政策も、共産党リーダーたちの文芸に関する論述さえもあまり引用していない。彼はあくまで共産党と個人としての作家の間にある複雑な関係に重点を置いている。だが、朱羽の廃名論に見て取れるように、彼は実は抵抗しながら社会的要請に応じようとする作者の姿勢を鋭敏的に把握している、と鈴木氏は結論づけた。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

「東西文明学」最終授業発表報告



12月26日に、EAAの授業 Modern Classics, East and West（東西文明学）の最終授業があり、履修者による発表が行われた。授業は学部生向け（履修者は主に2年生）で、毎週指定されたテキストをあらかじめ読んだ上で、テキストを読み込み、それをベースとして議論するものであった。テキスト講読および議論は、基本的に英語で行われた。テキストとしては Michel Foucault の “What is Enlightenment”、Walter Benjamin の “Comments on the Poems of Brecht”、“The Task of the Translator”、魯迅の『狂人日記』『故郷』、竹内好『近代とは何か』などが扱われた。

発表では、最終レポートの内容やその方向性について各自披露した。最終レポートの提出前にアウトプットを行い、議論やフィードバックを通してより良いものへと修正することを目的とした。そのためこの発表は、各自が现阶段で考えていることを、たとえ中途半端な状態で煮詰まっていなくても、とにかくアウトプットするための場となった。

具体的には、各自がこれまでの授業を踏まえ、何かしらのテキストを読み、それについて自由に論じた。履修者は、これまで色々なテキストを講読する中で、その読み方、また色々な考え方に触れてきた経験を活かし、その内容や方法論を、個々の興味関心に沿って自分なりの考えを展開した。

最初の発表者は、Giorgio Agamben における “Contemporary” という概念を踏まえつつ、自分なりの意見を自由に、かつ楽しげに展開した。“Displacement”, “Contradiction”, “Creativity” といった別の概念と結び付けることで、何か新しい考えにたどり着くことができるのかという模索が行われた。発表者は、哲学を研究として続けることを考えており、自分の考えを作り上げる練習をしたいという意図のもと、テキスト自体の解釈にとどまらず、他の概念との共通点・相違点を考察した。一方で、先行研究との類似性について指摘されるなど、今後の課題も明らかになった発表だった。

2番目の発表者は、尾形亀之助（1900-1942）の詩を、（政治的）抵抗の視点、“Contemporary” の観点から読解することを試みた。尾形の作品は、ある意味で凡庸な内容で、政治的抵抗を前面に押し出した詩が見られた当時においては変わった作風であり、その作風が全く違った形での抵抗になっていたのではないだろうか、ということ指摘した。

発表者の問いは、竹内好や魯迅が言うところの「抵抗」との相違点から、尾形の「抵抗」を論じ



られないか、というものであった。具体的に、最大の相違点として“Hopeless”という観点について指摘した。竹内好や魯迅においては、現状がどうしようもないと認めつつも、何かしら抵抗すること・挑戦することを価値あることとして捉えられていたのに対して、尾形亀之助の詩では、現在の状態・今ちょうど感じていることが書かれているのみで、そこには将来についての記述はなく、ましては hope について何も書かれていない。発表者は、この点こそが、むしろ何かしら新しい形での抵抗になっているのではないだろうか論じた。また発表者は、韓国の詩人の生涯を描いた映画を見て、植民地支配下で政治的に間接的に詩を通じて抵抗する姿を見て、それとは対照的な尾形亀之助の詩が却って気になったというエピソードを話した。

発表に対して、実際のところ尾形亀之助は抵抗に成功したのかどうか、成功したとすればどう示すのか、という指摘が出た。着想・発想が面白い一方で、これを論理的に示す大変さをひしひしと感じる結果となった。

最後の発表者はエクソフォニー (Exophony) について論じた。エクソフォニーは母語の外に出た状態一般を指すことである。発表者は、外国語によって自己表現や他者表現を綴る、つまり外国語で文学を創ろうとすることについて議論した。日本人でありながらドイツ語でも文学作品を発表している多和田葉子のエッセイを元に、母国語以外で表現することそのものの可能性について、翻訳に関する議論を交えつつ発表した。

発表中、多和田葉子の興味深い翻訳が紹介された。空港の Terminal を「民なる」と訳したという。発音を共有しつつ、「その地に降り立つことでその国にいる人となる」という意味を持たせた翻訳である。このような音や意味を拡大することを含む、様々な弾力性を有するような言語体験が語られていると、発表者は指摘した。

多和田は『エクソフォニー』の中で「ある言語で小説を書くということは、その言語が現在多くの人によって使われている姿をなるべく真似するというではない。(中略)むしろ、その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せることの方が重要だろう。そのことによって言語表現の可能性と不可能性という問題に迫るためには、母語の外部に出ることが一つの有力戦略になる」と述べており、これは授業で取り上げた Benjamin の「翻訳者の使命」と類似するところがある。翻訳が言語の可能性を拡大するように、エクソフォニーという母語の外部へ出て言語表現すること、文章を書き、話をするとは、言葉に新しい可能性をもたらすだろう。

発表後には、各自が本授業への感想を述べた。哲学を扱うような授業が少なく (特に PEAK の授業では)、また、一つ一つのテキストを深く読むような授業も新鮮だったという意見が見られた。また、授業内での議論では背景に関係なくお互いが尊重されるということが良かったという声や、

時には理解が難しいこともあったが、一方で抽象的に物事を考えるきっかけを得ることができてためになったという声が聞かれた。学部生という早い段階で、Modern Classicsに触れつつ、テキストとしっかり向き合うような読み方に触れる良い機会となったのではないだろうか。

報告者：野波新（総合文化研究科修士課程／EAA ティーチング・アシスタント）

Winter Institute 2020 at NYU-Report 1



1月6日（月）から1月10日（金）にかけて、ニューヨーク大学で Winter Institute が開催された。第5回目の開催となる本 Institute は、毎年世代や専門を超えた学術交流を行なっている。今回は東京大学、北京大学、オーストラリア国立大学、ニューヨーク大学を中心として様々な学者や大学院生が集まった。東京大学からは EAA より羽田正氏（EAA 院長）、中島隆博氏（EAA 副院長）、武田将明氏（東京大学）、王欽氏（EAA 特任講師）、八幡さくら氏（EAA 特任助教）、そして建部良平氏（EAA リサーチ・アシスタント）がニューヨークへと渡った。総勢 47 名の参加者が集まった本 Institute は「Beyond Identity Politics : Global Challenges & Humanistic Responses」という今日的なテーマを掲げ、豊富な視点からの主張や議論が展開された。

長時間のフライトによる疲労を若干引きずりつつも、予定されていた3つの基調講演は強い熱意とともに展開され、初日から密度の濃い議論が繰り広げられた。トップバッターを務めた Hent de Vries 氏は、自身が主張する「Inexistence」という概念の説明とその射程について述べた。講演中では多くの哲学者が引用され、極めて難解なものであったが、コメンテーターを務めた中島氏やボン大学からの参加者である Markus Gabriel 氏によって様々な角度から質問が飛んだ。「Inexistence」は宗教の問題と密接に関わっており、中島氏がハーバースマやロバート・ベラーを引用しながらコメントしたように、一神教を前提とした宗教を素朴に語ることが困難な中、そして様々な形での宗教があり得る現代において、如何に宗教を考える場を確保するかが焦点の一つとなった。また、氏の主張をどのように現実の実践の場において考えていくかという質問も寄せられた。

続く基調講演はオーストラリア国立大学の Paul Pickering 氏と Shirley Leitch 氏による講演である。2019年3月15日、ニュージーランドのモスクで銃乱射事件が起こった。事件直前に犯人は声明をネット掲示板に投稿し、その後自身の手によって犯行が Facebook でライブ配信された。この事件の問題性はそれが大量殺人事件であること、そしてソーシャルメディアを通して発信されたという2つの要素が重なった点にある。両氏はこのような事件の背景として存在している「Alt-Right（オルタナ右翼）」について言及した。現代社会では、グローバル化に伴って人々の交流の拡大が進む一方で、ソーシャルメディアの発展による閉じた言説空間が形成されている。「Alt-Right（オルタナ右翼）」はそういったソーシャルメディアを通じて拡大したもので、ポピュ



リズムと結びつきながら現実の政治に大きな影響を与えている。ニュージーランドで起こった悲劇的な事件はこのような状況から影響を受けたもので、その問題性を両氏は強く主張した。しかし講演は決して悲劇的な口調で行われたわけではなかった。とりわけ印象的だったのは、Pickering氏が最後に述べた、それでも人間を信じたいという主張だった。人間は悲劇的な事件を起こす。しかしそれを食い止められるのも人間であり、人間を信じることなくしては何も進まない。両氏の学問と現実に対する熱意を強く感じられる講演であった。

初日の最後に置かれたのは、現在日本でも注目を集めている Markus Gabriel 氏の講演である。氏は、アイデンティティは「Ontological Identity」「Metaphysical Identity」「Personal Identity」「Social Identity」という四種に分類することができ、とりわけ4つ目の「Social Identity」に注目した。議論の前提として意識されていたのは、フランシス・フクヤマやマーサ・ヌスバウムの主張であり、「Social Identity」は極めてローカルなもので、コスモポリタニズムや普遍性とは遠く離れたものであるという議論である。これは所属している社会によってアイデンティティを認識することが、極めて閉じた体系の中に留まってしまい得ることへの問題提起であった。しかし Gabriel 氏はこのような主張に全面的に賛同しておらず、氏が提唱している新実在論の議論と対応させながら、「social」なものと普遍的なものとのつながりを見出そうとした。議論は多岐にわたり、俄かには理解しがたいものであったが、講演中度々「human」という言葉を使用していた。人間という存在に如何に向き合うか。その語り口から、Gabriel 氏が人間存在について正面から立ち向かおうとする姿勢を強く感じる事ができた。

以上の講演で中心的話題の1つがアイデンティティと社会の関係についてであった。人間は他者と完全に隔絶された存在ではあり得ない。自身の思想や意思によって生きていると考えていたとしても、他者からの影響は免れ得ないものであり、つまりは社会の中で自信を定位せざるを得ない存



在である。その社会には宗教的な空間もあれば、ソーシャルメディアという空間もある。そういった様々な要素の中で如何にアイデンティティを形成、あるいは考えていけば良いのか。学者という一種のアイデンティティを持ち、その知性を最大限に働かせながら、如何にこういった問題に対処していけばよいのか。夜に企画されていたレセプションパーティでも、引き続き活発な交流や議論が行われ、多くの参加者にとって示唆に富む1日であった。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

Winter Institute 2020 at NYU-Report 2



会議2日目は前日と同じ建物のコロキアムルームで開催された。

中島隆博氏（EAA 副院長）は、冒頭で沖縄の首里城焼失に触れつつ、沖縄の問題が今回の会議のテーマである現代のアイデンティティの問題に対して重要な視座を含んでいることを述べ、“Okinawa in the Eyes of Ōta Masahide” と題した発表を始めた。中島氏は、1990～1998年に沖縄県知事を務めた大田昌秀氏を取り上げ、当時の沖縄の政治的背景を説明しながら、沖縄の哲学者である伊波普猷の思想を太田がいかに解釈し、そこから「国家アイデンティティ」と「文化アイデンティティ」と、未来への視点を導き出したのかについて論じた。ディスカッサントの Annmaria Shimabuku 氏（ニューヨーク大学）は、沖縄におけるアメリカの基地問題と経済的状況、今日までの歴史について紹介し、沖縄の複雑性とコスモポリタンとしての特性を指摘した。会場の参加者との質疑では、沖縄とアメリカの関係を今日の香港問題とも比較しようという意見や、香港、台湾、沖縄、済州、グアムなどの中心とは離れた小さな地域が持つアイデンティティを参照することの可能性について、活発な議論が繰り広げられた。

次に、Natian Emmerich 氏（オーストラリア国立大学）による“Expertise and the Claims of Lived Experience”の発表では、我々のアイデンティティが現象学において語られる「生きられた経験」（Lived Experience）が専門知識といかに関係しうるのかについて、現代の技術発展や医療現場での調査をもとに知識獲得の問題を論じられた。ディスカッサントの Zakir Paul 氏（ニューヨーク大学）は、サッカー選手の例を挙げながら、経験がいかに技術となるのか、習慣と倫理の関連についてコメントし、それを受けて会場からも習慣が文化を生み出し、それを体現しているアメリカあるいはニューヨークについて議論が深められた。

短い休憩を挟んで、Yoon Jeong Oh 氏（ニューヨーク大学）が“Cosmopolitan Dilemmas and/or Diasporic Subjects in Younghill Kang’s East Goes West”について発表した。Oh 氏は日本の植民地支配に対する反対運動に参加し、その後アメリカに移住した韓国人小説家・作家の作品を取り上げ、そこにカントやデリダが論じたコスモポリタニズムが見いだされると指摘した。ディスカッサントの王欽氏（EAA 特任講師）はデリダの Hospitality が「法」を必要とするものであること、また Hospitality について柄谷行人が重要な制度的な見解を示していることを補足した。会場からの質問として、マルクス・ガブリエル氏（ボン大学／ニューヨーク大学）がカントの「コスモポリタ



ン」はドイツの市民社会に関して取り上げられる概念であり、デリダや現代の「コスモポリタン」とは異なる文脈であることを指摘した。

武田将明氏（東京大学）の発表“Kicking Away the Gold Coins : Ōtsuka Hisao's Reading of Robinson Crusoe and the Human Archetype of Post-War Japan”では、経済学者大塚久雄がロビンソン・クルーソーへいかに資本主義の「人間類型」を見出したのかを、Daniel Defoe の *Robinson Crusoe* および Joachim Heinrich Campe の『The New Robinson Crusoe』と比較検討して明示した。ディスカッサントの John Y. Zou 氏（北京大学／重慶大学）は大塚と Max Weber の解釈の親近性に触れた上で、大塚の議論と国家資本主義とがいかに協調しうるのかについて問いかけた。会場との質疑では戦前の日本の植民地主義の文脈、フォーコーの市場空間、グローバル貿易との問題など、多岐に渡る議論が行われ、活況の内に午前中のセッションが終えられた。

報告者：八幡さくら（EAA 特任助教）

Winter Institute 2020 at NYU-Report 3



会議3日目は19 University PlaceのThe Great Roomで行われた。最初の発表者 Annmaria Shimabuku 氏 (ニューヨーク大学) による、“The Female Voice as Trace : The Intertextual Odyssey of the 18th Century Ryukyuan Poetess Unna Nabi throughout the Chinese, Yamato, and American Worlds” では、琉球王国の歴史に触れながら、18世紀の女性詩人「ウンナ ナビィ」による詩から現代の作家である崎山多美『Swaging, Swinging』までに連なる沖縄の女性問題を論じた。ディスカッサントの Mark Kenny 氏 (オーストラリア国立大学) は、沖縄のアイデンティティの独自性について賛成し、オーストラリアの政治的状況と比較しつつ、文化とアイデンティティ形成のために時間が必要であることを強調した。中島隆博氏 (EAA 副院長) は伊波による琉球の起源を詩に求めた試みの背景に触れた上で、それが近大において無視されてきた万葉集と重ね合わせられる理由を説明し、ナビィの詩がいかに政治的権力によって適切化されたのかと質問した。ほかにも参加者との間で、言語学的観点からの質問や万葉集における女性の詩についても議論が行われた。

Carolyn Strange 氏 (オーストラリア国立大学) の発表 “Identifying Victims of Violence by Gender : Historical Constructions and Future Considerations” では、家庭内暴力の問題に関する19世紀の様々な文献から男性と女性の表象について分析し、オーストラリアの事例を紹介した。ディスカッサントの Ulrich Bear 氏 (ニューヨーク大学) は、認識論的観点から、名前をつけるこ

とによって、その名前と実際の世界における実存や現状と乖離してしまうという危険性を指摘した。羽田正氏（EAA 院長）はグローバル・ヒストリーの観点から 19 世紀における地域理解について問題を指摘した。

王欽氏（EAA 特任講師）は “The Rhetoric of Carl Schmitt’s “Forward” to The Nomos of the Earth” というタイトルで、今日の地政学の問題に関わるカール・シュミットの『大地のノモス』（1950）を取り上げ、その「ノモス」概念が意味するところを、シュミットがゲーテの詩をいかに読み違えたかを両者のテキストを比較検討しながら検証した。ディスカッサントの Markus Gabriel 氏（ボン大学／ニューヨーク大学）は、まずシュミットとハイデッガーの関係について紹介し、近年のハイデッガー研究によって明らかになりつつあるその哲学者の実像に対して警鐘を鳴らした。さらにゲーテの詩とシュミットの読み替えの両者に関係するドイツ語の言語、例えば、「earth」という語が「ガイア」と関係することなどを指摘しながら、シュミットの読み替えの意義について議論を膨らませた。会場の参加者が様々な観点から質疑に参加し、活気ある議論が繰り広げられた。

John Y. Zou 氏（北京大学／重慶大学）の発表では、“Richard’s Proverbial Horselessness : The Person of State and Politico-Cultural Transformation on the Shakespearean Stage” と題して、シェイクスピアの『リチャード三世』における「馬」の表象の問題を論じた。ディスカッサントの Avital Ronell 氏（ニューヨーク大学）は発表者 Zou 氏との思い出に触れながら、シェイクスピアの演劇のみならず劇や文学における個々の表象について、様々な例を引きながら自論を展開し、会場の参加者を魅了した。プログラムが終わった後も、発表者と参加者の間で引き続き議論や様々な意見交換が行われ、今後の研究者間の新たな関係構築が期待できる一日となった。

報告者：八幡さくら（EAA 特任助教）

Winter Institute 2020 at NYU-Report 4



会議4日目。午前は引き続き各大学の研究者による発表が展開され、午後は大学院生による発表がなされた。最初の発表者は八幡さくら氏（EAA 特任助教）であった。氏はシェリングの他、日本で活発に開催されているアートフェスティバルについて研究しており、今回の発表では2019年に大きな社会的関心を集めた「愛知トリエンナーレ」の開催中止をめぐる問題を扱った。アートは政治から独立したものであるが、それがアイデンティティなどの問題と結びつくと、政治とも無関係ではいられず、その関係が極めて複雑なものになってしまう。この問題は続く Peter Alwast 氏（オーストラリア国立大学）の発表にも関係しており、氏はジャン＝リュック・ナンシーの理論を用いながら、アイデンティティ・アート・政治の関係について発表した。両氏の発表後はアートの効力やその独立性についての質問が上がり、音楽や映像などのアートの様々な分野も考慮に入れながら、なぜ今アートかという問題が議論された。

午前の後半は、Cheng Xing 氏（北京大学）の発表で始まった。中国近代文学を研究する氏は、金庸の武俠小説を文学史の中で如何に位置づけるかという問題を提起した。中でも小説の主軸となる「俠客」を、儒学者であり官僚でもあった前近代中国の「士大夫」のアイデンティティと結びつけながら論じた点に特徴があった。続く Terhi Nurmikko-Fuller 氏（オーストラリア国立大学）の発表では情報社会やデータエコノミー下におけるプライバシーについて論じられた。氏の主張はビッグデータとその解析によってプライバシーが侵害されてしまうことに直接抵抗するのではな

く、情報自体の多様性を拡大し、人々を安易にカテゴライズすることや歴史的なバイアスに左右されない仕方でデータサイエンスに向かっていくべきというものであった。

午後からは各校の大学院生による発表であった。翌日 10 日の午前のセッションも含めて、計 11 名の発表が行われた。

9 日の前半は Katie Cox 氏（オーストラリア国立大学）、Lin Juntao 氏（北京大学）、そして建部良平氏（東京大学）のセッションであった。Cox 氏は映画「アイアン・マン」の分析を通して、identity politics と国家安全保障の問題について論じ、Lin 氏は近年中国の経済発展特区として注目されている深圳が持つイメージについて、そして建部氏は丸山真男と竹内好という戦後日本の思想家の「近代」に対する向き合い方の相違について論じた。後半は Qi Yue 氏（北京大学）、James Mortensen 氏（オーストラリア国立大学）、Huang Wan-Chun 氏（ニューヨーク大学）のセッションである。Qi 氏は東アジアを主たる考察対象としながら、「境界 border」が持つ様々な意味を分析した。Mortensen 氏は政治における「security」の概念について、ホッブスの議論を参照しながら論じた。Huang 氏は中国の文学者である蘇童の『河岸』に現れている「中国人」としてのアイデンティティについて分析した。

報告者：建部良平（EAA リサーチ・アシスタント）

Winter Institute 2020 at NYU-Report 5



最終日である10日は、Lee-Anne Sim（オーストラリア国立大学）、Wu Shuang（北京大学）、Kathrin Witter（プリンストン大学）、Haziran Zeller（ベルリン工科大学）、Tan Zijian（オーストラリア国立大学）たち五名の大学院生の発表であった。Sim氏は新たな金融システムの可能性を模索している。その際一つの巨大なシステムを志向するのではなく、identityが多種多様であるように、様々な連帯を基礎においたシステムを考えることの必要性を述べた。Wu氏は孫文がアメリカの政治思想を吸収しながら打ち出した主張を分析対象として「訓政」の問題について論じた。Witter氏とZeller氏は合同で発表し、テオドル・アドルノを参照しながらパーソナリティと社会の関係について、昨今のidentity politicsの状況を踏まえながら論じた。最後のTan氏は魯迅の『野草』をニーチェの思想などを参考にしながら分析した。その過程の中でモーリス・ブランショのニーチェ読解にも言及し、魯迅のテキストを様々な視点から読解しようという試みが展開された。

合計11名の大学院生の発表は、専門分野も幅広く刺激の多いものであった。また、初日のレセプションや会議の合間に互いの研究や大学の状況などについて話すことができ、極めて有益な機会となった。大学院生の発表後、そのまま全体の総括に入った。5日間の濃密なプログラムを経て参加者にはやや疲労の影も見られたが、この期間で得られた課題や問題について意見交換がなされた。大学院生からシニアの学者まで、幅広い年代で構成された本Instituteは、参加者全員にとって普段の研究生活の中では得難い機会である。最後に今回の全体責任者である張旭東氏（北京大学／オーストラリア国立大学）が改めて参加者に対して謝意を述べ、盛会のうちに閉会した。

報告者：建部良平（EAAリサーチ・アシスタント）

EAA セミナー 「ライシテ再考——中国・日本の視点から」報告

2020年1月7日、東京大学駒場キャンパス101号館11号室にて、EAA セミナー「ライシテ再考——中国・日本の視点から」が開催された。講演者は歴史家の咎涛氏（Tao ZAN、北京大学副教授）であり、伊達聖伸氏（東京大学准教授）がディスカッサント、石井剛氏（EAA 副院長）が司会兼通訳を務めた。講演題目は「トルコのライクリッキ——宗教と国家の関係あるいはイデオロギー」で、近現代トルコの政教関係を指す「ライクリッキ」の歴史と変容がテーマとなった（原題は「土耳其的世俗主義：政教关系与意识形态」）。本報告では以下、その様子をまとめる。

トルコのライクリッキの形成過程を概観したあと、咎氏が強調したのは、ライクリッキを定義することの難しさである。たしかに、1928年以降のトルコに国教はもはや存在していないし、1937年以降はライクリッキが憲法に記載されるまでになっている。しかし、その内実が明確に定義されているとは言えないし、トルコの近代化を進めたムスタファ・ケマル（1881-1938）も、ライクリッキを明確に定義しているわけではない。それゆえ、咎氏によると、政治指導者が変わるたびに、ライクリッキはその内実を変化させているという。

そこで咎氏は、ほとんど対照的な2つのライクリッキを示した。ひとつは、20世紀前半にケマルが構想した「積極的なライクリッキ」である。トルコの近代化を主導したケマルは、理性主義的なライクリッキを構想している。ケマルの考えでは、近代人は宗教を私的領域にとどめ、理性的に思考すべきであり、世俗国家は宗教制度と袂を分かつたねばならない。ケマルは権威主義的かつ急進的に、この構想を実現しようとしている。このケマル・モデルに対しては、世俗の国家権力の安定化と引き替えに宗教的自由の後景化をもたらしている、という批判がなされることもある。

もうひとつは、現職大統領のエルドアンが構想する「消極的なライクリッキ」である。咎氏によれば、エルドアンは近代的語彙を用いてライクリッキを再解釈している。実際、エルドアンの公正発展党は近年、ライクリッキは反宗教的イデオロギーではなく、宗教的自由を保障する平和の原理であるという見方を、公式に表明するようになっていく。ライクリッキという語彙を掲げることによって、軍部を中心とする世俗主義勢力に配慮しているようにみせながら、ライクリッキの内実を再解釈することで、支持基盤である政治的イスラーム勢力の要求にも応じているのである。

咎氏は最後に、ライクリッキが変化している理由を、社会経済的に説明した。咎氏によると、か





つての政治指導者の支持基盤は、都市部の裕福な西洋的知識人だった。しかし、1990年代以降は状況が変化している。国内経済の発展により、政治的にイスラーム寄りの中産階級が生じている。さらに、かつてから農村部にはケマル主義が十分浸透していなかったが、近年はそうした農村部の人びとが都市部に流入するようになってきている。啓氏によると、こうした政治的にイスラーム寄りの新興勢力の台頭が、エルドアンによるライクリッキの再解釈をもたらしているという。

発表に続いて、啓氏と伊達氏のあいだで質疑応答がなされた。フランスのライシテを専門とする伊達氏はまず、トルコのライクリッキとフランスのライシテでは、「積極的」および「消極的」という形容詞の用いられ方が正反対であることを指摘した。啓氏は理性主義的なライクリッキを「積極的」、宗教勢力に好意的なライクリッキを「消極的」と整理したが、フランス元大統領のニコラ・サルコジはむしろ、理性主義的なライシテを「消極的」としたうえで、宗教の公共性を認める「積極的」なライシテを提唱したという。

質疑応答のなかで特に議論されたのは、翻訳の問題である。伊達氏は、ライクリッキの定義の難しさとその歴史の変遷を強調する啓氏に共感を表明しながら、ライクリッキやライシテといった言葉をどのように翻訳するかが、地域比較研究にとって重要なポイントになるという見解を示した。啓氏はこの指摘をうけて、ライクリッキやライシテは中国語でも「政教分離」と訳出されるが、少なくとも歴史的にみれば、ライクリッキやライシテに向かう動きには、「反教権運動」という訳語をあてたほうが、その内実に即しているのではないかと応答した。

翻訳される側の言葉の問題だけでなく、翻訳する側の言葉の問題にも議論は及んだ。中国語で「世俗的」というと、「俗悪である」というネガティブなニュアンスが含まれかねないし、日本語の「世俗」はたんに「世間」を指すこともある。翻訳元の言語の概念的な外延と、翻訳先の言語の概念的な外延は、必ずしも一致しない。トルコを専門とする中国人研究者と、フランスを専門とする日本人研究者。両者のあいだでなされた翻訳をめぐる問答は、比較困難なものを比較すること、翻訳困難なものを翻訳することが、地域研究の醍醐味のひとつであることを感じさせた。

報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

EAA「中国近現代文学研究会」第5回

2019年度秋学期 EAA 中国近現代文学研究会の第5回イベントは2020年1月16日に本郷キャンパス・赤門総合研究棟で行われた。今回参加者は趙樹理『邪不圧正』に対する倪文尖の読解を羅崗の読解と比較しながらディスカッションした。

まず、報告者（王欽・EAA 特任講師）は2つの論文におけるそれぞれの問題意識を指摘した。倪氏の『如何に趙樹理を精読すべきか』は、現代読者、とくに近代西洋小説に慣れている読者のもつ文学に対する基本的な理解のし方と読解の策略を出発点として、趙樹理のテキストをもって違う文学的表現と受け取り方を打開しながら、「主体」「人物」「環境」など、文学的テキストを読むときに用いられる一連の概念を批判的に反省しようとする。それなしには、趙樹理を含んだ所謂「十七年文学」の有している歴史的意味と文化的・政治的意味が適当に現代の歴史的な文脈に参与するはずがないし、現代読者の文学を読む経験にぶつかりながら、読者を自分の置かれる時代の歴史性、とくに社会主義時代との連続性と非連続性を批判的に意識させるはずがない。一方で、羅氏の『「事情」そのものに戻る』は『邪不圧正』の核心問題に切り込んで、小説の中であらわれる「旧暦時間」「民国時間」「新暦時間」という三種類の紀年システムの差異と関連性を強調し、そこに提示されている農村社会における土地革命の正当性、そして経済的問題に潜んでいる階級闘争と政治主体性の問題を論じている。

倪氏と羅氏は同じように「説理」の問題に焦点を当てている。ただ、前者はこれを社会主義時代の「暴力」問題に関連しているのに対して、後者は「理」と前近代社会のもつ「慣習」の関係を強調している。兆候として言えば、羅氏の読解は趙樹理のリアリズムが体现しているジレンマをよく露呈させている。それは、一方で、「慣習」は前近代社会において社会関係・人間関係の基礎を築いたが、他方で「礼」としての「慣習」の腐敗はまさに社会不平等と圧搾を覆い隠す手段になってしまう、ということである。「説理」において、社会主義の土地改革が直面したのは「慣習」そのものではなく、「慣習」の腐敗といってもいいかもしれないが、そうしたら、如何に社会主義における「新たな倫理」を前近代社会における倫理的秩序と調和すればいいのか。十分な答えができれば、「伝統に戻れ」というようなスローガンが響いてもおかしくない。

鈴木将久氏（人文社会系研究科教授）は、両氏が共に竹内好の趙樹理論を論及しているが、竹内



のはただ趙樹理を研究するための入り口を提示しているだけで、深く研究する方法を提供していない、と言った。実は倪氏の論文はこの点をちゃんと表している。2つの論文を読んだうえで強く感じたのは、「社会史視野」に従っている研究者が歴史の現場へ戻ろうとしているが、倪氏と羅氏があえて現代という視点から趙樹理を読もうとしている。しかし、あくまで現代の視点を強調しても、「社会史視野」が欠けてはならないものである。たとえば、「礼俗社会」を論じる場合、大事なものは当時の農民と知識人はこの問題をどう理解していたか、ということである。

趙樹理の使う言語に触れたのは、趙陝君氏（北京大学）であった。趙樹理は方言を意識的に使いながら改造した、と彼女は同郷人として気づいた。彼女にとって問題は、もし現代読者の審美感性はすでに西洋化されてしまったら、もし趙樹理のテキスト——倪氏が指摘したように——「大きい問題の欠片」をあらわしていたら、これらのテキストに面したとき、どうしたらいいか。他方で、中国の南方と北方はだいぶ違うから、『邪不压正』を当時の土地改革を全面的に反映する小説として読むではいけないかもしれない、と趙氏は述べた。このテキストが1948年に書かれたという事実を勘定に入れたら、それをほかの土地改革を表象しているテキストと一緒に読まないといけないと把握できない。

裴亮氏（武漢大学）は、両氏の論文を対照して面白い疑問を呈した。つまり、趙樹理の文学における開放性と説話性を倪氏が強調しているのに対して、羅氏は時間と事件と世間の間に、うまく関係性を想定している。もしそうでしたら、このような巧妙な仕掛けをもつテキストの要請している精読は、「物語る」ことに矛盾していないであろうか。あと一つ、羅氏の論じた「空間」の問題について、裴は趙樹理そのほかの作家が「自然風景」のような描写を意識的に省略し、自分の作品を「五四」伝統と隔てていることを強調した。「自然風景」を表象することを諦めることによって、趙樹理は時間の重要性を浮き彫りにした。

これについて、王氏は羅氏の読解が趙樹理を読むことにおける緊張に満ちた経験を指摘した。それは、裴亮のいう通りに、羅氏はうまく『邪不压正』の有する三つの時間構造を描いているが、こういう認識に至るためには、この小説を再読・精読せねばならない。いいかえれば、読者は空間的に精読しなければ、羅氏の結論に至らない。こういう経験は、おそらく趙樹理が自分の文学に対しての規定と矛盾しているかもしれない。この意味で、逆説なことに、趙樹理の小説を系統的・連関的テキストとして読むか、それとも彼の小説を欠片に満ちた不連続的テキストとして読むか、ということ、読者が彼の小説を読む前に下ろさなければならない決断である。

鈴木氏は、1980年代の「純文学」のコンテキストの中で、趙樹理があまり注意されていないし、魯迅が注意されているのも彼の「非政治的」テキストのためだ、ということ強調した。1990年代に入って研究者はだんだん趙樹理を再読し始めるから、彼のテキストに「強い読解」を入れても仕方がないことである。当時の中国人の研究者にとって、1980年代に盛り上がった啓蒙論、文学と政治の関係論などのテーマを反省するため、竹内の趙樹理研究は大事な手掛かりなのかもしれない。だから、両氏は同じ意味で趙樹理を手掛かりとして文学と政治の関係を考えている、と鈴木氏は結論した。これに対して、裴氏は竹内の矛盾論を引き合いに出して、竹内の趙樹理論が同じような関心の延長にあると述べた。1950年代には、趙樹理のテキストが日本に紹介され、ある意味で日本知識人は彼のテキストを通じて現代中国と中国共産党を認識した。だから、趙樹理は当時日本で起きた「国民文学論争」にも間接的に繋がっているかもしれない。

報告者：王欽（EAA 特任講師）

EAA Forum “On Secularism from Historical and Regional Perspectives”



On the morning of January 17th, the EAA Forum “On Secularism from Historical and Regional Perspectives” was held in Conference Room 1 of the Institute for Advanced Studies on Asia.

Following the opening remarks by Dr. Takahiro Nakajima (EAA Deputy Director), who questioned how we might redefine terms such as secularization and secular that are both modern and traditional, three presentations were given.

The first presenter, Dr. Emi Goto (IASA), gave a talk entitled “Post-secular Challenges to the Unification of Islamic Discourse”. Based on the work of Egyptian intellectual Abu Zayd (1943-2010), she discussed the relationship between religion and society in contemporary Egypt. Zayd also taught Arabic at Osaka University. On Dr. Goto’s account, Zayd does not place emphasis on the act of interpretation but rather the significance of the text itself. In this fashion, he tried to go beyond a text instead of confining himself to its interpretation, thereby hoping for some guidance regarding the real world. After her presentation, members of the audience asked about similar thinkers, the effects of the revolution in Egypt, and criticisms of the West.

The second speaker, Dr. James Babb (ISS), gave a presentation entitled “The Impossibility of Complete Secularization : Lessons from the History of World Political Thought”. Raising the issue of secular tolerance of religion, Dr. Babb outlined the problematics of ethical systems not based on



region, the religious origins of secularism, and the example of Japan from the nineteenth century. Specifically, he pointed out the function of ritual after Meiji modernization, including connections between Shintoism and the emperor system. Following the presentation, the discussion explored questions concerning the translation of shukyo into English, the existence of Komeito, and the effects of Westernization in the Meiji period.

The last speaker, Dr. Zan Tao (PKU), gave a presentation entitled “The Changing of the ‘Definition’ of Laiklik in the Turkish Context”. Taking the post-2002 AKP government into account, Dr. Zan carefully charted the use of the term laiklik in official documents. In particular, he focused on changes that followed independence from the Ottoman Empire, especially the struggle between the republic and laiklik, the separation between religion and political affairs, and the freedom of belief. During the discussion following the talk, the audience was particularly interested in contrasting laiklik with French laïcité, and other European (e. g., British) approaches to secularism.

Reported by Hanako Takayama (EAA Project Research Fellow)

EAA 若手研究発表支援活動報告：Chuo-UHM-UTokyo Student Conference



(Plenary Lecture を聴いている参加者の様子)



(ポスター発表会場の様子)

2020年1月17日にハワイ大学マノア校にて開催された、Fifth Chuo-UHM-UTokyo Student Conference on Linguistics, Psycholinguistics, and Second Language Acquisition に出席した。この学会は、言語学や心理言語学、第2言語獲得について学ぶ、中央大学、ハワイ大学マノア校、東京大学の学生が、自分の研究について発表し、学生間での交流を図る学会である。研究発表では、他大学の学生のみならず、他大学の教授からも様々なコメントやアドバイスを受けることができる良い機会である。

学生の研究発表の前には、ハワイ大学マノア校の Bonnie D. Schwartz 教授とインディアナ大学の Rex A. Sprouse 教授による Plenary Lecture があり、第3言語獲得に関する講演をしていただいた。

Plenary Lecture では、第1言語や第2言語が第3言語でのふるまいに与える影響や、第3言語の獲得モデルに関して、データを示しながらお話しいただいた。第3言語獲得の研究について学ぶことのできる貴重な講演であった。

その後、ポスター発表形式での、学生による研究発表が行われた。ポスターセッションは、約10人ずつの3つのセッションに分けられており、それぞれの学生が、自分の研究に関する発表を行なった。

発表の内容は、第2言語に関する研究が多くみられたが、その中でも、文の構造に関するものや、語の形態的要素に関するもの、音に関するもの、など多岐にわたるものであった。私自身も、第2言語に関する研究を行っていることもあり、大変興味深い発表が数多くあった。他大学の学生がどのような研究をしているのかを知ることができると同時に、他大学の学生や教授と、自分の研究に関する議論を行うことができる場であった。

報告者は、“Is universal quantifier sensitive to distance? : A case study of Japanese nested structures” というタイトルで発表をした。これは、第1言語文処理に関する研究で、どのような場合に文理解中の処理負荷が増加するのか、を眼球運動測定という手法を用いて調べたものである。複数の節を含む文を読む際に、関連する要素同士が離れた位置にあるときには、それらの要素



(ポスター発表の様子)

が隣同士にあるときに比べて、処理負荷が増加する場合がある、ということが知られているが、その処理負荷の要因となるものをより詳しく検討した。発表において、“なぜ”そのような場合に文理解中の処理負荷が増加するのか、という点について、他の参加者と議論することができた。

ポスター発表の後は、学会に参加している教授や学生が交流できる reception の時間も設けられ、ポスター発表の限られた時間では議論することのできなかつたことについて意見交換をしたり、他大学の学生の生活について話したりすることができる時間であった。私も、この reception の時間に、他の研究者と話すことができ、より多くのコメントやアドバイスを頂くことができた。また、日本だけではなく、海外の大学院生が普段どのような生活を送っているのかを聞くことは、自分が学生生活を送る上で、良い刺激となるのではないかと思う。

ハワイに滞在中、ハワイ大学マノア校と東京大学の教授とともに、共同研究プロジェクトに関するミーティングも行った。このプロジェクトは、第2言語での文処理に関する研究で、リアルタイムでの文理解中に、知識を使って予測をしながら処理しているのか、さらには、第1言語と第2言語の違いが、第2言語における文理解中に、干渉効果を引き起こすのかどうか、を検討するものである。ミーティングでは、実際にこれから行う眼球運動測定実験について、細かい点を話し合い、実施に向けて大きく前進することができた。

今回の若手研究発表支援を受けての活動では、普段交流する機会がほとんどない他大学の学生たちと交流し、他大学の学生や教授たちと自分の研究について議論することができた。今回、得られたコメントやアドバイスを熟考して、これからの自分の研究に役立てたいと考えている。また、共同プロジェクトに関するミーティングも行うことができ、充実した滞在とすることができた。今後、この研究も進め、研究成果を発表できるよう、共同プロジェクトにも引き続き取り組んでいきたいと思う。このような機会を与えてくださった関係者の方々、そして、学会を含む今回の滞在中関わった方々に、ここで深く感謝の意を記したい。

報告者：津村早紀（東京大学大学院博士課程）

【EAA Dialogue】 Tao ZAN × 羽田正



On January 21, 2020, EAA welcomed Professor Zan Tao as our guest. Professor Zan is Associate Professor in the History department and Area Studies Institute of Peking University, specializing in Turkish and Ottoman Studies. His many publications include a book entitled *Modern State and Nation Building: A Study on Turkish Nationalism in the Early 20th Century*, and several articles on modern Turkish and contemporary history. Professor Haneda Masashi, Vice President and Director of EAA, was a host and led the dialogue. The two exchanged their personal experiences studying in and about Turkey and Iran, as well as their thoughts and perspectives towards world or global history.

Professor Haneda advocates the need for a new world history and has been researching this theme for more than a decade. Professor Zan's research focus on Turkey and the Ottoman Empire, which belongs to the field of world history in China. Thus, they first engaged in a discussion of the current situation of world history studies, and how differently the meaning of world/global history has been understood in different languages and academic systems. Zan introduced the concepts used by scholars in China, including *quanqiushi* (全球史, the entire globe) for global history, and *kuanguoshi* (跨国史, literally, across countries) for transnational history. In the Chinese context, the word "world" in world history is understood as foreign, and world history in China, as it was formerly understood in Japan, refers only to the history of other countries, excluding China's own national history. The question of how to integrate national history into the writing of world history is a shared task for both academic systems.

Professor Haneda commented that since the 1960s, scholars in Japan have been making an effort to integrate the national history of Japan into the framework of world history, yet a distinction between the two disciplines still remains. Echoing this, Professor Zan introduced a recent project concerned with writing a history of the modern world, from 1500 to 1900. He indicated that the part



addressing China has proved the most challenging, because four hundred years of modern Chinese history need to be covered only within one and one-half chapters, which the historians of Ming and Qing China find very difficult. Regarding the different nuances of world versus global history, both Professors Haneda and Zan agree that world history is the vision. Meanwhile, since it is almost impossible for people to understand the entire globe, global history should be recognized only as an approach, and global historians implement this approach by taking up in older historical materials from a fresh perspective.

The two then shared how they grew interested in the subject matter of their studies, along with some memories from younger years. Professor Zan first became interested in Turkish history during his late undergraduate years. He was very fortunate to receive personal training from a famous Turkish scholar, Isenbike Togan, who was visiting Peking University at that time. Initially interested in military history, Zan later developed his study into a broader focus on the history of modern Turkey. He recently furthered his research into the nineteenth-century Ottoman Empire, exploring the phase of transformation between the Ottoman Empire to modern Turkey. For this inquiry, besides modern-day Turkish, Ottoman Turkish and many other languages are necessary. Professor Haneda noted that what happened after the 9/11 terrorist attack contributed to his shift of academic interest from the political history of sixteenth-century Iran, to the formation of the concept of “the Islamic world.” However, the demarcation between the study of national history within and beyond a nation-state, as well as the problematic academic framework of historical studies, which took shape in nineteenth-century Europe, led him to rethink the writing of history. Viz., for whom we write history? Is there a right way to write history? How do we understand the world without cutting the globe into parts like Europe, East Asia, or “the Islamic world” ? These



questions led him to his ongoing research on a new world history.

Wrapping up the dialogue, the two expressed their sincere concerns about the current epidemic of the corona virus, acknowledging that the history of epidemics itself is one of the most important topics in global history studies. Both agreed that historical studies should be done with contemporary issues in mind, and that by reading historical texts, scholars can find answers to contemporary questions. Professor Zan also expressed his wish to bring together Japanese and Chinese scholars of Ottoman and Turkish studies, in the hope that more researchers can explore and establish a new way of writing world history, rooted in an East Asian tradition.

Reported by WANG Wenlu (EAA Research Assistant)

【EAA Dialogue】 Tao ZAN × 石井剛

2020年1月22日（水）、EAA本郷オフィスにて咎涛（ZAN Tao, さんとう）氏（北京大学）と石井剛氏（EAA副院長）のEAAダイアログが開催された。咎涛氏は中国においてトルコ研究に携わる代表的な歴史学者である。2時間におよんだこの対談は中国語で行われ、咎氏の出自や学者になった経緯、地域研究のあり方、「東アジア」と「中国」といった概念にまつわる複雑性、さらに研究者キャリアにおける偶然性などが触れられた。

石井氏はまず中国におけるトルコ研究者がわずかしかないことから、この分野に入ったきっかけについて咎氏の研究者になるまでの道程を尋ねた。咎氏は、著名な文学者莫言（MO Yan、ばくげん）と同じく山東省高密県出身であることや、「改革開放」の光景を目にして外の世界が知りたいと強く思うようになり、北京大学に入学後は歴史学しかも外国史を専攻として日本語を学んだこと、北京に訪れたトルコの学者と出会ってトルコ語を教わったことを語った。なかでも大学3年生の頃、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ史専攻に所属した先生の授業をきっかけにトルコに関心を持ちはじめ、大学4年次には第2次世界大戦後のトルコの軍人クーデターについて卒業論文を書いた。大学院に進学後も同じ先生のもとでトルコ研究を続け、「Rewriting of National History in the Early Period of Turkish Republic」を博士論文のテーマにしたという。2005年「South × South」プログラムの援助でついにトルコを訪れ、帰国後チベット大学での1年間の勤務を経て北京大学へ着任した。2012年にアメリカのインディアナ大学に訪問学者として滞在することになり、そこでアラビア語やウズベク語も学んだという。

咎氏の話を受けて、石井氏は大江健三郎や竹内好を例に挙げながら、地域研究における土着性ととどまらぬ現場感覚の重要性を指摘しながら、今後の地域研究のあり方について咎氏に問いかけた。咎氏は、中国の地域研究は功利性が強く、シンクタンクでの勤務を志向する研究者も少なくないという現状に言及しつつ、それが望ましいことではないと批判的に見ている。学部生の段階からシンクタンクを志向するより、むしろ最初は文学・哲学・歴史学・宗教学といった人文系の専門的知識を身につけ、その上で外国語を学ぶべきであって、最終的にシンクタンクに入るかどうかは個





Umarim ki 中国与日本的“世界史”可以有更多交流和对话
※ “Umarim ki” = トルコ語で “I hope~”

人の選択に任せればよい。人文学の基礎がなく、外国語とローカル・ノレッジのみによって行われる功利的な地域研究に深みはないと咎氏という。それに関して石井氏も自身の研究的背景を引き合いに出して共感を示した。

対談ではヨーロッパと東アジアにおけるナショナリズムの相違、「中国」と「東アジア」の関係、中国の「多元一体」的な性格も話題になった。石井氏と咎氏は「中国」には東アジア的な性格のみならず内陸アジア的な性格もあるという点で一致した。石井氏は今日のネーション・ステートとしての中国と長い歴史における「帝国」としての中国との齟齬に着目した。それを受けて咎氏は、ネーション・ステートに転身したにもかかわらず、いわゆる「帝国の遺産」は今でもなお大きな存在感を放っているところに、オスマン帝国と中華帝国を比較する可能性と意義があると述べた。

最後に石井氏は研究者のキャリアにおける偶然性のことを問題にした。つまり、石井によれば、東京大学には数多くの優秀な学部生が在学し、その優秀さはたいてい効率のよさとして表れている。こうした効率重視は結局偶然性の排除につながるが、しかし人生そのものにおいて偶然性の排除は不可能ではないかという。咎氏は、個人のパーソナリティの鍛錬、持続的な学びを通して偶然を必然に変えることを強調し、すべての人に偶然があり、それをどうするかは個々人の人生態度次第だと、本対談を締めくくった。

報告者：郭馳洋（EAA リサーチ・アシスタント）

【EAA Dialogue】 Eddy Dufourmont × 中島隆博



2019年1月29日、EAA本郷オフィスにて、エディ・デュフルモン氏（ボルドー大学）と中島隆博氏（EAA副院長）によるEAAダイアログが開催された。

2人の友情は、約20年前、中島氏がパリで行った講演会に、当時大学院生だったデュフルモン氏が参加したことに始まる。その数年後、日本へと留学を果たしたデュフルモン氏は中島氏と再会し、以後、両氏の学問的交流は現在に至るまで継続している。ダイアログではリラックスした雰囲気の中、デュフルモン氏の幼少期の興味関心から、日本研究という道に進んだきっかけ、そして現在の研究関心に至るまで、様々な話題が飛び交った。

デュフルモン氏は、軍人である父、アルジェリアにルーツを持つスリムの母、というバックグラウンドを持つ一方で、学校教育においては、伝統的なフランス式の教育を受けた。ヨーロッパ史を中心とした歴史教育を受け、また、学校の方針の影響の中、自らクリスチャンとなる選択をした。反対に、アジアやアフリカの歴史・文化、また、母の信仰するイスラム教などには、あまり触れる機会がなかったという。最も強く関心を持ったのは、ギリシャやエジプトの古代史で、歴史研究に従事したいという意識はこの頃芽生えたと語った。

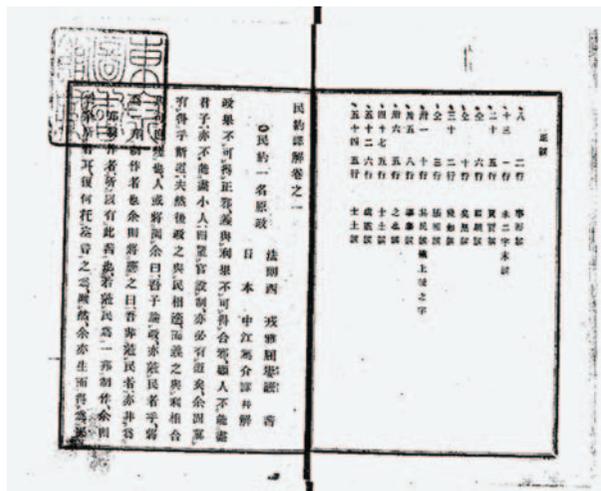
学校教育では非ヨーロッパ世界に触れることはほとんどなかったと語ったデュフルモン氏であったが、当時メディアを通してフランスに紹介され始めた日本のアニメや音楽に触れる機会を得たことで、日本をはじめとするアジア圏への興味関心を持ち始めたという。しかし、大学でも高校までと同様、相変わらずヨーロッパを中心とした歴史にしか触れることができなかった。こうした状況に疑問を抱いたデュフルモン氏は、フランス国立東洋言語文化学院への進学を決意し、ここで日本研究を始めることとなる。日本のテキストを日本語で読み日本語で議論するという、それまでとは全く異なった研究環境が、彼の好奇心を掻き立てた。また、フランス社会が変革期を迎えるなか、あえてムスリムへと転身するという選択も、このとき行った。

同学院で学ぶ中でデュフルモン氏は、日本のみならず、東アジア全体、とりわけその近代の歩みに対して興味を持つようになった。特に、江戸時代に隆盛を誇った儒教がなぜ近代に入ると日本では途絶えてしまうのか、また、同時代における中国において儒教はどのように変化していったのか、という学問的問いを抱くに至った。そこで彼が博士論文の主題として選んだのが、近代日本の思想家・安岡正篤（1898-1983）であった。安岡が「最後の儒者」として紹介されているのを目に

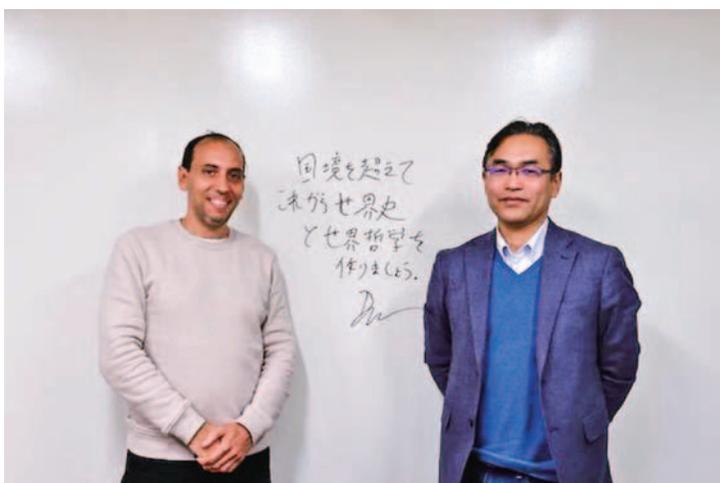
したのが、興味を抱いたきっかけだったという。中島氏が指摘したように、戦後日本では、戦前のいわゆる「右翼」と見なされる人物の思想は、正しく検証されずに、無視あるいは忌避され続けてきた。本当に必要なのは、その思想・哲学と向き合い、その構造的問題を明らかにすることである、と両氏は強調した。

安岡のような人物を題材として扱ったことで、デュフルモン氏自身も色眼鏡で見られるという厄介な経験をしたという。というのも、当時勢力を拡大しつつあった右派の代表的人物であったブルーノ・ゴルニッシュが、日本研究者であったという背景があったからだ。批判精神を忘れず、なおかつ、過去の「右翼」思想家のテキストに真摯に向き合うというデュフルモン氏の姿勢は、なかなか理解されなかったという。しかし、デュフルモン氏は今でも、博士論文で安岡を扱ったことを後悔していない、と語った。彼を通して、近代日本の知識人の関係図を把握できたことは、安岡のような人物を生んだ近代日本という構造そのものを見つめることに繋がった。また、安岡を通して、デュフルモン氏は次なる研究対象となる中江兆民との出会いも果たした。安岡も中江も、共に孟子を引用しているものの、両者の解釈が全く異なっていることに、強い興味を覚えたという。

周知の通り、中江兆民はジャン＝ジャック・ルソー『社会契約論』の日本における翻訳者である。デュフルモン氏はこの度、中江による翻訳書である『民約訳解』を再びフランス語に翻訳し直すという興味深い試みに挑戦した。なぜわざわざ、もともとフランス語であった『社会契約論』の日本語訳を、再度フランス語に翻訳する必要があったのか。その理由について、デュフルモン氏は次のように語った。中江は、フランス語を日本語に置き換えただけの単なる技術的な翻訳を行ったのではなく、彼自身が、翻訳という行為を通して新たな概念を創造している。それは、ルソーのテキストを超え出た、中江の哲学であるとすら言える。さらにデュフルモン氏は、中江の哲学を翻訳することは、フランス語において新たに概念を作り直す作業であったと語った。したがって、中江の哲学の中から、デュフルモン氏自身の哲学が生み出されたと言うこともできる。このように翻訳とは、哲学的概念を練り上げる作業であるのだ。今後の展望として、モンテスキューやトクヴィルといった哲学者たちのテキストが、日本や中国といった東アジア世界でどのように翻訳され、そしてあらたな哲学として練り上げられていったのかを追究したい、とデュフルモン氏は意欲的に語っ



中江兆民『民約訳解』の本文。国立国会図書館デジタルコレクションより：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/783742/9> (2020/01/29 最終閲覧)



た。

デュフルモン氏が考える中江兆民の独自性は、自由主義と社会主義をなんとかして調和させようとする煩悶・混乱の中にある。日本という若き近代国家の建設の只中で、どのような理念が必要とされているのか。その1つの解をルソーの中に見出した中江は、ルソーのみならず、当時の共和主義者たちとの交流を通して、その哲学を深化させた。「天」「君」「民」といった儒教由来の概念を駆使しつつ、天皇という特異な存在がいるこの国で、中江は独自の民主主義を練り上げていったのだ。

ダイアローグの終盤、昨今のフランス情勢にも話が及んだ。ムスリムをはじめとする異文化・異教の民との共存方法を、フランスはどのように創造してきたのか。デュフルモン氏によれば、フランスにおける民主主義は未だ進行中のプロジェクトであり、その終わりはまだ見えない。「ライシテ」(いわゆる政教分離政策)を重んじるがあまり、文化の多様性が抑圧されてしまうような、皮肉な状況も出来している。デュフルモン氏は、50年代・60年代において、経済的理由で渡仏してきた北アフリカの人々を、単なる一時滞在者とみなし、彼・彼女ら、そしてその次世代の人々を、「共和国」の一員として迎え入れる制度を真剣に整えてこなかったことが現在の矛盾を生んでいる、と指摘した。フランス革命を経て産出された、まさに革命的な「市民」概念は、誰もが皆共和国の一員である、という普遍的な方向へと深化するのではなく、皮肉にも、「能力ある市民」——例えば資産があって、高等教育を受けたエリートと呼ばれる人々——だけが政治に参画できるという方向へと進んでしまった。このようにエリート主義が再生産され続ければ、反対に、その鬼子としてのポピュリズムも生まれ続けることになる。「市民」とは、古代ギリシャのポリスに起源を持つ概念である。しかしそこで市民=自由民とは、労働を担う奴隷がいてはじめて成立する階級であった。皮肉にも、現代のフランスにおいては、「能力ある市民」とそれ以外、といったように、階級が再生産され続けている。自由主義、社会主義、共和主義、民主主義——これらの理念・理想をどのように共存させ、その中から新しい概念を創出するのかという、中江が直面した問題は、今も形を変えて、わたしたちに重くのしかかっている。この問いと真剣に格闘し、社会を変えていく力を養うことこそが、学問に託されている。

報告者：崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)

ジャーナリズム研究会第2回公開研究会



2020年2月9日（日）14時30分より、駒場キャンパス4階コラボレーションルーム3にて、EAAの共催を受けたジャーナリズム研究会の第2回公開研究会が催された。

一人目の講師は、武田悠希氏（立命館大学他非常勤講師）である。本発表「複合的メディアとしての画報誌の行方——押川春浪の雑誌編集の活動から」は、明治末期～大正初期の押川発行の画報誌の特徴を検討し、雑誌編集者・押川の活動を考察する意欲的かつ充実した内容であった。

『海底軍艦』の刊行や冒険小説の雑誌寄稿から、明治・大正期の冒険小説家として評価された押川春浪。氏は、題目の「複合的メディア」という用語に触れ、押川が画報誌の発行を通して、視覚的・聴覚的（音声的）効果を含む雑誌の新しい可能性を考えたのではないかと推察し着想したと述べた。

先行研究紹介の後、押川が博文館に入社し、『日露戦争写真画報』主任記者として活動した1900-1904年（明治33-37年）頃は、近代出版文化の成長・発展期に当たると指摘された。1904年以降の押川の雑誌編集活動が、画報誌の表紙図版とともに時系列で紹介され、日露戦争期に画報誌が多数発行された背景として、日清戦争期に編目銅版印刷による写真掲載が可能になった点や日露戦争期に写真が出版物の重要な要素となった点が挙げられた。

つぎに博文館発行の『写真画報』と『冒険世界』を例に、誌面紹介とともに押川が編集した画報誌の特徴が考察された。『写真画報』には以下のような特徴があったという。①写真や絵画のページの充実、②家庭向けの読物の充実、③西洋の文学・文化・風俗との比較紹介を伴った都市文化の提示と批判・風刺。特に印刷技法や彩色にこだわった写真・挿絵の視覚効果と、講談や落語など口承文芸の活字化による音声的多様性、コマ絵や組み写真などの映像的效果を誌上で組み合わせる点から、押川が編集した雑誌は複合的メディアであったのではないかと主張した。

一方、『冒険世界』の特徴について、先行研究の引用とともに、紙面構成の斬新さや近代化に対する批判、対立軸としての「蛮カラ」（理想的な男性らしさや帝国主義の肯定）にあり、押川の思想が強く反映されたと総括した。その内容は、①世界各地を舞台とする冒険譚・海外旅行記・海外情報、②学生文化や学生スポーツを取り上げ、青年を取り巻く都市文化を批判した記事であった。氏は、多色刷りや草双紙風の誌面構成、挿絵を駆使した視覚的效果や合成写真の掲載で、非日常性

を提示したと述べた。ただし合成写真については多数の読者から着想の奇抜さや理解の困難さを指摘されたという。氏は、『冒険世界』の特徴は『武俠世界』にも継承されていたのではないかと推測する。最後に、日露戦争後、写真掲載が一般的になった出版界で、複合的メディアとして雑誌の新たな可能性が模索された形跡を、押川編集の画報誌から読み取れるのではないかと強調して発表を終えた。

質疑応答では、日露戦争後の女性誌における画報誌や雑誌の商業化の成功への言及や、近世では視覚的表現による定期報道がなかった点、明治期～大正期のグラフ雑誌の刊行形態との関連性も考慮すべきと指摘された。また、『婦人画報』や三越のPR雑誌を想起すると、押川の編集手法はさほど目新しくはなかつただろうとのコメントもあった。さらに合成写真は当時としては斬新なモダニズムの写真表現であり、同時代の『グラヒック』にも見られるという指摘もあった。その他、雑誌の歴史的研究の問題点の指摘、押川時代の誌面とポスト押川時代の誌面の比較が必要との助言、写真家・押川の活動や海外雑誌の受容、読者ニーズへの配慮の有無の質問やコメントがあった。氏は、読者層や読者の反応の変化に伴う誌面の特徴や内容の変化の有無、同時代の他誌との比較考察を今後の課題としたいと答えた。

10分間の休憩の後15時55分より、主宰者による簡単な紹介の後、岡安儀之氏（東北大学）による発表「近代新聞の形成——福地源一郎とその周辺に注目して」が行われた。発表ではまず、明治初期のメディア状況は「官権派と民権派」「知識人向けの大新聞と庶民向けの小新聞」などの単純化した図式では捉えきれないと指摘、この点で、「御用記者」と分類されてきたゆえに（思想史）研究上軽視されてきた福地源一郎（櫻痴）の思想と活動について考察することが重要であるとの主張が示された。というのも、福地は、幕末における二度にわたる洋行体験から新聞紙（ニューエス）の重要性に気付き、1868年（明治元年）に早くも、知識人層を意識した論説と庶民層を意識した振り仮名付きの文章と挿絵を掲載した『江湖新聞』を創刊していたからである。

続いて、明治ジャーナリズム史を再構築する上での一環として、福地や彼が深く関わった日報社の大新聞『東京日日新聞』（以下『東日』）の周辺に光を当てる考察が示された。自由民権運動の産声が聞かれた1874年（明治7年）、日報社に入った福地により紙面改革が決行され、新聞社の確固たる信念を打ち出す「社説」欄が常設化、新聞の党派性が前面に打ち出されるようになった。これが他紙にも大きく影響を与え、以後、「論説」の価値が浮上し、政論新聞の全盛期となったことが説明された。

近代的なメディアとしての新聞の特徴である「論説」を大新聞『東日』に導入する一方で、日報





社は、近世的なメディアと親和性のある錦絵新聞（『東京日日新聞大錦』）や小新聞（『平仮名絵入新聞』）も刊行していた。日報社に関わった福地以外の人物に、戯作者・新聞経営者・小説家であった条野伝平がいる。条野の取り組みからは、激動の時代の中での試行錯誤がうかがえる。条野の周辺にいた戯作者や絵師は錦絵新聞や小新聞の発行にもかかわっており、この人脈から草創期の新聞を総合的に捉えられることが示唆された。最後は福地自身の思想と合わせ、日報社を洋学者と戯作者の結節点として捉えた上で、新たなジャーナリズム史を描く可能性が提示された。

フロアからは、まず、今回の発表で触れられていなかった先行研究の指摘がなされるとともに、『東日』と政府の関わり、福地の文体に関する思想とその実際の紙面への反映について質問が上がった。これに対し岡安氏は、福地の政府スポークスマンとしての在り方については今後の研究課題であり、また文体に関しては西南戦争以前の福地のテキストに試行錯誤の形跡が見られると述べた。また政治制度が未発達な段階での「論説」の役割・受容についても質問が上がり、これについて岡安氏は、新聞が投書家同士の論争を建設的なものにする司会者的な役割を持つことを指摘した言説を紹介され、また政治的訓練の場として受け入れられていったと回答された。また別の質問者は幕末維新期において文学などへの興味と政治的論説への興味が一人の人物の中で同居していた事例をもとに両者の関連性を問い、これに対しては福地においても同様の傾向がみられることを述べた上で、福地が両者の関連を考える上で重要な人物と考えられると回答した。最後に本研究会の主宰者・前島が、新聞の論説が大衆の政治的議論に対して抑圧的に働く可能性を指摘した上で、それについての福地の見解を質した。岡安氏は、論説が読者を操り、戦略的に議論を盛り上げたり冷却したりする役割を持つことについて、福地が自覚的であったと回答した。

今回は、視覚的表象を用いた報道的な定期刊行物の草創期である、明治後期における作家兼編集者・押川春浪の編集ぶり、および、日本の近代的ジャーナリズムの揺籃期である明治前期の先駆的な新聞記者・福地源一郎とその周辺の活動という、いずれも領域横断的なアプローチによる研究発表だったが、聴衆の関心も、思想史、文学、美術、メディア史など多岐にわたっていたため、大変活発な議論が展開された。また、どちらの発表も日本の事例に関するものではあったが、そこで取り上げられた問題点を十分に考察するには同時代の欧米の事例についての知見も必要であることが、改めて実感される会であった。

報告者：松枝佳奈（東京大学特任助教）・永嶋宗（東京大学大学院博士課程）

EAA 特別セミナー

「わたしたちの30年後——世界と学問」第1日目 (1)

2020年2月10日(月)と2月12日(水)、東アジア藝文書院(EAA)特別セミナー「わたしたちの30年後——世界と学問」が開催された。本セミナーは新型コロナウイルス流行の影響で中止となった東京大学-北京大学集中講義の代替イベントである。10日の講演と質疑(駒場キャンパス101号館EAAセミナー室)、12日のグループワークとプレゼンテーション(駒場キャンパス1号館107号室)は、いずれも英語で行われた。今回は学部生のみならず、EAAに所属する研究員やリサーチアシスタントたちも参加した。

2020年2月10日のイベントにおいて、王欽(EAA特任講師)が2つの講義を行い、咎涛(Zan Tao、北京大学)がディスカッサントを務めた。1つ目の講義では、ジャック・ランシエール(Jacques Rancière)の*The Ignorant Schoolmaster: Five Lessons in Intellectual Emancipation*(Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1991. 原書: *Le Maître ignorant: Cinq leçons sur l'émancipation intellectuelle*, Fayard, 1987. 日本語訳: 梶田裕・堀谷子訳『無知な教師 知性の解放について』法政大学出版局、2011年)と柄谷行人『探求I』(講談社、1986年)の第1章と第3章が扱われた。

*The Ignorant Schoolmaster*でランシエールは19世紀初期のルーヴェン大学におけるフランス人教師ジョセフ・ジャコトの教育活動に焦点をあてた。オランダ語を解さないジャコトは、フランス語を知らないルーヴェン大学の学生たちにフランス語を教えることになった。相手と言葉が通じないジャコトはフェヌロンの『テレマコスの冒険』のフランス語・オランダ語対訳本を共通のテキストにし、この書物で学ぶよう学生たちに指示した。そして不思議なことに、学生は見事にフランス語を習得した。驚いたジャコトはそこで、教師は自分さえ知らないことを教えることができると悟った。ランシエールの関心を引いたのはまさにこの出来事である。教師は自分自身も知らないことを教えるべきだ——この一見荒唐無稽なテーゼは伝統的な教育観と一線を画す「普遍的教育」のあり方を示している。王氏はランシエールの議論に沿いつつ、説明を重んじる従来の教育では教師と生徒は一種の権力関係にあって、そこには知と無知のヒエラルヒー、すなわち、教師は知識を有していることを期待されるのに対して、学生は無知だと想定されるという二項対立の構造が横たわっていると指摘した。こうした不平等な関係は教育現場にとどまらず、様々な形をとって社会的



不平等として現れている。しかし、ランシエールにとって、教師と学生はもともと知的に平等であり、この平等は到達すべきゴールではなくむしろ出発点なのだ。というのも、本当の知性は自分が他者の自己確認を介して理解されるようにする力と考えられていたからだ。こうした知性の平等は書物＝テキストそのものに基づき、テキストを前にする私たちの、教師の説明に頼らず自力で学ぼうとする意志の平等によって実現する。それこそ個人の解放である。テキストの彼方にあるのも、表現・翻訳する意志のみだ。ではなぜ、平等な者同士が1つの課題で違う結果・成績を出すこともよくあるのか。それは決して知性の差ではなく、課題に向けられた注意の差からくるものである。知性 (intelligence)、意志 (will)、注意 (attention) という3つの語こそランシエールの議論のキーワードだと王氏は述べた。

次に取り上げられたのは柄谷行人のテキストである。王氏によれば、「教える」ということをめぐって議論を展開させている点ではランシエールのテキストと共通しているが、両者における「他者」概念が異なる。つまり、ランシエールの「他者」は教師との関係において無知とされる学生であるのに対して、柄谷の議論では「他者」は事前に知るものではなく、ただ逢着するものなので、あらかじめ成立した合意やコンセンサスなどない。したがって柄谷の場合、話し手の言葉が意味をなすかどうかは聞き手の反応によって決まり、そのために話し手は自分自身を他者に向けて曝け出す/開く必要があるという。こうした事態を端的に表すのは言葉の通じない外国人や子供に教えるときである。そこでは「共通の規則」は事前に決定されたのではなく、ただ偶然に形成されていく。逆にいうと、既成の「共通の規則」を前提とする同質な共同体内部の交流は自己反復にすぎず、本当の交流とはいえないから、共同体の外部に出ることは大事である。言説の規則は予知されない「飛躍」のあとに見出された以上、権威をもつ言説はどこにもなく、あらゆる関係は偶然で転換可能なものとなる。そのため、教育も一種の冒険としてつねに誤読のリスクを伴い、予定調和のものではありえないと王氏は考えた。なお、柄谷の議論が最初の個人レベルのものから次第に共同体、社会といった集団性に関わるものに移行したという点は興味深いとした。

王氏がランシエールと柄谷のテキストを以上のように解説したあと、ディスカッサントの咎涛氏は一教育者としての心構えや今日の教育手段の多様化などに言及してコメントを述べた。質疑応答の時間において、聴講した学生からはなぜランシエールやデリダのようなポストモダン思想家たちは書物への回帰を説くのかという質問が寄せられた。それに対して王氏は憲法を例に挙げながら、デリダの形而上学批判の内実を再確認する形で答えた。王氏にしたがえば、デリダの批判したパロールは西洋の思想伝統において、反復・引用・代替不可能で単一な実在とされてきたものだが、



デリダからみればそれは実際どこにも存在せず、意味を可能にするのはむしろ反復可能性、引用可能性、均等性を体現するエクリチュールである。王氏はそういったエクリチュールは物理的なテキスト＝書物に限られず、私たちの日常的な交流の至る所にあるものだと、本日の1つ目の講義を締め括った。

報告者：郭馳洋（EAA リサーチ・アシスタント）

EAA 特別セミナー

「わたしたちの30年後——世界と学問」第1日目 (2)



10日後半の講義が王欽氏により引き続き行われた。後半の講義は、竹内好の「私たちの憲法感覚」(『世界』176号(1960年、岩波書店)。『竹内好全集』第9巻(1981年、筑摩書房)所収)というテキストを題材に行われた。講義のはじめ、参加者に対しこのテキストが好きであるか嫌いであるかが問いかげになかなか反応が出てこない中で繰り返し問われた。

続けて、「imposed by America」、すなわちアメリカによる押し付けということが強調された。決定権は日本国民にも日本政府にもなく、「外部」としてのアメリカにあった、そのようなドキュメントとして日本国憲法はある、「押し付けられたもの」、「私たちのもの」ではないものとして、それはあるということが示された。では、そもそも「私たちの憲法感覚」とある「私たち」とはなにかが問題とされた。竹内はテキストの中では「平均の国民」としている。それは、法学的ないし政治学的に定義づけられ、正当化されたものではない。そのようなテクニカルなものではないものとしての「私たち」から竹内が出発していることが重要であるとされた。

また戦前の体制について触れ、そこには自由がなかったが、しかし、そのような枠があったからこそ、その枠の中において、なんとかして自由でありたいという念願があり、またそれがなんとかして表明されたのであるという、竹内の認識が示された。

ここで竹内好を中国に紹介した、『竹内好という問い』(2005年、岩波書店)の著者、孫歌氏も紹介された。

課題のテキストは短い、実は難解であるという。また、竹内の行動は古い型で、1960年のこの時期に、まさにデモをやっていたような「戦後の人」からは理解されないものだった、世代間にはギャップがあり、また歴史的経験においてジェネレーションギャップがあったとされた。しかし、むしろ異なる世代、異質なグループによって「国民」が形成されるのが大事であるとされた。

また、竹内は法実証主義的な立場に対し、「クリティシズム」を発揮したのだと指摘された。憲法の字面が、つまり成文の憲法がいかに立派であっても、それが官僚の作文に過ぎないようでは仕方がないということである。

講義が一段落したところで、石井剛氏から「Constitution」をどのように理解するか、「憲法」という以外に日本語でなんと言うべきかという提議がなされ、参加者からは「この国のかたち」の案も出されたが、石井氏は「Body of the Nation」としての「国体」を取り上げ、その「国体」とい

うものはディスコースであって、テキストではないとの指摘がなされた。

王欽氏は、Constitution は法の基底にあるが、さらにその基底にあるのは、「事実」ではないのか、そうしてそれは「法的」なものではない、「not legal」であるとし、カール・シュミットのいう「決断」について触れた。国民の国民たる所以は、国籍法に規定された要件による、というような legal なものではなくて、主権者としての自覚にある、ゆえに、国民の形成は一回的なものではなくて、日々繰り返されるものであるとした。

報告者：高原智史 (EAA リサーチ・アシスタント)

シンポジウム

「東アジアにおける世界文学の可能性」

2020年2月11日、東京大学駒場キャンパス18号館ホールにて、シンポジウム「東アジアにおける世界文学の可能性」が実施された。

本シンポジウムの趣旨をポスターから引用すると、以下の通りである。

近代文学はその歴史的な役割を終え、文学自体が社会における重要性を失っているとの指摘が、しばしばなされている。同時に、グローバル化の進展の結果、もはや英語以外の言語は、豊かな文化的創造性をもつ言語ではなくなるとの悲観的な予測もある。

他方、近年では国民国家の文学と一線を画す「世界文学」という概念が注目されている。果たして、近代文学と言語的多様性の終焉後、私たちが直面するのはエリート層による知の囲い込みと、それが必然的にもたらす衰退なのか。それとも、知の階層構造を攪乱し、地域性と普遍性との接点をあばき出す新しい文学・文化なのか。

ここで現代日本の状況を見れば、日本語文学は東アジア出身の書き手や琉球語を取り入れた書き手によって活性化され、また韓国語、中国語で書かれた文学が新たな読者を獲得している。東アジアという単位で、新しい世界文学の可能性を構想することはできないだろうか。

本シンポジウムでは、国内外からゲストを招き、上記の問題について多面的に検討する。

シンポジウムの主催はEAAおよびEAA所属教員の報告者（武田将明）が研究代表者を務める基盤研究（B）「世界文学の時代におけるフィクションの役割に関する総合的研究」であった。

休日にもかかわらず、会場には東京大学の関係者だけでなく、一般の方も含んだ多数の聴衆が集まり、集中して討議に聞き入っていた。

13時から14時まで、文芸評論家で、柄谷行人の翻訳者としても知られる曹泳日氏による基調講演「韓国文学は世界文学であり得るのか」があった。曹氏は、日本現代文学（とりわけ村上春樹）とソニー、韓国現代文学とサムソンとの同時代性など、大胆な仮説を次々に提起しつつ、現代の韓国文学と日本文学が抱える様々な問題点について、挑発的なまでに刺激的な議論を展開した。もっとも、曹氏が指摘した問題点の中には、現代文学に広く見られるものも多く、「世界文学」という





問題設定自体の難しさを感じさせる内容でもあった。なお、この基調講演および、シンポジウム、総括討論において、司会は報告者（武田将明）が務めた。

続いて、14:05から15:25まで、「日本語文学の多様性」をめぐるシンポジウムが実施された。日中2言語作家・翻訳家である李琴峰氏による「第2言語である日本語で世界を切り取ろうとする時」、近代日本文学史を様々な視点で読み替えている日比嘉高氏（名古屋大学）による「時を語る日本語文学——記憶、環境、進化」、沖縄文学と原爆文学に関する著書のある村上陽子氏による「記憶とコトバ——崎山多美「月や、あらん」をめぐって」という3つの発表、およびその後の討議の中で、一見便利な「日本語文学」という概念のはらむ問題、ポスト・ヒューマンの時代における日本文学の問題点と可能性、沖縄の島言葉と東アジアとの接点など、様々な興味深い論点が浮き彫りとなった。

その後、15:40から17:00まで、「東アジアから考える世界文学」と題するシンポジウムが行われた。英語圏文学を研究し、ポストコロニアル文学の紹介者としても知られる小沢自然氏（台湾・淡江大学）による、「東アジア世界文学は存在しない？——英語圏ポストコロニアル文学の歴史から考える」、優れた翻訳者・紹介者として、日本における現代韓国文学ブームを牽引する斎藤真理子氏による「「正論を盛る器」としての韓国文学」、現代中国文学を世界文学的な視座も交えて研究する鈴木将久氏（東京大学）による、「中国文学と世界との対話——「抒情」をめぐって」という3つの発表と、その後の討議により、「世界文学」というあまりにニュートラルな概念の持つ危うさや、「正論」を堂々と盛り込む韓国文学の視点から日本文学の常識を批評することの重要性、さらには「抒情」のような普遍的に見える概念を詳細に検討することで東アジアの文学と世界文学との葛藤を見ることの意義など、多岐にわたる論点が導き出された。

その後、17:05から18:00まで、登壇者全員による総括討論と質疑応答があったが、登壇者の発言のみならず会場からの質問も熱を帯びたものとなり、予定の時間を超過して終了した。

終了後の懇親会でも、登壇者を中心に活発な談話があり、東アジアという単位で（ただし批評的に）未来の文学を考えることの可能性を改めて実感することができた。

報告者：武田将明（総合文化研究科准教授）

EAA 特別セミナー 「わたしたちの30年後——世界と学問」第2日目



特別セミナーの2日目は「30年後の未来」をテーマとしたグループワークとプレゼンテーションが行われた。学部生を3つのグループに分け、そこに研究員やリサーチ・アシスタント（RA）が加わる形である。プレゼンテーションは各グループ学部生によって行われた。

グループA（学部生2人、研究員・RA4人）ではまず各自の関心を共有した上で、コミュニケーションに焦点を当てることとした。30年前の世界と現在の世界を比べた時、交通網やSNSの発展によって広範囲での人的交流が可能となっていることは、広く共有されている事実である。しかしその反面、同じ関心や主義主張を共有する閉じたグループが乱立している状態も拡大している。ここでは柄谷行人が言ったような、「命がけの飛躍」を必要とする「他者」、すなわち自身の主張を無媒介に同意・肯定することのない「他者」の存在は捨象されてしまっている。SNSを中心としたコミュニケーション技術の発展の功罪を受け止めた上で、今後どのような形でのコミュニケーションを考えていくか。そしてどのような形で自分自身がそれに関与していくかが議論された。

グループB（学部生3人、研究員・RA2人）では技術の発展について議論した。人工知能をはじめとするコンピュータ・サイエンスの革新、気候問題などの自然環境の変化が話題となり、それらの問題を抜本的に解決するため、改めて人間に自身に対する見方を変える必要があるという意見が出た。大規模製造業などでは人間の仕事が機械に切り替えられることや、いわゆる「デジタル全体主義」による人権弾圧などの事実を受け、人の価値は一体何かという問題は技術から離れて、倫理学や哲学の面で考えなければいけない。発表者の3人は議論の内容を踏まえて、さらに2つの問題を共有した。1) 人間は何もせずに生きられるか。大半の機械的な労働がロボットに取って代わられる時代になると、人間は皆「ひま」になる。そこで個々人にとって自分の生きがいは何か、どのように実現できるか。2) グループAに呼応し、柄谷行人のコミュニケーション論をどう理解するか。SNSの発達は既存の情報発信と受容の枠組みを変えるに寄与されていたが、事実上、自分と違う意見を無視するという言論のクロージャー（閉止域）がネットでさらに強化された。その局面を打開するには、真の「他者」の確立がいっそう重要になる。それは未来の人文科学の目指すべきところだと指摘した。

グループC（学部生3人、研究員・RA2人）では、まずKJ法に従って、それぞれテーマの

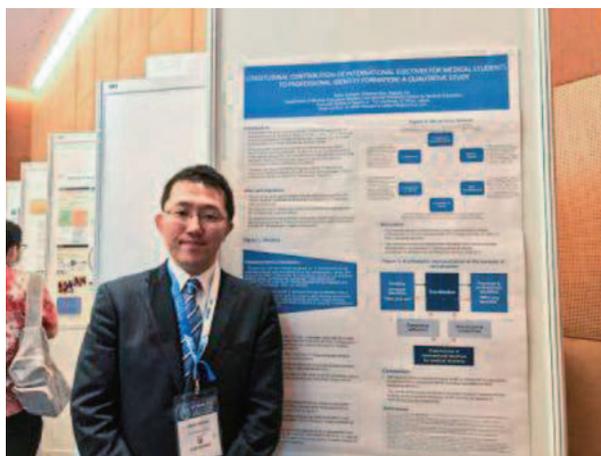


「Looking Ahead Thirty Years : The Liberal Arts in the World」について思い付いたことをキーワードで書き出し、それらをいくつかのグループに分けた。絞られたトピックは、テクノクラシー (technocracy) や社会運動、コミュニケーション言語など多岐にわたる。とりわけ昨年世界各地に活発に行われたデモ活動や、現在流行中のコロナウイルスおよび各国の対応について、ソーシャルメディアと民主の発展の関連性を深く議論を交わした。発表の際は、次のようなことが語られた。三十年後に教えと学びのスタイルが変化するとともに、情報・知識の生産や管理は専門家に頼る状況になり、これによってあらたに不公平が生じる。しかしソーシャルメディア等を積極的に利用することで、現在と比べてより水平的なコミュニケーションと、広範囲にわたる社会運動とを実現することができ、民主主義を守ることが可能となる。発表後はコメントや質問に返す形で情報と知識との区別、民主の解釈と内実等について議論が交わされた。

未来とはただ単にやってくるものではなく、今の若い世代の手によって作られる。30年後の未来をこれから担っていく主体として考えを巡らす2時間となった。

報告者：郭馳洋・高原智史・建部良平・胡藤・王雯璐 (EAA リサーチ・アシスタント)

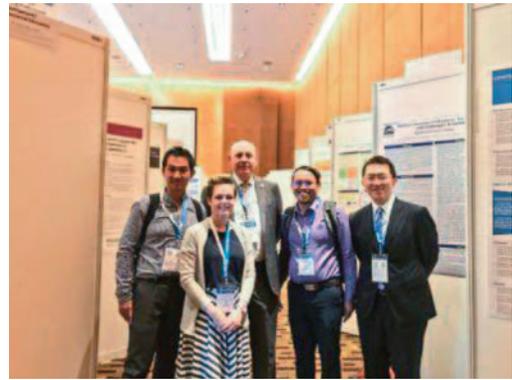
若手研究発表支援：OTTAWA CONFERENCE 2020



この度、東アジア藝文書院での若手研究発表支援に採択を頂き、マレーシアで2020年2月28日に開催されたIAMSE Meeting および2月29日から3月4日にかけて開催されたOttawa Conference 2020にそれぞれ参加した。今回参加したOttawa Conferenceは、Dundee大学のRonald Harden教授とOttawa大学のIan Hart教授が、臨床能力の評価について異なる国からの多様な意見を交換できる場を作ろうと国際学会の設立に踏み切ったのがきっかけで発足した学会である。本年はコロナウイルス感染の影響もあり、例年に比べ参加者が少なく、全体では400人程度の参加者であった（参加登録総数は800人）。その一方で、Webinar（Web Seminar）を通じて、世界各地から数多くの医学教育者が本学会に参加しているのが印象的であった。

同学会において、私は在学中の海外実習の経験が医師としてのアイデンティティ形成にどのような影響を与えるかという研究についてのポスター発表を行った。質疑応答を含め約10分程度の発表時間であったが、参加されていた欧米およびアジア諸国の先生方から様々な意見を頂くことが出来た。同研究については現在、論文投稿を行っているが、その際にも今回頂いた意見を生かして修正を行いたい。また、カンファレンスでは、医学教育の評価に関連する数多くのセッションに参加したが、各大学において独自の理論を用いた研究や評価手法を採用している点が印象的であった。医学教育に関する評価研究は欧米での研究が先行している印象があるが、アジアの文脈においてどのような調整が必要であるかをワークショップ内では議論することが出来た。アジア開催ということもあり、同学会では評価の文化的な側面について議論される機会が多かったのが非常に印象的であった。

一方、Ottawa Conference開催にあたり共催されたIAMSE Meetingというカンファレンスではワークショップを担当させて頂いた。こちらのワークショップでは、低学年の医学生に対して医師としてのプロフェッショナリズム教育を各国でどのように実践しているのかというテーマについて、香港、韓国、台湾、英国の医学教育者らとワークショップを共催した。ワークショップの参加人数は10名程度であったが、本ワークショップ中の議論を通じて、医学生に対するプロフェッショナル教育には各国共通して抱えている問題があることがあきらかとなった。同ワーク



ショップの内容に基づき、ワークショップを共催した医学教育者らと論文を投稿する予定となっている。

今回の出張を通じて、アジア諸国をはじめとする医学教育者らと充実した議論を行うことが出来た。また、今回発表を行った内容に基づき、論文投稿の際にも有用な知見を得ることも出来た。このような貴重な機会を提供して頂いた東アジア藝文書院若手研究発表支援に心から御礼を申し上げたい。また、この機会を通じて、将来的にも多くの若手研究者の国際的な交流が行われ、国内における研究活動が促進されていくことを切に願う。

報告者：林幹雄（東京大学大学院博士課程）

「一高プロジェクト」の活動報告

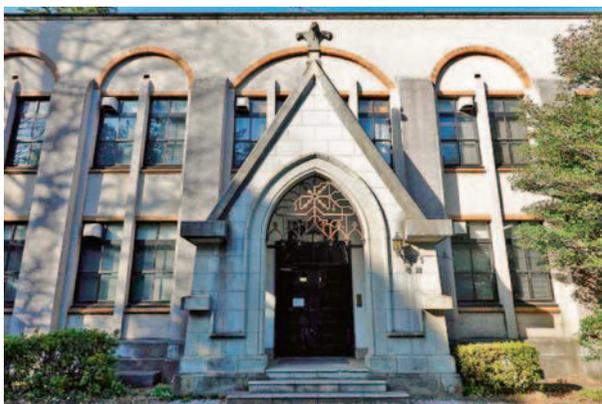
「一高プロジェクト」は、EAAの駒場オフィスが居を構える「101号館」を中心に、第一高等学校、通称「一高」時代の中国人留学生に関する資料の調査・公開、及び研究を目的とした活動である。以下、(1)本プロジェクト発足の経緯と(2)活動内容のあらましを述べたい。

(1) 本プロジェクト発足の経緯

本プロジェクトは、EAAの駒場オフィスが「101号館」に入居したことに端を発する。101号館は、今ではほとんど知られていないが、かつて「特設高等科教室」（通称「特高館」）と呼ばれ、一高における中国人留学生のための3カ年の課程「特設高等科」（1932年設置）の専用教室として建てられた建物であった。一高が本郷から駒場に移転した頃の昭和11年（1936年）から終戦後までの約10年間、留学生用の学舎として使用され、多くの卒業生を日本の大学に送り出した。東京大学と北京大学のジョイント教育研究プロジェクトである「EAA」のオフィスが、こうした歴史を持つ101号館の中に入ったという事実に深い縁を感じた石井剛 EAA 副院長により、101号館の歴史を紐解くプロジェクトが発案されたのである。

当時、駒場キャンパスには、101号館の他にも留学生用の教育施設及び寄宿寮が建設されていたが、現存するのは101号館だけである点でも貴重である。こうした東京大学教養学部の前身にあたる「一高」における留学生教育、ひいては日中教育史の一側面を物語るこの建物に光を当てることで、歴史を鑑とし、よりよい東アジアの未来を築くための学びを得たい——このような思いから本プロジェクトは始動した。

プロジェクト始動時の活動として特記すべきは、2019年3月21～22日に北京大学で開催されたEAAキックオフ・シンポジウムにおけるEAA特任研究員（開催時）の趙斉氏の研究発表である。同氏は22日の若手研究発表会において、「Pioneer of Sino-Japan Education Exchange 第一高等学校特設高等科」と題し、特に建築学の知見から「特設高等科」について北京大の研究者に向けて紹介し、大きな反応を得ることができた。また21日には、『近代日本的中国留学生予備教育』（北京語言大学出版社、2015年）の著者である韓立冬氏へのインタビューも叶い、趙斉氏と共に筆者も



「101号館」正面玄関（宋舒揚 撮影）

同席し、現在の研究状況などについて貴重なお話を伺った。またこれに先駆けて、2月20日には、一高時代の資料を多く所蔵する駒場博物館の折茂克哉助教にもインタビューし、趙氏と共に博物館の一高関連資料を広く活用する必要性や重要性について伺う機会を得た。

(2) 活動報告

本プロジェクトの主な活動内容は、先述のように一高時代の中国人留学生に関する資料群の調査・公開および研究（活用）である。EAA が本格的に始動した2019年4月以降、本プロジェクトは、①「藤木文書」の目録作成及び駒場博物館への寄贈、②101号館の歴史に関する展示開催、③②の関連イベントとしての国際シンポジウム開催の3本柱で活動（準備含む）を行ってきた。以下に、時系列にそって詳細を述べたい。

①「藤木文書」の目録作成及び駒場博物館への寄贈（2019年春～11月）

4月から上記の3本柱で準備を進めたが、秋口までは、主として「藤木文書」の駒場博物館への寄贈・公開に向けて目録作成の作業に取り組んだ。「藤木文書」は、駒場キャンパスに未整理の状態で蔵されていた昭和17～20年頃を中心とした当時の第一高等学校留学生課長・藤木邦彦氏の残した公文書・書簡類（340件）である。作業にあたっては、教養学部の歴史学部会及び駒場博物館の多大なるご協力・ご教示を得ながら、EAAにて古文書保存用の封筒及び箱を購入し、EAAのリサーチ・アシスタント・高原智史氏（東京大学大学院博士課程）と共に分類整理、目録作成を進めた。本資料は、終戦間際の困難な時勢における一高の留学生教育の現場、またその中で留学生課長として中国人留学生一人一人に寄り添う藤木邦彦氏の態度が窺える貴重なものとなっている。11月には、幸いなことに故藤木邦彦氏のご子息・藤木成彦氏の本プロジェクトへの深いご理解とご厚意を賜り、全資料（340件）を駒場博物館へ正式に寄贈いただける運びとなった。ここに改めて記し、深く感謝申し上げたい。本資料は、今後の幅広い活用が期待される。

②「一高中国人留学生と101号館の歴史展」開催に向けて（2019年秋～2020年2・3月）

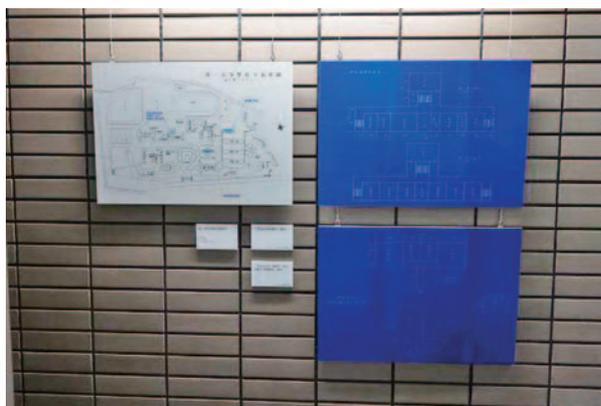
「一高中国人留学生と101号館の歴史展」と題し、駒場キャンパス内に残された一高留学生に関する資料の展示を下記の通り企画し準備を進めてきた。



展示風景（会場1）（宋舒揚 撮影）



森巻吉、「一高前駅」、寮風景、張興漢に関する写真（会場1）（宋舒揚 撮影）



第一高等学校平面略図、特設高等科教室の図面など（会場1）（宋舒揚 撮影）

会場1：101号館エントランス（会期：2020年2月7日～）

会場2：駒場図書館1階展示コーナー（会期：2020年3月20日～4月2日）※延期

会場1は、主に駒場博物館に所蔵されている昭和10年（1935）前後の一高の駒場移転の時期における一高留学生に関する貴重な資料16点をパネル展示している。具体的なラインナップは、当時の駒場キャンパスの航空写真から始まり、「特設高等科教室」（現101号館）、「特設高等科・物理学・化学・生物学・特設教室」の図面や特設高等科の修了証書、卒業写真、当時の一高校長・森巻吉に関わる写真、当時の学生寮や「一高駅前」の風景の写真、さらに運動部で大活躍した留学生・張興漢に関わる写真、留学生と日本人学生の交流に関わる新聞記事、現在の駒場の航空写真となっている。

会場2では、実物展示を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、延期とした（開催時期未定）。こちらでは、第一に、駒場図書館所蔵の清国留学生受け入れ開始時の一高校長・狩野亨吉時代（明治30年代）の留学生関連資料、第二に、一高の駒場移転時の校長・森巻吉時代（昭和10年前後）の留学生関連資料を展示する予定であった。既に、会場1・2で展示する全資料に関して解説文を掲載したパンフレットを発行しており（3月20日付）、現在会場1にて配布しているため、是非手に取ってご覧いただきたい。

本パンフレットにより、今回の展示が、101号館という建物が刻んだ歴史を端緒としながら、駒

場キャンパスに眠る日中教育史に関わる貴重な資料に光を当てたものであることが知られると思う。とくに、会場2の展示は、明治30年頃から昭和10年代に至る時期の一高に留学してきた中国人学生の受け入れに関わる公文書、また彼らの学業・生活、内面に抱えていた問題や日中学生・教員との交流の様子を生き生きと伝える資料を直にご覧いただける貴重な機会であり、是非とも実現させたいと願っている。

なお、本展示と関連イベントとしてのシンポジウムは、田村隆氏（東京大学准教授）の科学研究費補助金・基盤研究（C）「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」との共催という形で企画されたものである。会場1については、筆者とRA 高原氏の他に、宋舒揚氏（東京大学大学院博士課程）が調査・執筆にあたり、会場2は、以上3名に加え、狩野時代の資料に関して、田村准教授とともに、同科より川下俊文（東京大学大学院博士課程）、鶴田奈月（東京大学大学院修士課程）の両氏が調査・執筆を担当した。

③シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」開催準備（2019年秋～2020年3月）

②の展示の準備と並行して進めてきたのが、展示関連イベント・国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」開催に向けての準備である。

会場2の展示時期に合わせて、3月21日に開催予定であったが、こちらも新型コロナウイルス流行の関係で延期となった。本シンポジウムでは、展示に関わったメンバーの他に、長らく中国人留学生研究に携わり、この分野を牽引されてきた大里浩秋氏（神奈川大学名誉教授）と孫安石氏（神奈川大学教授）のほか、中国からも複数の専門家を招聘して開催する予定であった。本シンポジウムについても開催時期は未定であるが、事態の収束を待って必ず開催に漕ぎつけたい。

以上がこれまでの主要な活動内容となるが、この他に、RA 高原氏と共に、8月に松本市の旧制高校記念館にて開催された第24回夏期教育セミナーに参加し、一高だけではなく旧制高校に関する研究者との交流を図ることができたのも貴重な経験であった。

1年間の活動を振り返ると、EAA オフィスの「101号館」への入居を機縁として、駒場に残された貴重な一高時代の留学生資料へと導かれ、教養学部創立70周年というタイミングとも相俟って、人が人をつなげながら、思わぬ広がりや深みを持つプロジェクトに育っていったように感じられる。筆者自身も、それまで日中古典文学を専門としてきたが、偶然にも趙齊氏のインタビューに同伴させてもらったことから一高時代の留学生資料と出会い、新たな研究領域と研究仲間へと開かれる貴重な機会を得た。新型コロナウイルスの影響で、展示（会場2）やシンポジウムの延期という事態にも見舞われたが、全展示品に関するパンフレットの発行という現時点での目標に向けて、不思議と私たちの情熱や集中力が途切れることはなかった。それは、本プロジェクトにおいて、それぞれに問題関心・意義が見出せていたからではないかと思うが、こうした石井副院長はじめチーム全体の前向きな姿勢が大きな推進力となった。勿論、私たちの活動は、周囲の支援なくして成し得なかった。本プロジェクトを遂行する上でお世話になった全ての方々に感謝申し上げたい。とくに駒場博物館、駒場図書館、教養学部の先生方からは様々な場面でご協力・ご助言を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

2019年7月23日、EAAの設立記念セレモニーが東京大学にて開催された折、邱水平・北京大学党書記は、はからずも両大学の友好関係が1903年の京師大学堂（北京大学の前身）による留学生派遣にまで遡ると言及され、EAAプロジェクトをこの歴史上に位置づけられた。現在は、新型

コロナウィルスの影響で、日中の交流どころか、国内での人同士の接触が制限されている困難な状況ではあるが、一刻も早く事態が収束へと向かうとともに、本プロジェクトにおける歴史からの学びが、さらなる交流を深めていく礎となれればと願っている。

報告者：宇野瑞木（EAA 特任研究員）

5. その他

- (1) 訪問研究員プログラム：咎濤氏（ZAN Tao、北京大学歴史学系副教授）（12月1日～2月29日）
- (2) 刊行物：北京大学集中講義報告書『The 1st EAA Intensive Seminar 2019』
- (3) 若手研究発表支援プログラム：採用4名（そのうち2名は新型コロナウイルス流行の影響で渡航中止）

6. INDEX

EAA 活動 (2018 年度・2019 年度)

No.	日付	活動内容	場所	詳細	該当頁
1	2019/3/21~23	北京大学-東京大学ジョイントプログラム立ち上げ会議	北京	両大学 EAA スタッフによる北京大学での実務協議	12-18
2	2019/4/5	第 1 回学術フロンティア講義	駒場	教養学部前期課程授業「30 年後の世界へ——「リベラル・アーツ」としての東アジア学を構想する」ガイダンス	19
3	2019/4/19	第 2 回学術フロンティア講義	駒場	講師：羽田正 (EAA 院長)	22
4	2019/4/26	第 3 回学術フロンティア講義	駒場	講師：中島隆博 (EAA 副院長)	25
5	2019/4/30	第 4 回学術フロンティア講義	駒場	講師：石井剛 (EAA 副院長)	28
6	2019/5/10	第 5 回学術フロンティア講義	駒場	講師：藤原帰一 (法学政治学研究所教授)	31
7	2019/5/24	第 6 回学術フロンティア講義	駒場	講師：佐藤将之 (台湾大学)	35
8	2019/5/31	第 7 回学術フロンティア講義	駒場	講師：小林和彦 (農学生命科学研究科名誉教授・茨城大学研究員)	39
9	2019/6/7	第 8 回学術フロンティア講義	駒場	講師：伊藤重聖 (社会科学研究所准教授)	43
10	2019/6/13	2019 Networking Asia (1)	本郷	東文研・ASNET・GJS・EAA の共催で、東京大学日本・アジア交流集会を開催	
11	2019/6/14	第 9 回学術フロンティア講義	駒場	講師：阿古智子 (総合文化研究科准教授)	47
12	2019/6/21	第 10 回学術フロンティア講義	駒場	講師：高田康成 (東京大学名誉教授、名古屋外国語大学教授)	50
13	2019/6/25	EAA Workshop「哲学者とはどのような人々か?—概念的・歴史的・社会的考察」	駒場	発表者：若澤佑典 (ヨーク大学)	53
14	2019/6/28	第 11 回学術フロンティア講義	駒場	講師：鈴木将久 (人文社会系研究科教授)	55
15	2019/6/28~30	【共催】第 11 回 BESETO 哲学会議	本郷	榊原哲也 (人文社会系研究科教授) 'An Unforgettable Patient: A Phenomenological Approach to Dialysis Nursing Care' / Xiaomin Zhu (北京大学) 'Different Philosophies: Could Taijiquan be Understood Today?' / Heo Min (ソウル大学) 'Rethinking Death as a Socially-constructed Concept: a Critical Examination on Two Ways of Defining Death'	58
16	2019/7/5	第 12 回学術フロンティア講義	駒場	講師：高橋哲哉 (総合文化研究科教授)	61
17	2019/7/7	【共催】シンポジウム「世界哲学としての中国哲学」	本郷	李晨陽 (南洋理工大学) "Chinese Philosophy as World Philosophy" / 張志強 (中国社会科学院) 「中国哲学のチャンスと哲学の歴史性」など	65
18	2019/7/8	【共催】国際ワークショップ「東京学派と近代教養の編成」	本郷	石田正人 (ハワイ大学) 「伊波普猷について——何が『沖繩学』を生み出したのか」/ 町泉寿郎 (二松學舎大学) 「方法としての日本漢学」/ 中島隆博 (EAA 副院長) 「近代日本の儒教教育——元田永孚、中江兆民、三島中洲」	68
19	2019/7/12	第 13 回学術フロンティア講義	駒場	講師：張旭東 (北京大学・ニューヨーク大学)	71
20	2019/7/12	EAA ダイアローグ (1)	本郷	対談：バク・チョルヒ (ソウル大学) × 中島隆博 (EAA 副院長)	75
21	2019/7/17	EAA コロキウム「東アジア国際関係とリベラル・アーツの役割——元外交官の視点から」	駒場	講師：柳明桓 (日韓フォーラム議長・元韓国外交通商部長官)	

22	2019/7/23	北京大学邱水平党書記一行来訪	本郷		77
23	2019/7/23	EAA Forum 「東アジアから考える世界文学と世界哲学」	本郷	張旭東（北京大学・ニューヨーク大学）“Of Animal, Machine, and Ghost: World Literature and the Future of Humanity in Lao She’s Camel Xiangzi” / 納富信留（人文社会系研究科教授）“Promoting World Philosophy”	80
24	2019/7/24	【共催】「自民党政権の現在と今後」	駒場	講師：バク・チョルヒ（ソウル大学）／コメンテータ：内山融（総合文化研究科教授）	84
25	2019/7/26	EAA Forum 「世界文学としての東アジア文学」	本郷	武田将明（総合文化研究科准教授）“Remarks on the End of Modern/National Literature and the Rise of World Literature in East Asia” / 鈴木正久（人文社会系研究科教授）“How or Why are Bei Dao’s poems World Literature” / 張旭東（北京大学・ニューヨーク大学）《“编年”与“诗史”——鲁迅晚杂文再解读》	87
26	2019/7/29～8/2	2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Tokyo session			89-98
27	2019/8/5～8	2019 CAMPUS Asia Undergraduate Student Summer Program, Peking session			99
28	2019/8/17～18	第24回夏期教育セミナー	松本	参加者：宇野瑞木（EAA 特任研究員）・高原智史（EAA RA）	101
29	2019/8/20～23	上海インターンシップ視察	上海	参加者：石井剛（EAA 副院長）・伊達聖伸（総合文化研究科准教授）	105
30	2019/8/30	EAA Forum with Young Scholars Visiting U Tokyo	本郷	Ju-Ling Lee “Image, Body and Colonialism: Taiwan under Japanese rule” / Kyle Peters “Early Nishida Philosophy and Auto-poiesis: On Two Frameworks of Self Formation” / Michael Facius “Narrating Edo pasts: Between history and historicizing”	107
31	2019/9/2	EAA Forum “Recent Past & Remote Past”	本郷	Presentater: Prof. Yujie Zhu (The Australian National University) / Dr. Sakura Yahata (The University of Tokyo) / Yu Zou (Chongqing University) / Prof. Takahiro Nakajima (The University of Tokyo)	110
32	2019/9/6～10	EAA 北京大学集中講義 2019	北京	テーマ：「文明とその批判者」講師：石井剛（EAA 副院長）、中島隆博（EAA 副院長）。講師による授業後、北京大学と東京大学の学部生が合同チームを組みグループディスカッション	113-120
33	2019/9/20～23	第6回日中哲学フォーラム	北京	テーマ：「東アジアにおける哲学の受容・変化と発展」参加者：納富信留（人文社会系研究科教授）	121
34	2019/10/1	2019年度秋学期 EAA 読書会 第1回	駒場	テーマ：「文学と共同体の思想」ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』	123
35	2019/10/4～5	中國文化大學東亞人文社会科学研究院 国際学会	台北	参加者：納富信留（人文社会系研究科教授）	125
36	2019/10/15	2019年度秋学期 EAA 読書会 第2回	本郷	テーマ：ジャック・デリダの「署名 出来事 コンテキスト」	127
37	2019/10/15	EAA セミナー「『イスラーム世界への公開書簡』を読む」	駒場	ゲスト：アブデヌール・ビダール（フランス国民教育省・高等研究実習院）	129
38	2019/10/16	【共催】国際シンポジウム「イスラーム世界を見る視線の交錯——日本とフランスの対話」	駒場	伊達聖伸（総合文化研究科准教授）の企画に基づく東京大学東アジア藝文書院 EAA のイベント。司会：鶴飼哲（一橋大学）。登壇者：アブデヌール・ビダール（フランス国民教育省・高等研究実習院）、中田考（同志社大学客員フェロー）、池内恵（先端科学技術センター教授）	132
39	2019/10/21	EAA 講演会「明治日本における「中国哲学」——学問領域の誕生」	本郷	講師：佐藤将之（台湾大学）	135

40	2019/10/24	EAA「中国近現代文学研究会」第1回	本郷	テーマ：程凱「社会史的視野における中国近現代文学研究の狙い」、薩支山「社会史視野の“現代文学”研究のある問題点」、劉卓「近現代文学研究における“歴史化”」	137
41	2019/10/29	2019年度秋学期EAA読書会第3回	本郷	テーマ：酒井直樹 <i>Translation and Subjectivity: On Japan and Cultural Nationalism</i> (University of Minnesota Press, 1997)	139
42	2019/11/2~3	北京フォーラム2019第13分科会「書院によるリベラルアーツ教育：世界の経験とアジアの経験 Liberal Education through College: World's Experience and Asian Experience」	北京	参加者：石井剛 (EAA 副院長)	141
43	2019/11/7	EAA「中国近現代文学研究会」第2回	本郷	テーマ：何浩「『創業史』と建国初期の創業史」	143
44	2019/11/12	2019年度秋学期EAA読書会第4回	本郷	テーマ：丸山真男「福沢諭吉における『実学』の転回」と「福沢諭吉の哲学」	145
45	2019/11/14~19	国際学術大会「『沖縄学』は可能なのか——ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」	済州・水原	参加者：崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)	147-153
46	2019/11/15	【共催】中国社会文化学会2019年第2回例会 歴史学のなかの「南京事件」	駒場	講師：孫江 (南京大学)	154
47	2019/11/16	【共催】シンポジウム「桑木巖翼と『哲学雑誌』」	本郷	大橋容一郎 (上智大学)、宮島光志 (富山大学)、中島隆博 (EAA 副院長)	
48	2019/11/28	EAA「中国近現代文学研究会」第3回	本郷	朱羽の近著『社会主義と“自然”——1950-1960年代中国美学論争と文芸実践研究』(北京大学出版社2018年)	156
49	2019/12/1	EAA Forum「舞踏の越境——メテオール《土方巽とその分身》をめぐる」	駒場	星野太 (金沢美術工芸大学)、ボヤン・マンチューフ (哲学者/ドラマトゥルク)、アニ・ヴァセヴァ (アーティスト/演出)、レオニード・ヨフチュフ (出演)、小林康夫 (青山学院大学)、國分功一郎 (東京工業大学)	158
50	2019/12/9	「世界人間学宣言」座談会	駒場	EAA および関連教員 (石井剛、太田邦史、武田将明、伊達聖伸、田辺明生、中島隆博、馬路智仁) による座談会	160
51	2019/12/10	2019年度秋学期EAA読書会第5回	駒場	テーマ：小熊英二『日本社会のしくみ：雇用・教育・福祉の歴史社会学』(2019年、講談社現代新書)	164
52	2019/12/12	“Rethinking (Asian) University: Institutionalizing the Liberal Arts”	本郷	ブレガム・ダルグリーシュ氏 (総合文化研究科准教授)、中島隆博 (EAA 副院長) ほか国内外の研究者を招聘しての大学におけるリベラル・アーツ教育に関する座談会	166
53	2019/12/13	【共催】第63回GJSセミナー「和辻哲郎の儒教的絆」	本郷	発表者：カイル・シャトルワース (日本女子大学)	170
54	2019/12/15	【共催】ジャーナリズム研究会第1回公開研究会	駒場		172
55	2019/12/17	EAA Workshop “Chinese and Japanese Ethics: History and Prospects”	本郷	Ryohei Tatebe (EAA), Mizuki Uno (EAA), Rika Dunlap (University of Guam), Michael Hemmingsen (University of Guam)	176
56	2019/12/17	EAA セミナー「フランスの公共空間における宗教的中立性の拡大：新しいライシテに向かって？」	駒場	ゲスト：エマニュエル・オーバン氏 (ポワティエ工科大学)。ディスカッサント：伊達聖伸 (総合文化研究科)、山元一 (慶應義塾大学)	178
57	2019/12/18	EAA セミナー「近現代中国の目に映るトルコ」	駒場	講師：咎涛 (北京大学)	180

58	2019/12/19	EAA/IASA Seminar “The Writing of National History in the Early Period of Turkish Republic: Centering on Turkish History Thesis”	本郷	講師：咎涛（北京大学）コメンテータ：秋葉淳（東洋文化研究所准教授）	182
59	2019/12/19	EAA ダイアローグ (2)	本郷	対談：ブレット・デービス（ロヨラ大学メリーランド校）×中島隆博（EAA 副院長）	184
60	2019/12/19	Networking Asia (2)	本郷		
61	2019/12/19	EAA「中国近現代文学研究会」第4回	本郷	テーマ：朱羽『社会主義と“自然”——1950-1960年代中国美学論争と文芸実践研究』（北京大学出版社2018年）	186
62	2019/12/26	「東西文明学」最終授業発表	駒場		188
63	2020/1/6～10	Winter Institute 2020 at NYU	NY	東京大学・北京大学・オーストラリア国立大学・ニューヨーク大学等が合同開催する研究会議であり、EAAからは羽田正院長・中島隆博副院長以下の6名が参加・報告	191-200
64	2020/1/7	EAA セミナー「ライシテ再考——中国・日本の視点から」	駒場	講師：咎涛（北京大学）	201
65	2020/1/16	EAA「中国近現代文学研究会」第5回	本郷	テーマ：趙樹理『邪不压正』に対する倪文尖の読解を羅崗の読解と比較	203
66	2020/1/17	EAA Forum “On Secularism from Historical and Regional Perspectives”	本郷	咎涛（北京大学）、James BABB（ISS）、GOTO Emi（IASA）	205
67	2020/1/21	EAA ダイアローグ (3)	本郷	対談：咎涛（北京大学）×羽田正（EAA 院長）	209
68	2020/1/22	EAA ダイアローグ (4)	本郷	対談：咎涛（北京大学）×石井剛（EAA 副院長）	212
69	2020/1/29	EAA ダイアローグ (5)	本郷	対談：エディ・デュフルモン（ボルドー大学）×中島隆博（EAA 副院長）	214
70	2020/2/10～	一高関連「101号館展示」	駒場		
71	2020/2/9	【共催】ジャーナリズム研究会第2回公開研究会	駒場		217
72	2020/2/10	EAA Special Seminar：わたしたちの30年後——世界と学問 (1)	駒場	北京大学とのウィンタープログラム中止に伴い、学部生を対象に開催された集中講義。講師：王欽（EAA 特任講師）、ディスカッサント：咎涛（北京大学）	220
73	2020/2/11	シンポジウム「東アジアにおける世界文学の可能性」	駒場	司会：武田将明（総合文化研究科准教授）、発表者：青泳日（文芸評論家・翻訳家）、李琴峰（作家・翻訳家）、日比嘉隆（名古屋大学）、村上陽子（沖縄国際大学）、小沢自然（淡江大学）、斎藤真理子（翻訳家）、鈴木将久（人文社会系研究科教授）	225
74	2020/2/12	EAA Special Seminar：わたしたちの30年後——世界と学問 (2)	駒場	北京大学とのウィンタープログラム中止に伴い、学部生を対象に開催された集中講義。EAA 研究員およびRAと学部生がチームを構成してグループディスカッションを実施	227
75	2020/3/20～4/3	一高関連「図書館展示」	駒場		231

編集者

具裕珍 前野清太郎 八幡さくら

編集協力（五十音順）

犬塚悠 宇野瑞木 崎濱紗奈
高山花子 田村正資 若澤佑典

のぞみを耕す——東京大学東アジア藝文書院 2019 年度報告書

発行日：2020 年 6 月 1 日

発行者：東京大学東アジア藝文書院

製作協力：一般財団法人東京大学出版会

デザイン：株式会社 designfolio/佐々木由美

印刷・製本：株式会社真興社

©2020 East Asian Academy for New Liberal Arts, the University of Tokyo